東九州自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

－20－

福岡県京都郡みやこ町有久・築上郡築上町安武所在遺跡の調査

京ヶ辻遺跡２区
安武・深田遺跡Ｂ遺跡２・Ｃ遺跡

2015

九州歴史資料館

東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告 ⑳

京ヶ辻遺跡２区
安武・深田遺跡Ｂ遺跡２・Ｃ遺跡

二〇一五

九州歴史資料館

東九州自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

－20－

福岡県京都郡みやこ町有久・築上郡築上町安武所在遺跡の調査

京ヶ辻遺跡２区
安武・深田遺跡Ｂ遺跡２・Ｃ遺跡

2015

九州歴史資料館

京ヶ辻遺跡２区出土　須恵器

１　京ヶ辻遺跡２区合成写真（上空から）

２　京ヶ辻遺跡２区合成写真（上空から）

１　京ヶ辻遺跡２区　２３号竪穴住居跡カマド（南から）

２　京ヶ辻遺跡２区　井泉遺構（東から）

１　京ヶ辻遺跡２区出土　ジョッキ形土器

２　京ヶ辻遺跡２区出土　須恵器高杯

３　京ヶ辻遺跡２区出土　瑤

１　京ヶ辻遺跡２区出土　須恵器壺

２　京ヶ辻遺跡２区出土　須恵器器台

１　京ヶ辻遺跡２区出土　土師器甑

２　京ヶ辻遺跡２区出土　鉄鏃・鉄鋌

序

福岡県では西日本高速道路株式会社の委託を受けて、平成１９年度から東九州自動車道に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施しています。本報告書は平成２２年度から２３年度にかけて行った、京都郡みやこ町に所在する京ヶ辻遺跡（２区）と築上郡築上町に所在する安武・深田遺跡の調査の記録です。

京ヶ辻遺跡は祓川左岸の微高地から低地にかけて所在する弥生時代から中世にかけての集落遺跡です。特に今回の調査では、初期須恵器が出土した竪穴住居跡や溝、谷などが発見され、福岡県のみならず国内の須恵器研究に資する良好な資料を得ることができました。

安武・深田遺跡は弥生時代中期～奈良時代の集落遺跡です。今回の調査では集落の一部を検出し、小ピットの中から貴重な３連式小型丸底壺が出土しました。

本報告書が教育、学術研究に資するとともに、文化財愛護思想の普及・定着の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査・報告書の作成にいたる間には、関係諸機関や地元をはじめ多くの方々にご協力・ご助言をいただきました。ここに、深く感謝いたします。

平成２７年３月３１日

九州歴史資料館

館長　杉光　誠

例　言

1．本書は、東九州自動車道建設に伴って発掘調査を実施した、福岡県京都郡みやこ町有久に所在する京ヶ辻遺跡と築上郡築上町大字安武に所在する安武・深田遺跡の記録であり、東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告の第２０集にあたる。

2．発掘調査は西日本高速道路株式会社の委託を受けて、平成２２年度までは福岡県教育庁総務部文化財保護課が実施し、平成２３年度以降の発掘調査・整理報告は同社の委託を受けて、九州歴史資料館が実施した。

3．京ヶ辻遺跡と安武・深田遺跡は東九州自動車道福岡工事事務所管内の第３５・３６地点と築城ＩＣにあたる。

4．本書に掲載した京ヶ辻遺跡の遺構写真の撮影は、海出淳平（現筑紫野市教育委員会）、安武・深田遺跡は秦憲二と城門義廣が行った。両遺跡の遺物写真は文化財調査室北岡伸一が行った。

　京ヶ辻遺跡出土の初期須恵器の胎土分析は岡山理科大学白石純准教授が行った。京ヶ辻遺跡の１２号竪穴住居跡の炭化材の分析はパリノ・サーヴェイが行った。

　空中写真の撮影は熊本航空株式会社･東亜航空技研株式会社に委託し、ラジコンヘリコプターによる撮影を行った。

5．本書に掲載した京ヶ辻遺跡の遺構図の作成は海出と発掘作業員、安武・深田遺跡の遺構図の作成は秦・城門が行った。京ヶ辻遺跡の遺物実測図は坂本真一と海出、安武・深田遺跡の遺物実測図は秦・城門と整理指導員、整理補助員が作成した。

6．出土遺物の整理作業は九州歴史資料館において、小川泰樹・城門の指導の下に実施した。

7．出土遺物及び図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館において保管する。

8．本書に使用した第２・３図は、国土交通省国土地理院発行の１/５０,０００ 地形図「行橋　田川　蓑島　中津」を改変したものである。本書で使用した座標は日本測地系九州東（Ⅱ）系により､方位は座標北である。また、磁北の場合には明記した。

9．京ヶ辻遺跡の調査が進むにつれ旧地形が判明し、１・２区は同一丘陵、北側の３区は別の低地部分であった。地形に合わせて区分けしている結果であったため、区分け順はあえて変更を行わないとした。そのため、１・２区の遺構番号は連続し、３区は新に遺構番号を付けている。１・２区の調査は海出が担当した。

１０．本書の執筆は京ヶ辻遺跡の遺構を海出・坂本、Ⅲ－７は城門、須恵器や他の遺物は坂本、安武・深田遺跡のＢ遺跡２を秦、Ｃ遺跡は城門が執筆した。編集は坂本が行った。

目　次

Ⅰ　はじめに…… 1
　1　調査に至る経緯…… 1
　2　調査・整理の組織…… 2

Ⅱ　位置と環境…… 6

Ⅲ　京ヶ辻遺跡２区…… 9
　1　調査の概要…… １１
　2　竪穴住居跡…… １１
　3　その他の建物跡…… ６０
　4　掘立柱建物跡…… ６３
　5　土坑…… ６８
　6　溝状遺構…… ７９
　7　小谷・大谷…… １４９
　8　その他の出土土器…… １８６
　9　特殊遺物…… １８８
　１０　まとめ…… １９３
　１１　京ヶ辻遺跡ほか出土須恵器胎土分析…… ２０３
　１２　京ヶ辻遺跡出土炭化材の放射性炭素年代測定…… ２０８

Ⅳ　安武・深田遺跡Ｂ遺跡２…… ２１１
　1　調査の概要…… ２１１
　2　遺構と遺物…… ２１１
　3　掘立柱建物跡…… ２１３
　4　土坑…… ２１４
　5　小結…… ２２２

Ⅴ　安武・深田遺跡Ｃ遺跡…… ２２３
　1　調査の概要…… ２２３
　2　遺構と遺物…… ２２３
　3　土坑…… ２２３
　4　溝…… ２２６
　5　谷…… ２２９
　6　その他の遺構…… ２３１
　7　特殊遺物…… ２３３
　8　小結…… ２３４

巻頭図版目次

巻頭図版１　　京ヶ辻遺跡２区出土須恵器
巻頭図版２　１　京ヶ辻遺跡２区合成写真（上空から）　２　京ヶ辻遺跡２区合成写真（上空から）
巻頭図版３　１　京ヶ辻遺跡２区２３号竪穴住居跡カマド(南から)　２　京ヶ辻遺跡２区井泉遺構(東から)
巻頭図版４　１　京ヶ辻遺跡２区出土ジョッキ形土器　２　京ヶ辻遺跡２区出土須恵器高杯
　　３　京ヶ辻遺跡２区出土鞴
巻頭図版５　１　京ヶ辻遺跡２区出土須恵器壺　２　京ヶ辻遺跡２区出土須恵器器台
巻頭図版６　１　京ヶ辻遺跡２区出土土師器甑　２　京ヶ辻遺跡２区出土鉄鏃・鉄鋌

図版目次

図版１　１　２区より居屋敷遺跡を望む（上空南西から）　２　２区北側竪穴住居跡（上空から）
図版２　１　２区北側全景（上空から）　２　２区南側全景（上空から）
図版３　１　１２号竪穴住居跡炭化材出土状況（南西から）
　　２　１２号竪穴住居跡完掘状況（南西から）
　　３　１２号竪穴住居跡カマド（南西から）
図版４　１　１３号竪穴住居跡（北から）　２　１３号竪穴住居跡遺物出土状況（北東から）
　　３　１４号竪穴住居跡（北から）
図版５　１　１４号竪穴住居跡遺物出土状況（北から）　２　１５号竪穴住居跡（北西から）
　　３　１６・１７号竪穴住居跡（南東から）
図版６　１　１８号竪穴住居跡（南西から）　２　１９号竪穴住居跡カマド（南から）
　　３　１９号竪穴住居跡カマド（南西から）
図版７　１　２０号竪穴住居跡カマド（東から）　２　２３号竪穴住居跡カマド（南から）
　　３　２３号竪穴住居跡カマド（南から）
図版８　１　２８号竪穴住居跡（南から）　２　２８号竪穴住居跡カマド（南から）
　　３　３０号竪穴住居跡（南西から）
図版９　１　３０号竪穴住居跡カマド（南西から）２　３１号竪穴住居跡（南から）
　　３　３３号竪穴住居跡（南東から）
図版１０　１　３４・３７・４６号竪穴住居跡（南から）
　　２　３２・３６号竪穴住居跡・３６号土坑（南西から）
　　３　３６号竪穴住居跡カマド（南西から）
図版１１　１　３８・４０号竪穴住居跡（南から）
　　２　３８号竪穴住居跡遺物出土状況（北東から）
　　３　３９号竪穴住居跡（東から）

図版１２　１　３１・４１号竪穴住居跡・２６号掘立柱建物跡（南から）
　　２　４１号竪穴住居跡カマド（北から）
　　３　４２号竪穴住居跡（北から）
図版１３　１　４２号竪穴住居跡カマド（北西から）　２　４３号竪穴住居跡（東から）
　　３　４３号竪穴住居跡カマド（東から）
図版１４　１　４４号竪穴住居跡遺物出土状況（東から）　２　４５号竪穴住居跡カマド（南から）
　　３　４７号竪穴住居跡（東から）
図版１５　１　４８号竪穴住居跡粘土貼り炉（南西から）　２　１号竪穴状遺構（南から）
　　３　１９号掘立柱建物跡（南東から）
図版１６　１　２１号掘立柱建物跡（南東から）　２　２２号掘立柱建物跡（西から）
　　３　２３号掘立柱建物跡（西から）
図版１７　１　２４号掘立柱建物跡（南東から）　２　１９・２０号土坑（北から）
　　３　２１号土坑（北から）
図版１８　１　２２号土坑（東から）　２　２３号土坑（南西から）　３　２４号土坑（南から）
図版１９　１　２５号土坑（南西から）　２　２６号土坑（東から）　３　２７号土坑（西から）
図版２０　１　３０号土坑（東から）　２　３１号土坑小児棺出土状況（南から）
　　３　３１号土坑完掘状況（南から）
図版２１　１　３２･３３号土坑(東から)　２　３４･３５号土坑(南から)　３　３７号土坑(北から)
図版２２　１　１区１３号溝Ａ－Ａ′土層断面（北東から）
　　２　１区１３号溝Ｃ－Ｃ′土層断面（北から）
　　３　１区１３号溝遺物出土状況１（北から）
図版２３　１　１区１３号溝遺物出土状況２（南東から）
　　２　１区１３号溝遺物出土状況３（南から）
　　３　１区１３号溝遺物出土状況３（北西から）
図版２４　１　１区１３号溝遺物出土状況４（南西から）
　　２　１区１３号溝遺物出土状況５（北西から）
　　３　２区１３号溝上層除去後（北から）
図版２５　１　２区１３号溝下層遺物出土状況（西から）
　　２　２区１３号溝上層祭祀遺物出土状況（南から）
　　３　３２号溝遺物出土状況（北東から）
図版２６　１　３６号溝上層除去後（東から）　２　３６号溝テラス状部分（北から）
　　３　３６号溝Ｂ－Ｂ′土層断面（東から）
図版２７　１　３６号溝上層勾玉出土状況（北西から）　２　３６号溝遺物出土状況１（東から）
　　３　３６号溝遺物出土状況２（北東から）
図版２８　１　３６号溝遺物出土状況４（南西から）　２　大谷北側全景（南西から）
　　３　大谷Ｄ－Ｄ′土層断面（南西から）
図版２９　１　大谷Ｅ－Ｅ′土層断面（北西から）　２　大谷遺物出土状況１（西から）
　　３　大谷遺物出土状況２（北西から）

図版３０　１　井泉遺構全景１（西から）　２　井泉遺構全景２（北東から）
３　井泉遺構前、板木出土状況（北から）
図版３１　竪穴住居跡出土土器１
図版３２　竪穴住居跡出土土器２
図版３３　竪穴住居跡出土土器３・土坑出土土器１
図版３４　土坑出土土器２・１３号溝状遺構出土土器１
図版３５　１３号溝状遺構出土土器２
図版３６　１３号溝状遺構出土土器３
図版３７　１３号溝状遺構出土土器４
図版３８　１３号溝状遺構出土土器５
図版３９　１３号溝状遺構出土土器６
図版４０　１３号溝状遺構出土土器７・３２号溝状遺構出土土器
図版４１　３６号溝状遺構出土土器１
図版４２　３６号溝状遺構出土土器２
図版４３　３６号溝状遺構出土土器３
図版４４　３６号溝状遺構出土土器４
図版４５　３６号溝状遺構出土土器５
図版４６　３８号溝状遺構出土土器１
図版４７　３８号溝状出土土器２・小谷・大谷出土土器１
図版４８　大谷出土土器２
図版４９　大谷出土土器３
図版５０　大谷出土土器４
図版５１　大谷出土土器５
図版５２　大谷出土土器６・鋳造関連製品
図版５３　鉄製品・石器・石製品１
図版５４　石製品２
図版５５　１　安武・深田遺跡Ｂ遺跡２全景（西上空から）　２　同上南区全景（上空から）
３　１号掘立柱建物跡（上空から）　４　２号掘立柱建物跡（上空から）
図版５６　１　１号土坑（北東から）　２　１号土坑土層１（北から）　３　同上２（南東から）
４　３号土坑（東から）　５　同上土層（東から）
図版５７　１　２号土坑（上空から）　２　４号土坑（西から）　３　同上土層
４　５号土坑（南西から）　５　同上土層（南東から）
図版５８　１　６～８号土坑遺物出土状況（上空から）　２　６号土坑遺物出土状況（西から）
３　６号土坑土層（南西から）　４　９号土坑（東から）
図版５９　Ｂ遺跡２出土遺物
図版６０　１　Ｃ遺跡全景（南から）　２　Ｃ遺跡１区東側全景（上から）
図版６１　１　Ｃ遺跡１区西側全景（南東から）　２　Ｃ遺跡１区１号土坑（東から）
３　Ｃ遺跡１区２号土坑（南から）

図版６２　１　Ｃ遺跡１区３号土坑（南から）　２　Ｃ遺跡１区２号溝（北から）
３　Ｃ遺跡１区２号溝土層（北から）
図版６３　１　Ｃ遺跡１区１号谷（東から）　２　Ｃ遺跡１区１号谷土層（南西から）
３　Ｃ遺跡１区２号谷（東から）
図版６４　１　Ｃ遺跡１区２号谷土層（東から）　２　Ｃ遺跡２区全景（上から）
３　Ｃ遺跡２区全景（東から）
図版６５　１　Ｃ遺跡２区全景（西から）　２　Ｃ遺跡２区全景（南から）
３　Ｃ遺跡２区北側壁（南から）
図版６６　Ｃ遺跡出土遺物

挿図目次

第１図　みやこ町と築上町の位置図…… 1
第２図　東九州自動車道路線図及び調査地点位置図（1／１００,０００）…… 4
第３図　周辺遺跡分布図（1／５０,０００）…… 7
第４図　京ヶ辻遺跡調査区割り図（1／２,０００）…… 8
第５図　京ヶ辻遺跡２区全体図（1／３００）…… 9
第６図　１２・１３号竪穴住居跡実測図（1／６０、1／３０）…… １２
第７図　１２号竪穴住居跡出土土器実測図（1／３）…… １３
第８図　１４・１５号竪穴住居跡実測図（1／６０）…… １５
第９図　１３・１４号竪穴住居跡出土土器実測図（1／３）…… １６
第１０図　１４号竪穴住居跡出土土器２実測図（1／３）…… １７
第１１図　１４号竪穴住居跡出土土器３実測図（1／３）…… １８
第１２図　１６～１８号竪穴住居跡実測図（1／６０）…… １９
第１３図　１９号竪穴住居跡実測図（1／６０）…… ２０
第１４図　１９号竪穴住居跡、カマド実測図（1／３０）…… ２１
第１５図　１６・１８・１９号竪穴住居跡出土土器実測図（1／３）…… ２２
第１６図　１９号竪穴住居跡出土土器２実測図（1／３）…… ２３
第１７図　２０号竪穴住居跡、カマド実測図（1／６０、1／３０）…… ２５
第１８図　２０号竪穴住居跡出土土器実測図（1／３）…… ２６
第１９図　２１・２２号竪穴住居跡実測図（1／６０）…… ２７
第２０図　２３号竪穴住居跡、カマド実測図（1／６０、1／３０）…… ２９
第２１図　２１～２３号竪穴住居跡出土土器実測図（1／３）…… ３０
第２２図　２４・２５号竪穴住居跡、２８号土坑実測図（1／６０）…… ３１
第２３図　２４・２５号竪穴住居跡、２８号土坑出土土器実測図（1／３）…… ３２
第２４図　２６・２７号竪穴住居跡実測図（1／６０）…… ３３

第２５図　２６・２７号竪穴住居跡出土土器実測図（1／３）…… ３４
第２６図　２８・２９号竪穴住居跡、２８号竪穴住居跡カマド実測図（1／６０、1／３０）… ３５
第２７図　２８～３０号竪穴住居跡出土土器実測図（1／３）…… ３６
第２８図　３０号竪穴住居跡、カマド実測図（1／６０、1／３０）…… ３７
第２９図　３１・４１号竪穴住居跡、カマド実測図（1／６０、1／３０）…… ３８
第３０図　３１・４１号竪穴住居跡出土土器実測図（1／３）…… ３９
第３１図　３２・３３号竪穴住居跡実測図（1／６０）…… ４１
第３２図　３２・３３号竪穴住居跡出土土器実測図（1／３）…… ４２
第３３図　３４・３５・４６号竪穴住居跡実測図（1／６０）…… ４３
第３４図　３４・４６号竪穴住居跡出土土器実測図（1／３）…… ４４
第３５図　３６号竪穴住居跡、カマド実測図（1／６０、1／３０）…… ４５
第３６図　３６号竪穴住居跡出土土器実測図（1／３）…… ４７
第３７図　３７・４７号竪穴住居跡および出土土器実測図（1／６０、1／３）…… ４８
第３８図　３８・４０号竪穴住居跡実測図（1／６０）…… ４９
第３９図　３８・４０号竪穴住居跡出土土器実測図（1／３）…… ５１
第４０図　３９号竪穴住居跡実測図（1／６０）…… ５２
第４１図　３９号竪穴住居跡出土土器実測図（1／３）…… ５２
第４２図　４２号竪穴住居跡、カマド実測図（1／６０、1／３０）…… ５３
第４３図　４２号竪穴住居跡出土土器実測図（1／３）…… ５５
第４４図　４３号竪穴住居跡、カマド実測図（1／６０、1／３０）…… ５６
第４５図　４３号竪穴住居跡出土土器１実測図（1／３）…… ５７
第４６図　４３号竪穴住居跡出土土器２実測図（1／３）…… ５８
第４７図　４４・４５・４８号竪穴住居跡、４５号竪穴住居跡カマド実測図（1／６０、1／３０）… ５９
第４８図　４４・４５・４８号竪穴住居跡出土土器実測図（1／３）…… ６１
第４９図　１号方形周溝状遺構、１号竪穴状遺構実測図（1／６０）…… ６２
第５０図　１号方形周溝状遺構、１号竪穴状遺構出土土器実測図（1／３）…… ６３
第５１図　１９・２１号掘立柱建物跡実測図（1／６０）…… ６４
第５２図　２２～２４号掘立柱建物跡および出土土器実測図（1／６０、1／３）…… ６６
第５３図　２５・２６号掘立柱建物跡実測図（1／６０）…… ６７
第５４図　１９～２３号土坑実測図（1／３０）…… ６９
第５５図　２４～２７号土坑実測図（1／３０）…… ７１
第５６図　２９～３３号土坑実測図（２９・３２・３３は1／４０、他は1／３０）…… ７２
第５７図　２２～２５・２７・２９号土坑出土土器実測図（1／３）…… ７３
第５８図　３４～３７号土坑実測図（３６は1／４０、他は1／３０）…… ７５
第５９図　３１～３６号土坑出土土器実測図（１は1／６、他は1／３）…… ７７
第６０図　３７号土坑出土土器実測図（1／３）…… ７８
第６１図　１２号溝状遺構出土土器実測図（1／３）…… ７９
第６２図　1区１３号溝状遺構実測図（1／２００）…… ８０

第６３図　1区１３号溝状遺構土層断面図（1／６０）…… ８１
第６４図　1区１３号溝状遺構遺物出土状況１実測図（1／２０）…… ８２
第６５図　1区１３号溝状遺構遺物出土状況２実測図（1／２０）…… ８３
第６６図　１３号溝状遺構①・②地点出土土器実測図（1／３）…… ８４
第６７図　１３号溝状遺構③地点出土土器１実測図（２０・２３は1／４、他は1／３）…… ８６
第６８図　１３号溝状遺構③地点出土土器２実測図（1／３）…… ８７
第６９図　１３号溝状遺構③地点出土土器３実測図（1／３）…… ８８
第７０図　１３号溝状遺構④地点出土土器１実測図（1／４）…… ８９
第７１図　１３号溝状遺構④地点出土土器２実測図（６８は1／４、他は1／３）…… ９０
第７２図　１３号溝状遺構④地点出土土器３実測図（1／３）…… ９１
第７３図　１３号溝状遺構④地点出土土器４実測図（1／３）…… ９２
第７４図　１３号溝状遺構⑤・⑥地点出土土器１実測図（1／３）…… ９３
第７５図　１３号溝状遺構⑥地点出土土器２・⑦地点出土土器１実測図（１４９は1／４、他は1／３）… ９４
第７６図　１３号溝状遺構⑦地点出土土器２実測図（1／３）…… ９５
第７７図　１３号溝状遺構⑦地点出土土器３・⑧地点出土土器実測図（1／３）…… ９６
第７８図　２区１３・３６号溝状遺構実測図（1／２００）…… ９８
第７９図　２区１３号溝状遺構土層断面図、祭祀遺物出土状況実測図（1／６０、1／２０）… ９９
第８０図　１３号溝状遺構⑨地点出土土器１実測図（1／３）…… １００
第８１図　１３号溝状遺構⑨地点出土土器２実測図（1／３）…… １０１
第８２図　１３号溝状遺構⑨地点出土土器３実測図（1／３）…… １０２
第８３図　１３号溝状遺構⑨地点出土土器４実測図（1／３）…… １０３
第８４図　１３号溝状遺構⑨地点出土土器５実測図（1／３）…… １０４
第８５図　１３号溝状遺構⑨地点出土土器６実測図（1／３）…… １０５
第８６図　１３号溝状遺構⑨地点出土土器７実測図（1／３）…… １０６
第８７図　１３号溝状遺構⑨地点出土土器８実測図（1／３）…… １０７
第８８図　１３号溝状遺構⑩地点出土土器１実測図（２８２は1／４、他は1／３）…… １０９
第８９図　１３号溝状遺構⑩地点出土土器２実測図（1／３）…… １１０
第９０図　１３号溝状遺構⑩地点出土土器３実測図（1／３）…… １１１
第９１図　１３号溝状遺構⑩地点出土土器４実測図（1／３）…… １１２
第９２図　１３号溝状遺構⑩地点出土土器５実測図（1／３）…… １１３
第９３図　１３号溝状遺構⑩地点出土土器６実測図（1／３）…… １１４
第９４図　１３号溝状遺構⑩地点出土土器７実測図（1／３）…… １１５
第９５図　１３号溝状遺構⑩地点出土土器８実測図（1／３）…… １１６
第９６図　１３号溝状遺構⑪～⑭地点出土土器実測図（1／３）…… １１７
第９７図　１３号溝状遺構⑬地点出土土器実測図（1／３）…… １１８
第９８図　１３号溝状遺構⑭地点出土土器実測図（1／３）…… １１９
第９９図　３２号溝状遺構遺物出土状況、断面図・３７号溝状遺構断面図（1／２００、1／６０、1／２０）… １２０
第１００図　２７・３０・３２号溝状遺構出土土器実測図（1／３）…… １２１

第１０１図　３２・３４号溝状遺構出土土器実測図（1／３）…… １２２
第１０２図　３６号溝状遺構土層、土橋状土層断面図、テラス柱穴実測図（1／６０）… １２３
第１０３図　３６号溝状遺構遺物出土状況１実測図（1／２０）…… １２４
第１０４図　３６号溝状遺構遺物出土状況２実測図（1／２０）…… １２５
第１０５図　３６号溝状遺構①地点出土土器１実測図（1／３）…… １２７
第１０６図　３６号溝状遺構①地点出土土器２実測図（1／３）…… １２８
第１０７図　３６号溝状遺構①地点出土土器３実測図（1／３）…… １２９
第１０８図　３６号溝状遺構②地点出土土器１実測図（1／３）…… １３０
第１０９図　３６号溝状遺構②地点出土土器２実測図（1／３）…… １３１
第１１０図　３６号溝状遺構②地点出土土器３実測図（1／３）…… １３２
第１１１図　３６号溝状遺構③地点出土土器１実測図（1／３）…… １３４
第１１２図　３６号溝状遺構③地点出土土器２実測図（1／３）…… １３５
第１１３図　３６号溝状遺構③地点出土土器３実測図（1／３）…… １３６
第１１４図　３６号溝状遺構④地点出土土器１実測図（1／３）…… １３７
第１１５図　３６号溝状遺構④地点出土土器２・⑤地点出土土器実測図（1／３）…… １３８
第１１６図　３６号溝状遺構その他出土土器実測図（1／３）…… １３９
第１１７図　３７号溝状遺構出土土器実測図（1／３）…… １４０
第１１８図　３８号溝状遺構①地点出土土器１実測図（1／３）…… １４１
第１１９図　３８号溝状遺構①地点出土土器２実測図（1／３）…… １４２
第１２０図　３８号溝状遺構①地点出土土器３実測図（1／３）…… １４３
第１２１図　３８号溝状遺構①地点出土土器４実測図（1／３）…… １４４
第１２２図　３８号溝状遺構①地点出土土器５実測図（1／３）…… １４５
第１２３図　３８号溝状遺構②地点出土土器実測図（1／３）…… １４６
第１２４図　３８号溝状遺構③地点出土土器実測図（1／３）…… １４７
第１２５図　４２・４４号溝状遺構出土土器実測図（1／３）…… １４８
第１２６図　小谷土層断面図（1／６０）…… １４９
第１２７図　小谷出土土器実測図（1／３）…… １５０
第１２８図　大谷出土土器実測図（1／３）…… １５１
第１２９図　大谷実測図（1／２００）…… １５２
第１３０図　大谷土層断面図１（1／６０）…… １５３
第１３１図　大谷土層断面図２（1／６０）…… １５４
第１３２図　大谷遺物出土状況、井泉遺構および出土土器実測図（1／２０、1／３０、1／３）… １５５
第１３３図　大谷中層出土須恵器実測図（１３は1／４、他は1／３）…… １５７
第１３４図　大谷上層出土須恵器実測図（1／３）…… １５８
第１３５図　大谷最下層出土土器実測図①（1／３）…… １５９
第１３６図　大谷最下層出土土器実測図②（1／３）…… １６０
第１３７図　大谷最下層出土土器実測図③（1／３）…… １６１
第１３８図　大谷最下層出土土器実測図④（1／３）…… １６２

第１３９図　大谷最下層出土土器実測図⑤（1／３）…… １６３
第１４０図　大谷最下層出土土器実測図⑥（1／３）…… １６４
第１４１図　大谷最下層出土土器実測図⑦（1／３）…… １６５
第１４２図　大谷最下層出土土器実測図⑧（1／３）…… １６６
第１４３図　大谷最下層出土土器実測図⑨（1／３）…… １６７
第１４４図　大谷最下層出土土器実測図⑩（1／３）…… １６８
第１４５図　大谷最下層・下層出土土器実測図①（1／３）…… １７０
第１４６図　大谷最下層・下層出土土器実測図②（1／３）…… １７１
第１４７図　大谷下層出土土器実測図（1／３）…… １７２
第１４８図　大谷中層出土土器実測図①（1／３）…… １７３
第１４９図　大谷中層出土土器実測図②（1／３）…… １７４
第１５０図　大谷中層出土土器実測図③（1／３）…… １７５
第１５１図　大谷中層出土土器実測図④（1／３）…… １７６
第１５２図　大谷中層出土土器実測図⑤（1／３）…… １７７
第１５３図　大谷中層出土土器実測図⑥（1／３）…… １７８
第１５４図　大谷中層出土土器実測図⑦（1／３）…… １７９
第１５５図　大谷中層出土土器実測図⑧（1／３）…… １８０
第１５６図　大谷中層出土土器実測図⑨（1／３）…… １８１
第１５７図　大谷上層出土土器実測図①（1／３）…… １８２
第１５８図　大谷上層出土土器実測図②（1／３）…… １８３
第１５９図　大谷出土土器実測図①（1／３）…… １８４
第１６０図　大谷出土土器実測図②（1／３）…… １８５
第１６１図　その他出土土器実測図（1／３）…… １８７
第１６２図　鋳造関係製品および鉄製品実測図（1／２、1・２は1／３）…… １８８
第１６３図　石器実測図１（５は2／３、他は1／２）…… １８９
第１６４図　石器実測図２（２４は1／４、他は1／２）…… １９０
第１６５図　石器実測図３（1／２）…… １９１
第１６６図　石器実測図４（1／２）…… １９２
第１６７図　京ヶ辻遺跡出土初期須恵器（1／６、1／８）…… １９７
第１６８図　サンプル試料実測図１（1／３）…… １９９
第１６９図　サンプル試料実測図２（1／３）および朝鮮半島関連遺構・遺物 …… ２０１
第１７０図　京ヶ辻遺跡出土多孔式甑（1／６）…… ２０２
第１７１図　京ヶ辻遺跡ほか出土須恵器の胎土分析１…… ２０６
第１７２図　京ヶ辻遺跡ほか出土須恵器の胎土分析２…… ２０７
第１７３図　各試料の暦年較正結果の比較…… ２１０
第１７４図　安武・深田遺跡Ｂ遺跡２南側調査区遺構配置図（1／２００）…… ２１１
第１７５図　周辺地形と調査範囲図（1／３，０００）…… ２１２
第１７６図　掘立柱建物跡実測図（1／６０）…… ２１４

第１７７図　１～４号土坑実測図（1／６０）…… ２１５
第１７８図　５号土坑実測図（1／６０）…… ２１６
第１７９図　６～８号土坑実測図（1／６０）…… ２１８
第１８０図　南側調査区出土遺物実測図１（１０は1／２、他は1／３）…… ２１９
第１８１図　南側調査区出土遺物実測図２（５は1／２、他は1／３）…… ２２０
第１８２図　９号土坑実測図（1／６０）…… ２２０
第１８３図　北側調査区遺構配置図（1／２００）および縄文包含層基本土層図（1／４０）…… ２２１
第１８４図　北側調査区出土遺物実測図（４は1／２、他は1／３）…… ２２２
第１８５図　安武・深田Ｃ遺跡遺構配置図（1／４００）…… ２２５
第１８６図　安武・深田Ｃ遺跡１～３・７号土坑実測図（1／３０）…… ２２７
第１８７図　安武・深田Ｃ遺跡４～６号土坑実測図（1／３０）…… ２２８
第１８８図　安武・深田Ｃ遺跡土坑・溝出土遺物実測図（1／４、１８～２１・２５は1／３）… ２３０
第１８９図　安武・深田Ｃ遺跡谷・溝土層、２区壁土層実測図（1／６０）…… ２３１
第１９０図　安武・深田Ｃ遺跡谷・ピット出土遺物実測図（1／４、６・７・１９～２５は1／３）… ２３２
第１９１図　安武・深田Ｃ遺跡２区ピット・遺構外出土遺物実測図（1／４、１・６～８は1／３）… ２３３
第１９２図　安武・深田Ｃ遺跡出土石製品実測図（１・２・７は2／３、他は1／２）…… ２３４

表目次

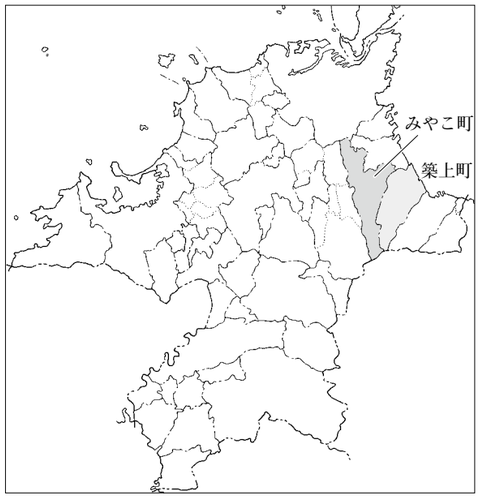
表１　東九州自動車道関係発掘調査地点一覧…… ５
表２　特殊遺物計測表…… １９３
表３　京ヶ辻遺跡ほか出土遺物の胎土分析一覧表…… ２０５
表４　１２号住居跡出土炭化材の放射性炭素年代測定および暦年較正結果…… ２１０

Ⅰ　はじめに

１　調査に至る経緯

東九州自動車道は、福岡県北九州市を起点とし、大分市、延岡市、宮崎市を経由し鹿児島市に至る基幹道路として計画された、総延長約 436㎞の高速自動車道である。

東九州自動車道の整備計画策定からの文化財調査にかかる経緯については，先行する報告書に詳しく記載されているために本書では割愛することとし、以下、本書で報告する各遺跡についての個別的な調査に至る経緯を記述したい。



第1図　みやこ町と築上町の位置図

京ヶ辻遺跡は東九州自動車道建設に伴い、京都郡みやこ町有久の田地部分の約 20,000㎡が対象であった。工事対象地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である「京ヶ辻遺跡」を一部含んでいた。教育庁総務部文化財保護課は、西日本高速道路株式会社九州支社福岡工事事務所と協議をし、平成２１年６月１７・１８日に確認調査を行った。その結果、対象地内で埋蔵文化財が発見されたので平成２１年９月２８日から発掘調査を開始した。

調査は用地取得の関係で全面掘削ができないため、工事の進捗状況にあわせて行なうこととなった。対象面積が広いため、北側から水田区画にあわせて３・１・２区と分けて調査を行なった。１・３区の詳細については東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告－１４－を参照して頂きたい。

今年度は２区と１区の一部を報告する。２区は平成２２・２３年度に調査を行なっている。

２２年度の調査では用地取得の事情により１区の調査途中で、２区にバックホーを投入して表土剥ぎを始めた。９月２９日には１区から移動して人力掘削を行った。遺構検出の結果、住居跡・溝を検出し、２区に古墳時代の集落が広がっていることが判明した。１１月２日から表土を反転し、溝が続いて検出され、初期須恵器が出土した。１２月６日には空中撮影を行なった。２２年度の調査面積は約 1,850㎡である。

平成２３年度では２２年度の北側のおよそ 4,000㎡が対象で、工事の工程に合わせて３回に分けて調査を行った。４月１５日にバックホーを搬入し、１回目の表土剥ぎを開始した。工程上６月までに終わるように要望されたため、他の現場から応援を得て、６月３０日に空中撮影を終えた。隣接地の調査では、８月２９日に２つ目となる初期須恵器の蓋が調査区南東の大谷で出土した。９月１５日に２度目の空中撮影を行った。９月２３日には最後の調査区の表土剥ぎが終了し、多数の住居跡を検出した。大谷の続きではさらに初期須恵器が出土した。１２月１日の空中撮影終了後、大谷の下層・残りの住居跡の図化作業を行った。１２月１５日に記者発表を行い、翌日には小雪が散る中、建機・道具類の撤収を行ない、すべての作業を終了した。

なお、調査区に近接して工事が進行していたため現地説明会を行なえずにいたが、京築地域の京築発掘速報展２０１２（平成２４年２月２１日～３月２５日）と九州歴史資料館発掘速報展２０１２（平成２４年７月２４日～１０月２８日）で出土遺物の展示を行った。

安武・深田遺跡は築上郡築上町安武に位置している。遺跡は椎田道路建設時にも発掘調査が行わ

れており、弥生時代中期の鍛冶遺跡として多くの成果を挙げている。

平成２２年３月８・９日の確認調査の結果、埋蔵文化財が発見されたことから、築城 IC の拡幅部分について発掘調査を行うこととなった。調査範囲は既存の椎田道路築城ＩＣの北側をＡ・Ｂ遺跡、南側をＣ遺跡と区分し、Ａ・Ｂ遺跡は築上町教育委員会、Ｂ遺跡の一部とＣ遺跡を九州歴史資料館（平成２２年度までは教育庁総務部文化財保護課が担当）が調査した。

調査は平成２２・２３年度の２ヶ年にかけて行い、工事主体である西日本高速道路株式会社九州支社福岡工事事務所との定期的な協議の中で、用地の進捗に沿って進められた。平成２２年度は南側のＣ遺跡の調査を行い、２３年度は用地の関係で残っていたＣ遺跡の一部、ならびに工事の進捗にあわせてＢ遺跡の一部の調査を行った。なお、詳しい調査の経過についてはそれぞれの担当者により後述している。

２　調査・整理の組織

西日本高速道路株式会社九州支社

	平成２２年度	平成２３年度	平成２５年度	平成２６年度
支社長	本間清輔	本間清輔	本間清輔	本間清輔
福岡工事事務所長	福田美文	中園明広	源谷秋義	源谷秋義
副所長（技術担当）	岩尾　泉（～ 9.30） 入江壮太（4.1 ～）	入江壮太 今井栄蔵（～ 9.30） 井　秀和（10.1 ～）	松繁浩二 井　秀和	松繁浩二
副所長（事務担当）	原野安博	原野安博	甲斐島武司 （用地課長兼務）	甲斐島武司
総務課長	江口政秋	江口政秋	馬場孝人	馬場孝人（～ 9.30） 桑野和之（10.1 ～）
用地課長	桑原和之	桑原和之	甲斐島武司	甲斐島武司（～ 9.30） 大野嘉彦（10.1 ～）
工務課長	石塚　純	石塚　純（9.30 ～） 堅山哲仁（10.1 ～）	田中康一朗	田中康一朗
みやこ築上工事長	大久保良和	大久保良和	大原和章	大原和章

平成２２･２３年度（発掘調査）、２５･２６年度（整理報告）に関わる関係者は次の通りである。なお、県の組織改革により、平成２３年度以降は埋蔵文化財調査業務全般が九州歴史資料館へと移管されている。

福岡県教育委員会

	平成２２年度	平成２３年度	平成２５年度	平成２６年度
総括				
教育長	杉光　誠	杉光　誠	杉光　誠	城戸秀明
教育次長	荒巻俊彦	荒巻俊彦	城戸秀明	西牟田龍治
総務部長	今田義雄	今田義雄	西牟田龍治	川添弘人
文化財保護課長	平川昌弘			
副課長	伊﨑俊秋			
参事	小池史哲			
参事補佐兼調査第二係長	飛野博文			
主任技師	城門義廣（安武・深田調査）			
臨時職員	海出淳平（京ヶ辻調査）			

九州歴史資料館

	平成２３年度	平成２５年度	平成２６年度
総括			
館長	西谷　正	荒巻俊彦	杉光　誠
副館長	南里正美	篠田隆行	伊﨑俊秋（副理事兼）
参事（文化財調査室長と兼務）		飛野博文	飛野博文
総務室長（企画主幹）	圓城寺紀子	圓城寺紀子	塩塚孝憲
文化財調査室長（企画主幹）	飛野博文		
文化財調査室長補佐（企画主幹）	吉村靖徳	吉村靖徳	吉村靖徳
文化財調査班長（技術主査）	小川泰樹	小川泰樹	秦　憲二（報告）
庶務			
総務班長	塩塚孝憲	長野良博	山﨑　彰
事務主査	熊谷泰容	青木三保	南里成子
		南里成子	宮崎奈巳
主任主事	近藤一崇		
主事	谷川賢治	三好洸一	秦　健太
調査・整理報告			
技術主査	秦　憲二（安武･深田調査）		小川泰樹（整理）
主任技師		坂本真一（整理）	坂本真一（編集）
	城門義廣（安武･深田調査）	城門義廣（整理）	城門義廣（報告）
臨時職員	海出淳平（京ヶ辻調査）		

なお、発掘調査では、地元の区長、発掘作業員、みやこ町教育委員会の関係者など、多くの方から御協力を賜った。特に、行橋市教育委員会の伊藤昌広氏、築上町教育委員会の高尾栄一氏、豊前市教育委員会の棚田昭仁氏には多くのご教示を頂いた。ここに記して感謝いたします。

第2図　東九州自動車道路線図及び調査地点位置図（1/ 100,000）

表1　東九州自動車道関係発掘調査地点一覧

地点	工事件名	遺跡名	所在地	対象面積（㎡）	試掘年度	調査面積（㎡）	調査年度	報告年度	既刊報告書番号	備考
0	苅田 IC	雨窪遺跡群	京都郡苅田町大字雨窪		H12・13	4000	H13·14	H15	1集	
1	福岡		京都郡苅田町大字雨窪	1700	H22					遺跡なし
2	福岡		京都郡苅田町大字提	4500	H21					遺跡なし
3	福岡	馬場遺跡群	京都郡苅田町大字提・馬場	13100	H16·20·21	1200		H24	4集	
4	福岡	馬場遺跡群	京都郡苅田町大字馬場・南原	35300	H18·19	3900	H19·20	H24	4集	
5	福岡		京都郡苅田町大字集	32100	H21·22					遺跡なし
6	福岡		京都郡苅田町大字下片島	30600	H18·20·21					遺跡なし
7	福岡		京都郡苅田町大字下片島	10700	H18					遺跡なし
8	福岡	岩屋古墳群	京都郡苅田町大字上片島	24200	H20 ～ 22	5000	H19	H24	5集	
9	福岡	岩屋古墳群	京都郡苅田町大字上片島	29600	H20 ～ 22		H19	H24	5集	
10	福岡		京都郡苅田町大字上片島	21500	H20					遺跡なし
11	福岡	上片島遺跡	京都郡苅田町大字岡崎・上片島	18200	H20	8440	H21～23	H24	5集	
12	福岡	上片島遺跡	京都郡苅田町大字上片島	7500	H20	6180	H21	H24	5集	
13	福岡		行橋市延永	12200	H19					遺跡なし
14	福岡		行橋市延永	17500	H19					遺跡なし
15	福岡	延永ヤヨミ園遺跡	行橋市延永・吉国	24810	H22	24810	H19～23	H23・25・26	2·9·11·18集	
16	福岡		行橋市吉国	4400	H20					遺跡なし
17	福岡		行橋市吉国	5100	H19					遺跡なし
18	福岡		行橋市吉国・下検地	82500	H18・19					遺跡なし
19	福岡		行橋市下検地	12710	H22					遺跡なし
20	福岡		行橋市上検地・下検地	20650	H22					遺跡なし
21	福岡		行橋市上検地・中川・大野井	19190	H22					遺跡なし
22	福岡		行橋市大野井・宝山	4820	H20・22					遺跡なし
23	福岡		行橋市宝山	10050	H20					遺跡なし
24	福岡	宝山小出遺跡	行橋市宝山	16100	H20	6360	H21·22	H25	12集	
25	福岡	宝山桑ノ木遺跡	行橋市宝山・流末	46620	H20·21	31550	H22～	H25	12集	
26	福岡	流末溝田遺跡	行橋市流末	14710	H20·21	2900	H22	H25	12集	
27	福岡		行橋市流末	840						遺跡なし
28	福岡	矢留堂ノ前遺跡	行橋市矢留	18590	H20	12750	H21～23	H26	19集	
29	福岡		行橋市矢留・南泉	7000	H20·22					遺跡なし
30	福岡	福原長者原遺跡 福原寄原遺跡	行橋市南泉	18774	H19·22	16574	H22～	H25	13集	
31	福岡	福原寄原遺跡	行橋市南泉	10950	H21	3300	H21	H25	13集	
32	福岡	竹並大車遺跡 竹並ヒメコ塚古墳	行橋市南泉	13888	H21・22	13888				H22 行橋市による調査
33	福岡	竹並大内田遺跡	行橋市南泉	17636	H20・21	4560	H21	H24	6集	
34	福岡	鬼熊遺跡	行橋市南泉	15013	H20	15013	H21			H21 行橋市による調査
35	福岡	草場角名遺跡 国作三角遺跡	行橋市南泉・京都郡みやこ町国作	42940	H20 ～ 22	3420	H22·23	H24	6集	
36	福岡	八反田遺跡 京ヶ辻遺跡	京都郡みやこ町国作・田中・有久	29491	H20 ～ 22	29491	H21～23	H25·26	14·20集（本冊）	H21 八反田遺跡はみやこ町による調査
37	福岡		京都郡みやこ町有久	1110	H21					遺跡なし
38	福岡	呰見川ノ上遺跡	京都郡みやこ町呰見	1132	H21	1132	H22	H25	10集	
39	福岡	呰見中園遺跡 呰見大塚古墳	京都郡みやこ町呰見	8218	H21・22	5918	H21～23	H26	17集	H22 呰見中園遺跡はみやこ町による調査
40	福岡	カワラケ田遺跡 八ッ重遺跡	京都郡みやこ町呰見・下原	45510	H19 ～ 21	22763	H20～22	H23・25・26	3·10·17集	
41	福岡	カワラケ田遺跡	京都郡みやこ町呰見	5080	H21	3580	H21·22	H25	10集	
42	福岡	安武・深田遺跡	築上郡築上町安武	26000	H21・22	26000	H22	H26	20集（本冊）	一部築上町による調査
43	福岡		築上郡築上町小原	24359	H21					遺跡なし

Ⅱ　位置と環境

今回報告する２遺跡のうち、京ヶ辻遺跡は『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告 - 14 - 』で掲載した報告の続編であり、同遺跡の地理・歴史的環境についてはすでに掲載しているので、参照していただきたい。安武・深田遺跡は京ヶ辻遺跡と 3.6kmほど離れていることから、ここでは安武遺跡周辺の地理的環境を述べる。

安武・深田遺跡の所在する築上町は福岡県の東部、周防灘に面して位置し、北はみやこ町、東は豊前市、南はごく一部が大分県中津市に接する。平成 18 年 1 月 10 日に築城町と椎田町が合併して誕生した新しい町である。南には英彦山から広がる山裾を多くの川が開析して八ッ手状に延びる丘陵地形を生み出しており、丘陵の先端には洪積台地が形成されている。今回報告する安武・深田遺跡は、音無川と城井川の間にある築城原台地に立地している。築城原は築上町赤幡から始まり、下別府まで広がる標高 10 ～ 35 ｍの台地である。

築上町内では、表採資料や後世の遺構に混入したものだが、旧石器時代の遺物が確認されている。縄文時代に入ると、本庄大坪遺跡で早期の柏原式土器をはじめ押型文土器などが発見され、松丸Ａ遺跡・西八田平原遺跡でも押型文(註1)土器が出土している。安武・土井の内遺跡や広末・安永遺跡ではこの時期のもの(註2)と見られる(註3)落し穴群が検出されている。中期の遺跡としては(註4)平地部の東高塚弘法(註5)田遺跡があり船元式土器がまとまって出土している。後期では山崎遺跡と石町遺跡に代表され、鐘崎式(註6)から北久根山式の集落跡が発見された。松丸Ｄ遺跡ではこれに続く(註7)北久根山式(註8)から晩期末までの時期の遺構・遺物が見られる。

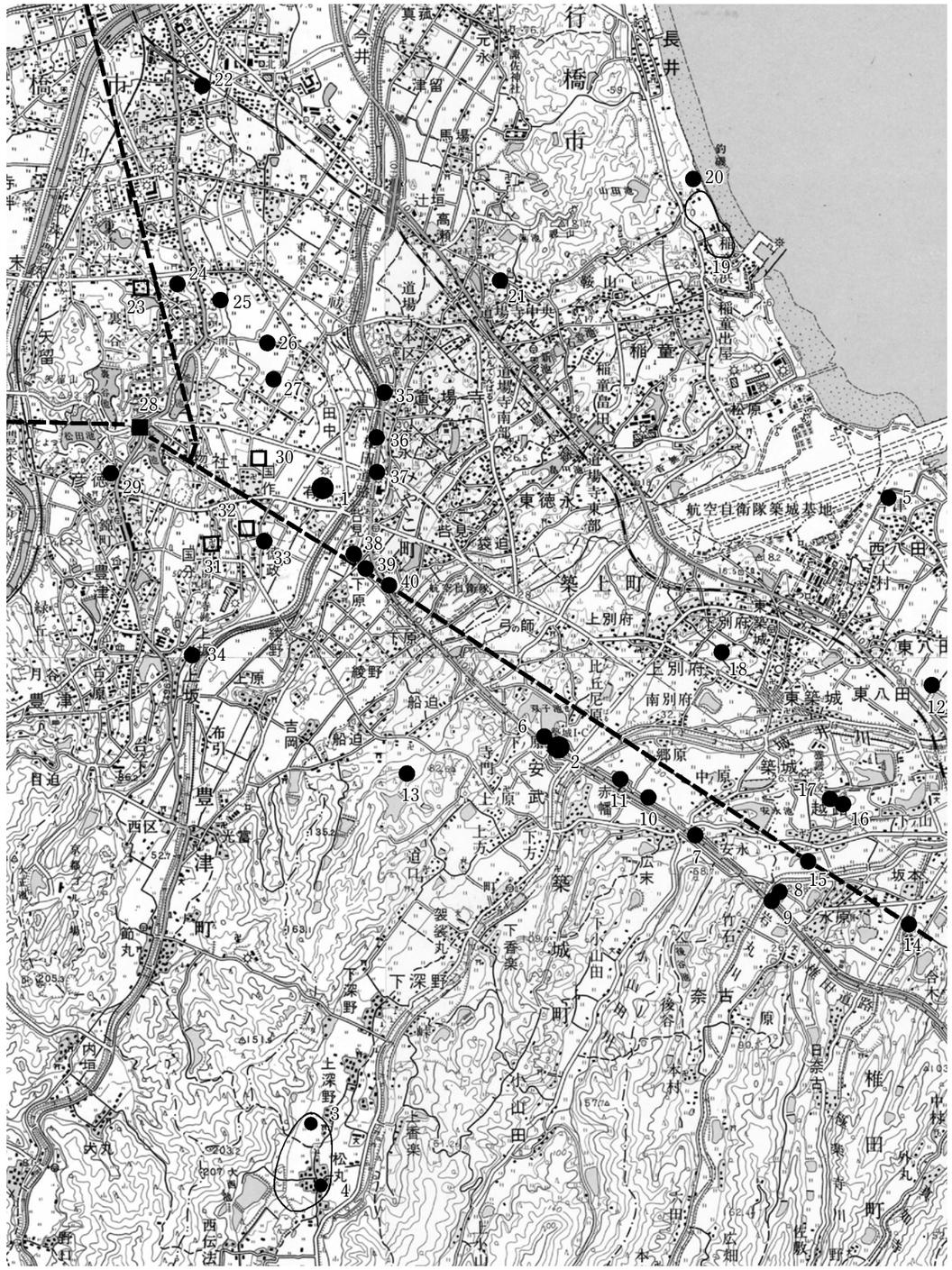
弥生時代では前期の遺跡は少ないが、中期には広末・安永遺跡や鉄器製作址が発見された安武・深田遺跡などの集落遺跡があり、後期では漢式土器が出土した十双遺跡や赤幡森ヶ坪遺跡がある。(註9)

古墳時代では前期の遺跡は少ないが、中期では木製品が多く出土した宇留津上角遺跡があり、後期には赤幡森ヶ坪遺跡で集落遺跡が発見されている。埋葬遺跡としては、石堂中後ヶ谷古墳(註10)群で群集墳(註11)が調査されている。また、６世紀後半の船迫窯跡も発見されており、古代に入ると瓦窯兼業となり、９世紀まで操業されている。

古代の築上町は築城郡に属し、郡内には「築城駅」が置かれたことが記されており、町内の築城地区に比定されている。また、古代官道は建設予定の築城ＩＣの北端を北西から南東に走る路線が推定されている。７世紀後半から８世紀の集落遺跡では赤幡森ヶ坪遺跡があり、多くの焼塩壺と銅碗・石帯が出土している。また、安武・深田遺跡でも墨書土器や木簡、平瓦・緑釉陶器などの希少な遺物が出土しており、築城原一帯に「築城駅」や「築城郡衙」に関連する公的施設や有力者が所在する集落が分布していたことが推察される。（秦）

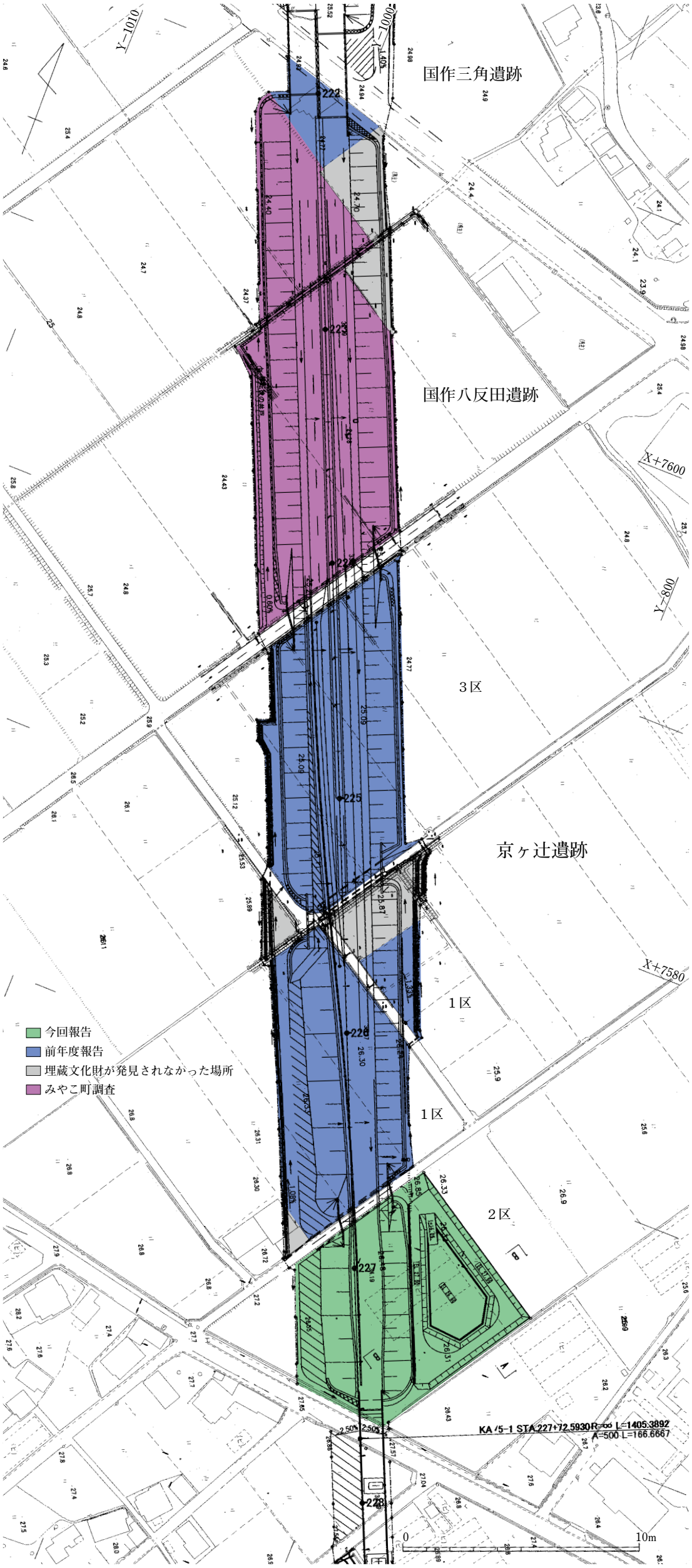
（参考文献）

1　築上町教育委員会 2007『本庄地区遺跡群』築上町文化財調査報告書第２集
2　築城町教育委員会 1992『城井谷Ⅰ』築城町文化財調査報告書第２集
3　椎田町教育委員会 1999『今津・西八田の遺跡』椎田町文化財調査報告書第９集
4　福岡県教育委員会 1991『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告 - 4 -』
5　福岡県教育委員会 1991『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告 - 5 -』
6　椎田町教育委員会 2004『東高塚地区・東八田地区と越路地区の遺跡』椎田町文化財調査報告書第 14 集
7　福岡県教育委員会 1992『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告 - 7 -』
8　椎田町教育委員会 1998『石町遺跡』椎田町文化財調査報告書第２集
9　福岡県教育委員会 1992『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告 - 8 - 中巻』
10　椎田町教育委員会 2001『日奈古・宇留津周辺の遺跡と岩丸・福間の遺跡』椎田町文化財調査報告書第 11 集
11　福岡県教育委員会 1990『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告 - 2 -』



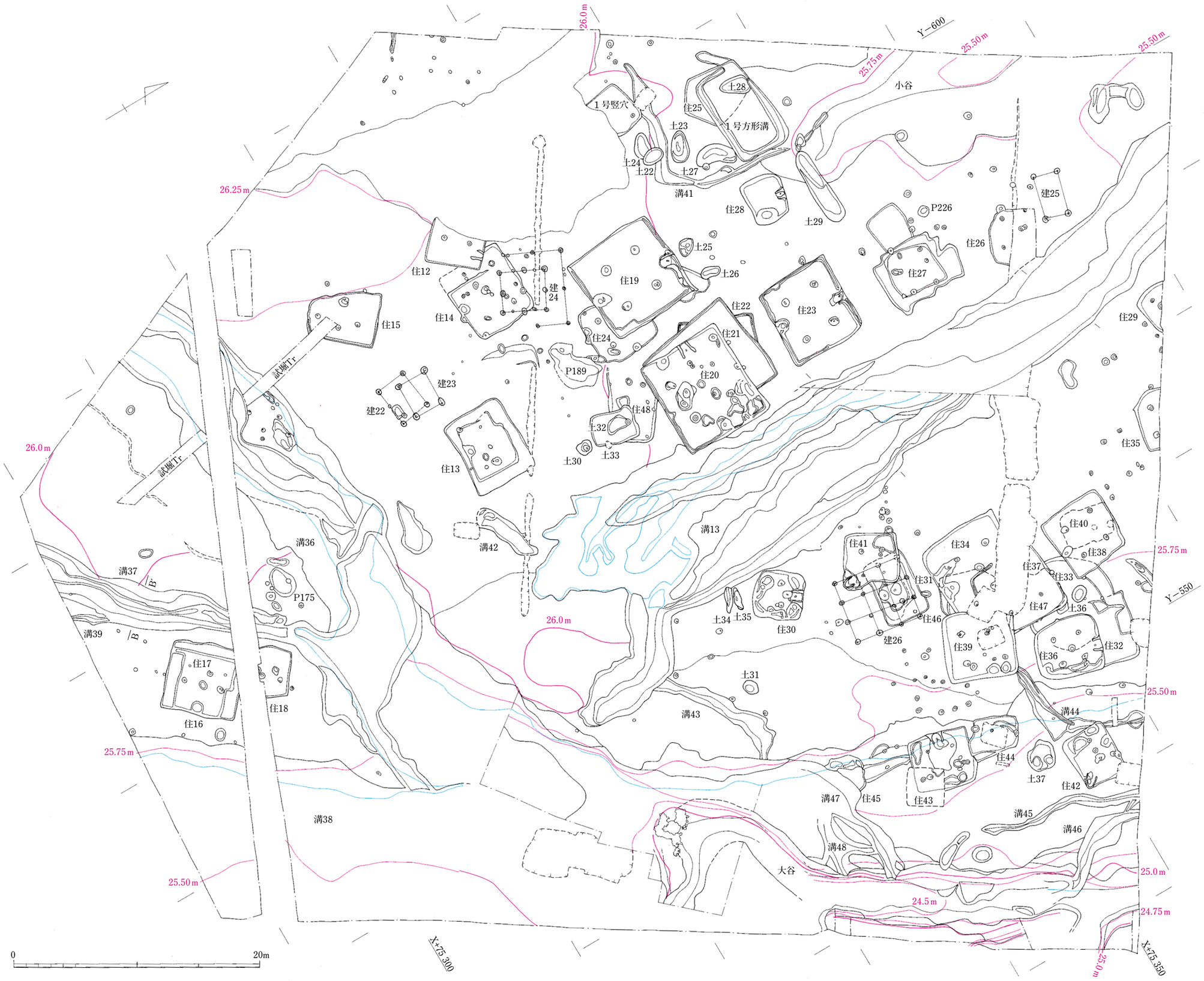
1　**京ヶ辻遺跡**	9　山崎遺跡	17　越路貴船遺跡	25　ヒメコ塚古墳	33　徳政瓦窯遺跡
2　**安武・深田遺跡**	10　十双遺跡	18　築城千代遺跡	26　鬼熊遺跡	34　上坂廃寺
3　松丸Ａ遺跡	11　赤幡森ヶ坪遺跡	19　稲童古墳群	27　草場角名遺跡	35　居屋敷遺跡
4　松丸Ｄ遺跡	12　宇留津上角遺跡	20　稲童石並古墳	28　甲塚方墳	36　徳永川ノ上遺跡
5　西八田平原遺跡	13　船迫窯跡	21　隼人塚古墳	29　彦徳甲塚古墳	37　神手遺跡
6　安武・土井の内遺跡	14　坂本正毛田遺跡	22　崎野遺跡	30　豊前国府跡	38　砦見大塚古墳
7　広末・安永遺跡	15　越路二月田遺跡	23　福原長者原遺跡	31　豊前国分寺	39　カワラケ田遺跡２次調査
8　石町遺跡	16　越路六郎遺跡	24　福原寄原遺跡	32　豊前国分尼寺跡	40　八ッ重遺跡１次調査

第3図　周辺遺跡分布図（1/ 50,000）



第4図　京ヶ辻遺跡調査区割り図（1/２,０００）

京ヶ辻遺跡



第5図　京ヶ辻遺跡2区全体図（1/ 300）

Ⅲ　京ヶ辻遺跡２区

１　調査の概要

２区は２２年度に南側の約 1,850㎡、２３年度に北側の約 4,000㎡の調査を行った。

遺跡の層序は、１区と同様で近世に大規模な耕地改造が行なわれたようで、床土の直下に遺構面が広がっている。祓川に近いためか、礫原が頭を覗かせる部分が１区よりさらに多く目に付く。部分的に黄色～灰色を基調にした砂・砂質土・礫原など様々な地山が広がるため遺構の埋土には地山と酷似するものも多い。礫原にも住居が掘り込まれ、さらに大溝・大谷の掘削が相次ぎ、検出や掘削作業に手間を費やすこととなった。検出した主な遺構は、関連する１区の遺構を含めて竪穴住居跡３７軒、掘立柱建物跡７棟（内２棟は１区）、土坑１９基（内３基は１区）、大溝１６条（内３条は１区）、小谷・大谷などである。

今年度は２区と１区の一部の古墳時代の遺構をあわせて報告する。

２　竪穴住居跡

竪穴住居跡は２区のほぼ全域で、弥生時代後期～古墳時代中期までの３７軒を検出した。特に古墳時代中期の遺構は、１区から延びる１３号溝から東は大谷、南は３６号溝の間にある大型住居を中心に位置していることが特徴的である。この大型住居周辺の遺構の切り合いは少ないが、北東住居群の大部分は前期の住居と中期の住居が重複するように建てられており、ほぼ継続的に集落は営まれたと思われる。

１２号竪穴住居跡（図版３・３１、第６・７図）

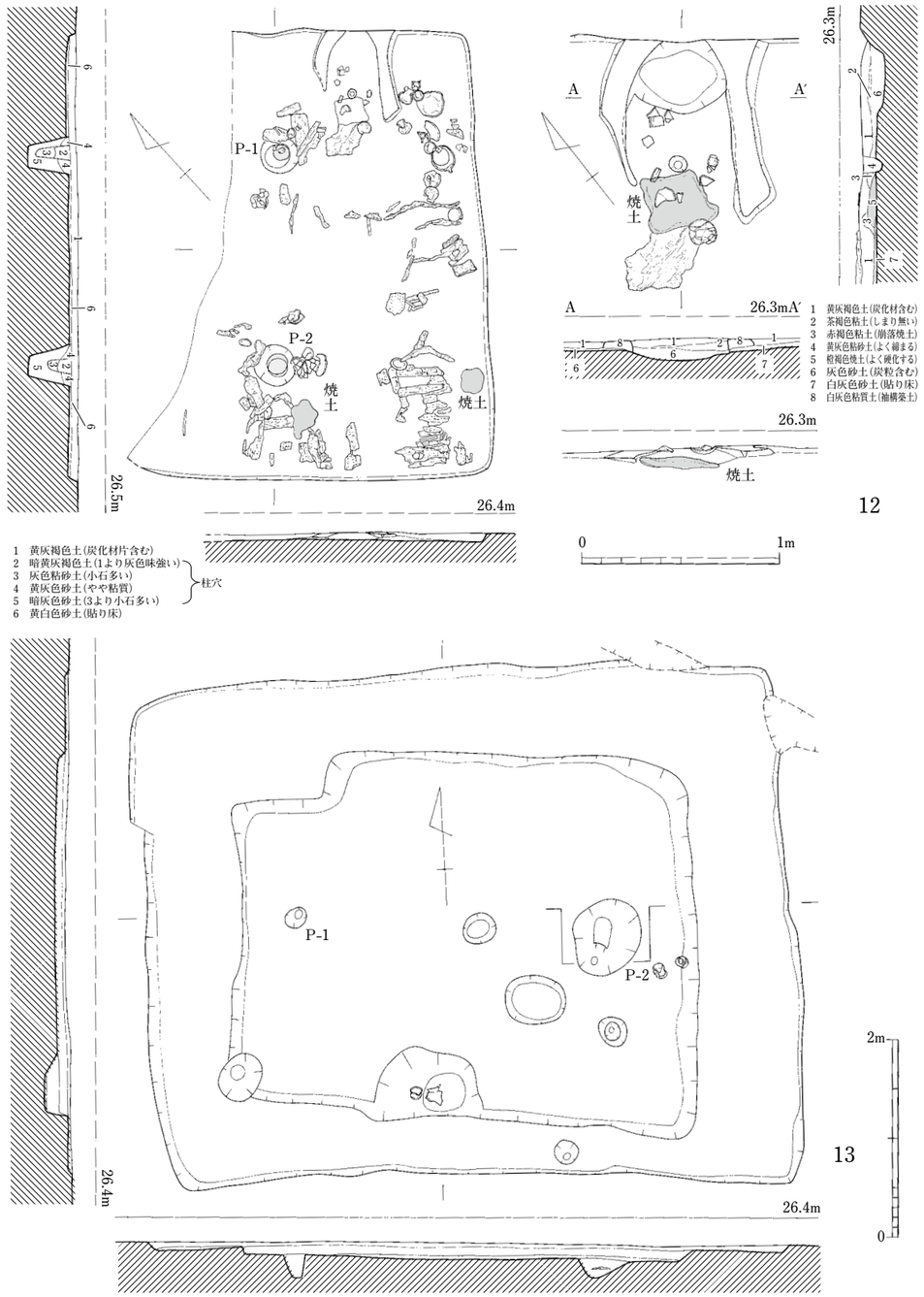
調査区の西側の礫原に接して検出した住居跡で 、火災に遭ったため炭化した木材片で覆われ、カマド周辺にある土器は原位置を保っていた。方位は北東 - 南西を向く方形プランで、礫原側は削平されていて不明である。礫原を精査したが二つの柱穴の他には無く、これらの柱穴を中軸としている。長軸 4.55m、残存短軸 3.55m、深さ 0.1m、柱穴の径は 0.4m、深さ 0.4m を測る。なお、炭化した木材の分析からは４世紀中葉～５世紀前葉という結果が出ている。（Ｐ 208 参照）

カマドは北東壁側に造り付けられ、柱穴を軸とするとやや南東に寄っている。支脚は抜き取り穴だけが焼土の後方に残り、左袖の先は後世の掘削で破壊されていた。袖の長さは 0.9m と長く、両袖の外壁間は 0.8m、燃焼部の幅は 0.47m である。壁面側には幅 0.35 × 0.45m の浅い窪みを持つ。

出土土器

１は須恵器𤭯又は壺である。底部を欠損し、４割程しか残存しておらず、体部の穿孔の有無は不明である。復元口径で 10.1㎝を測り、焼成はややあまく、灰褐色である。頸部の突帯は明瞭で、体部は丸みを帯びる。内外面の調整は横ナデで、内面に指の痕跡が残る。２～１０は土師器である。２は外側に向かって口を開く壺である。底部は欠損する。外面は摩滅しているため僅かに刷毛目が残るが、内面の体部にはナデの痕跡が明瞭に残る。３は体部上半以下を欠損する甕片である。外面の頸部下には歪みのない一条の沈線が巡る。４と５は小型の壺である。４の口縁端部はやや外側に

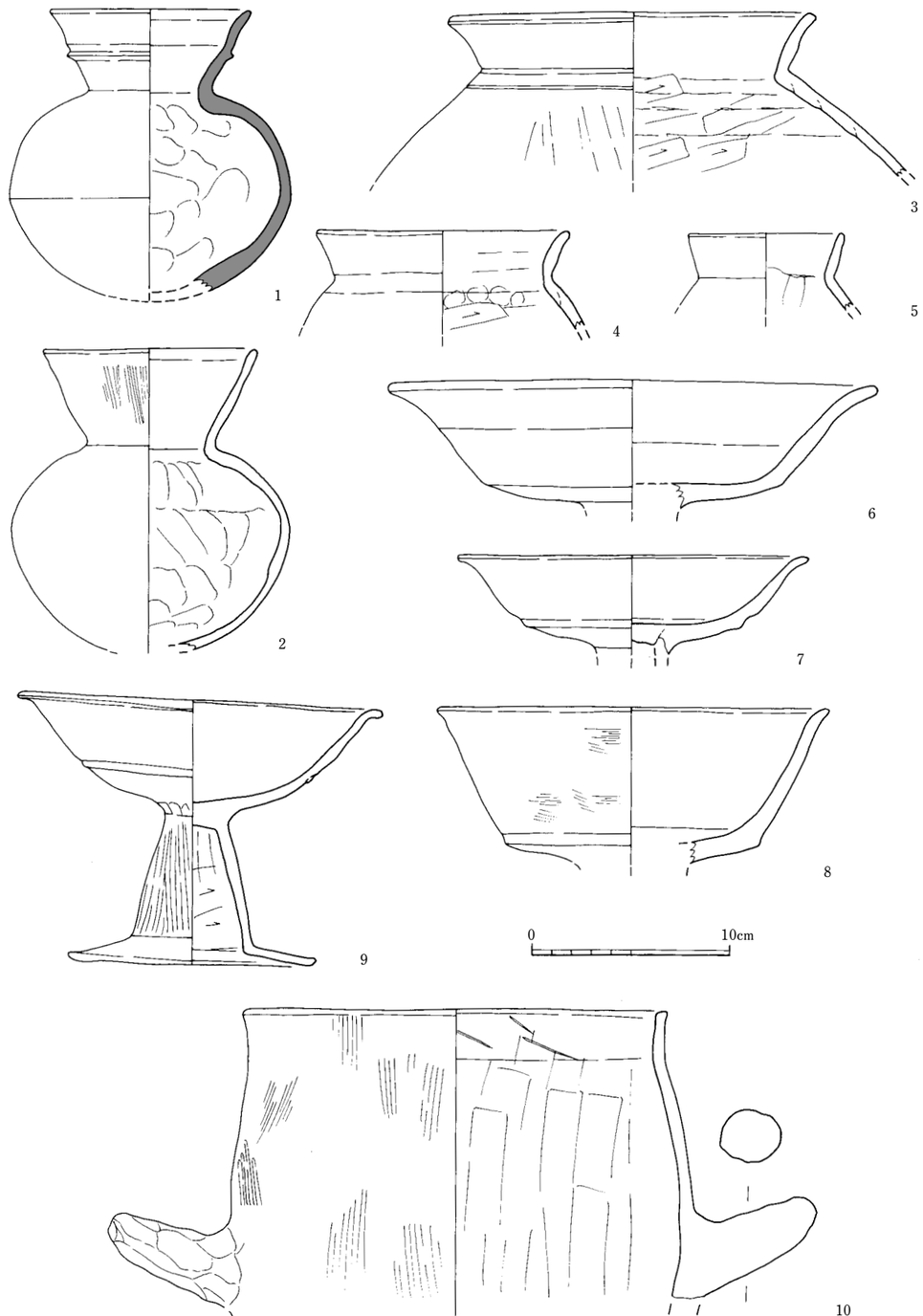
向かって口を開く。５はほぼ直に口が開く。３～５の外面の調整は摩滅して不明だが、内面にはケズリやナデを施す。６～８は高杯の杯部片である。８のみ杯部が深い。９は高杯である。脚部は直角に曲がって大きく開く。杯部は摩滅するが、脚部はミガキとケズリを施す。１０は把手より下半を欠損する甕片である。口縁端部に向かって内側に窄まる。外面は刷毛目と把手付近ではタタキの痕跡がある。内面は板状工具によるナデの痕跡が明瞭である。復元口径 21.8㎝を測る。



第6図　12・13号竪穴住居跡実測図（1/ 60、1/ 30）

１３号竪穴住居跡（図版４、第６・９図）

調査区の中央やや南で検出した長方形プランの住居跡である。検出当初は地山と埋土の区別がつきづらく、さらに調査区の境目に位置していたため、一部を掘り間違えてしまった。ベッド状遺構は幅 0.8 ～ 1m で、南側の幅は 0.4 ～ 0.5m と狭くなっている。住居の中央には 0.7 × 1m の屋内土



第7図　12号竪穴住居跡出土土器実測図（1/ 3）

坑を設けている。この屋内土坑の床面から5㎝程度浮いた状態で、また東側のベッド状遺構とＰ２との間で床面から3㎝程度浮いて、小型丸底壺が４点出土している。中央炉は検出されず、柱穴も確実といえるものがＰ１だけである。長軸6.5m、短軸5.2m、深さ0.1mを測り、埋土は暗灰色粘砂土である。

出土土器

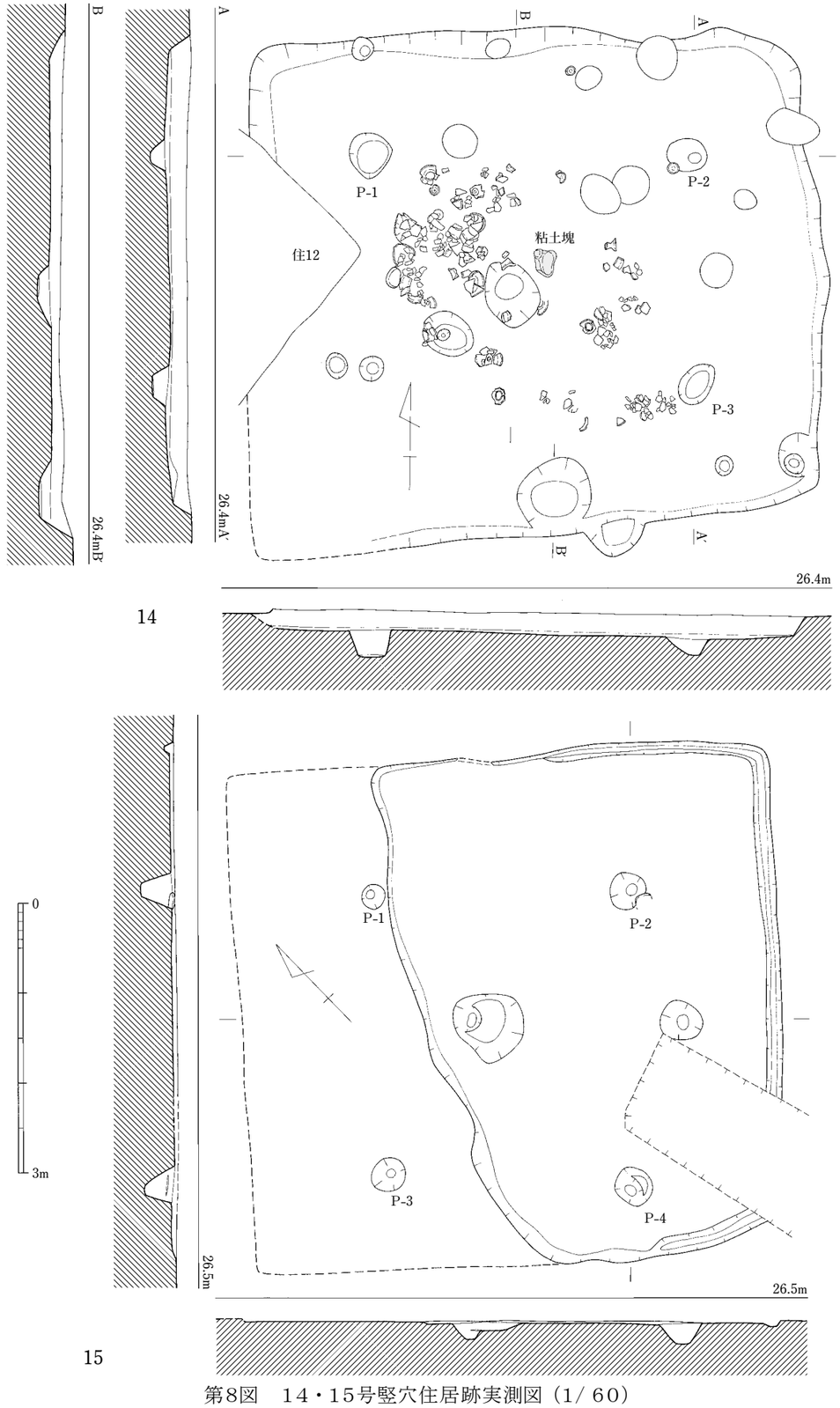
１～５は土師器である。１～４は小型丸底壺で、２は口縁端部を欠くが、復元口径で10.2㎝を測る。３は４点の中で小さいサイズである。４はやや直に口が開く。いずれも外面には刷毛目、内面にはケズリとナデを施す。５は体部下半を欠損する甕である。焼成は良好で、赤橙色を呈し、全体的に薄く作られる。調整は外面には刷毛目、内面にはケズリを施す。

１４号竪穴住居跡（図版４・５・３１、第８～１１図）

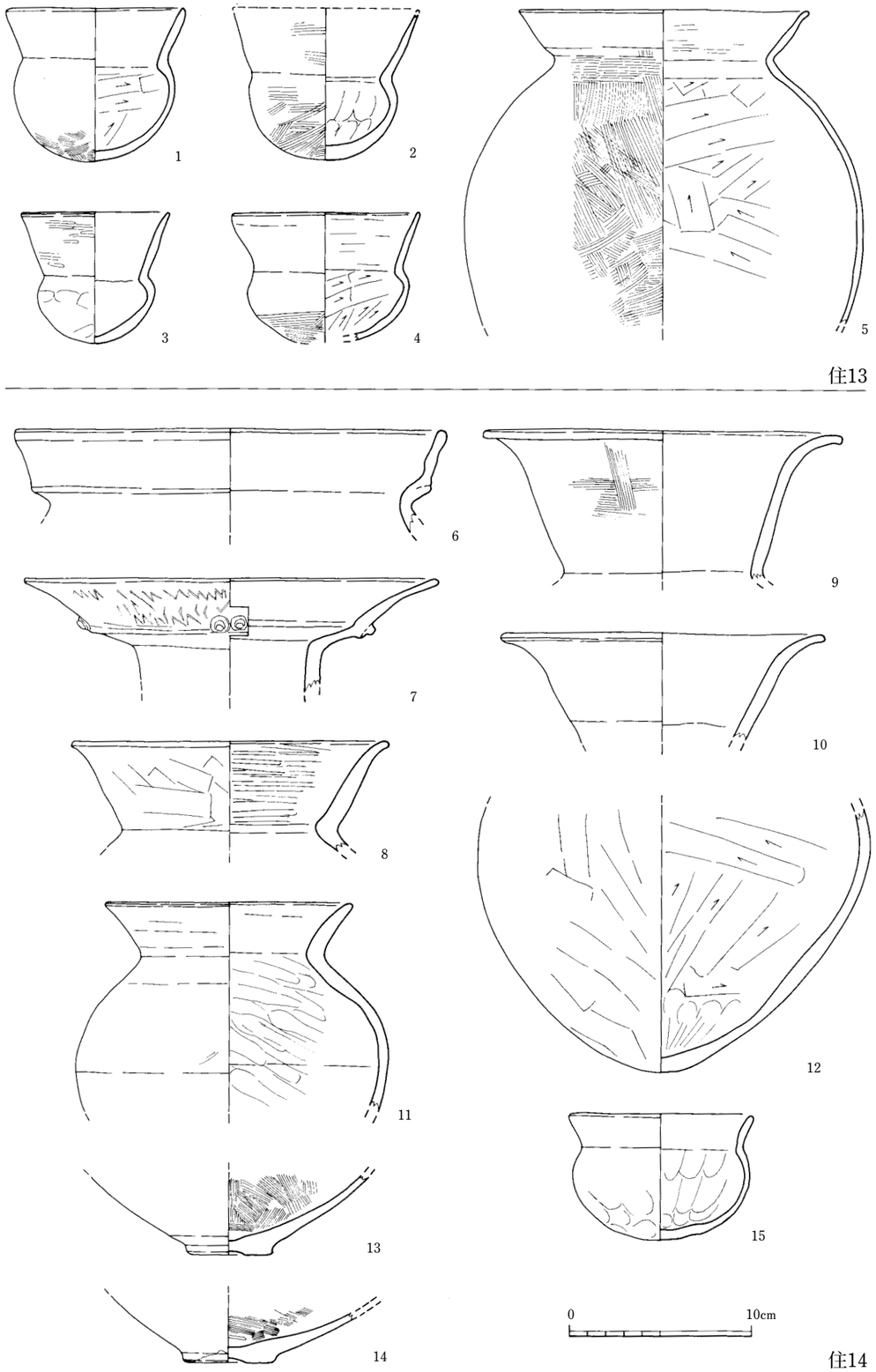
１２・１３号住居跡との間で検出したやや長方形プランの住居跡で、１９・２０号住居跡と同じ向きに建られる。埋土と地山の判断を誤り、南西隅の壁面の約1.6m分を見落としてしまっている。１２号住居跡に切られており、図には推定線で復元している。柱穴はＰ１～３がそれにあたると考えられ、検出できなかった柱穴を含め四本柱であったと思われる。遺物は同時期の住居とは違い、多くが廃棄されていた。長軸6.1m、短軸5.65m、深さ0.2m、中央炉は0.6×0.7mを測る。柱穴の径は約0.5m、深さ0.3m以下で、埋土は暗灰色粘砂土である。

出土土器

６は二重口縁壺の口縁部片である。復元口径に不安があるが、24.0㎝を測る。７は環状円形浮文がつく二重口縁壺の口縁～頸部片である。残存状況から、６ヶ所あった可能性がある。また浮文の上にはやや崩れた鋸歯文が所々消失してはいるが、巡っている。８～１０はほぼ同じ作りをする広口壺の口縁～頸部片である。８の内面には口縁～頸部にかけてミガキを施す。９と１０は口縁付近で大きく外側に向かって開く。１１は壺の体部下半を欠損する。器壁は厚く、内面にはナデの痕跡が明瞭にある。１２は体部下半片で、底部中央は尖る。内面にはナデとケズリの痕跡がある。１３と１４は平底の底部片で、外面に黒斑がある。１５は小型の壺で、緩やかに口縁は外側に開く。内外面にナデの痕跡がある。１６～１９は外来系の甕で、全体的に薄く丁寧に作られている。１８と１９は外面に波状文を施す。２０は外面に刷毛目と内面にはケズリが明瞭にある。外面の一部には、タタキが見られることから折衷系の甕か。２１～２５は甕の口縁～頸部片である。他の甕に比べて厚手である。２４は口縁～頸部までが短い。２６～３２は高杯である。２６～２９は畿内系の高杯か。杯部が深く、屈曲部も明瞭で、口縁端部に向かって大きく開く。２６の内面には、一部刷毛目が見られるが、他は内外面ともにミガキである。３０は屈曲部付近に穿孔を８ヶ所施す。３１の内面は丹塗りを施す丸みのある杯部である。内外面ともにミガキの痕跡がある。３２は小型の高杯か。僅かに外面に丹塗りの痕跡がある。３３と３４は器台である。３３は内面底部中央と脚部に穿孔を施す。３４も杯部と脚部の境目は貫通している。３５～４０は脚付鉢である。３５は脚を欠損するが、外面に黒斑がある。いずれも内外面ともにミガキである。色調は橙色や黄橙色であるが、４０のみ暗褐色である。４１と４２は椀形の鉢である。共に摩滅しているが、４１の内面にはミガキを施す。４３は甑である。底部中央には約2㎝の穿孔を施し、体部には板状工具によるナデを施す。４４は短脚の支脚片で、口縁端部に向かって窄まっている。



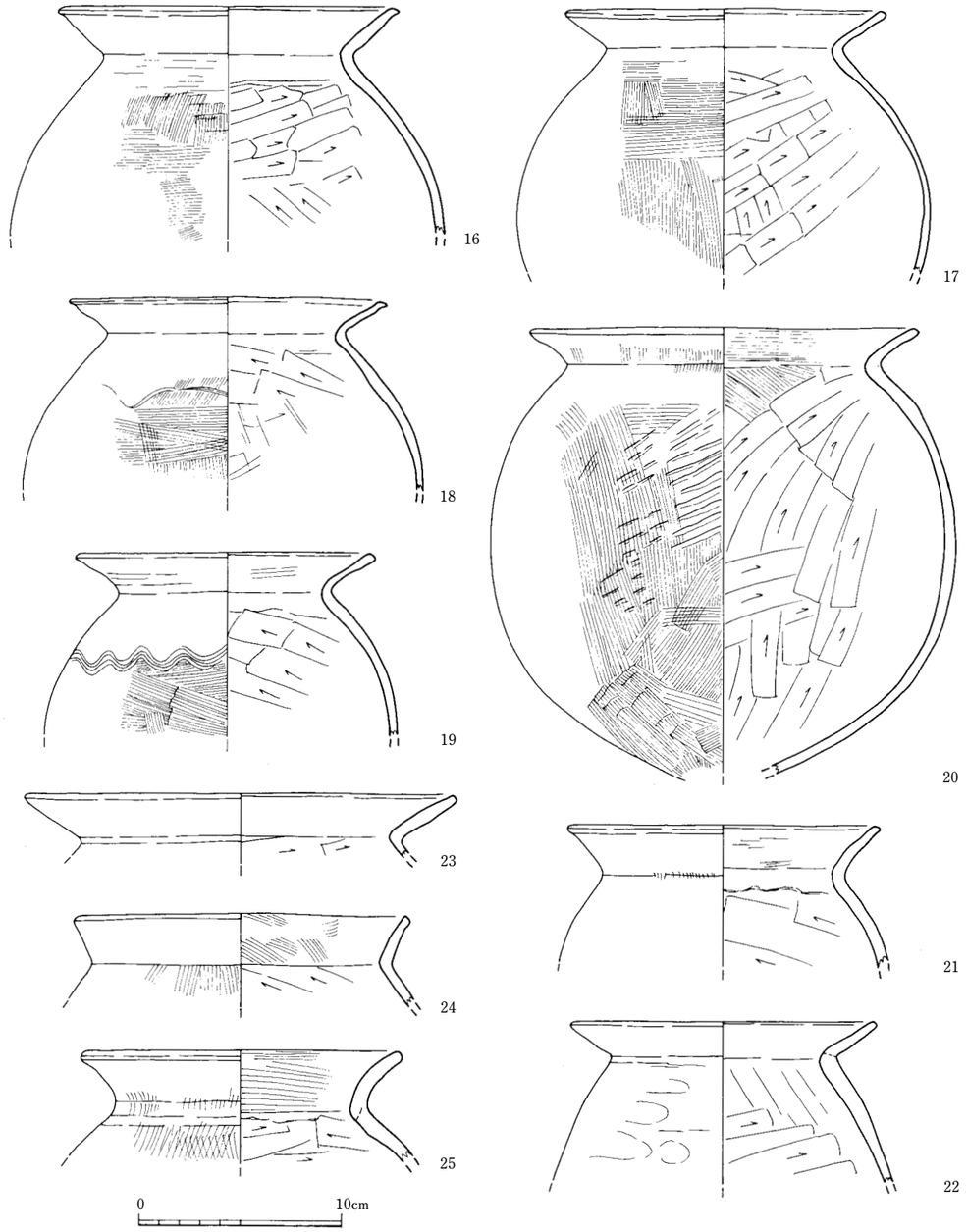
第8図　14・15号竪穴住居跡実測図（1/60）



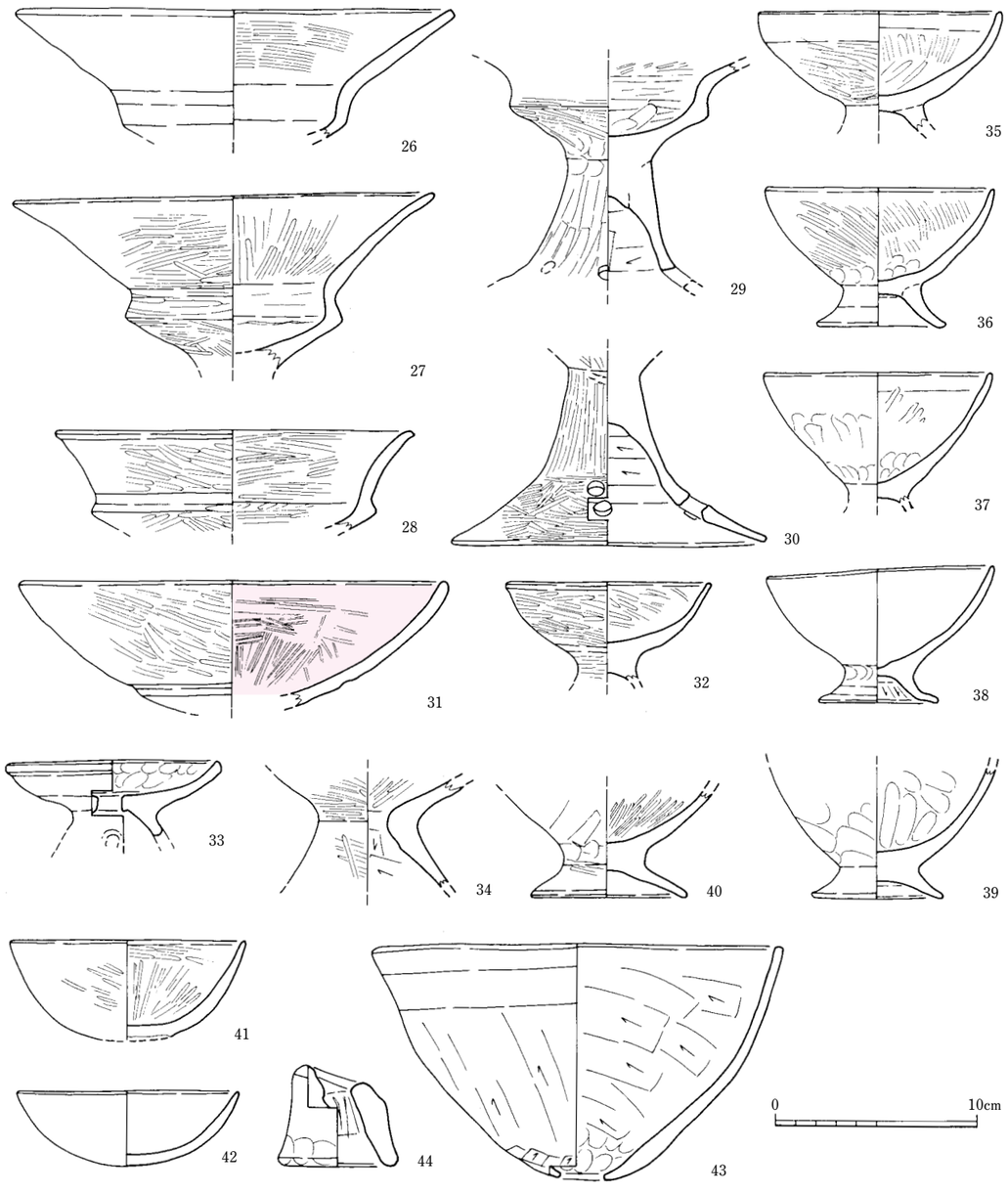
第9図　13・14号竪穴住居跡出土土器実測図（1/ 3）

１５号竪穴住居跡（図版５、第８図）

１４号住居跡の南で検出した方形プランで、四本柱の住居跡である。西側の約半分を削平により失うが、南東側には幅 0.15m 程度の周壁溝が廻る。長軸 5.75m、残存短軸は 4.3m、深さ 0.1 m未満を測る。埋土は淡黄灰色粘砂土である。柱穴径は 0.3 ～ 0.45m、深さは 0.3 ～ 0.35m を測る。中央炉は 0.65 × 0.8m の大きさで、屋内土坑は検出していない。図化に耐えうる遺物はない。



第10図　14号竪穴住居跡出土土器2実測図（1/ 3）



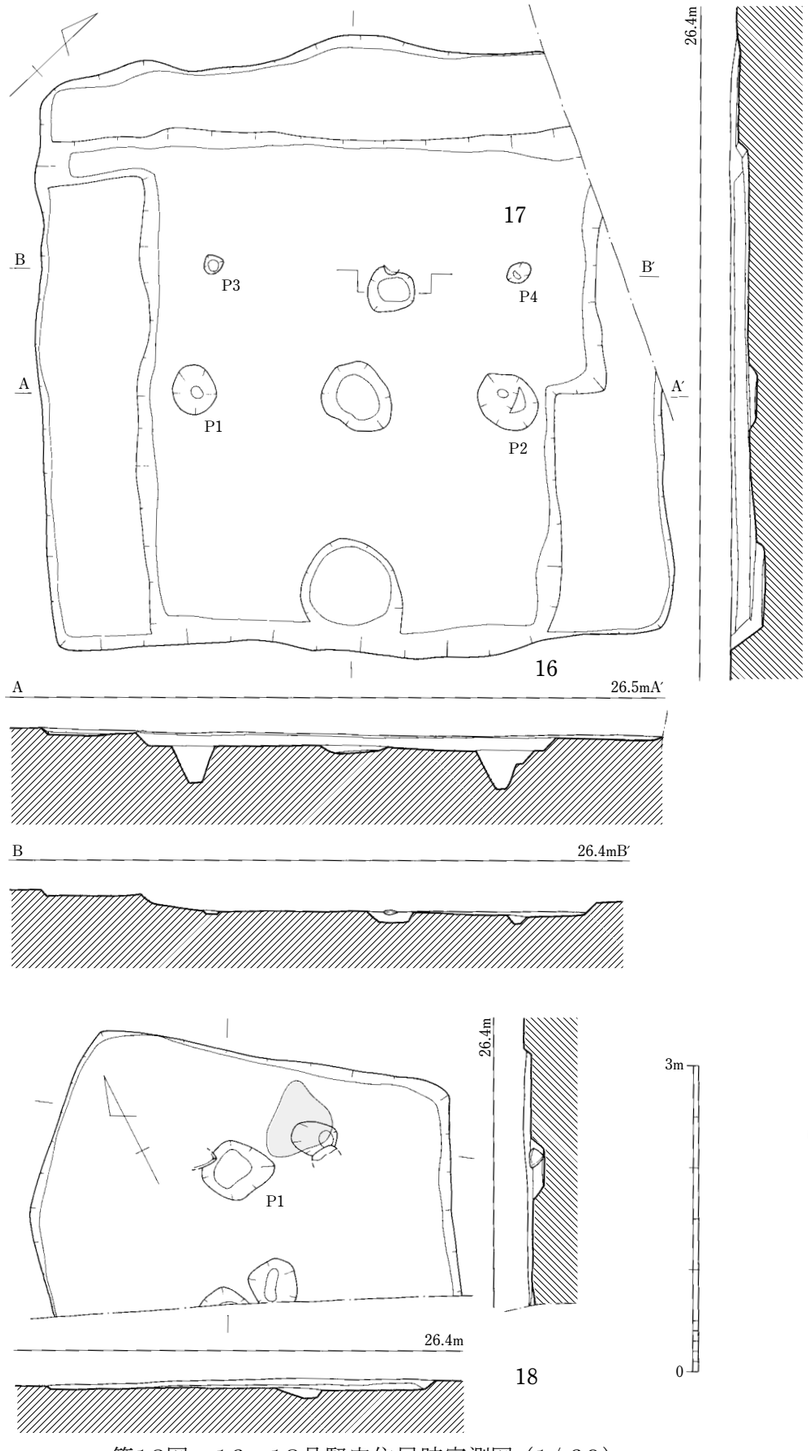
第11図　14号竪穴住居跡出土土器3実測図（1/3）

16号竪穴住居跡（図版5、第12・15図）

調査区南側の大谷際で17号、18号住居跡とともに孤立して検出した均整のとれた正方形プランの住居跡である。17号住居跡と軸は同様であるがこれを切っている。長軸6m、短軸6m、深さ0.25mを測る。ベッド状遺構の幅は1m前後で、中央炉は0.68×0.7m、屋内土坑は0.95×1.1mでやや丸みを帯びている。埋土は暗茶灰色粘質土である。柱穴の径は0.45～0.6m、深さは0.35m を測る。

出土土器

1～4は弥生土器である。1は複合口縁壺の口縁端部片である。端部は外へ膨らむ。2は壺の頸部片か。断面三角形状の突帯が付く。調整は僅かに外面に刷毛目と内面にはケズリを施す。3は厚手に作られた甕で僅かに外湾しながら外へ開く。内外面は刷毛目である。4は高杯の杯部片である。口縁端部は丸みを持ち、一回り大きくなる。また屈曲部は丸く膨らんでいる。摩滅しているが、脚部との接合部付近で外面にミガキの痕跡がある。



第12図　16～18号竪穴住居跡実測図（1/60）

17号竪穴住居跡（図版5、第12図）

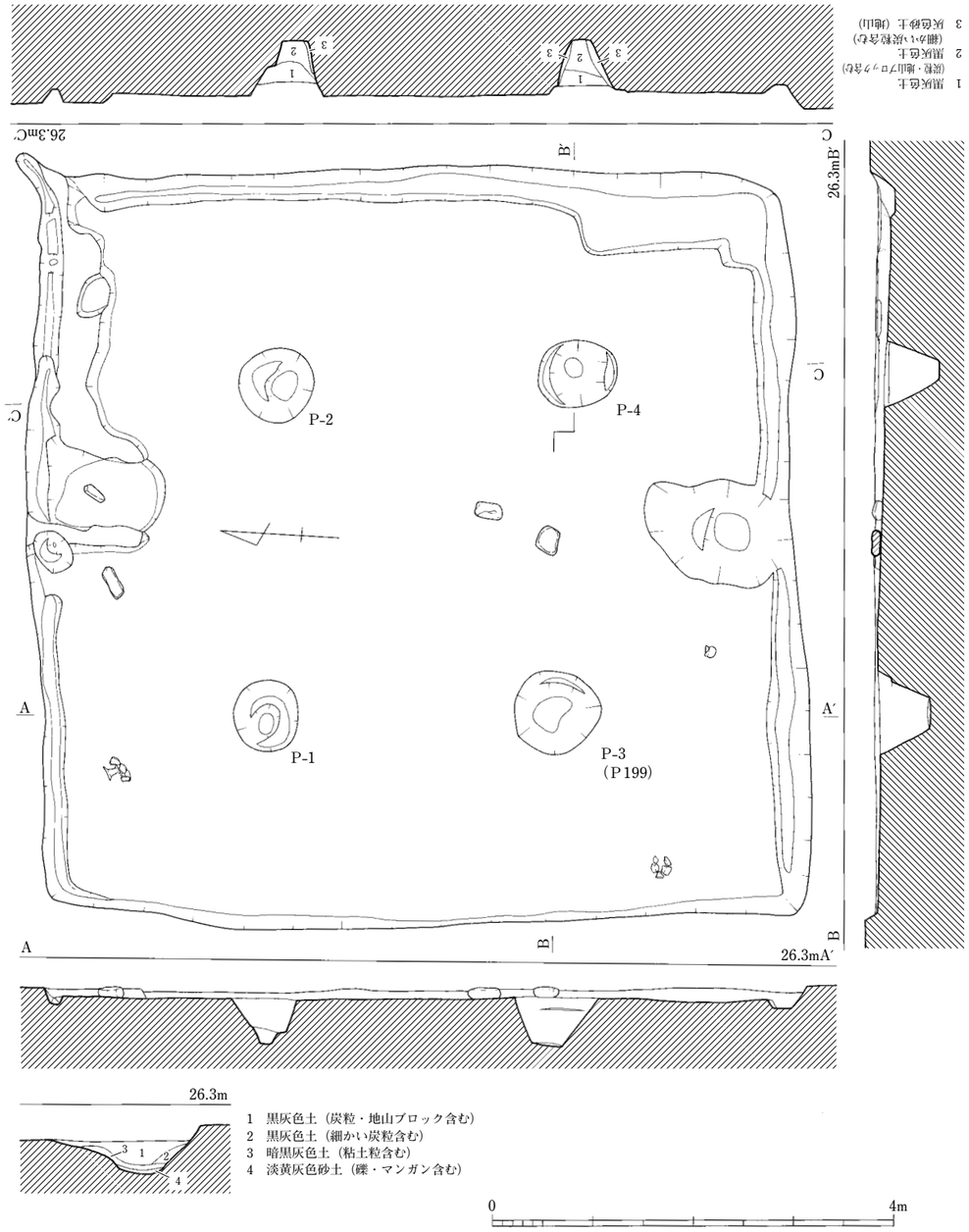
16号住居跡に切られているため床面で中央炉と柱穴のみを検出している。16号住居跡と軸が同じであることを考えると建て替えたのかもしれない。柱穴間はおよそ3m、中央炉は0.35×0.45m、残存する柱穴は0.2m前後、深さは0.1m以下である。図化に耐えうる遺物はない。

１８号竪穴住居跡（図版６、第１２・１５図）

調査区境を挟んで１６号住居跡と隣接して検出した長方形プランの住居跡である。住居壁面が削平され半分程度しか残存していないが、南壁際に中央炉を検出していることから弥生時代後期頃でベッド状遺構が削られていると解される。隣接する１６・１７号住居跡との切り合い関係は不明である。長軸 4.15m、短軸 2.85m、深さ 0.1m 以下が残存する。

出土土器

５～７は弥生土器の壺か。５は広口壺の口縁部か。６は体部片である。一条の突帯が付く。外面



第13図　19号竪穴住居跡実測図（1/ 60）

はミガキで、内面はナデである。７は平底の底部片である。内外面とも板状工具によるナデを施す。いずれも弥生時代後期前半頃の土器か。

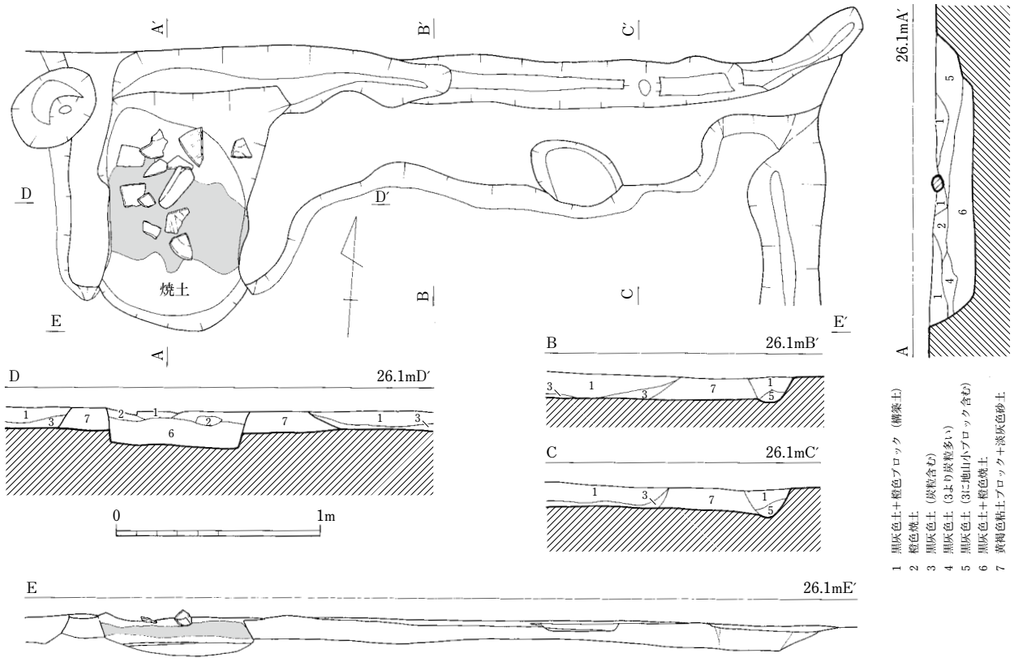
１９号竪穴住居跡（図版６、第１３～１６・１６１図）

調査区の中央のやや西側で２０・２３号住居跡と並立して検出した大型の正方形プランで、四本柱の住居跡である。これら大型の住居跡は１区南東～南側の１３・３６号溝、東の大谷からほぼ中心部に位置し、古墳時代中期の集落の中核と考えられる。南側で２４号住居跡を切り、２０号住居跡との間隔は約 3m で、軸はほぼ東西を向いている。長軸･短軸ともに 7.5m と長大で、深さは 0.15m 以下を測る。それに伴う柱穴も 0.7 ～ 0.85m 、深さ 0.45 ～ 0.6m と他と比べて大型である。屋内土坑は 0.35 × 0.45m を測る。埋土は黒灰色土であった。

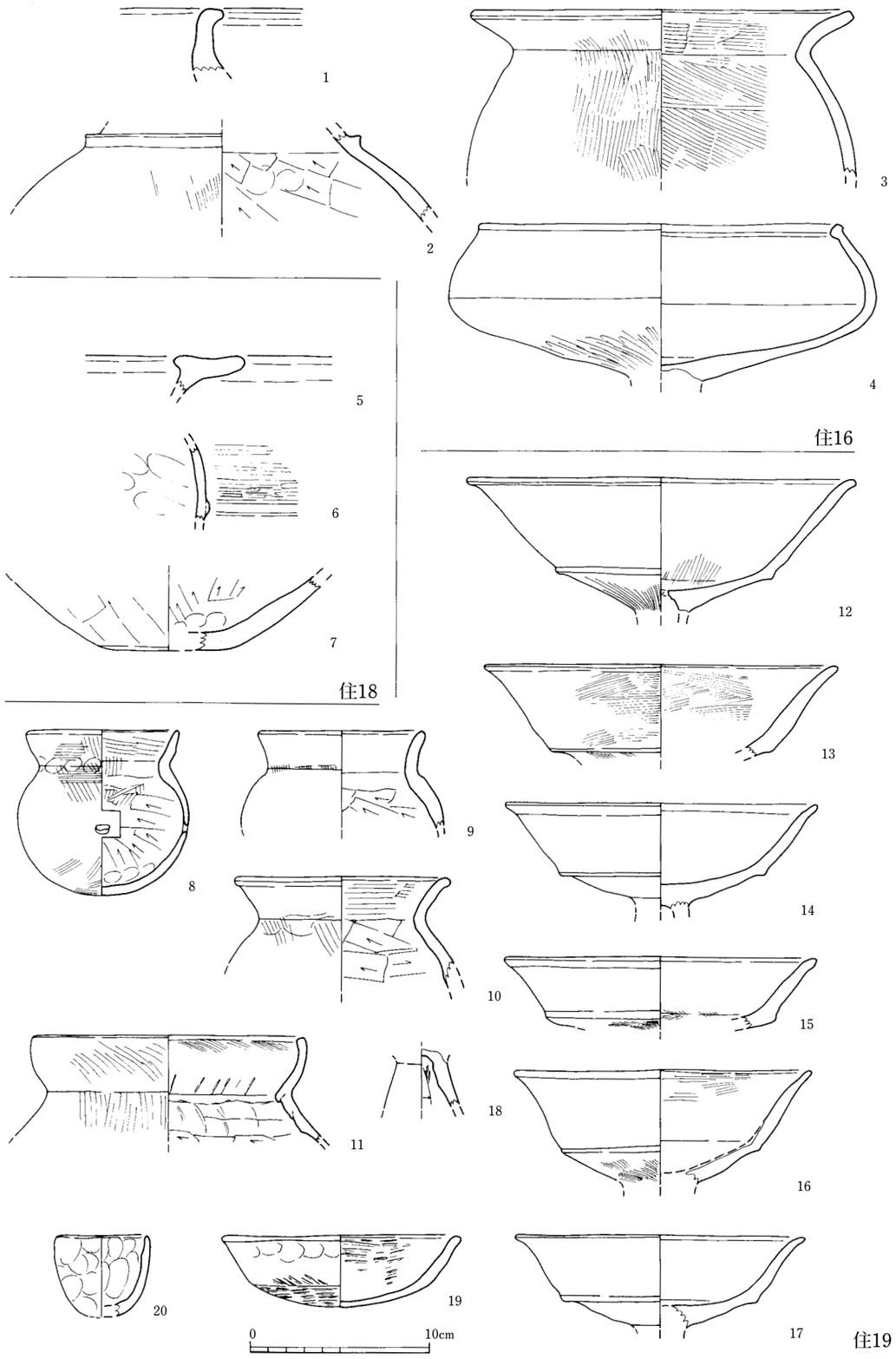
カマドは住居跡北壁に造り付けられており、中軸はやや東寄りである。煙道は 2.5m 程壁面に沿い、0.1 ～ 0.15m と深く掘られており、住居コーナーでは 0.45m 程残存して頭を出している。カマドの形状からは「L」字型カマドと呼称されるものである。支脚は検出時から倒れていたが、土層観察から焼土の上に立てられており、何度も使用されていたと考えられる。内部には焼土と炭粒が充填し、深さ 0.1m を測り、煙道側の袖はやや大きい形状で約 1m、西袖は 1.2m の長さで 0.1m 程度の高さで残る。カマド本体は黄褐色粘土と淡灰色砂質土で構築されていた。

出土土器

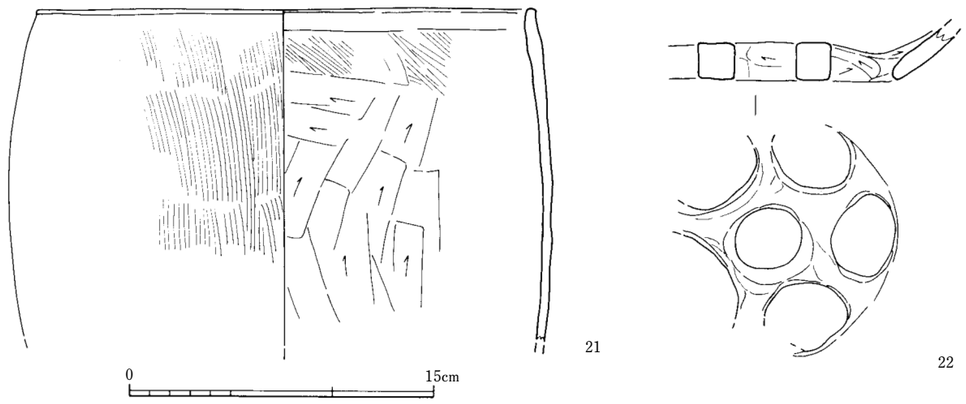
８～２２は土師器である。８は口縁を一部欠損する小型丸底壺である。体部中央には約 1㎝以下の穿孔がある。内外面には粗い刷毛目やケズリ、ナデなどを施す。９は体部中央～底部を欠損する小型の壺か。口縁～頸部部分を厚く作る。１０は口縁端部に丸みを持つ甕か。外面の器壁は剥げているが、僅かに刷毛目が残る。また内面の口縁は刷毛目で、頸部以下はケズリである。１１は内湾しながら口縁はほぼ直に立つ甕か。内面には接合痕が明瞭に残る。１２～１７は高杯杯部である。



第14図　19号竪穴住居跡、カマド実測図（1/ 30）



第15図　16・18・19号竪穴住居跡出土土器実測図（1/ 3）



第16図　19号竪穴住居跡出土土器2実測図（1/ 3）

器壁が剥がれているが、調整は内外面ともに刷毛目とナデである。復元口径 16.4 ～ 21.5㎝を測る。１８は高杯脚部片か。１９は浅い鉢である。２０は手づくねのミニュチュア土器である。調整は内外面ともにナデの痕跡が明瞭である。２１と２２は同一固体の多孔式の甑である。２１は体部下半と把手を欠く。器形は体部中央付近が最大径で、口縁と底部が内側に窄まっている。２２は底部片で穿孔は６カ所と考えられる。調整は外面に刷毛目、内面はケズリと刷毛目である。

２０号竪穴住居跡（図版７・３１、第１７・１８・１６１図）

１９号住居跡の東で近接して検出した大型の長方形プランの４本柱の住居跡で、２１・２２・４８号住居跡を切っている。西側壁の中央にカマドを造りつけている。なお、１３号溝は２０号住居跡が建てられた時にはすでに埋没してしまっている。この住居跡も方位は東西をとり、長軸は 8.3m、短軸は 7.2m で東西が 1m 程大きい。深さについては、約西側半分を調査区で分割されるなどで掘削してしまったため、東側と整合していない。東側半分の様子から、元々は中央炉をもつ住居で、継続している間にカマドへと移行期の様子が窺える。中央炉は 0.65m、残りのよい柱穴の径は 0.7 ～ 0.8m、深さは 0.4 ～ 0.5m を測る。屋内土坑は東に掘られ、1 × 1.5m を測る。

カマドはほぼ真西に造り付けられ、隣接する１９号住居跡と違い「L」字型カマドではない。煙道を想定して数度、精査したが発見できず、袖の横で土器が出土し、煙道がないものと判断した。なお掘削途中で袖の先を削り落としている。袖はやや「ハ」の字状に伸びて、構築土は黄褐色粘土を用い、残存する長さは 1.1 ～ 1.2m、高さは 0.1m で、燃焼部は幅 0.65m を測る。高さ 0.15m と縦に扁平な石製支脚を床面に埋め込み、頂上部は打ち剥いで平らにしてある。支脚の前には幅 0.35m ほど薄く焼土が広がり、5㎝ほど浮いて土玉も出土している。

出土土器

１～３は須恵器瓶や壺などの口縁部片である。１は明瞭な屈曲部から口縁に向かって開くが、頸部では窄まり､内面に絞りの痕跡がある｡内外面には丁寧な横ナデを施す｡２は外面は灰白色を呈し、内面には緑色の自然釉が付着する。３は口縁部片で、口縁と突帯との間隔は狭い。２と３は外面の突帯の下に波状文を施す。４は須恵器壺の口縁部片か。口縁端部は丸みを帯びた三角形状になり、口縁下には一条突帯が付く。内外面ともに丁寧な横ナデである。同一固体と思われる破片が１３号

溝で出土する。５～２４は土師器である。５～７は甕の口縁部片である。６は内外面に刷毛目が明瞭に残る。８～１６は高杯である。杯部の屈曲部には明瞭な段が付く。１１と１２を除いて杯部の口径がやや狭まり、深くなる。口縁端部付近で、外側に向かって外湾する。８～１０は脚部先端に近い位置で、大きく外に向かって水平に開く。８はやや焼成不良なのか、灰白色を呈す。いずれも外面は刷毛目、内面は横ナデを施す。１６は脚部片であるが、屈曲部は他と比べて接地面より浮く。１７は甑の口縁部片である。端部は外側に向かって尖る。１８と１９は甑の把手である。２０は他と比べてかなり小型の把手である。２１は器台の脚部片である。断面 1.2cmと厚く、残存する脚部から比較的大きなサイズのものか。外面はミガキ、内面はナデである。２２はジョッキ形土器で、半円形の把手が付く。須恵器のジョッキ形に比べると椀に近い形状である。口縁端部付近で外に開く。器面が剥がれているが、外面はナデ、内面はケズリを施す。２３と２４は小型の鉢である。体部中央よりやや上で外湾する。２３は厚手に作られている。

２１号竪穴住居跡（図版３１、第１９・２１図）

２０号住居跡に大部分を切られ、西側・北側しか残存しないが、２２号住居跡を切っている。この住居跡もカマドの有無を疑ったが、存在しなかった。切り合い関係より、中央炉のある住居跡か。長軸 8.3m、短軸 7.8m でやや長方形を呈す。深さは 0.1m 以下残存する。軸と比べてやや斜行しているＰ１～４が主柱穴で、柱穴径は 0.3 ～ 0.75m、深さは 0.2 ～ 0.6m、すべて２０号住居跡内で検出している。２０号住居跡の周壁溝の掘削とともに掘り上げてしまったが、東側の中央壁に屋内土坑を設置していたようで、幅は 1.1m である。

出土土器

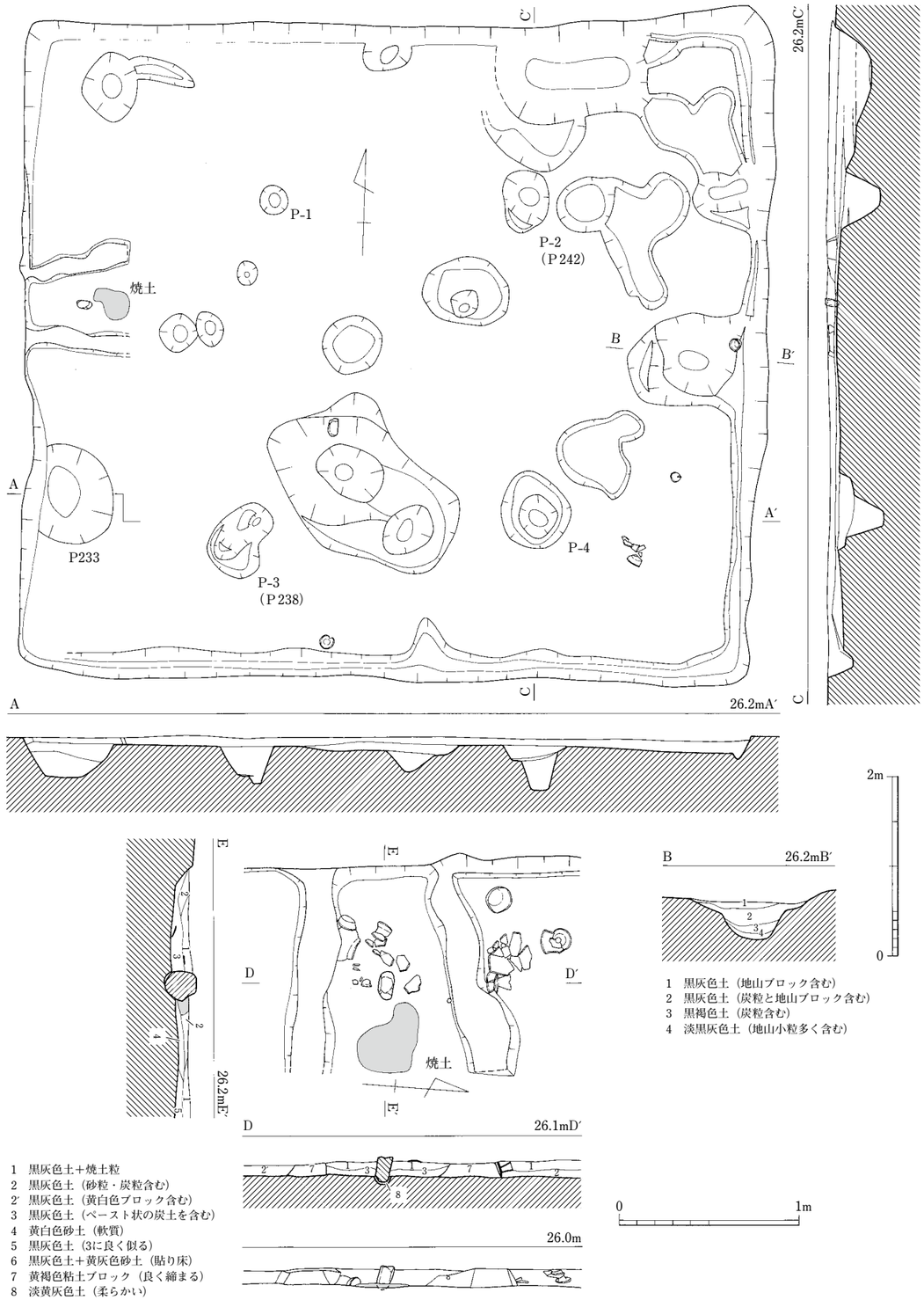
１は焼成不良のため軟質で黄白色であるが、須恵器の杯蓋片か。体部の段～天井部にかけて、丁寧なヘラケズリを施す。約 1/5 残存し、復元口径 13.0cmを測る。２～９は土師器である。２は厚手な作りの小型丸底壺である。内外面とも黒褐色を呈し、調整は粗いケズリやナデを施す。口縁部が一部欠損するが、ほぼ完形品である。３と４は甕である。３は焼成良好で堅固な破片である。頸部から口縁までほぼ直に立つ。４は体部に比べ、口縁～頸部にかけて厚手で、体部は薄手な作りである。５～７は甑の底部片で、現存で底部に２～３ヶ所の穿孔がある。５と６は内外面の体部と底部の境目は顕著であるが、７はなだらかで不明瞭である。底部の形状は平底か。８は鉢片である。体部上半から内湾しながら口を外側へ開く。外面は摩滅するが、内面には刷毛目やナデを施す。９は口縁が波打つ形状で縦長の手づくね状の鉢である。内外面ともに明瞭なナデを施す。

２２号竪穴住居跡（第１９・２１図）

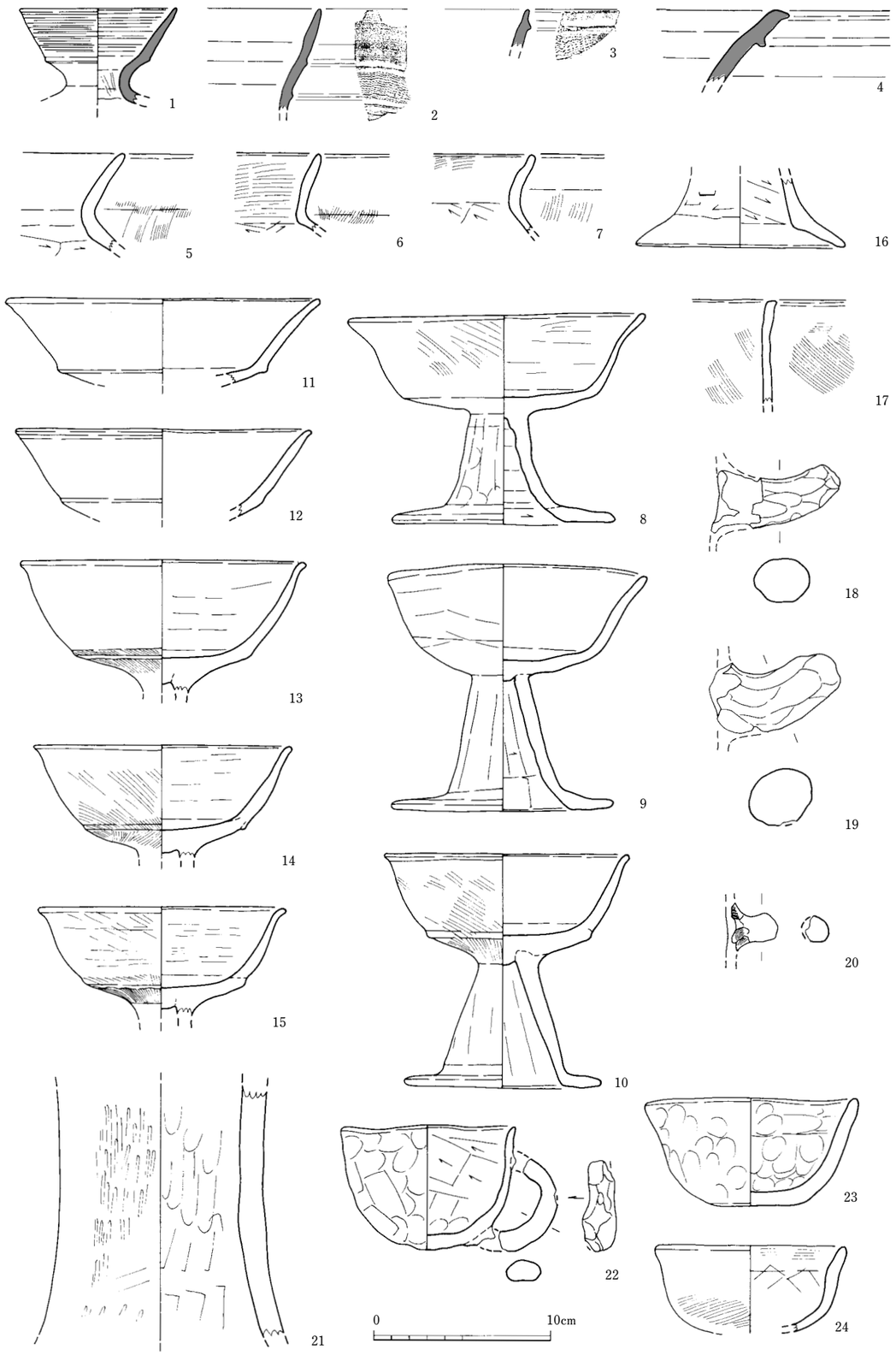
２０・２１号住居跡に切られ、住居コーナー部分を検出した。方形住居であることは確かであるが内部は不明である。長軸は 6.1m、深さ 0.15 m以下を測る。周壁溝の幅は 0.1 ～ 0.15 m、埋土は淡黄灰色粘砂土である。

出土土器

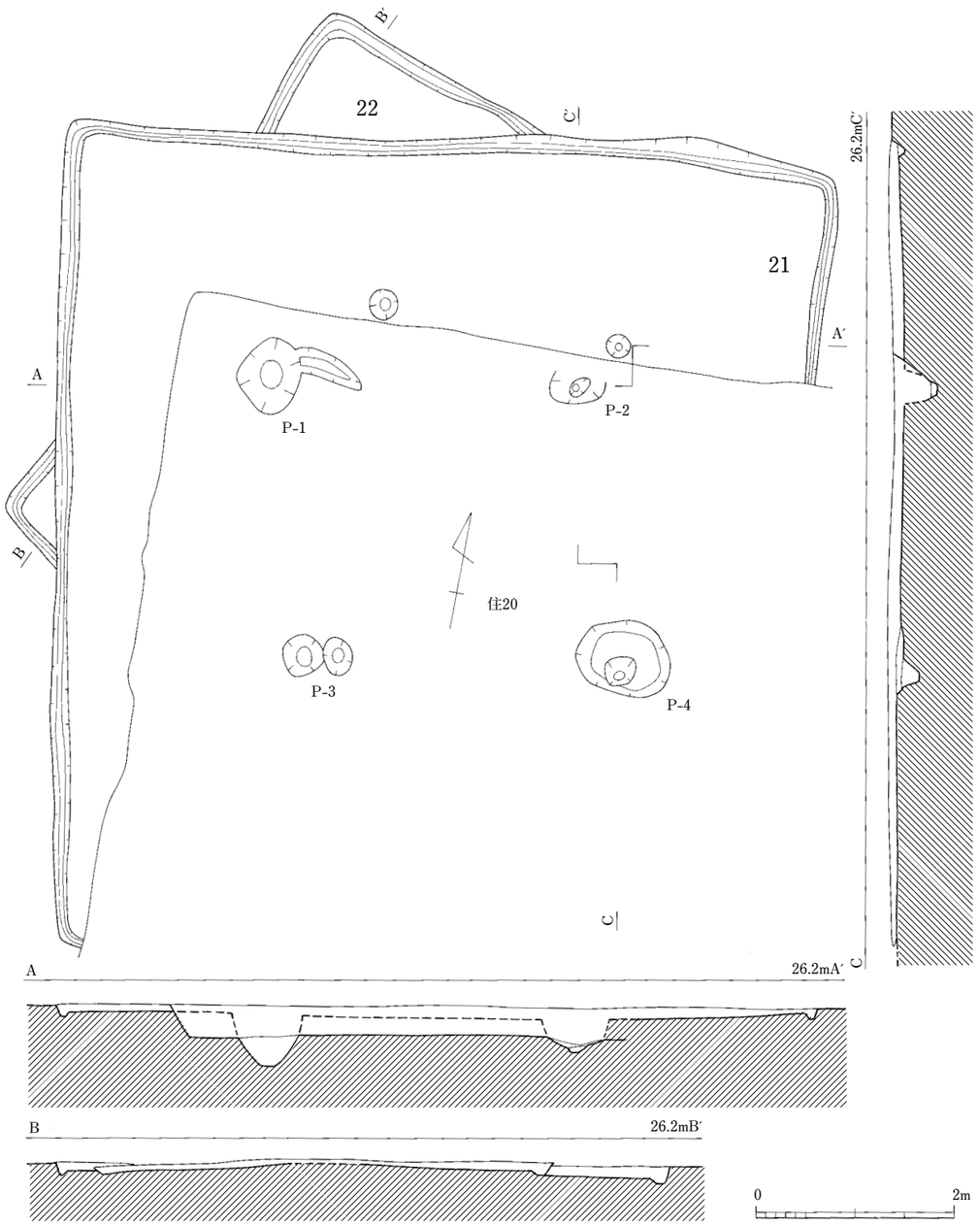
１０は 1/3 を欠損する土師器の小型丸底壺である。口縁は欠損するが、形状から推定すると復元口径約 8.0cmか。外面体部にはタタキを施す。



第17図　２０号竪穴住居跡、カマド実測図（1/ 60、1/ 30）



第18図　20号竪穴住居跡出土土器実測図（1/ 3）



第19図　21・22号竪穴住居跡実測図（1/ 60）

２３号竪穴住居跡（図版７、第２０・２１図）

２０～２２号住居跡の北側で検出した大型住居で２０号住居跡からは4m 程度離れている。１９・２０号住居跡と同じく軸は東西を向き、建物群の中核をなしていると考えられる。プランは「L」字型カマドを北側に設置する。住居は横長長方形プランの四本柱である。長軸 6.9m、短軸 6.3m、深さ 0.2m を測る。これも住居の大きさに比例して柱穴は大きく 0.6 ～ 0.75m、深さ 0.3 ～ 0.4m を測る。屋内土坑は 1.15 × 1.2m を測り、埋土は黒灰色土～黒灰色砂質土であった。

カマドは「L」字型でやや中央から東寄りに設置され、煙道はおよそ 2.4m 伸びている。袖は黄

褐色粘土で構築され、焚口部には高さ 0.25m の楕円形の川原石を据え付けている。それを含めると袖の長さは 0.95m、煙道側は 0.6 ｍの長さを測る。高さ 0.15m の支脚は頭部が幅広な川原石を据付け、その周りを 0.15m の高さで山のように焼土が囲んでいた。燃焼部の幅は約 0.6m、煙道は燃焼部より高い位置にあり、0.1m 以下の深さである。

出土土器

１１～２１は土師器である。１１～１３は小型の甕である。１１の外面には煤が付着する。１２は底部を欠損するが、外面は刷毛目で内面は板状工具によるナデを施す。１３のみ底部は厚く、平底である。内外面ともにナデを施す。１２と１３の外面には黒斑がある。１４と１５は甕で、内外面に刷毛目とケズリを施す。復元口径 15.0、18.7㎝を測る。１６～１９は高杯である。１６は杯の屈曲部が明瞭な段をもつ。復元口径 24.0㎝を測る。１７は杯部の屈曲部以下を欠損する。口径 16.6㎝を測る。１８は杯部片である。１９は脚部片で、内外面に丁寧なナデやケズリを施す。２０は厚い作りの脚付鉢の脚部片である。脚端部は丸く、底径 7.6㎝を測る。２１は約８割残存する鉢で、平底である。口径 13.4㎝を測る。

２４号竪穴住居跡（第２２・２３図）

１９号住居跡の南で切られて検出した隅丸方形の住居跡で、1/4 以上が消失している。深さ５㎝以下と非常に浅い。長軸・短軸ともに 5.1m 前後で、主柱穴はＰ１・２である。柱穴径は 0.45m、深さ 0.25 ～ 0.3m を測る。埋土は灰褐色粘質土である。

出土土器

１は弥生土器の壺又は甕の突帯部分か。２は土師器高杯の杯部片である。調整は内外面に刷毛目が残る。

２５号竪穴住居跡・２８号土坑（第２２・２３図）

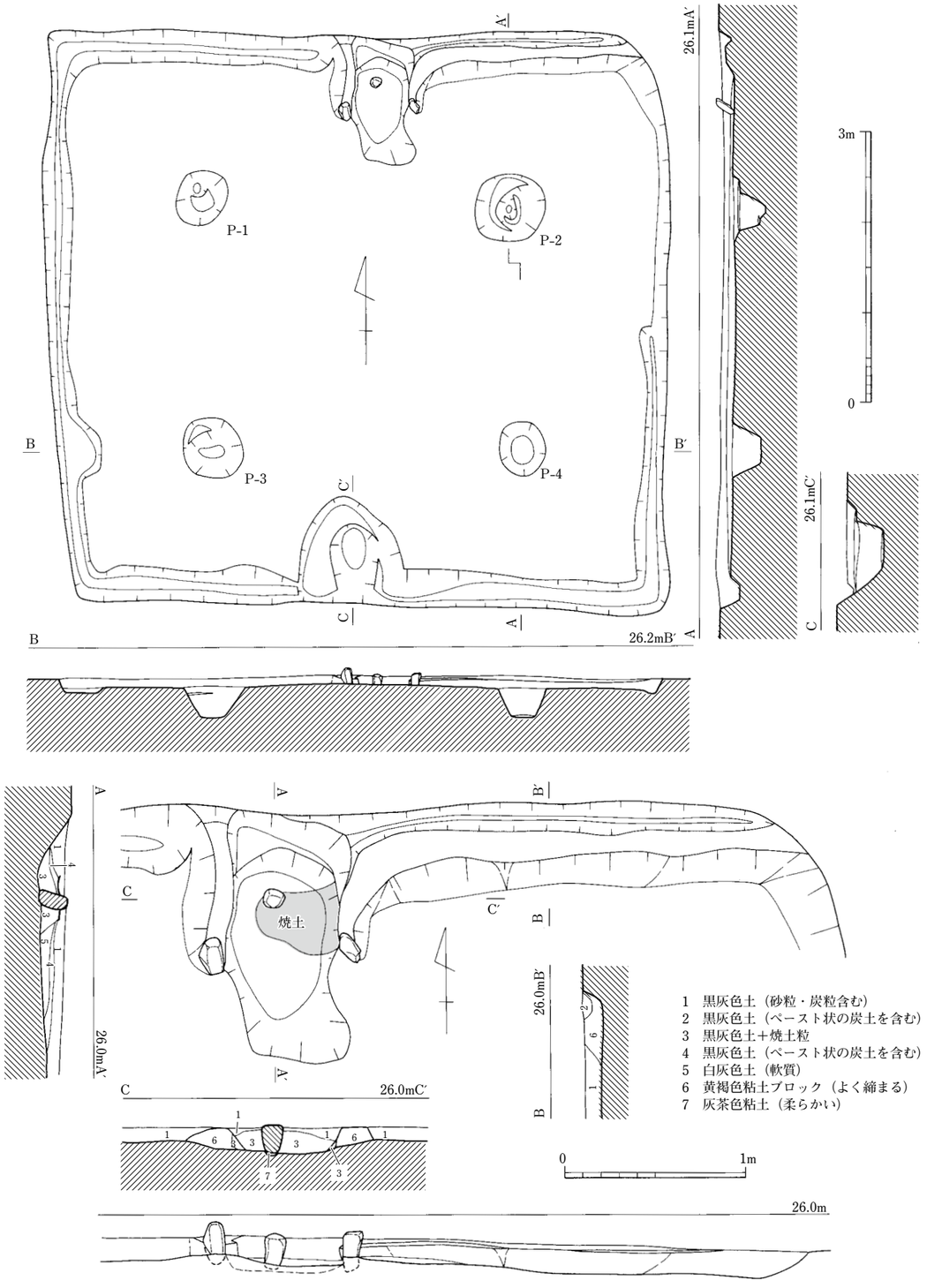
北西調査区に近い位置で、１号方形周溝状遺構に切られて検出した不整形の遺構である。住居は部分的に検出しており、当初は切り合いが多い住居と考えていた。しかしこれ以外には住居に関係する痕跡はなかった。長軸 5.8m、短軸 2.6m、深さ 0.1m で主柱穴は検出されなかった。

さらに遺構の北東では２８号土坑を検出している。この土坑は２５号住居跡と同じ埋土であり、別に遺構番号を付しているが本来は同遺構であると考えられる。長軸 2.7m、短軸 1.5m、深さ 0.1m を測る。

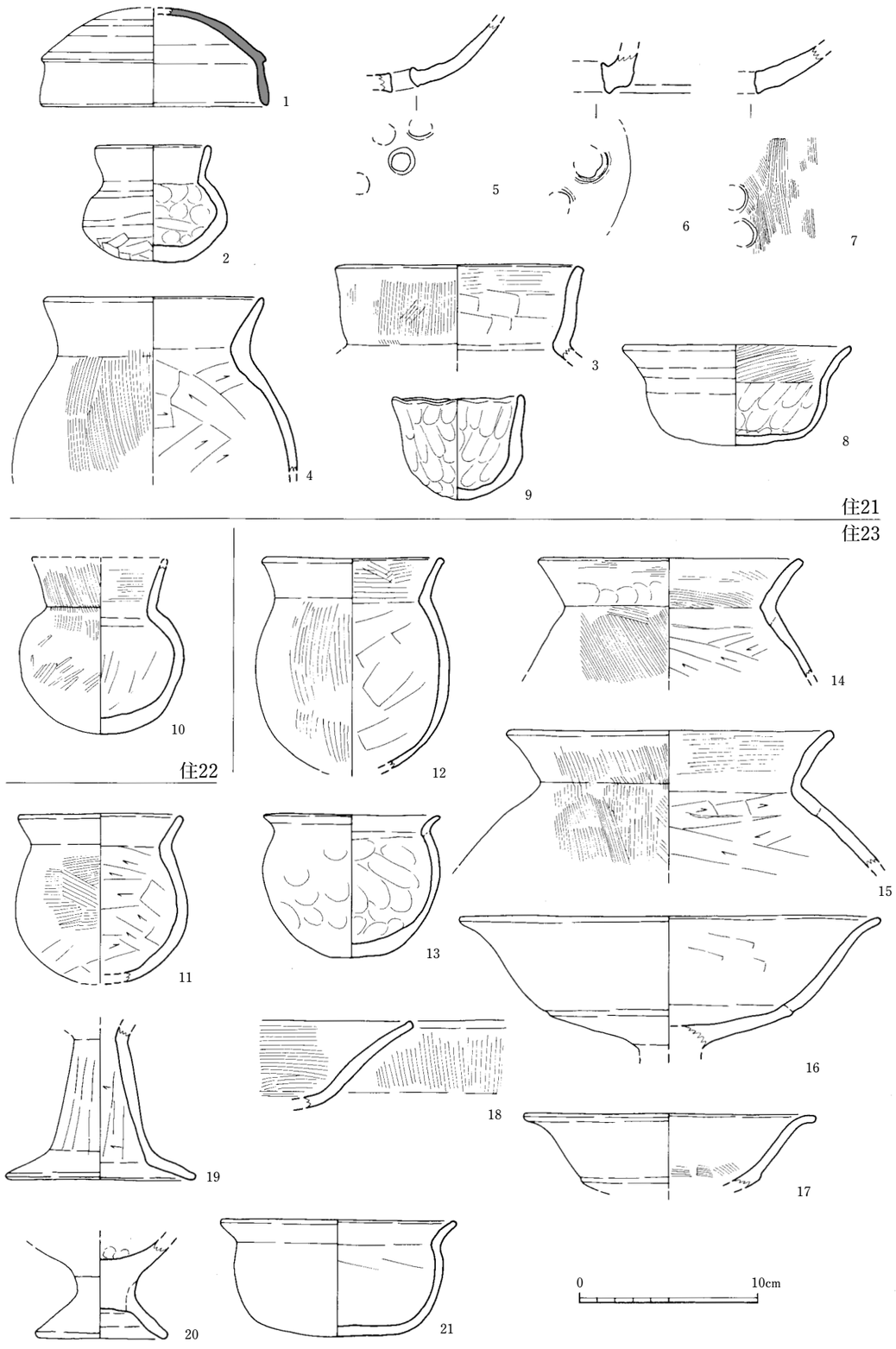
出土土器

３は口縁を欠損する体部が張る小型の壺である。４は厚手に作られた壺である。調整は粗く雑で、外面には刷毛目と内面にはケズリを施す。５は杯部の段が緩やかな高杯の杯部片である。僅かに刷毛目が残る。

６と７は２８号土坑出土である。６は土師器甕の肩部片である。内外面には幅の広い刷毛目とケズリを施す。７は焼成良好な高杯の脚部で、橙色を呈す。全体的に厚く作られており、やや大型サイズになるものか。外面は刷毛目とナデ、内面はケズリである。



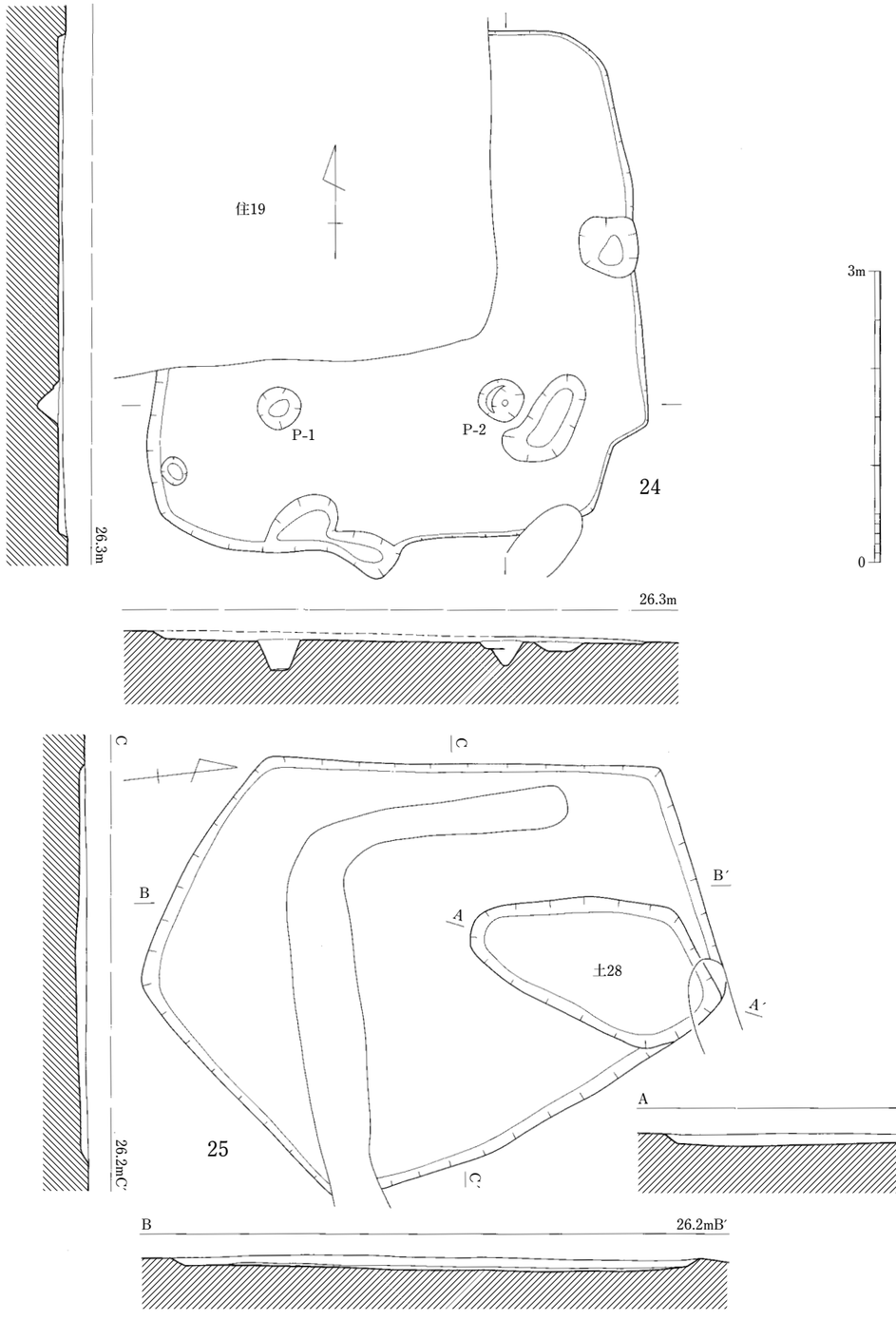
第20図　23号竪穴住居跡、カマド実測図（1/ 60、1/ 30）



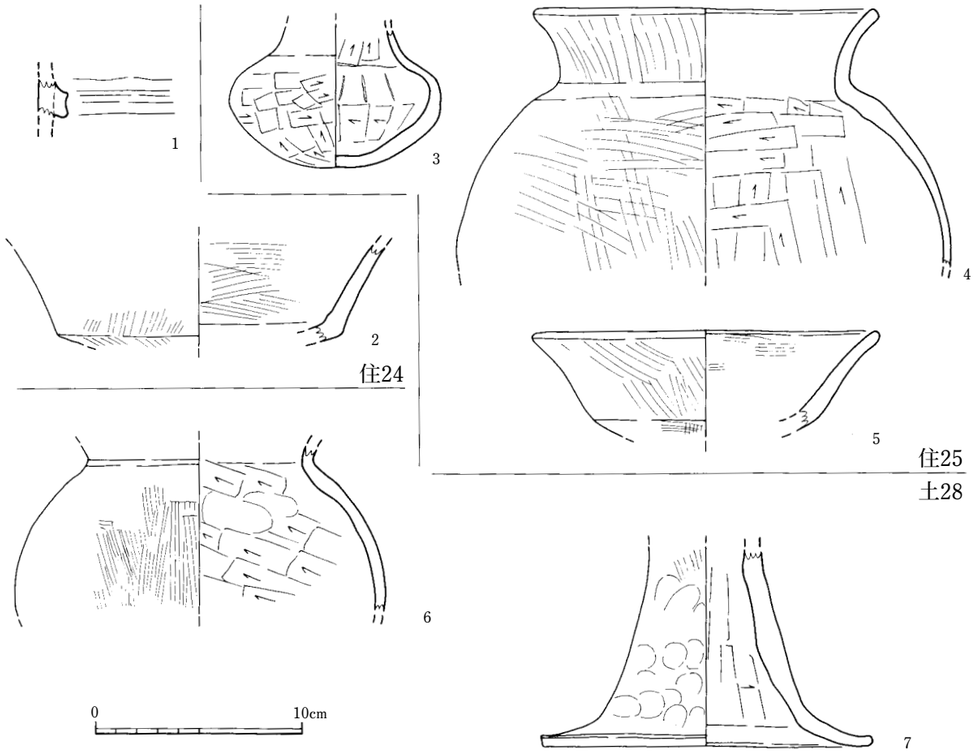
第21図　21～23号竪穴住居跡出土土器実測図（1/ 3）

２６号竪穴住居跡（第２４・２５図）

２７号住居跡から3mほど北側で撹乱されて検出した隅丸方形プランの住居跡である。住居跡の半分以上が消滅しているため全容は窺えない。長軸は4.5m、残存する幅は1.9mで、深さは0.15m以下である。主柱穴といえるものはないが、Ｐ１を床面で検出している。



第22図　24・25号竪穴住居跡、28号土坑実測図（1/ 60）



第23図　24・25号竪穴住居跡、28号土坑出土土器実測図（1/3）

出土土器

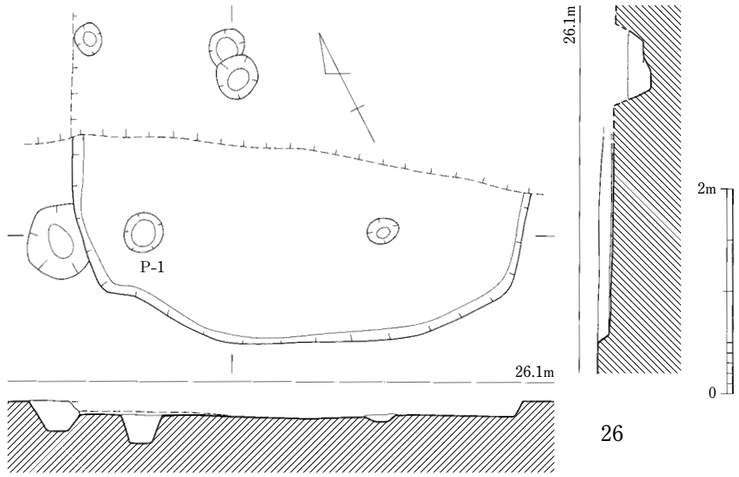
1は体部下半を欠損する甕である。外面には刷毛目、内面にはケズリを施す。

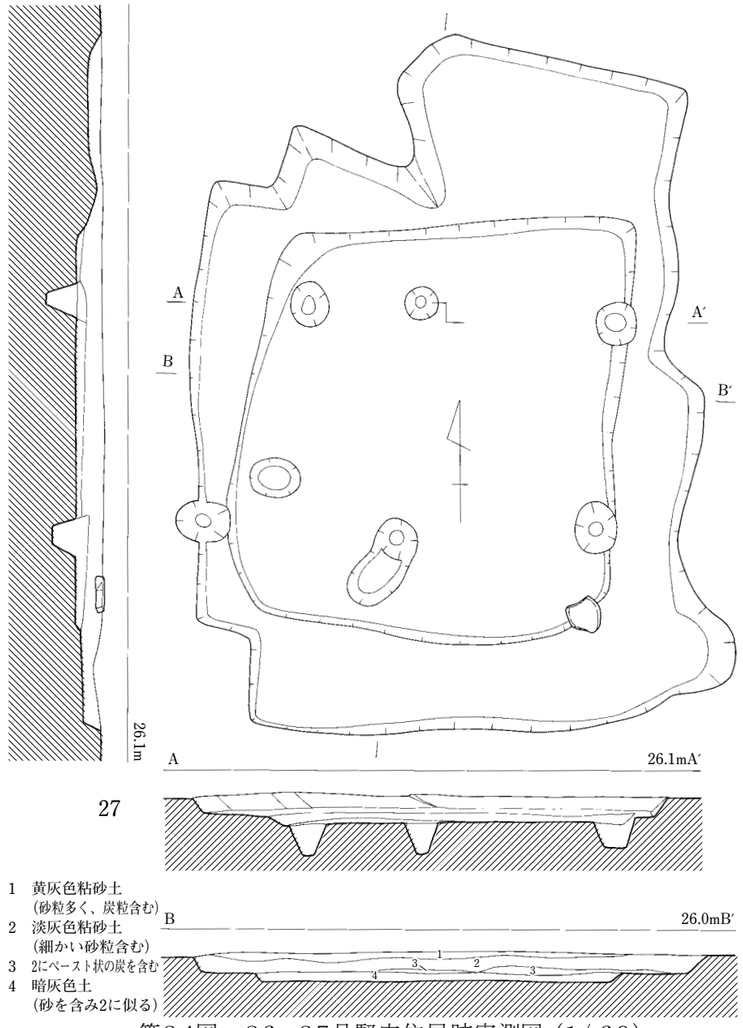
27号竪穴住居跡（図版31、第24・25図）

23号住居跡の2.5mほど北側で検出した住居で、地山が軟弱な砂土・砂利で構成された部分であった。そのため北側の壁面は異様な形状をしており、1・2層に多量に砂土が混ざることから、埋没過程で壁面がかなり崩壊してこのような形状になったものと思われる。長軸6.8m、短軸5m、深さは0.25mを測る。南側のベッド状遺構は0.8～1mの幅であり、その内側は4.1×3.6mで方形に窪む。南東コーナーに約0.2m浮いて台石、床面から0.1m浮いて臼玉が出土している。同じ高さの4層からは初期須恵器の有蓋高杯の蓋片が出土したが、この住居に隣接する13号溝の検出時に蓋片と接合する破片が出土しており、13号溝1層と住居4層は同時期と判断できる。主柱穴と呼べるものはなく中央炉も設置されていない。

出土土器

2は遺跡内で唯一検出した須恵器杯蓋である。口縁の上部には、三角形状の段が巡り、天井部には撮みをもつ。また外面にはヘラケズリ後、刺突文を施す。内面も丁寧な横ナデ調整をし、中央には緑色の自然釉が付着する。1～2割程度しか残存していないが、復元口径15.0cmを測る。3は体部以下を欠損する甕である。口縁～頸部を厚く作り、外面に刷毛目、内面にケズリを施す。口径15.6cmを測る。4～10は高杯片で、復元口径15.0～20.8cmを測る。6と7は杯部の屈曲から直に





第24図　26・27号竪穴住居跡実測図（1/60）

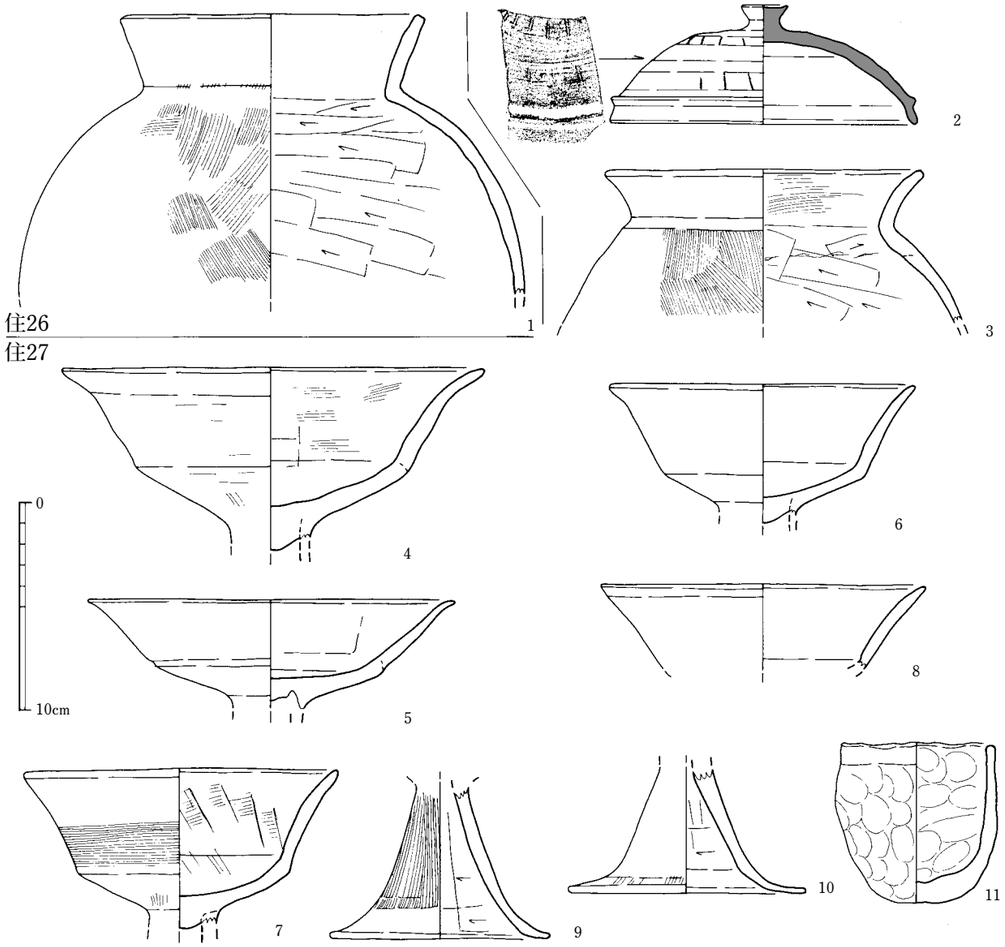
近く立ち上がる杯の深いタイプである。9と10は脚部である。9は焼成良好で、赤褐色を呈す。外面は丁寧な刷毛目と内面にはケズリを施す。11は口縁が波打ち、コップ形の鉢である。底部は厚いが、他は薄く作られ、内外面にはナデの痕跡が明瞭である。

28号竪穴住居跡

（図版8、第26・27図）

23号住居跡から4.5mほど西で検出した小型の住居跡である。やや横長の不整長方形で北辺は斜行している。この住居跡周辺は小谷を切り込み、不明瞭であった。しかしカマドの支脚が頭を覗かせてから住居跡と判断できた。柱穴は設置されておらず、南東側に1.3×1.7mの浅い屋内土坑、中央に二つの台石が設置されていた。住居跡長軸3.9m、短軸3.1m、深さ0.2m前後を測る。

カマドは北側壁面に造り付けられた小型のもので幅0.8m、長さ0.76mで燃焼部の幅は約0.3mを測る。東袖は先端が屈折しているが袖の長さは0.65～0.75m、幅は0.23m程で住居壁面側ではやや太くなる。石製支脚は高さ0.2mでラグビーボール状を呈し、床面に埋



第25図　26・27号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

め込まれている。カマドの奥壁は3cmほど掘り窪められている。

出土土器

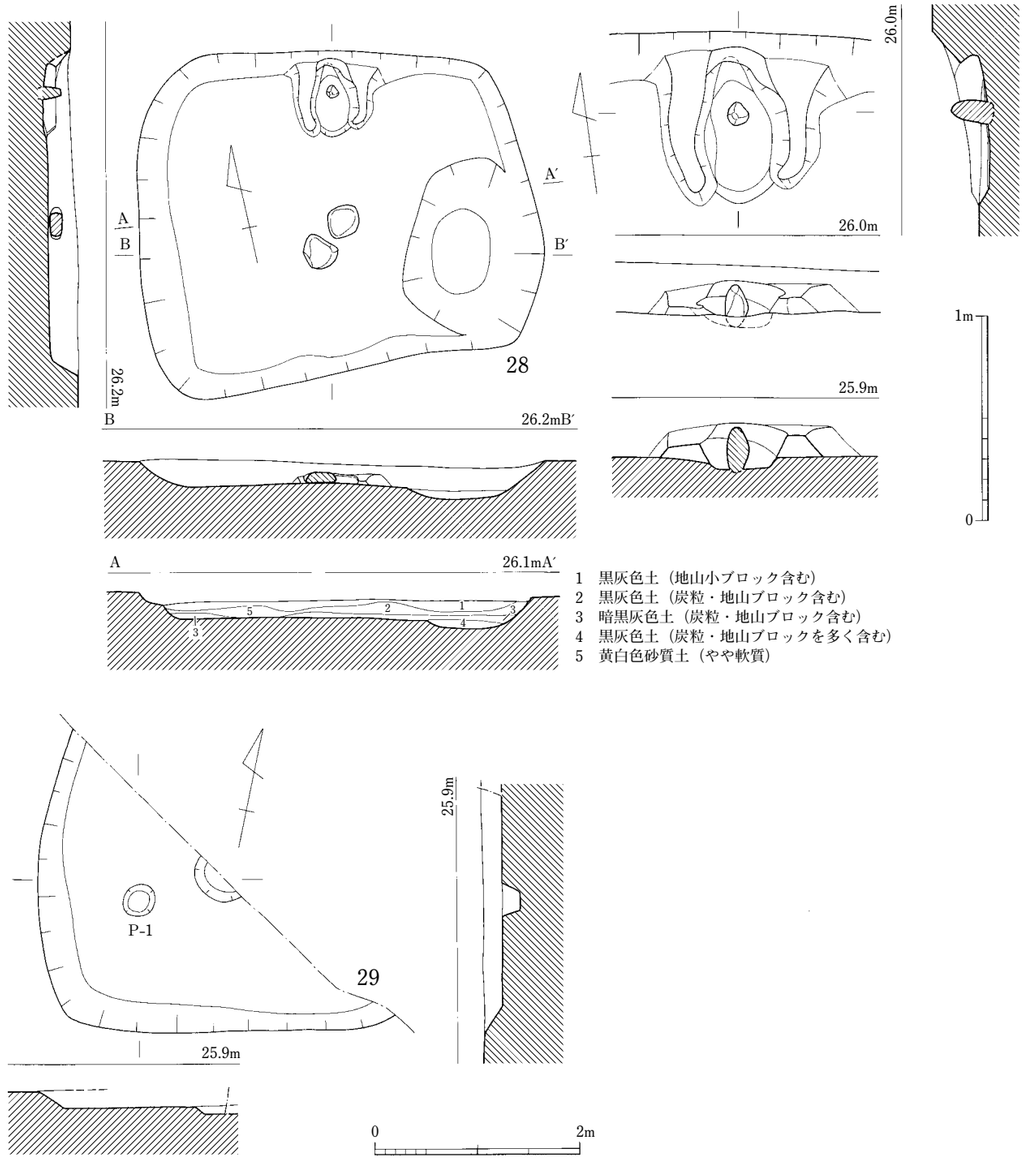
１は土師器の甑である。焼成良好で、赤褐色を呈す。把手は欠損するが、その位置で最大体部径となる。外面は摩滅するが、内面はケズリの後、ナデを施す。復元口径19.8cmを測る。２は甑の把手で、牛角状である。１と２は色調の違いから別個体と判断した。

２９号竪穴住居跡（第２６・２７図）

北側の調査区境で半分程検出した竪穴住居跡で、深さ0.2m以下でベッド状遺構が消滅しているものと考えられる。南側の一辺は3.2m、西側は2.7mで中央は膨らんでいる。住居内からは中央炉と柱穴Ｐ１を検出している。中央炉は幅0.55ｍ程度である。

出土土器

３は土師器壺の底部片か。体部は薄く作られているが、下半付近で厚手になり、平底となる。内外面ともに刷毛目を施す。



第26図　28・29号竪穴住居跡、28号竪穴住居跡カマド実測図（1/60、1/30）

３０号竪穴住居跡（図版８・９、第２７・２８図）

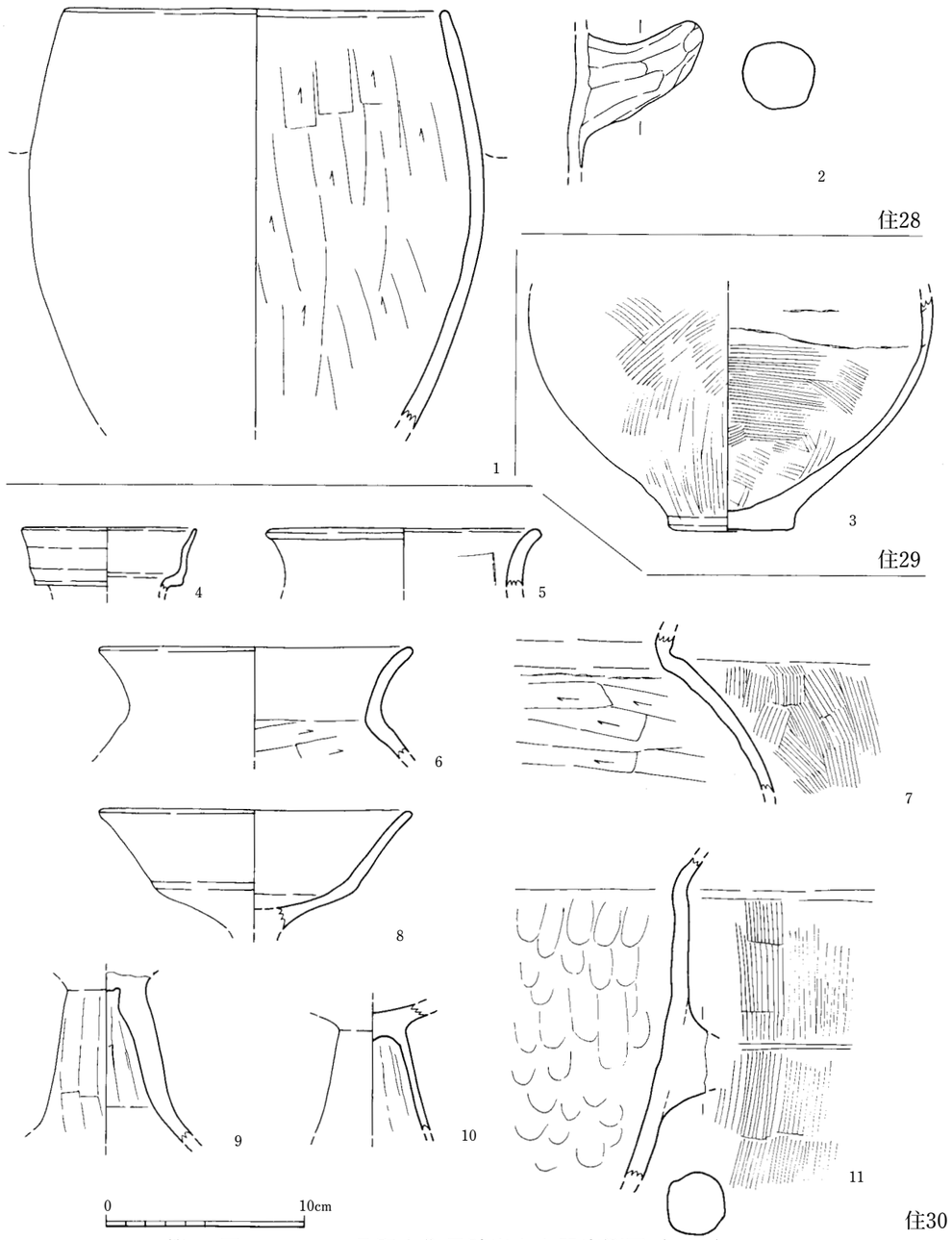
３１・４１号住居跡の3.5m南で単独で検出した小型の住居跡で、隅丸方形プランの２本柱である。軸は北西－南東を向いている。北東側の壁面にカマドを造り付け、また西側のコーナー付近から東壁面に渡り、Ｌ字に長さ5.3m分の溝を検出している。特に南西側の部分では深さ0.25m程度あり、空洞になっていたのはその部分のみで炭土などは検出していない。住居跡の一辺の長さ4m、深さ0.15mを測る。主柱穴はＰ１・２で、径0.45m程度、深さは0.4mを測る。

カマドは住居の大きさに対して大きめで、北東壁のほぼ中央に造り付けられ、「L」字型ではない。袖は分厚く、壁から長さ約1m、幅0.3mを測り、住居跡の埋土と良く似た黒灰色粘土で構築

されていた。支脚は下部が窄まる高さ0.25mの河原石を使用しており、甕底を受ける部分ではやや尖る。支脚前面には5cm以下の厚さで軟化した焼土が広がり、その上面に支脚を取り巻くように甕片が出土している。カマドの幅は1m、燃焼部幅は約0.6mを測る。

出土土器

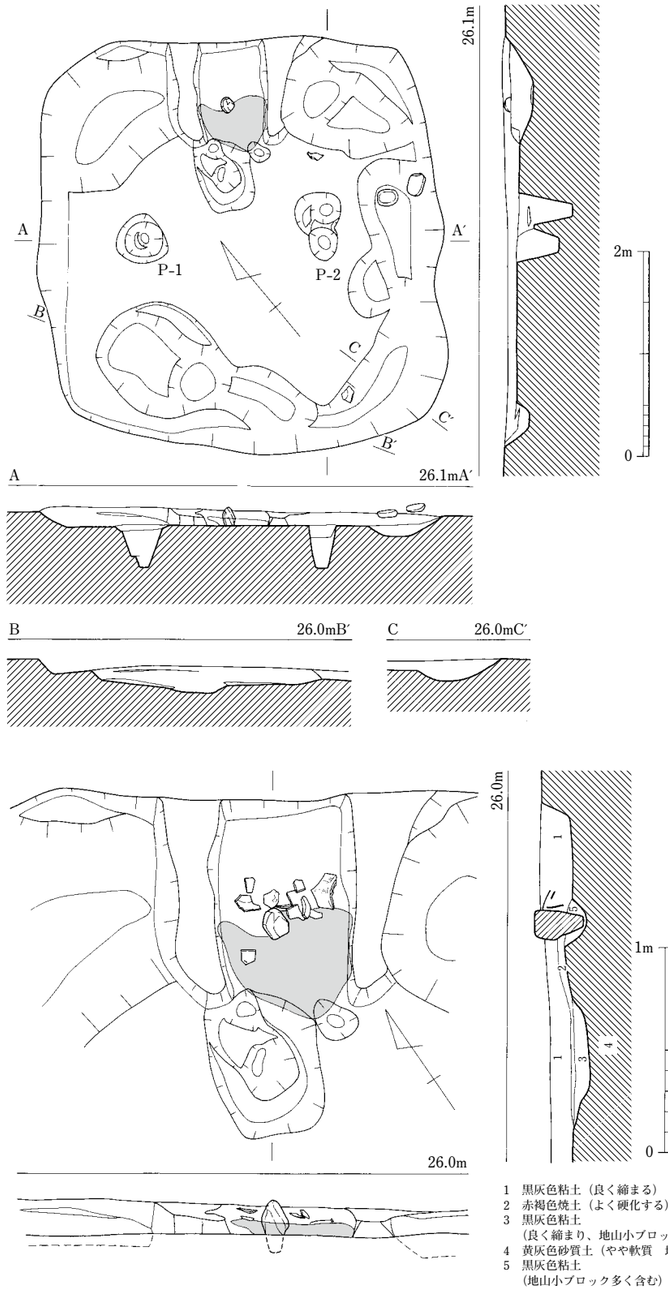
４～１１は土師器である。４は薄手に作られた二重口縁壺の口縁部片である。５と６は甕の口縁部片である。５の口縁端部は一回り膨れて丸みをもつ。それぞれ復元口径14、16cmを測る。７は



第27図　28～30号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

甕の体部片である。８は高杯の杯部片である。杯部の屈曲は緩やかで、やや深くなる。９と１０は高杯の脚部片で、かなり薄く作られている。１１は甑片である。口縁端部は欠損するが、口縁付近で曲がって外へ開く。外面体部中央には、一条の沈線があり、その位置に把手がつく。調整は外面に刷毛目、内面にはナデを施す。なお把手は体部との接合部以外が欠損し、形状は不明である。

３１・４１号竪穴住居跡（図版９・１２、第２９・３０図）



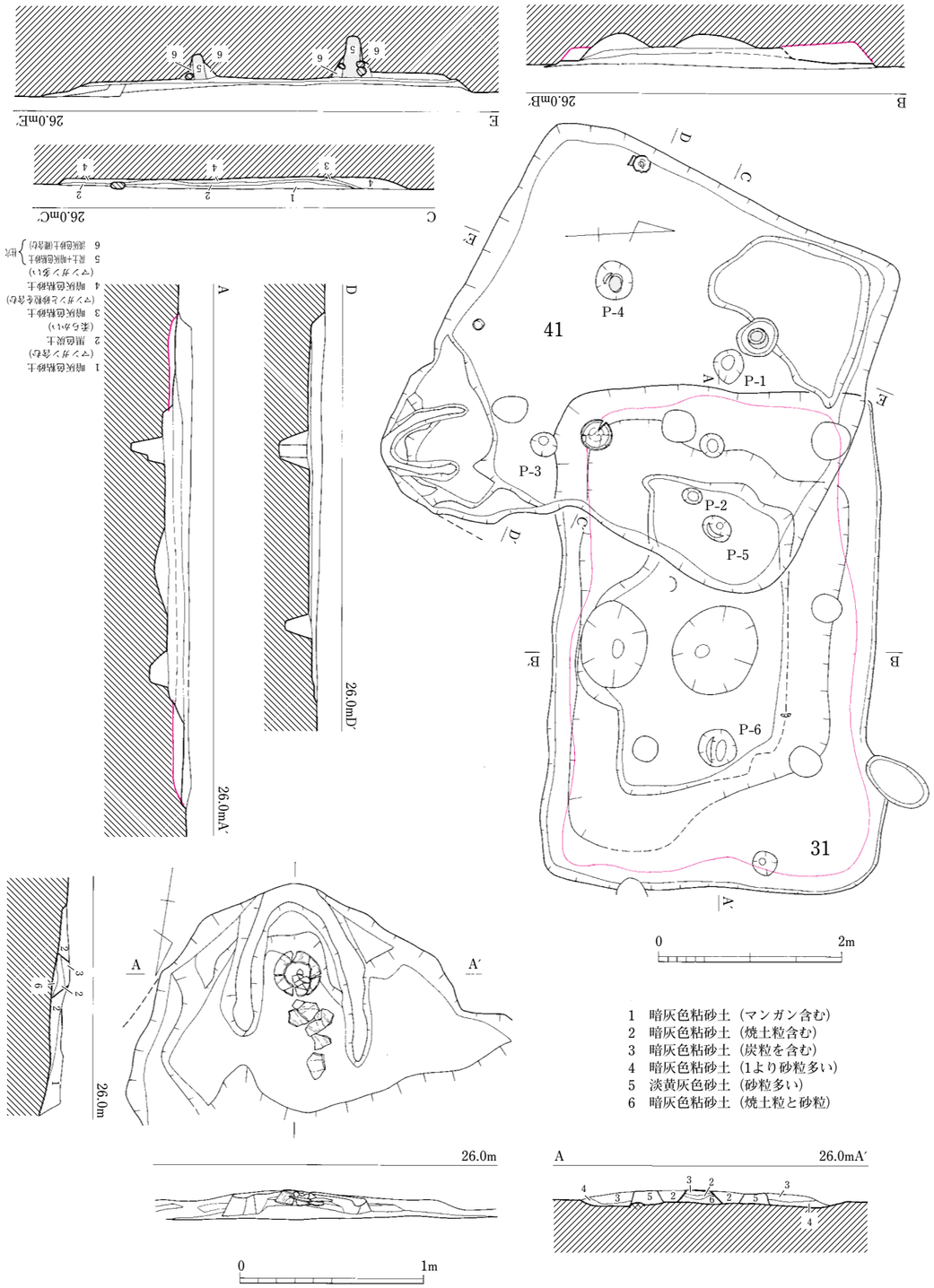
第28図　30号竪穴住居跡、カマド実測図（1/60、1/30）

３１号住居跡は４１号住居跡と２６号建物跡に切られる横長で長方形プランの住居跡である。長軸5.5m、短軸3.5m、深さ0.25mを測る。住居跡内を幅1m程度のベッド状遺構が完周し、南側に0.7×0.95ｍの屋内土坑を設置している。主柱穴はＰ５･６で、0.85×1.1mの中央炉を配している。ベッド状遺構を除去すると南西コーナーに高杯が埋納されていた。

４１号住居跡は３１号住居跡、２６号建物跡を切っている住居跡である。検出時では縦長の長方形プランである。南東側のコーナーでカマドを検出したことから、３１号住居跡側を削平されている正方形のプランであることが判明した。軸は北東－南西へ向き、長軸4.7m、短軸4.6m、深さ0.15m以下を測る。主柱穴はＰ１～４で、Ｐ２は３１号住居跡の掘削中に検出している。柱穴の大きさは0.25～0.45mで、深さは0.25～0.4mである。

カマドは削平によって異

様な形となるが、南コーナーに設置された隅カマドである。住居跡の内部より5cm程度高いテラス状になった部分にカマドを設置しており、カマドの壁体は住居跡の壁から直接伸びず、「U」字型を呈している。袖の奥部から小テラスが手前へ続き、壁面側は高くなるようである。袖は淡黄灰色

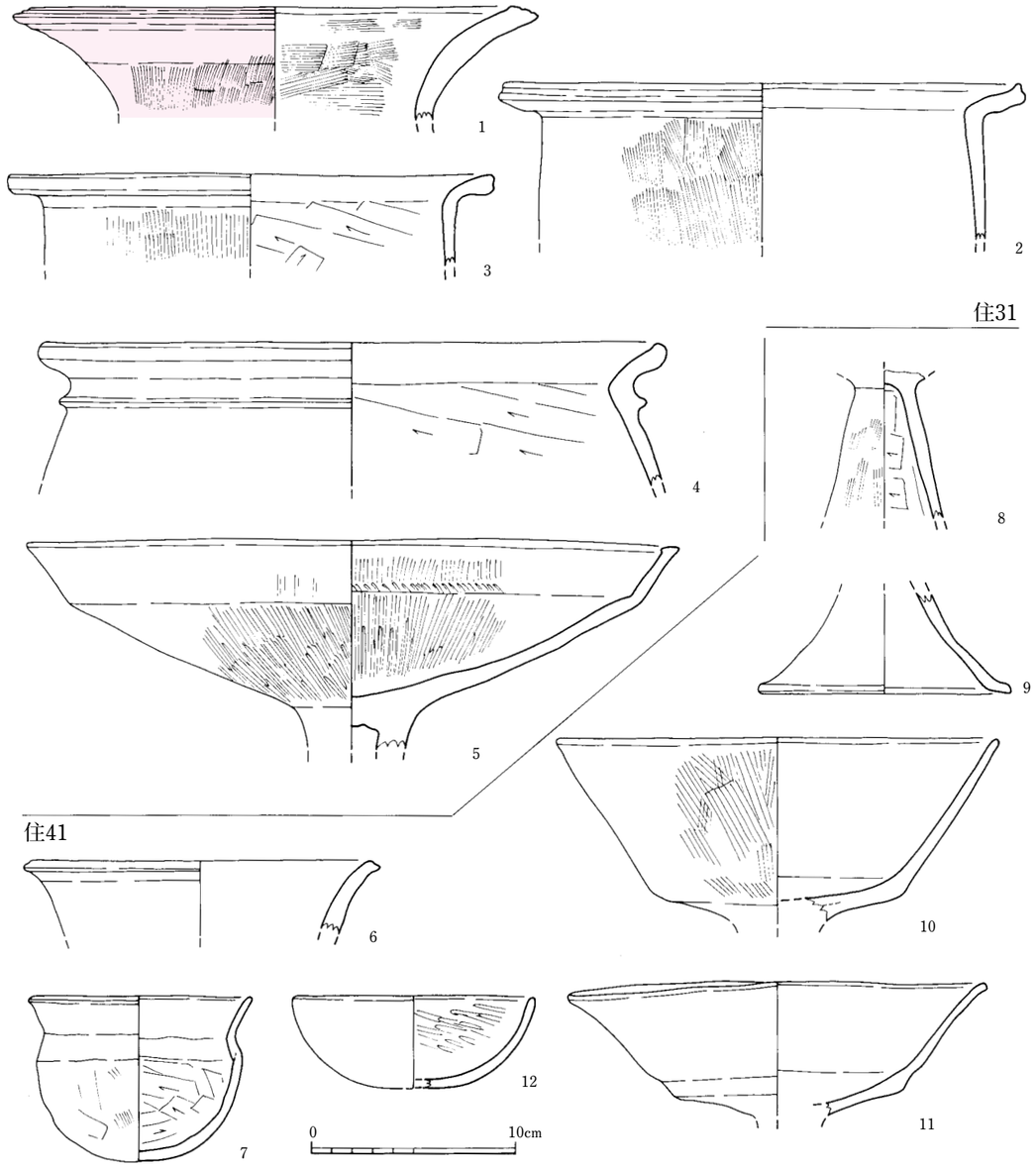


第29図　31・41号竪穴住居跡、カマド実測図（1/60、1/30）

砂土で構築されて、埋土に比べて非常に明瞭であった。支脚は削平されて杯部だけ残されるが高杯を転用していたようである。本体の幅は約0.8mで、奥壁からの袖の長さは約1m、袖の幅は0.2m前後を測る。燃焼部の幅は0.4mである。

出土土器

１～５は３１号住居跡出土である。１は瀬戸内系の壺か。内湾しながら外へ口を開く。口縁端部に２条の沈線が巡る。外面は丹塗りで、内外面には刷毛目を施す。２～４は甕の口縁部片である。それぞれ復元口径で26.0cm、24.0cm、31.0cmを測る。内外面の調整は刷毛目と板状工具によるナデを施す。５は高杯の杯部で、口縁の一部と脚部を欠損する。口縁端部は一回り大きくなり、内面に段を有する。口縁下では屈曲してなだらかになり、内外面にはミガキを施す。口径32.3cmを測る。



第30図　31・41号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

６～１２は４１号住居跡出土である。６は壺の口縁部片で、口縁端部は角張り嘴状になる。復元口径 17.6㎝を測る。７は小型の甕である。内外面は粗い刷毛目やケズリとナデを施す。８は高杯の脚部である。９は摩滅しているが、形状から高杯の脚か。１０と１１は高杯の杯部である。１０は杯部が深く、屈曲部から口縁まで真っ直ぐに延びる。１１は摩滅していて調整は不鮮明であるが、比較的薄手に作られる。１２は口縁～底部まで均一に作られた鉢である。内面にはミガキの痕跡がある。

３２号竪穴住居跡（図版１０、第３１・３２図）

調査区北東の住居跡が密集する部分で半分程度残存する住居跡で、３６号住居跡に切られ、３３号住居跡を切っている。周辺は礫原であるが方形プランでベッド状遺構を持つことは判断できた。長軸 5.4m、残存する短軸 3.1m、深さ 0.1m 以下を測る。ベッド状遺構は西側でＬ字に屈折し、東側は検出されなかった。幅は１～ 1.2m を測る。

出土土器

１は壺の口縁部片である。２は二重口縁壺の頸部片である。頸部には､刻目のついた突帯があり、丁寧な刷毛目を内外面に施す。３は甕の口縁部片である。４と５は甕の底部片か。共に平底である。

３３号竪穴住居跡（図版９、第３１・３２図）

３２・３６～３８・４７号住居跡、３６号土坑に切られて検出した円形住居跡である。検出当初は断片的にしか見えておらず､空中撮影時に判明した。この集落のなかでは一番古い住居跡となる。直径はおおよそ 8.1m で、残りのよい部分では深さ 0.3m 程残存する。幅１～ 1.3m のベット状遺構を持つことが分かっており、西側にも残存していたようであるが削り過ぎにより、消失してしまった。中央炉は良好に残存しており、0.9 ～ 1.2m を測る。主柱穴と考えられるものはＰ１～１２で、二重に廻っている。柱穴の径は 0.2 ～ 0.35m 程度で、0.1 ～ 0.35m の深さである。

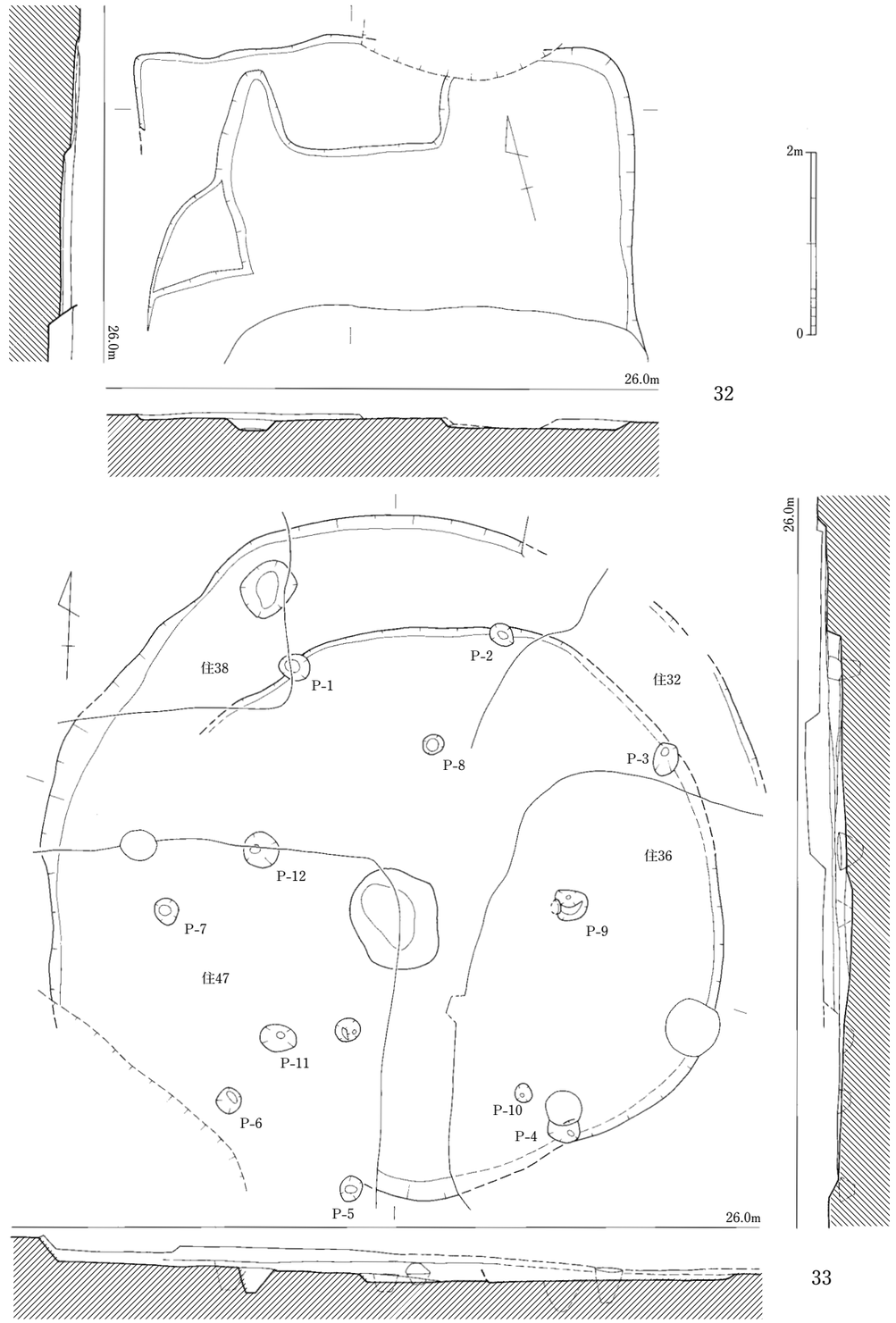
出土土器

６は壺で外面丹塗りとし、頸部には２条の突帯がある。７は甕の口縁部片か。８～１０は壺又は甕の底部片で、いずれも平底である。８は一回り大きいサイズのものか。外面に刷毛目、内面にはナデを施す。１１は高杯の杯部片で、口縁は外湾して内側に曲がる。内外面ともに摩滅する。

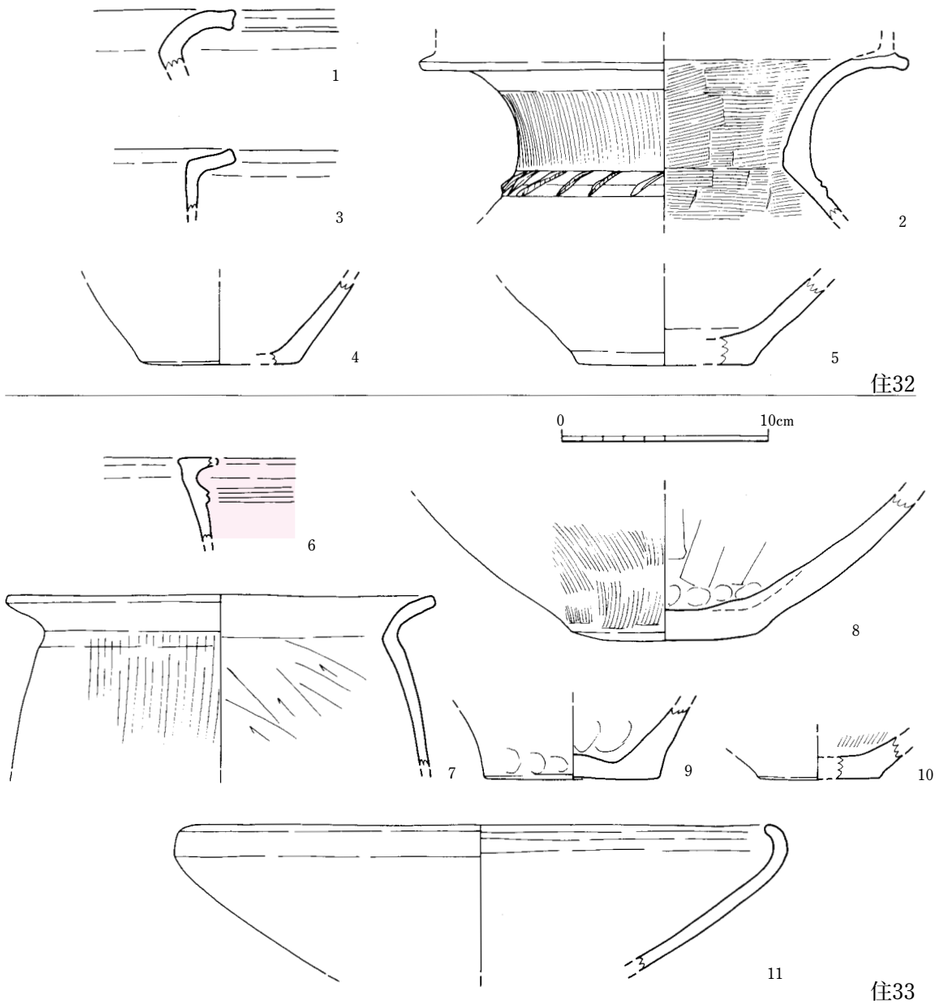
３４・４６号竪穴住居跡（図版１０・３１、第３３・３４図）

３４号住居跡は３１号住居跡から北側に 1.5m 離れて検出した大型の方形住居跡で、長軸 7m、短軸 6.3m、深さ 0.15 m を測る。東側は３７・３９号住居跡に切られ、北東部は撹乱により消失してしまっている。しかし、撹乱の中からこれに伴う柱穴を検出しており、４本柱であったことが判る。中央炉はやや楕円形を呈し、一部が３７号住居跡の周壁溝に切られているが、0.6 × 0.8m の規模である。屋内土坑は 1.3 × 1.6m の規模である。なお､本来はベッド状遺構があるはずなのだが、平面と土層で確認してもそれらしいものは見当たらなかった。

４６号住居跡は３４・３７・３９号住居跡に切られて検出したもので、３４号住居跡の床面には残存する壁面のラインが見えていた。軸は北東－南西にやや傾き、北東部が斜行する長方形プランである。中央炉が３４号住居跡の屋内土坑の北側で検出されている。主柱穴と思われるものは検出



第31図　32・33号竪穴住居跡実測図（1/ 60）



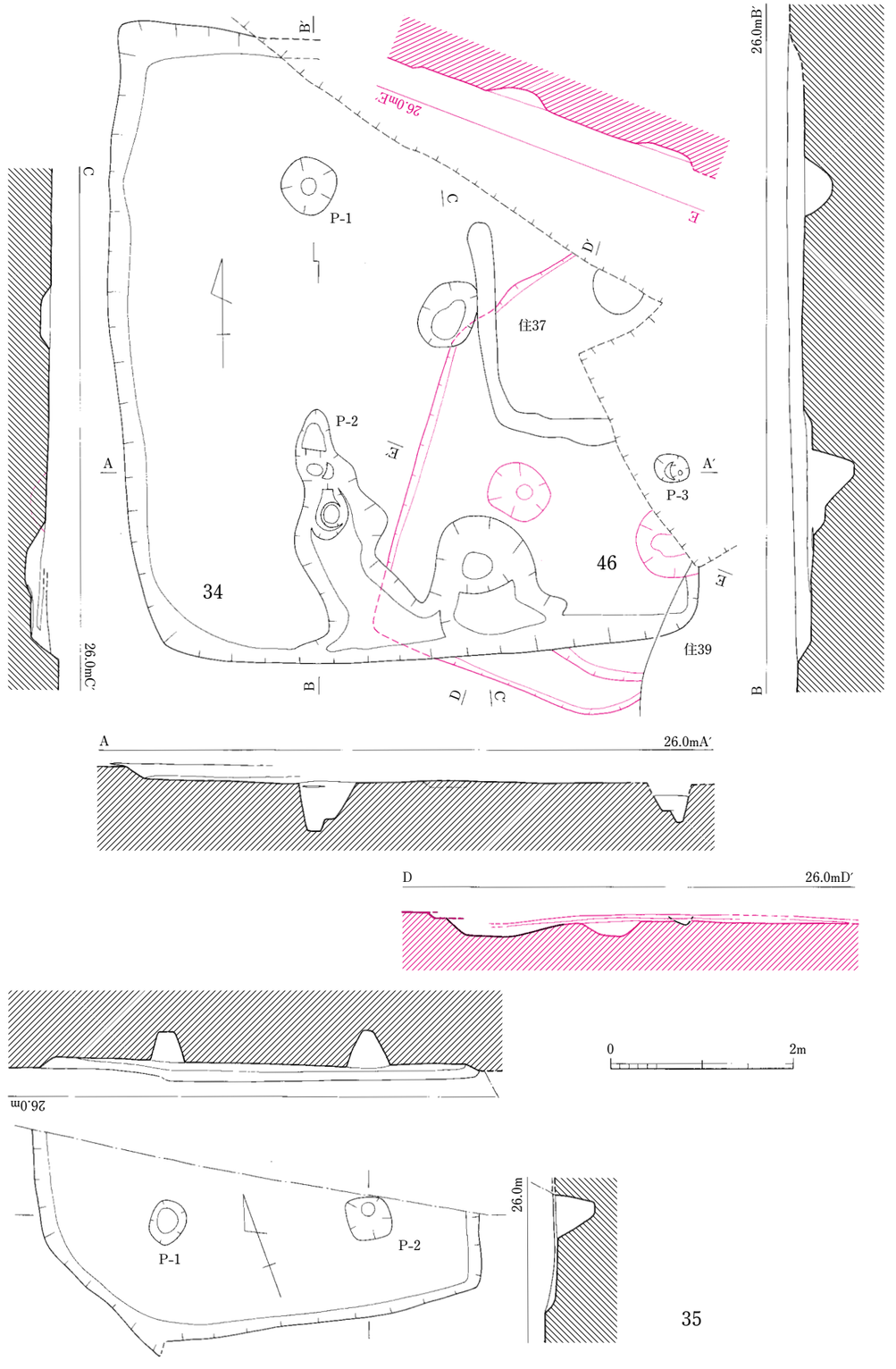
第32図　32・33号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

されていないが、屋内土坑は３９号住居跡側で撹乱に切られて半分程度検出している。３４号住居跡外に切られて残る部分には幅約 1m のベッド状遺構を設けているようである。残存長軸 4.7m、短軸 3.1m、残りが良いところで深さ 0.23m を測る。

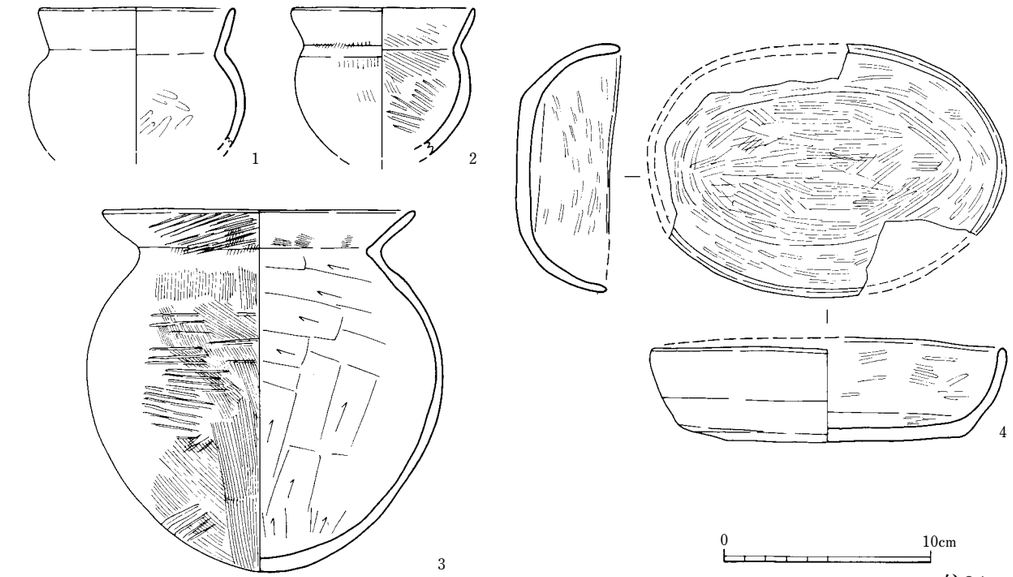
出土土器

１～４は３４号住居跡出土である。１と２は小型の甕である。内面はともにミガキである。復元口径 9.6、9㎝を測る。３は甕で、外面にはタタキの後、刷毛目を施す。内面はケズリである。口径 15.4㎝を測る。４は長円形をした椀か。外面は摩滅し、底部に黒斑がある。内面は細かいミガキを丁寧に施す。色調は茶橙色で、焼成は良好である。

５～７は４６号住居跡出土である。５は土師器小型丸底壺片である。６は弥生土器の甕片である。６は口縁端部が外に折れ曲がる。７は甕の底部片で、平底である。外面は粗い刷毛目で、内面には工具によるナデを施す。



第33図　34・35・46号竪穴住居跡実測図（1/60）



第34図　34・46号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

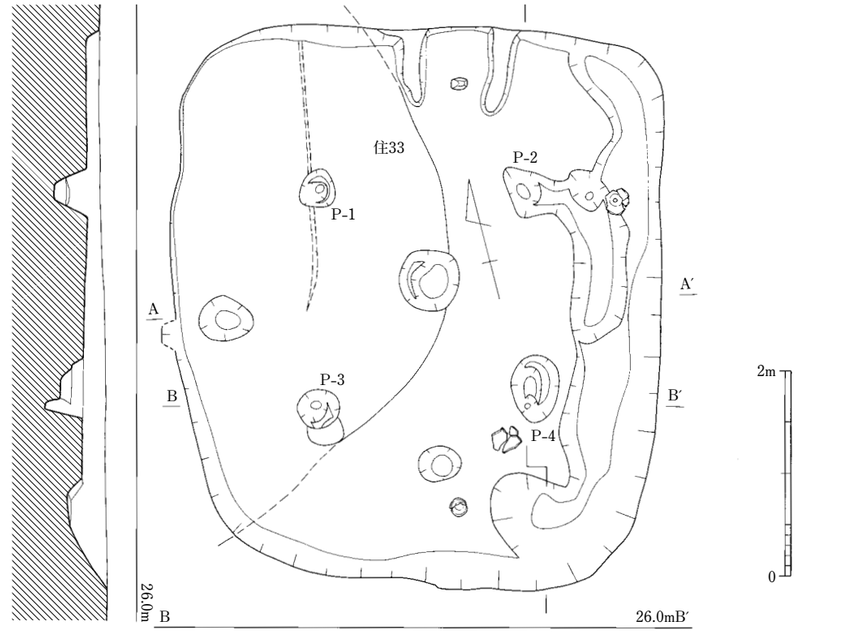
３５号竪穴住居跡（第３３図）

北辺の調査区で1/3程度検出した住居跡である。調査区境に位置し、西側の住居壁面は掘削しすぎている。東側と南辺は良好でコーナー部分もはっきりしている。長辺は約4.8mで深さは0.1mを測る。住居内からは主柱穴と思われるＰ１・２を検出している。柱穴の径は0.5mで深さは0.4mほどである。図化に耐えうる遺物はない。

３６号竪穴住居跡（図版１０・３２、第３５・３６図）

３２・３３号住居跡を切り、３９号住居跡から1.5mほど離れて検出した縦長の楕円形を呈する住居跡である。北側にカマドを造り付けているが、元は中央に炉を付設していたようである。中央炉は径約0.6mとほぼ正円形である。北西壁は住居跡内の掘削中に誤認して削り落としている。また西側の半分は床面から0.05m下げると、３３号住居跡が存在することが分かった。明瞭な周壁溝はもたないが、東側の壁面に沿って長さ4.5m、幅0.8m程度の掘り込みがある。住居の長軸は約5.4m、短軸4.8m、深さは0.15mを測る。屋内土坑は設置されておらず、主柱穴は４本でＰ１～４がそれにあたり、柱穴の径は0.4～0.65m、深さ0.24～0.3mを測る。

北側壁面に造り付けられたカマドは、焼土の範囲により袖の見当がつけられた。カマドの幅は約1.2mで袖の構築土は３０号住居跡のカマドに似て暗灰色粘砂土で検出が難しいものであった。袖の長さは0.8m前後で、幅は0.25m前後と太めである。支脚は幅が太く先が窄まる、高さ0.16mの



第35図　36号竪穴住居跡、カマド実測図（1/60、1/30）

河原石を使用して床面に浅く埋め込んでおり、その周囲に縦長に薄く焼土が広がっている。支脚の周りには崩落土と共に甕片が、袖から0.4ｍ南に甑片が出土している。

出土土器

１は須恵器壺の体部片で、僅かに外面の方が濃い灰色を呈する。内外面ともにナデで、タタキなどの痕跡は見えない。外面体部下半には薄い沈線と内面体部上半には接合痕がある。２は甑であるが、焼成不良で軟質になる。黒灰色を呈することから須恵器とした。これも体部中程の把手の位置にやや蛇行する沈線が巡る。また把手の先端部は尖らず、切られている。口縁は断面四角形状で、復元口径24㎝を測る。３～９は土師器である。３と４は甕である。３は残存する破片から判断したが、口縁と頸部までが短い甕か。底部は平底で、外面は黒斑になる。５～８は高杯で、杯部の屈曲は明瞭で、そこから口縁までは外へ広がる。復元口径21、21、18、17.1㎝を測る。８を除いて黒斑がある。９はやや底部に丸みをもつ鉢である。口縁は尖り、波打ち歪んでいる。

３７・４７号竪穴住居跡（図版１０・１４・３２、第３７図）

３７号住居跡は３８号住居跡の南に近接して検出した方形の住居跡で、住居跡の中央付近の大半を撹乱によって破壊されている。南東側を３９号住居跡に切られ、３３・４７号住居跡を切っている。３４号住居跡の東側で周壁溝と柱穴を確認しているが、壁面は３４号住居跡と共に掘削してしまった。また北西側の主柱穴は床面で検出できず、４７号住居跡の掘削時に共に検出している。結果、主柱穴はＰ１～３が該当する。長軸6.2m、短軸5.9m、深さ0.25m を測る。カマドは北側では検出しておらず、西側は破壊されているためカマドの有無は不明である。

４７号住居跡は３７号住居跡の北東部の下層で、壁面がほぼ重複して検出した長方形プランの住居跡で、南西側が撹乱されて残っていない。北・南側にベッド状遺構を、東側の中央に屋内土坑を設置していることは判明したが、中央炉と主柱穴は検出されなかった。長軸5.2m、短軸3.6m、深さは0.1 ～ 0.18m を測る。ベッド状遺構は0.5 ～ 0.6m 幅とやや細い。屋内土坑は0.95 × 1.1m の規模で壁面側で小型丸底壺が出土している。

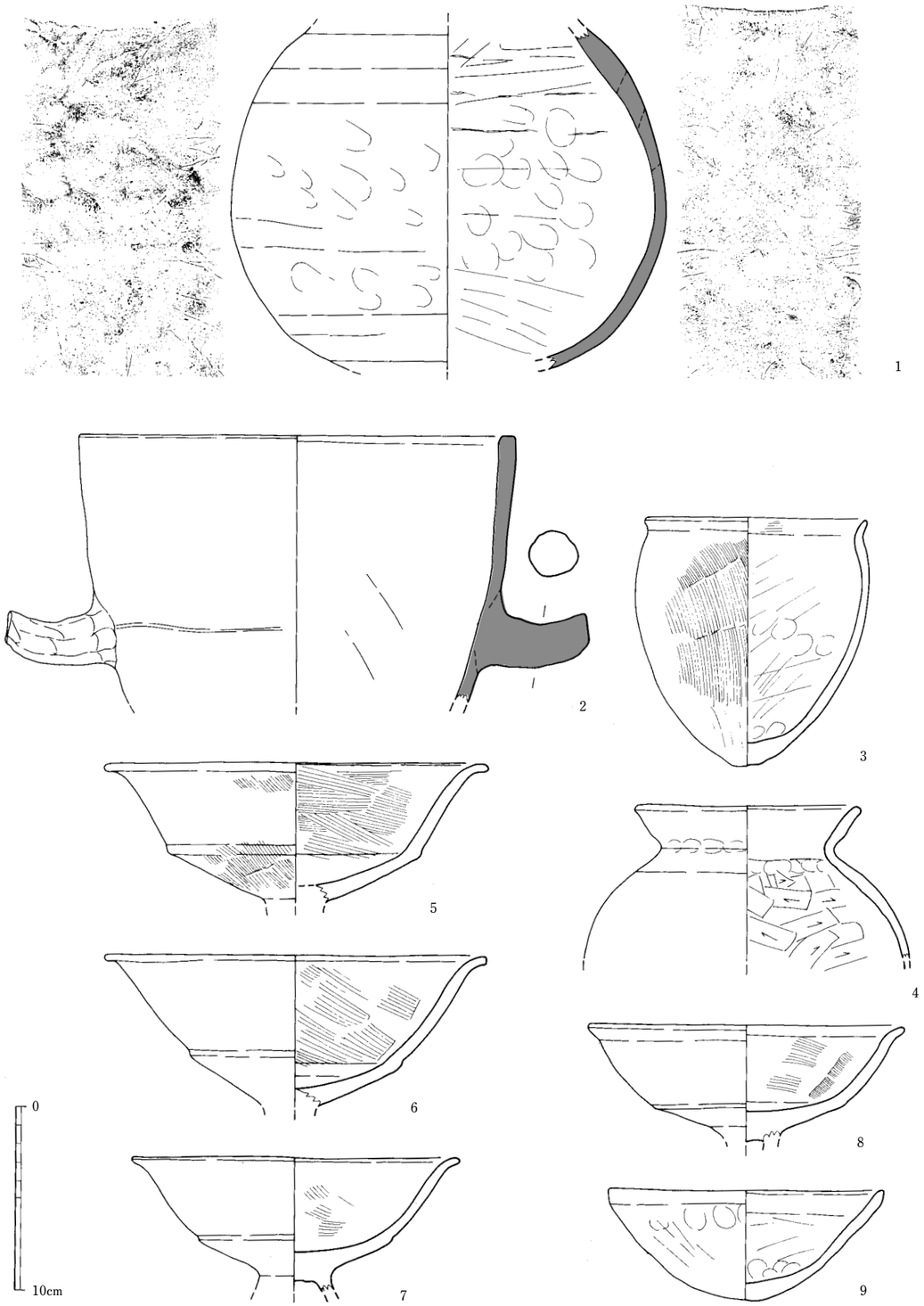
出土土器

１～６は３７号住居跡出土である。１は須恵器甕又は壺の体部片で、内外面ともに濃い青灰色を呈す。調整は外面に明瞭な刷毛目と内面には刷毛目の後にナデを施す。２～６は土師器である。２は壺である。頸部で口縁より窄まり、内面には絞りの痕跡がある。体部上半は丸みを持ちながら膨らむ。３は甕の口縁～頸部片である。４は脚付鉢の脚部である。５は口縁～体部までほぼ均一に作られた薄い作りの鉢である。外面に刷毛目が残る。６も小型丸底壺に近い鉢である。頸部が一回り厚くなり、境目ができている。

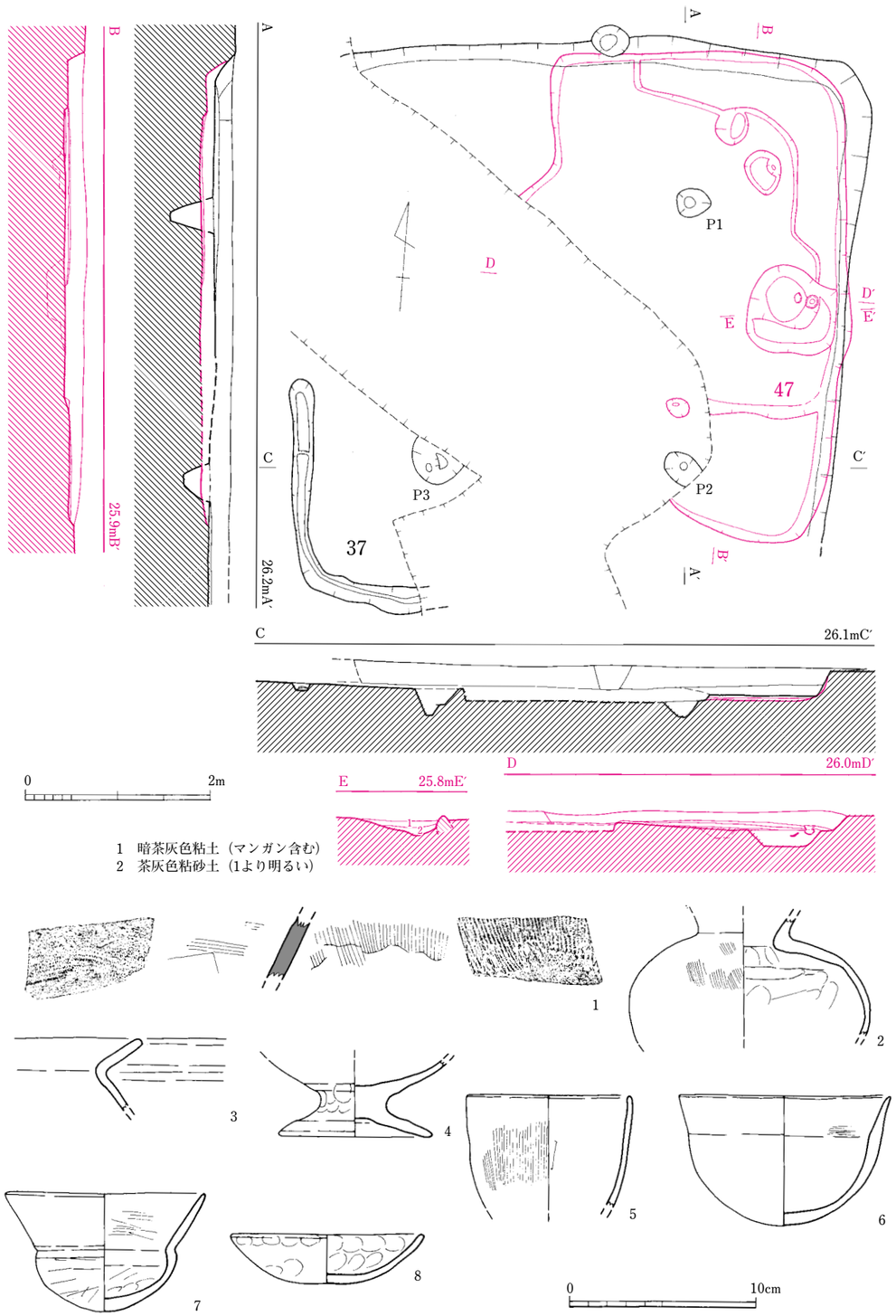
７と８は４７号住居跡出土である。７は土師器の小型丸底壺である。口縁部を一部欠損するほぼ完形である。頸部には明瞭な段がつく。８は土師器の浅い鉢である。内外面は丁寧なナデを施す。復元口径10.6㎝を測る。いずれも焼成良好で橙色を呈す。

３８・４０号竪穴住居跡（図版１１・３２、第３８・３９図）

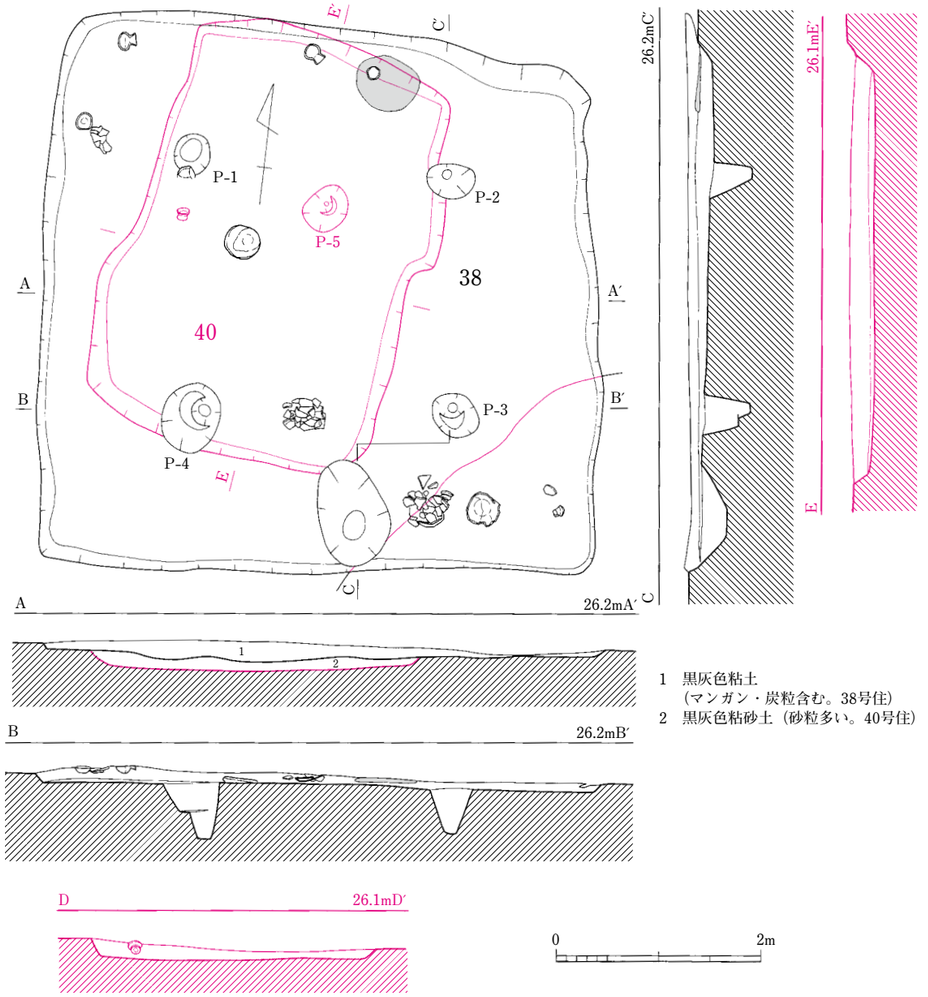
３８号住居跡は調査区北東側で検出した正方形プランの住居跡で、３７号住居跡の軸にあわせて1.5m ほど離れて建てられ、４０号住居跡を切っている。礫原の中に掘り込まれ、歪な部分もある。



第36図　３６号竪穴住居跡出土土器実測図（1/３）



第37図　37・47号竪穴住居跡および出土土器実測図（1/60・1/3）



第38図　38・40号竪穴住居跡実測図（1/60）

後世の削平で浅くしか残存しておらず、カマドは北壁に造り付けられていたようであるが、袖の検出は困難で幅0.5×0.6m程度の焼土だけを検出している。長軸と短軸ともに5.4m、深さは0.1m以下を測る。主柱穴はＰ１～４が該当し、0.35～0.5ｍの大きさ、深さ0.4～0.5mを測る。南壁側の屋内土坑は0.7～1.1m程度の楕円形を呈している。遺物は住居跡の残存状況は悪いが、屋内土坑から南東コーナーと北西コーナーからカマド付近で床面直上から出土している。中には初期須恵器高杯や朝鮮半島系かと思われる長胴甕が出土している。

４０号住居跡は８号住居跡に全面的に切られて検出した長方形プランの住居跡である。やや北東－南西に振れ、長軸4.2m、短軸は2.7mと小型で、深さ0.2～0.25mを測る。主柱穴と思われるものはＰ５であるが、この時期の柱穴が無い住居跡の可能性がある。西側壁の中央付近で小型丸底壺が出土している。

出土土器

１～３は３８・４０号住居跡両方に伴う可能性のある土器である。４０号住居跡が古墳時代中期以前であることから、１の須恵器のみ３８号竪穴住居跡に伴う可能性がある。

１は須恵器高杯の脚部片である。脚部には段を有し、内外面ともにナデである。杯部は欠損し、胎土は粗く１～2㎜の白色の砂粒を多く含み、粗い。焼成は良好で黒灰色である。２と３は土師器高杯の杯部である。内外面には刷毛目が残る。

４～１５は３８号住居跡出土である。４は土師器の様な形態をなすが、須恵器の無蓋高杯である。焼成は良好で非常に硬質である。色調は灰色である。口縁端部は尖り、内外面にナデを施す。復元口径 16.4cmを測る。同じ製品と思われるものが、大谷で出土している。５は体部片を欠損する壺又は甕の口縁～頸部片か。口径 12.0cmを測る。６は 1/2 以下を残存する丸底壺である。比較的均一に作られるが、底部に向かって薄くなる。７は壺又は甕の体部片か。内外面には刷毛目とケズリを施す。８は大きめな壺又は甕の体部片である。体部中央よりやや上半で最大径をとる。底部は平底である。９は約８割残存する長胴の甕である。やや砂粒は多いが、焼成良好で赤褐色を呈し、堅固に作られる。口縁端部～頸部までは短く内湾するが、頸部以下では緩やかに膨れながら底部付近で少し狭まる。内外面ともに無文のタタキであるが、外面は僅かに刷毛目である。口径 17.0cm、器高 34.0cmを測る。朝鮮半島系の土器か。１０と１１は高杯の杯部である。１１は口縁端部で広がり、厚く堅固に作られている。１２と１３は高杯の脚部片である。１４と１５は焼成良好で赤褐色を呈す甑の破片である。１４は把手で、先端部は尖る。１５は底部片で現存では約 3cmの穿孔を４ヶ所確認できる。

１６は４０号住居跡出土である。口縁端部を欠損する小型丸底壺か。焼成良好で堅固に作られるが、刷毛目やナデの痕跡は一部で見えるが調整は不鮮明である。

３９号竪穴住居跡（図版１１・３２、第４０・４１図）

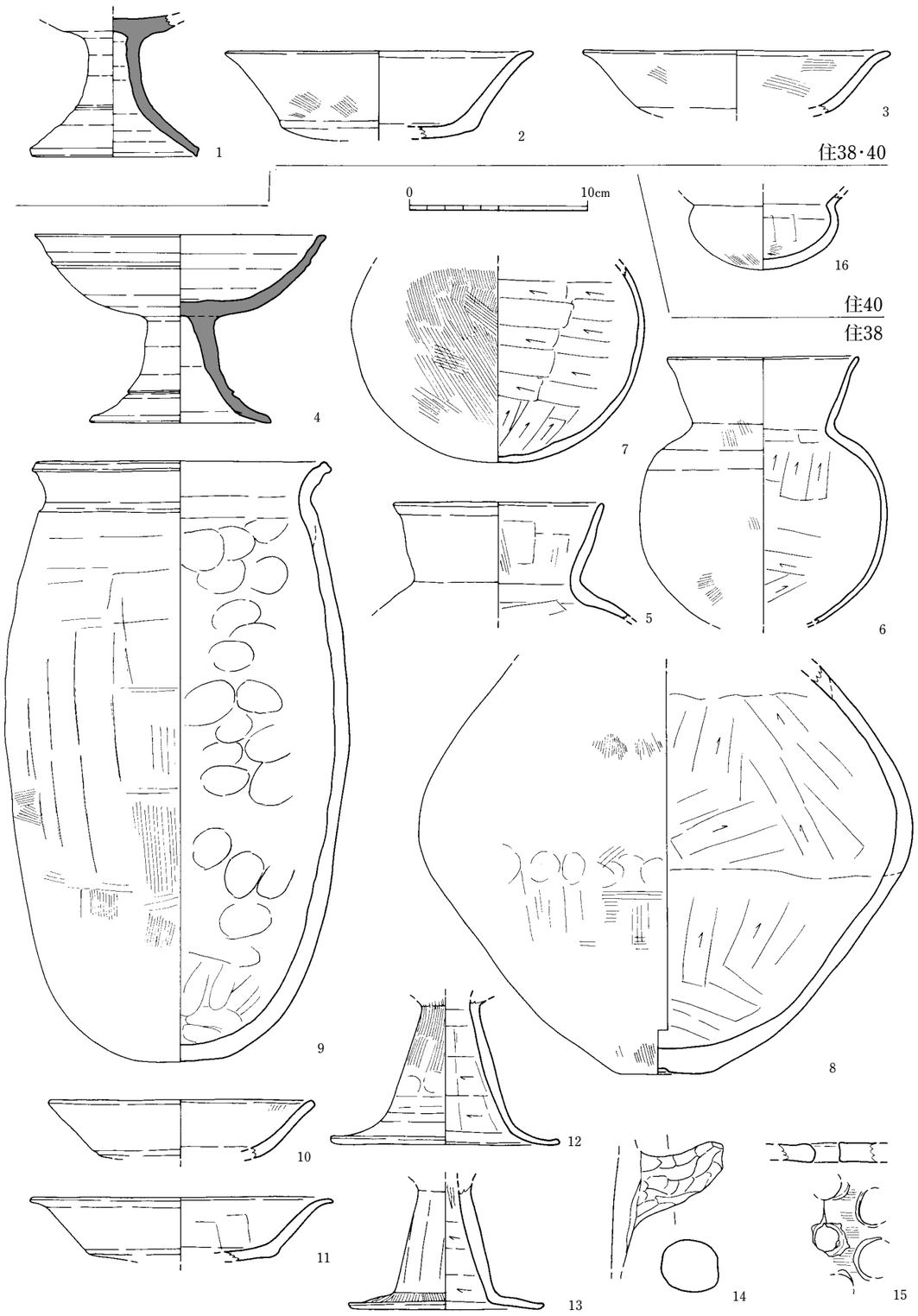
３６号住居跡から南に 1.5 ｍほど離れて検出した正方形の住居跡で、３４・３７・４６・４７号住居跡を切っている。精良な黄灰色砂土の地山に掘られており、壁面は明瞭であった。しかし西側壁面は撹乱により半分以上が消失してしまっている。その撹乱の近辺ではカマドの焼土と思われる土が埋土に散乱しており、西側にはカマドを設置していた可能性を窺わせている。主柱穴は４本で南東壁面に中央からずれた位置で両幅 1.1m 程度の屋内土坑を設置している。長軸は 5.8m、短軸 5.6m、深さ 0.15 ～ 0.2m を測る。主柱穴の大きさは 0.3 ～ 0.5m で、深さは 0.1 ～ 0.4m を測る。

出土土器

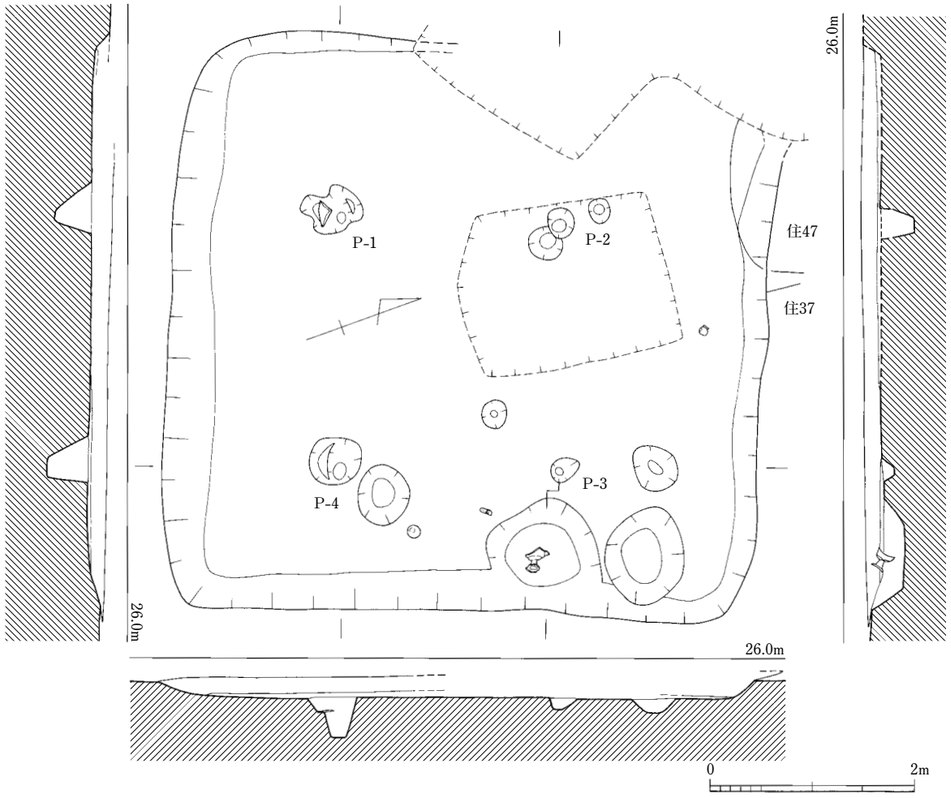
１は須恵器鉢や壺などの口縁部片で、端部に段を有する。口縁付近には突帯がつき、その突帯を挟んでわずかに緑色の自然釉が付着する。２～６は土師器である。２は頸部より上を欠損する壺又は甕の体部である。器面は剥離しているが、外面に縦のミガキ、内面はナデである。３は小型甕で、口縁を欠損する。底部は厚手になる。外面は僅かに刷毛目で、内面はナデである。４は約９割近く残存する杯部の深い高杯である。内外面には刷毛目とケズリを施す。５は甑の把手で、体部との接合部分から剥がれている。先端部は切られるが棒状で長く、断面は楕円形状になる。６は甑の底部片である。体部と底部の境目は明瞭である。やや不安であるが、復元底径 10.4cmを測る。外面は刷毛目で、内面は工具によるナデである。

４２号竪穴住居跡（図版１２・１３・３２・３３、第４２・４３・１６１図）

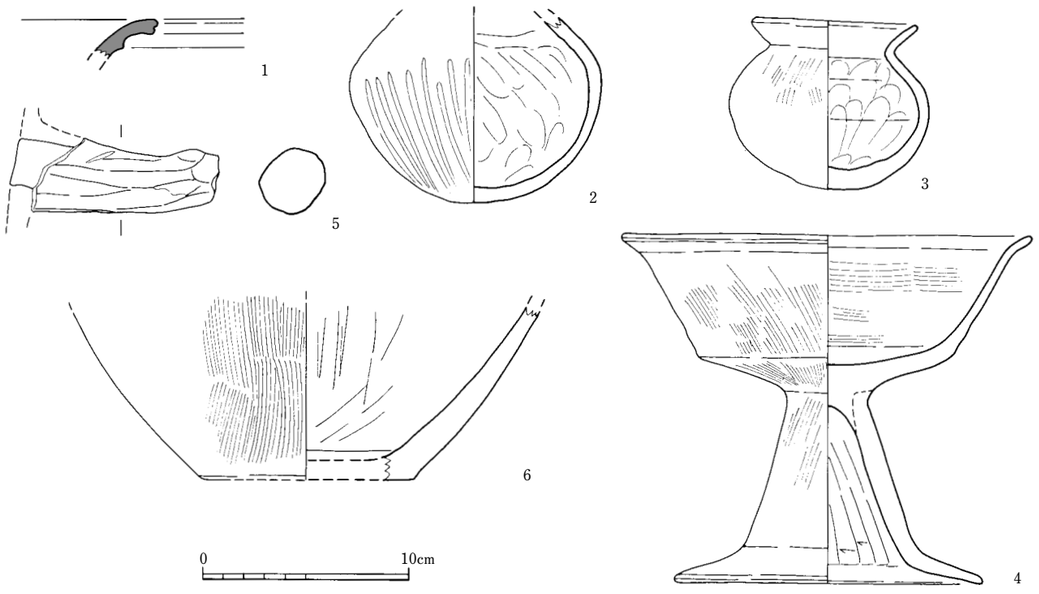
３６号住居跡から東へ約４ｍ先で検出した長方形プランの住居跡である。４２～４５号住居跡は大谷の落ち際が古墳時代前期までに埋没して陸地化した部分に建てられ、大谷の９層（黒灰色粘



第39図　38・40号竪穴住居跡出土土器実測図（1/ 3）

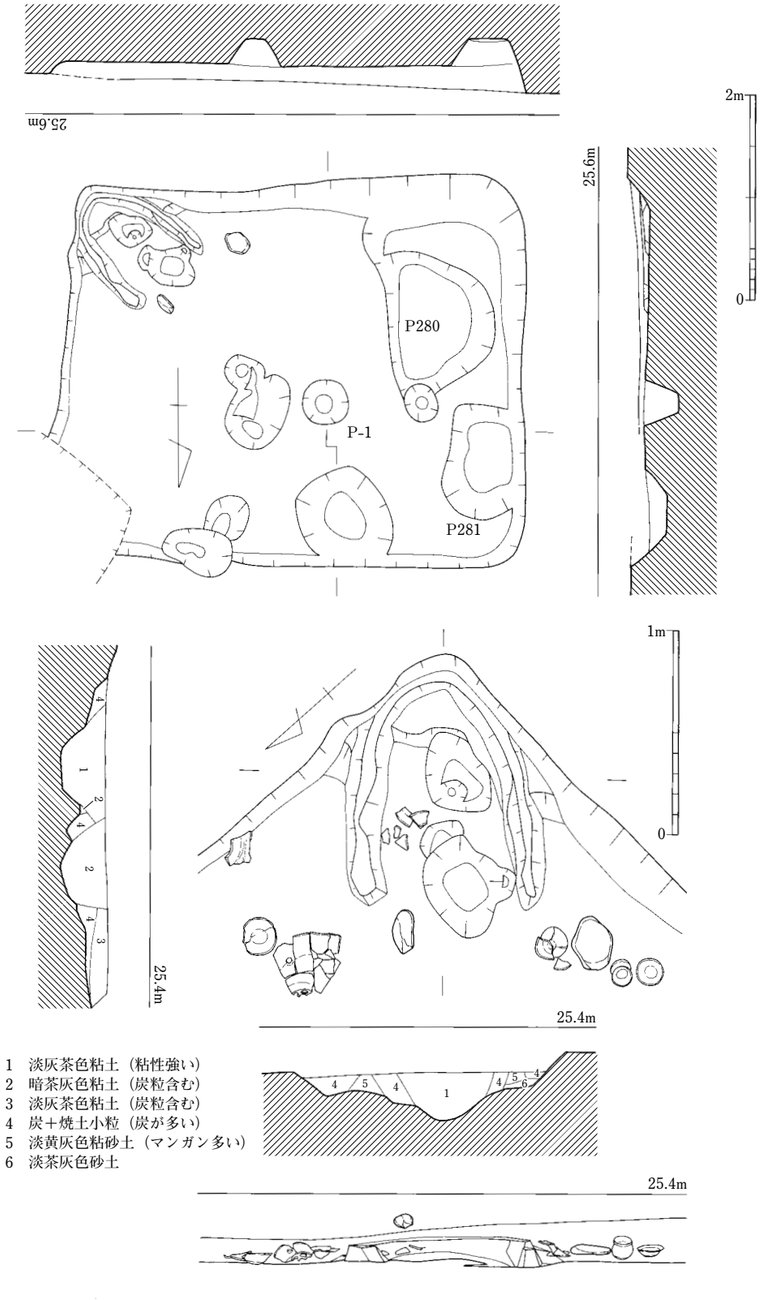


第40図　39号竪穴住居跡実測図（1/ 60）



第41図　39号竪穴住居跡出土土器実測図（1/ 3）

砂土）を除去して検出しているが、住居跡周辺ではやや色が薄い淡灰茶色粘土となる。軸はほぼ東西を向き、南東コーナーにカマドを造り付けている。谷の落ち際の西側は残りが良く、床面から約0.3mあり、谷の低い方へ浅くなっている。長軸4.5m、短軸3.8m、深さ0.1～0.3mを測る。北側壁面のやや西寄りに幅約1mの屋内土坑を設置しており、カマドと対面することから入り口側であったのであろう。主柱穴は床面で検出したＰ１が考えられるが１本柱ということは些か疑問も残る。柱穴の大きさは0.45m程度で、深さは0.34mである。



第42図　42号竪穴住居跡、カマド実測図（1/ 60、1/ 30）

カマドは４１号住居跡と同じ形状・構造の隅カマドで、やはりカマドの壁体は住居の壁から直接伸びず、「U」字を呈している。袖の奥部に小テラスがあり、コーナー壁面側は床面より5cm程高くなっている。支脚はカマド前面に0.2m浮いて石製のものが出土している。カマドの土層４が掘方を示し、当初は床面に支脚を設置していたようである。しかし上面からのピット掘削中に外された可能性がある。カマドの構築土は淡黄灰色砂土で本体の幅は約1m、奥壁からの袖の長さは1.2mほど、袖の幅は0.15～0.2mを測る。燃焼部の幅は0.65mである。カマド周辺では甑や壺、高杯、台石などがそのままの状況で出土している。

出土土器

１は時期の異なる混入品であるが、瀬戸内系

壺の口縁～頸部片である。口縁端部には２条の沈線が巡る。頸部下には円形の棒による刺突文が巡る。２～１１は土師器である。２は完形の小型壺である。少し褐色に汚れているが、本来は焼成が良く赤褐色を呈していたと思われる。３は出土した土師器に比べてやや古い時期の浅い小型丸底壺である。復元口径 11.8㎝を測る。４～６は甕である。４は内外面の摩滅した甕片で、内面の頸部付近で接合痕がある。５は鉢に近い甕で、口縁付近で内湾して外側へ開く。６は甕の頸部～体部上半片で、頸部と体部との境がくっきりと残り、ナデの痕跡が明瞭である。７は壺又は甕の底部で僅かに尖る。内外面は刷毛目とナデを施す。８と９は高杯の杯部である。９は８より口縁端部は外に延びず広がらない。内面には工具によるナデの痕跡がある。１０と１１は高杯の脚部である。１０は８に近い高杯か。１２は甑で、外側に向かって口を開く。残存する底部から穿孔が５ヶ所あることが推測でき、形状は中央のみほぼ円形、他は長円形状である。把手は先端部に向かってやや尖っている。口径 23.3㎝、器高 21.9㎝を測る。内外面に刷毛目やナデを施す。

４３号竪穴住居跡（図版１３・３３、第４４～４６図）

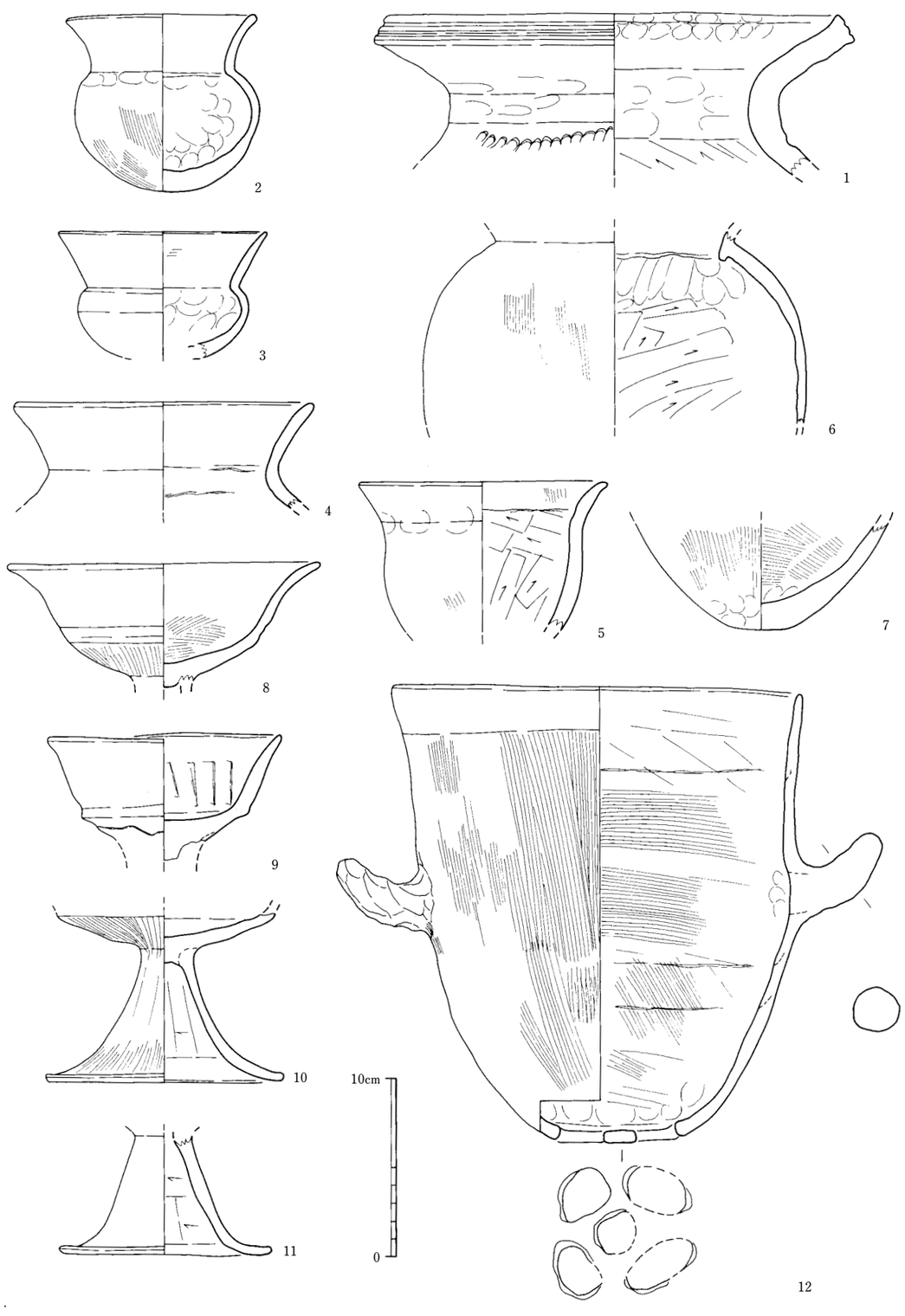
４２号住居跡の南西約 7m で４４号住居跡に切られて検出した住居跡である。谷内に住居跡が有り、南東コーナー付近は表土剥ぎの段階で壁面と床面を破壊してしまったが、貼り床も残存していた。北東側のコーナー以外は鋭角に屈折し、長方形状を呈している。西側壁面の中央にはカマドを造り付けている。住居内の硬化面を掘削をすると主柱穴に囲まれた中央付近がやや高まり状になっていた。主柱穴はＰ１～４の４本で、Ｐ３・４はやや八の字に広がる。長軸 5.2m、短軸 4.8m、深さ 0.18 ～ 0.25m を測る。柱穴の大きさは 0.28 ～ 0.45m で深さは 0.4m である。住居跡の貼り床は砂土や粘土を層状に積んでおり、これを除去した住居跡の深さは 0.3 ～ 0.4m となる。貼り床の除去後は、谷の埋土から水分が上がるのか、始終床面が湿気ていた。

カマドは検出時から支脚が頭を出していたので位置はすぐに判断できた。しかし袖の構築土は埋土に似て黒灰色粘土のため判別が付きにくく、炭土が見えるまで落として検出している。このカマドは両袖が壁から伸びるタイプで、袖の長さは 0.75 ～ 0.8m、幅については壁際で 0.3 ～ 0.4m と太く、先端部になると 0.15m 前後と細くなる。支脚から前面には幅 0.9 × 1.2m の浅い窪みを設けており、それには炭土が堆積していた。支脚は高さ 0.25m の河原石を床面に 4㎝程度埋め込んでいる。周囲には甕片が 10㎝程度浮いて出土している。カマド幅 0.9 ～ 1.2m で、燃焼部は約 0.65m を測る。

なお住居跡は大谷内での検出であって、床面の判別が難しかったために、一部掘りすぎている。そのため４５図６～８のような弥生土器も含んでいる。

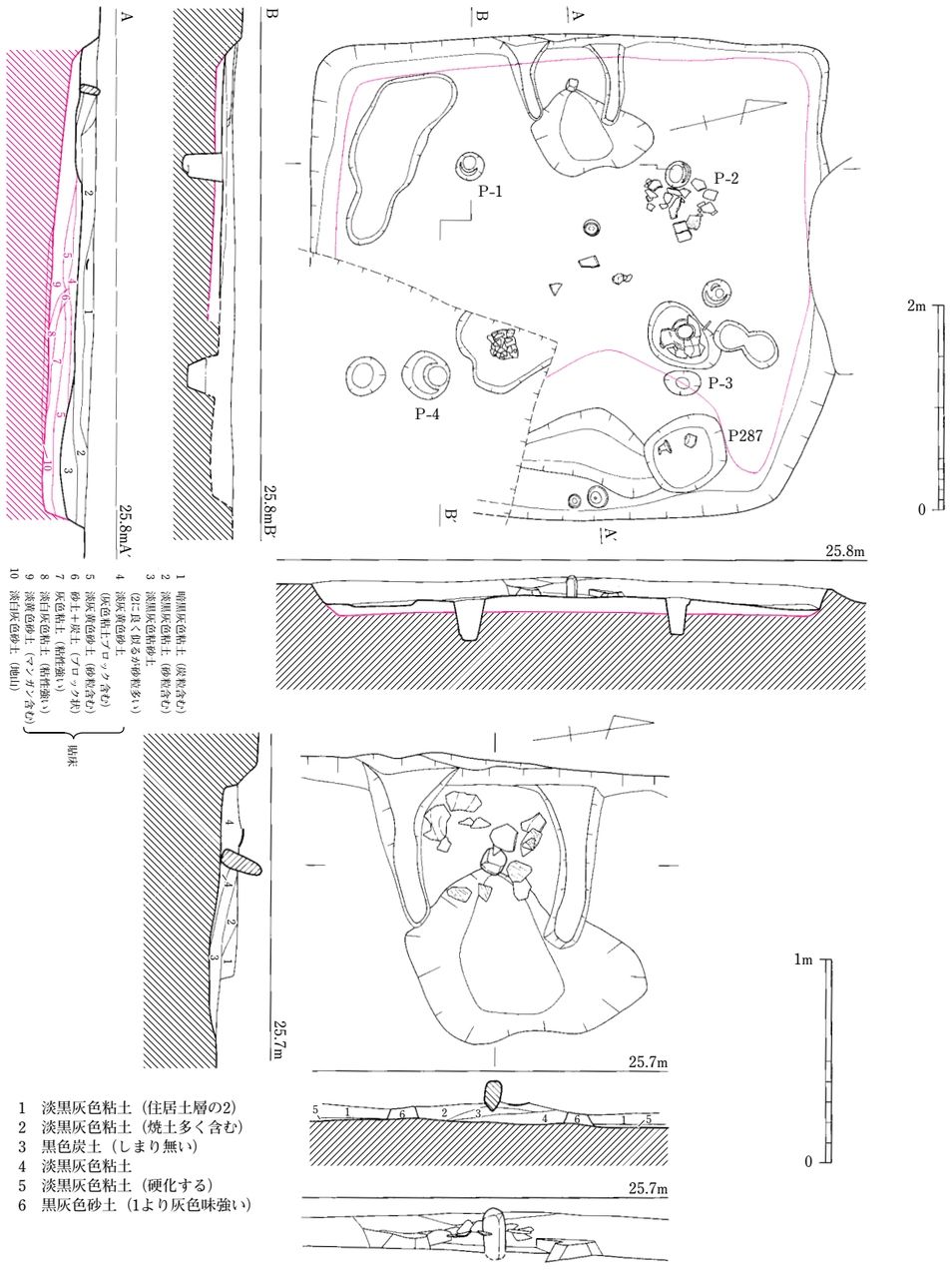
出土土器

１はかなり歪んでいる須恵器甕や壺などの口縁部片である。小さい三角形の突帯下には波状文がある。焼成良好で濃い灰色を呈す。２は土師器丸底壺の底部片か。内面にナデの痕跡が残る。３は土師器壺の口縁部片か。４は黄橙色を呈する甕の口縁～頸部片である。外面は刷毛目、内面はケズリを施す。５は口縁端部が肥大する甕である。胎土も砂粒が多く、内面にはケズリが見えることから土師器か。６は弥生時代後期の長胴甕か。内外面は刷毛目である。焼成良好で橙色を呈す。７も弥生時代後期頃の甕の口縁部か。内外面に刷毛目を施す。口縁端部は凹み、「く」の字形を呈す。８は弥生時代終末頃の大型の甕の口縁～体部上半片である。頸部には１条の刻目を施した突帯が巡る。調整は刷毛目が大部分であるが、内面口縁付近は縦方向のミガキである。９～１５はいずれも

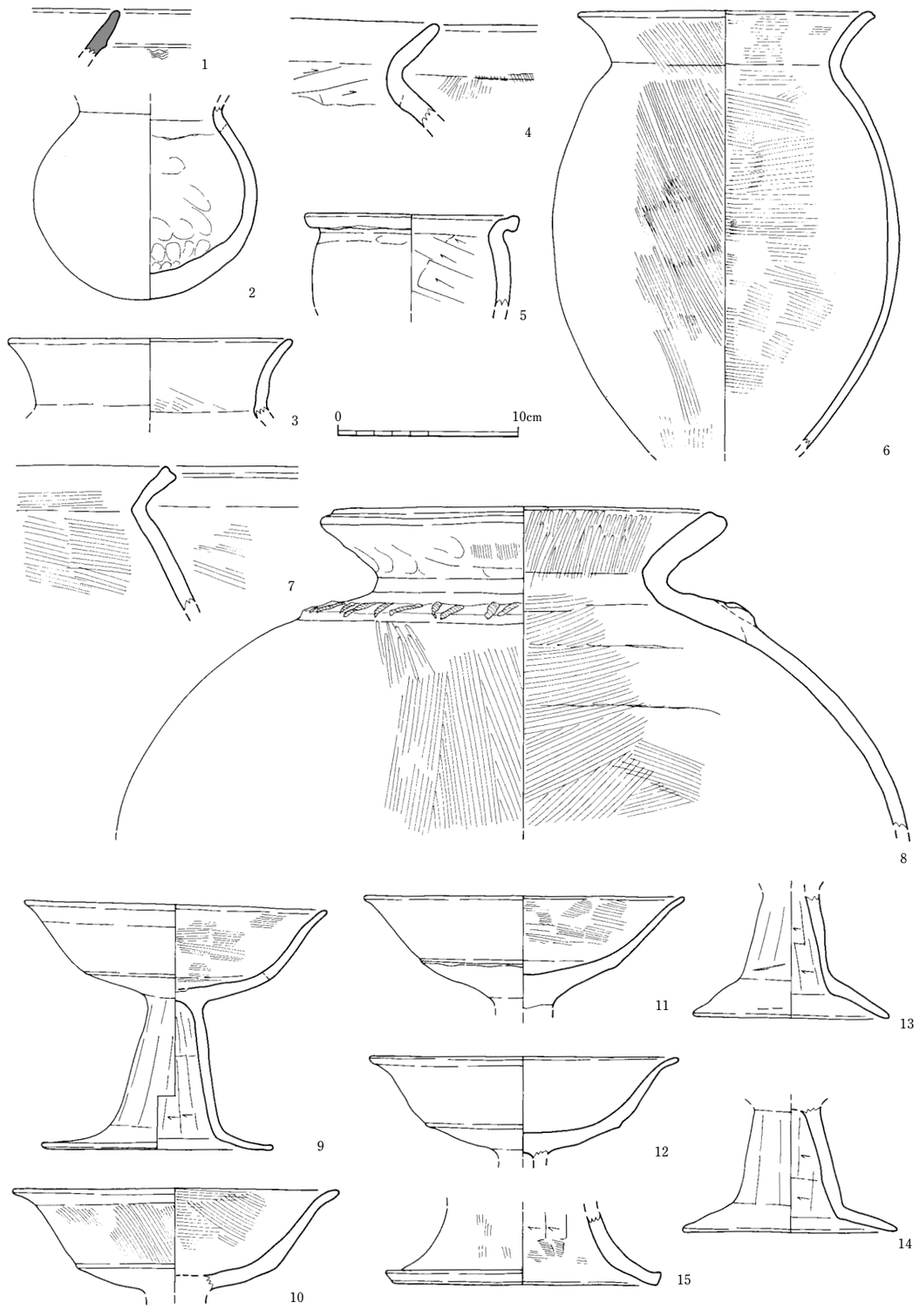


第43図　42号竪穴住居跡出土土器実測図（1/ 3）

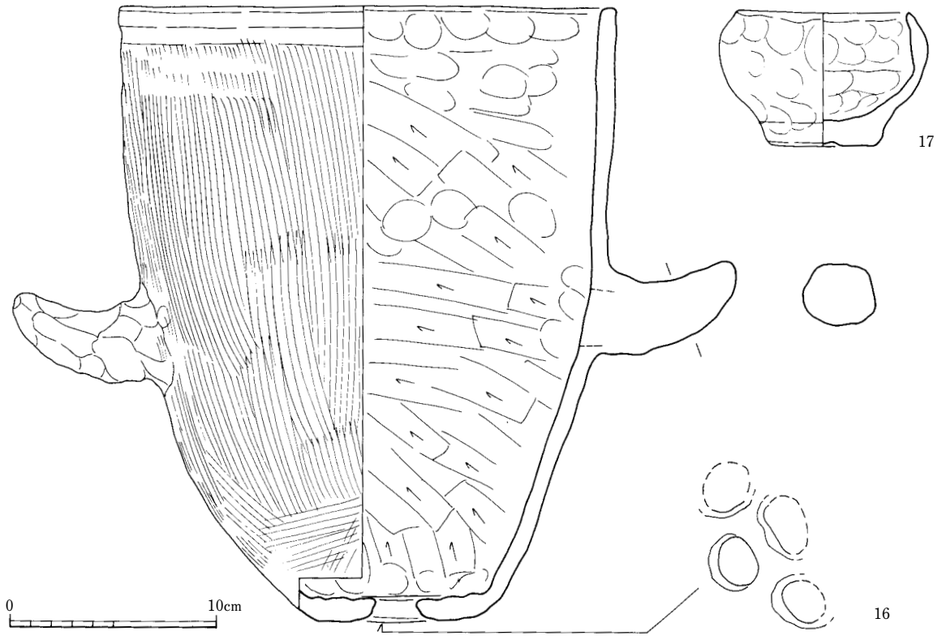
焼成良好で、橙色を呈する土師器高杯片である。９～１２の屈曲部には僅かに段を有し、口縁端部で内湾して広がる形状の杯部である。９は７割残存する。１０は脚部のみ欠損する。１１は外面屈曲部に粘土が厚く貼り付き雑な感をもつ。１２は他よりも屈曲部が明瞭な三角形の突帯状になる。１３～１５は高杯の脚部片である。１３と１４の脚部は接地面付近で明瞭に屈曲する。１５は形状から高杯の脚部と判断した。脚端部は三角形状で尖る。１６は８割以上残存する甕で、底部は平底である。底部～体部中央までは斜めで、それより上部はほぼ真っ直ぐに口を開く。調整もはっきりと確認でき、外面には刷毛目、内面にはケズリとナデを施す。底部には現状で４ヶ所の穿孔を確認



第４４図　４３号竪穴住居跡、カマド実測図（1/ 60、1/ 30）



第４５図　４３号竪穴住居跡出土土器1実測図（1/ 3）



第46図　43号竪穴住居跡出土土器2実測図（1/3）

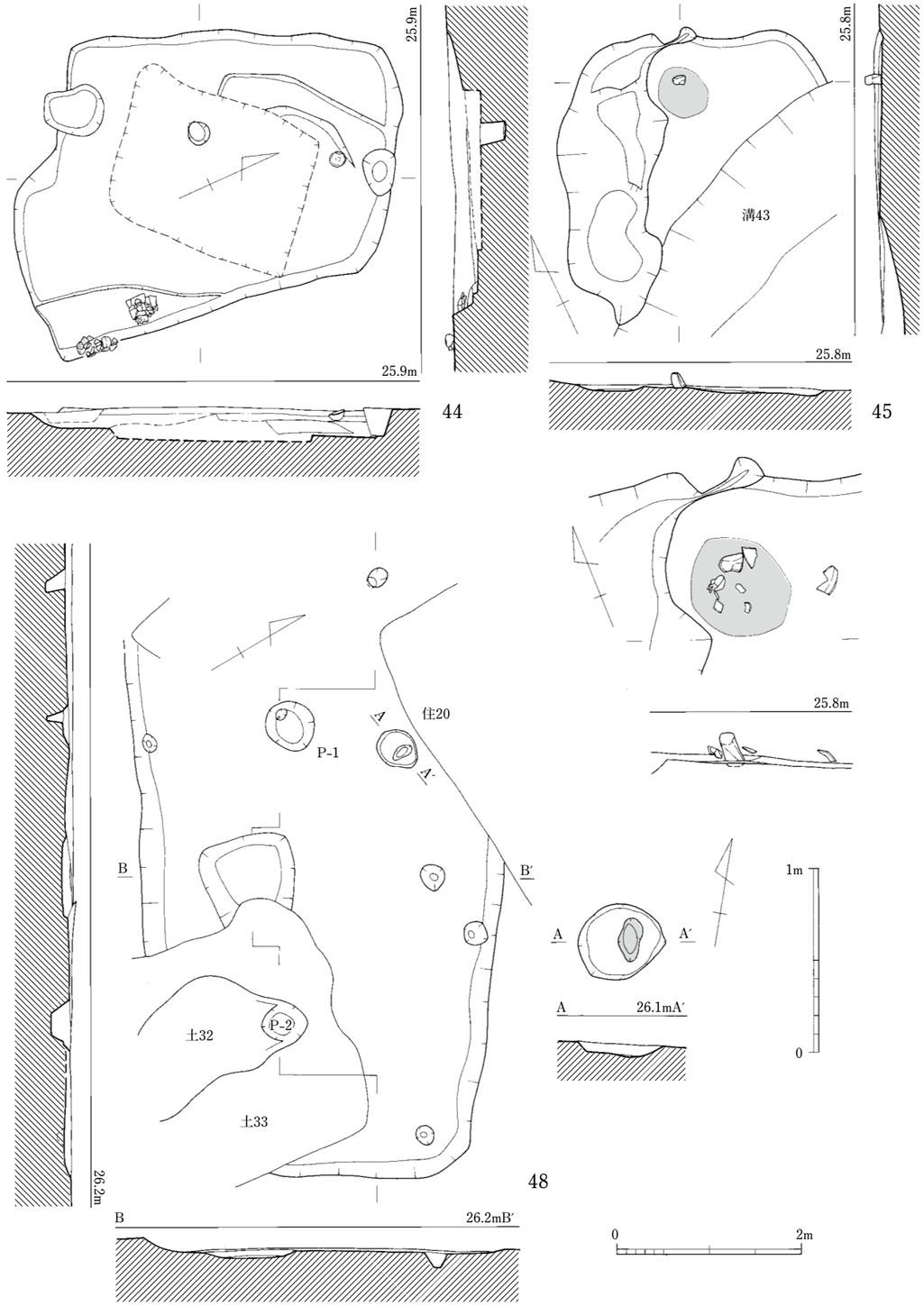
できる。把手は先端に向かって尖る。口径24.3cm、器高30.1cmを測る。17は平底で鉢状の手づくね土器である。体部下半で直角に曲がり、口縁は内傾する。内外面に指の圧痕が明瞭に残る。焼成は不良で、色調は内外面暗褐色である。

44号竪穴住居跡（図版14・33、第47・48図）

43号住居跡を切って北側で検出した住居跡である。表土剥ぎの時点で中央を掘削しすぎている。南側が一辺3.5m、北側は2.4mと不整な長方形プランである。竪穴状遺構かとも考えたが、当初の住居番号で報告する。西側壁と南東コーナーに幅が狭いテラスがあるようだが、やや掘りすぎた部分もあり、形状に不安が残る。南東コーナーのテラスに甑・甕・壺が出土している。長軸は4.1m、短軸3m、深さ0.2mを測る。

出土土器

1～9は土師器である。1は丸底壺である。口縁は大きく口を開くが、頸部で窄まる。体部は中央付近で最大径をとる楕円形状である。4条の接合痕が明瞭に残る。2は甕で、口縁がやや立ち短い。口径11.8cmを測る。3は体部中央よりやや上で張る甕で、内面の体部上半は強いナデが残る。復元口径15.4cmを測る。1～3は8割以上残存する。外面は刷毛目で、内面はケズリを施す。4は口縁端部で外へひねる。復元口径21.4cmを測る。5は甕の口縁～頸部片である。6と7は高杯の杯部である。6は外面屈曲部より上にミガキが残る。6は復元口径で23.4cmを測る。7は脚部のみ欠損し、屈曲部も明瞭ではない丸みの帯びた杯部である。口径17.1cmを測る。8は甑で、底部は長円形や楕円形状の穿孔が6ヶ所ある。把手は先端部に向かって尖る。調整は内外面に刷毛目とケズリを施す。外面体部中央付近には沈線が巡るが、把手の位置で蛇行している。黒斑もある。口縁はゆがんでいるため、口径19.7～22.4cm、器高23.8cmとなる。9は厚手な作りから支脚の脚部片か。復元脚端部径で14.0cmを測る。



第47図　44・45・48号竪穴住居跡、45号竪穴住居跡カマド実測図（1/60、1/30）

４５号竪穴住居跡（図版１４、第４７・４８図）

大谷の落ち際で上層の砂を剥ぎ取って検出した住居跡で、壁面の大半は残存していない。カマドの支脚が頭を覗かせていたことで存在に気付くことができた。プランは隅丸楕円形であると考えられるが、南側は４３号溝に破壊されている。西側の溝状になっている部分は他の遺構と勘違いし、掘削して壁面を掘り飛ばしてしまっている。残存長軸 3m、短軸 2.8m、深さ 0.05m を測る。

カマドの壁体と埋土は残存していないが、支脚と焼土面がある。支脚は高さ 0.2m の石製でやや手前に傾斜し、周辺には土器も出土した。焼け面の幅は 0.55m の範囲である。

出土土器

１０は口縁端部に向かって斜めに延びる土師器の甑片か。外面には刷毛目が残る。

４８号竪穴住居跡（図版１５、第４７・４８図）

２０号住居跡の南側で切られ、３２・３３号土坑に切られる。長方形の住居跡である。北西側は調査区の分割により、削りすぎて消滅してしまっている。主柱穴にあたるのはＰ１と、３２号土坑と一緒に掘削してしまったＰ２である。中央炉は南側の壁面に近い３３号土坑の北西で切られて検出したもので、炭が若干出土しただけである。２０号住居跡際に白色粘土を底面に貼った浅い炉跡を検出しているが、住居跡の中央に位置せず、規模も小型であるため、中央炉とは別に付設されたものであろう。残存長軸 5.8m、短軸 3.9m、深さ 0.1m 以下を測る。主柱穴の大きさは 0.5 ｍで、深さは 0.2 ～ 0.24m を測る。中央炉は約 1m の幅である。

出土土器

１１と１２は弥生土器の甕又は壺の口縁部片か。

３　その他の建物跡

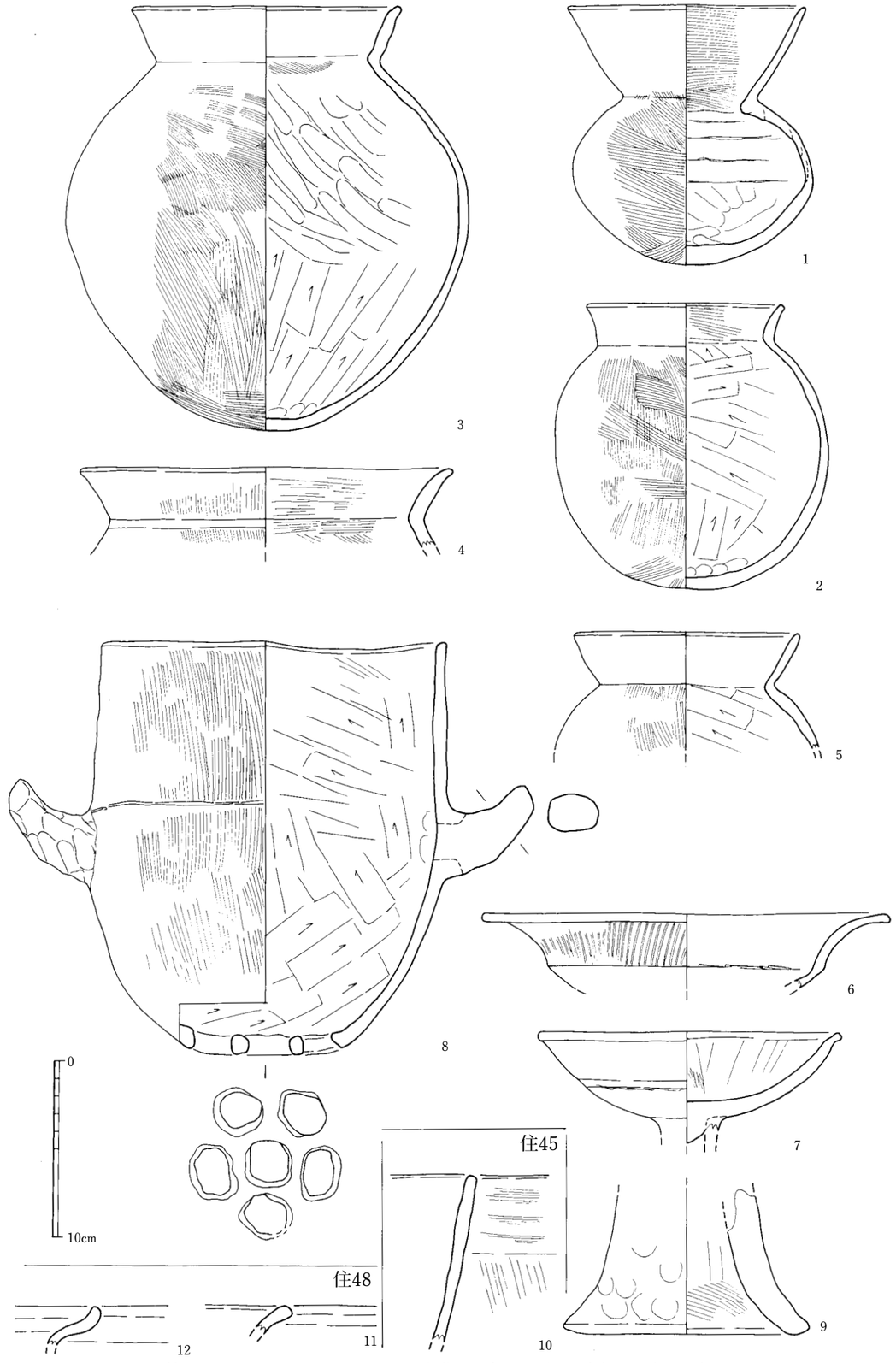
２区では竪穴住居跡・掘立柱建物以外に建物跡と考えられる２つの遺構を検出している。おおむね古墳時代中期に属しており、遺跡の性格上、住居跡の類と考えられる。

１号方形周溝状遺構（図版３２、第４９・５０図）

調査区北西側の中央付近で検出した長方形に廻る溝跡で、小谷・２５号住居跡・２８号土坑・４１号溝を切っている。軸はほぼ東西を向き、西側は削平により一部を失い、また細くなっている。埋土は黒灰色土で長軸は 7.7m、短軸 4.7m、溝の幅は 0.35 ～ 0.9m を測る。溝の深さは 0.1m と浅くしか残存しておらず、溝内部には特に柱穴などは見つかっていない。溝内から甑片・砥石などが出土しており、時期は古墳時代中期に属すと判断できる。類似する遺構は「大壁建物」として知られるが、その特徴の「溝内の柱穴」は検出されていないので、内部の構造は不明である。平地式建物の周溝部分ではないかと考えている。

出土土器

１は須恵器鉢や壺などの口縁部片か。色調は灰白色で、焼成は良好である。口縁端部は尖り、口縁下には一条の突帯がつく。内外面ともに横ナデである。２は甕片である。３は高杯の脚部である。

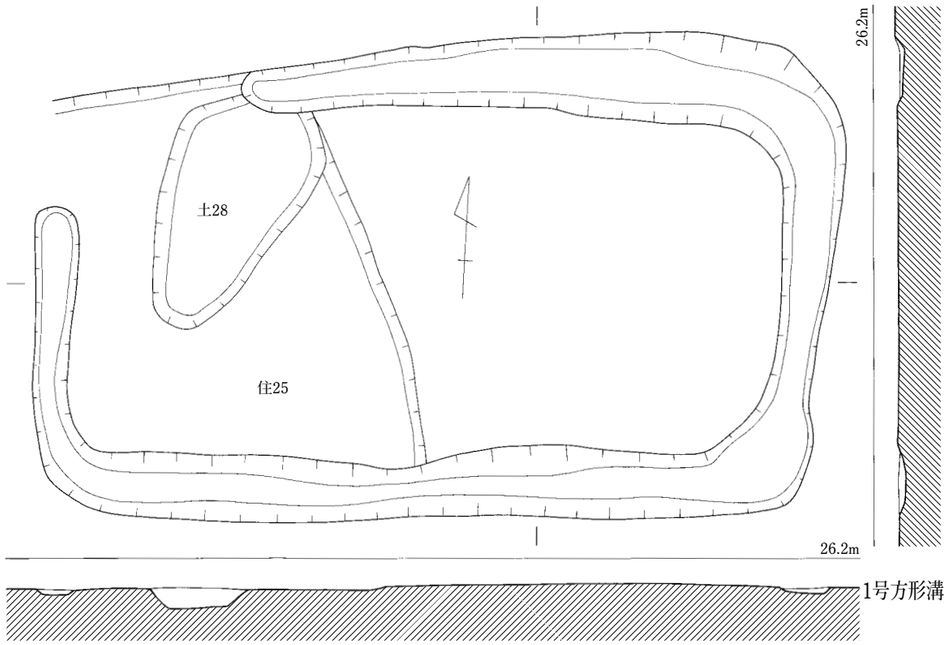


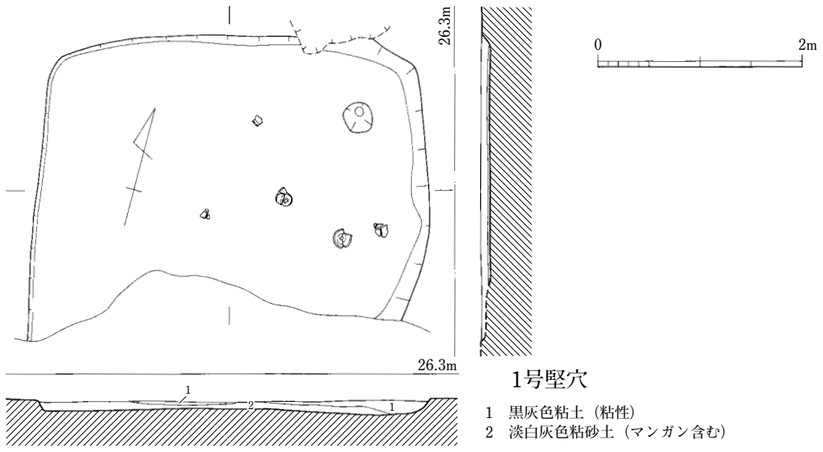
第48図　44・45・48号竪穴住居跡出土土器実測図（1/ 3）

４は鉢又は椀か。口縁端部で、外側に向かって開く。５は多孔式甑の底部片で、内外面ともにナデである。確認できる穿孔は４ヶ所以上か。６は手づくねのミニチュア土器である。

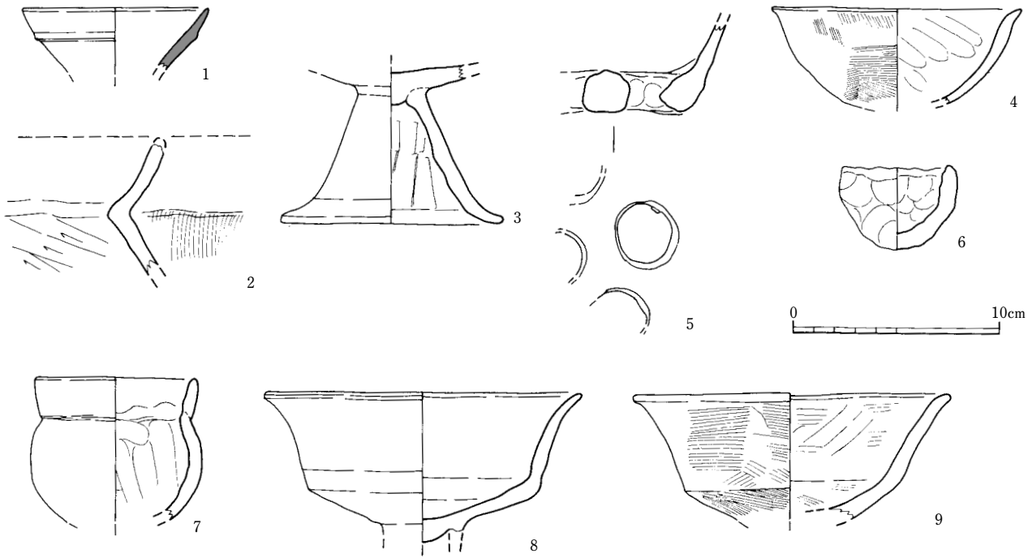
１号竪穴状遺構（図版１５、第４９・５０図）

１号方形溝状遺構から南西 4m 程度で検出した遺構で、南側は礫原に当たるため不明であるが長方形プラン状を呈する。削平が著しく 0.15m と浅くしか残存していないが４１号溝を切ることは確かである。長軸 3.9m、短軸 2.8m を測る。柱穴やカマドなどは無く、住居跡なのかは不明である。





第49図　1号方形周溝状遺構、1号竪穴状遺構実測図（1/ 60）



第50図　1号方形周溝状遺構、1号竪穴状遺構出土土器実測図（1/ 3）

出土土器

７は小型の短頸壺で、内外面ともにナデである。８と９は高杯の杯部で、口縁端部は外側に開く。

４　掘立柱建物跡

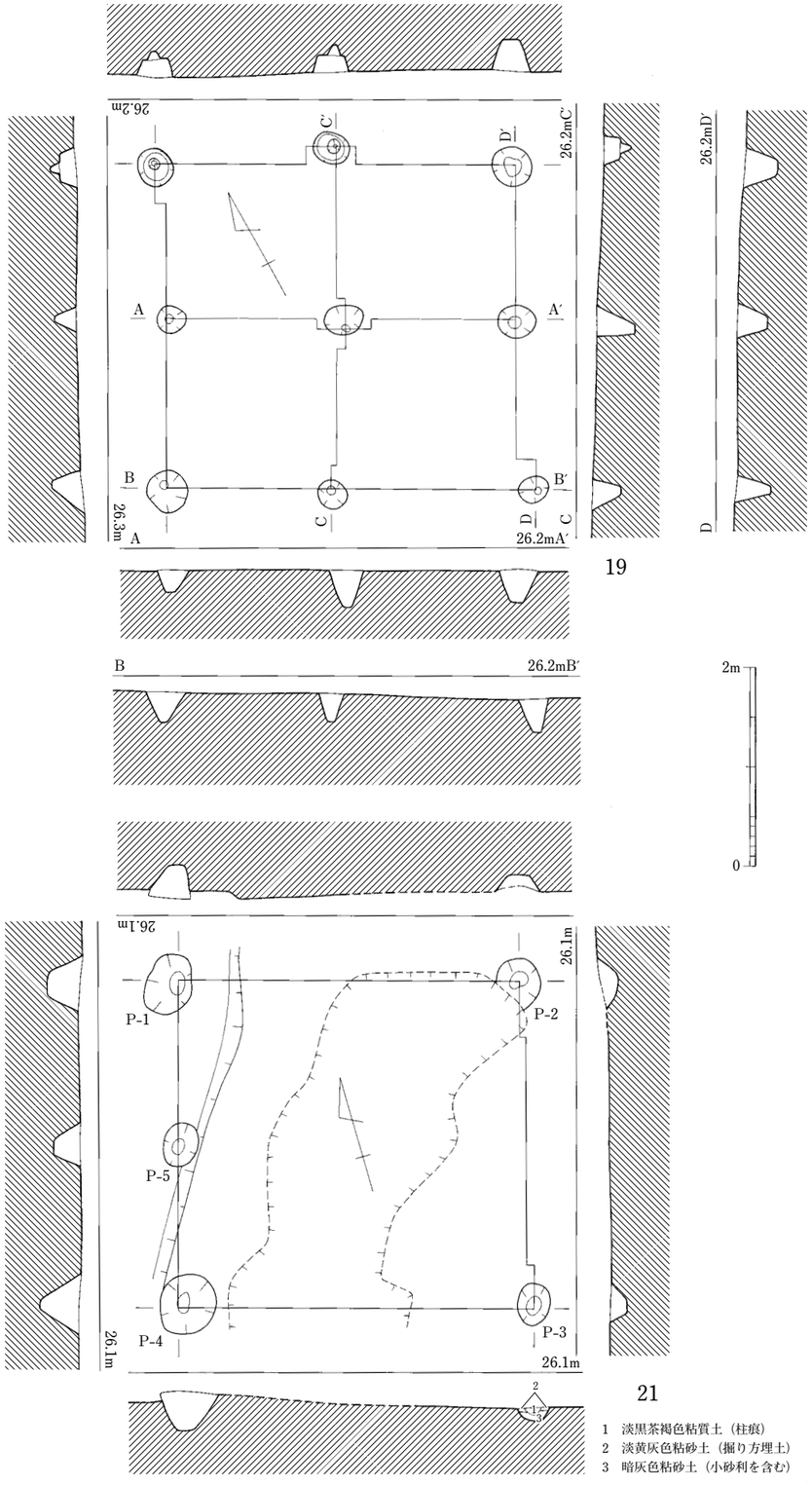
１区南東から２区には古墳時代の掘立柱建物跡が散見され、大谷に囲まれた中での検出であった。内訳は古墳時代前期と中期の掘立柱建物跡で、１×１間と２×２間の総柱建物、大型の３×３間の総柱建物である。

１９号掘立柱建物跡（図版１５、第５１図）

１区の南側で２１号建物跡と並立して検出した２×２間の総柱建物である。柱穴は明瞭で、切り合いもない。桁行 3.6 ～ 3.75m、梁行 3.25m、柱間はおよそ 1.6 ～ 2m を測る。柱穴の大きさは 0.3 ～ 0.45 m、深さ 0.24 ～ 0.35m である。図化に耐えうる遺物はない。

２１号掘立柱建物跡（図版１６、第５１図）

１９号建物跡から東に 5m のところで３２号溝を切って検出したもので、撹乱によって中央が消失している２×２間の総柱建物である。東側は削平が著しく柱穴底面に近いが、西側の柱穴は良好である。桁行 3.5m、梁行 3.2 ～ 3.3m、柱間はおよそ 1.7m を測り、柱穴の大きさは 0.45 ～ 0.6m、深さは 0.15 ～ 0.38m である。図化に耐えうる遺物はない。



第51図　19・21号掘立柱建物跡実測図（1/ 60）

２２号掘立柱建物跡（図版１６、第５２図）

２３号建物跡と重複して検出したもので１×１間の建物で、１３号住居跡から西に 2m ほど離れている。柱穴は古墳時代前期の遺構と同じく不明瞭で、暗灰色粘砂土で堀方は埋められている。桁行 3.2 ～ 3.3m、梁行約 2.5m を測る。柱穴の大きさは 0.4 ～ 0.5m、深さは 0.25 ～ 0.34m である。図化に耐えうる遺物はない。

２３号掘立柱建物跡（図版１６、第５２図）

２２号建物跡と重複しており、１×１間の建物である。桁行 2.8 ～ 3m、梁行 2.4m で２２号建物跡よりやや小ぶりである。柱穴の大きさは 0.55 ～ 0.6m で、深さは 0.1 ～ 0.25m を測り、この建物も掘方の埋土は不明瞭な暗灰色粘砂土である。２２号建物跡と前後関係は不明だが、同立地で軸を違えることを考えると建て替えの関係であろう。

出土土器

１は弥生土器の甕又は壺の底部片か。Ｐ１出土。

２４号掘立柱建物跡（図版１７、第５２図）

１２号住居跡の 1.5m 北東で１４号住居跡を切って検出した住居跡で、桁行きの柱穴間に添え柱が入る２×２間の総柱建物である。この建物から約 1m 間隔をあけて西側～北側～東側にかけて、柱間あたり 2.3 ～ 3.1m の柵跡が囲む。建物と柵がセットという貴重な例である。掘立柱建物跡は桁行 3.5 ～ 3.7m で柱間は 1.7 ～ 2m、梁行は約 3.3m で柱間は 1.6 ～ 1.7m を測る。柱穴の大きさは 0.35 ～ 0.45m、深さは 0.2 ～ 0.43m を測り、添え柱の大きさは 0.25 ～ 0.3m で深さ 0.1 ～ 0.25m である。柵の柱穴は添え柱と似て小型で、大きさ 0.23 ～ 0.34m、深さは 0.15 ～ 0.28m を測る。

出土土器

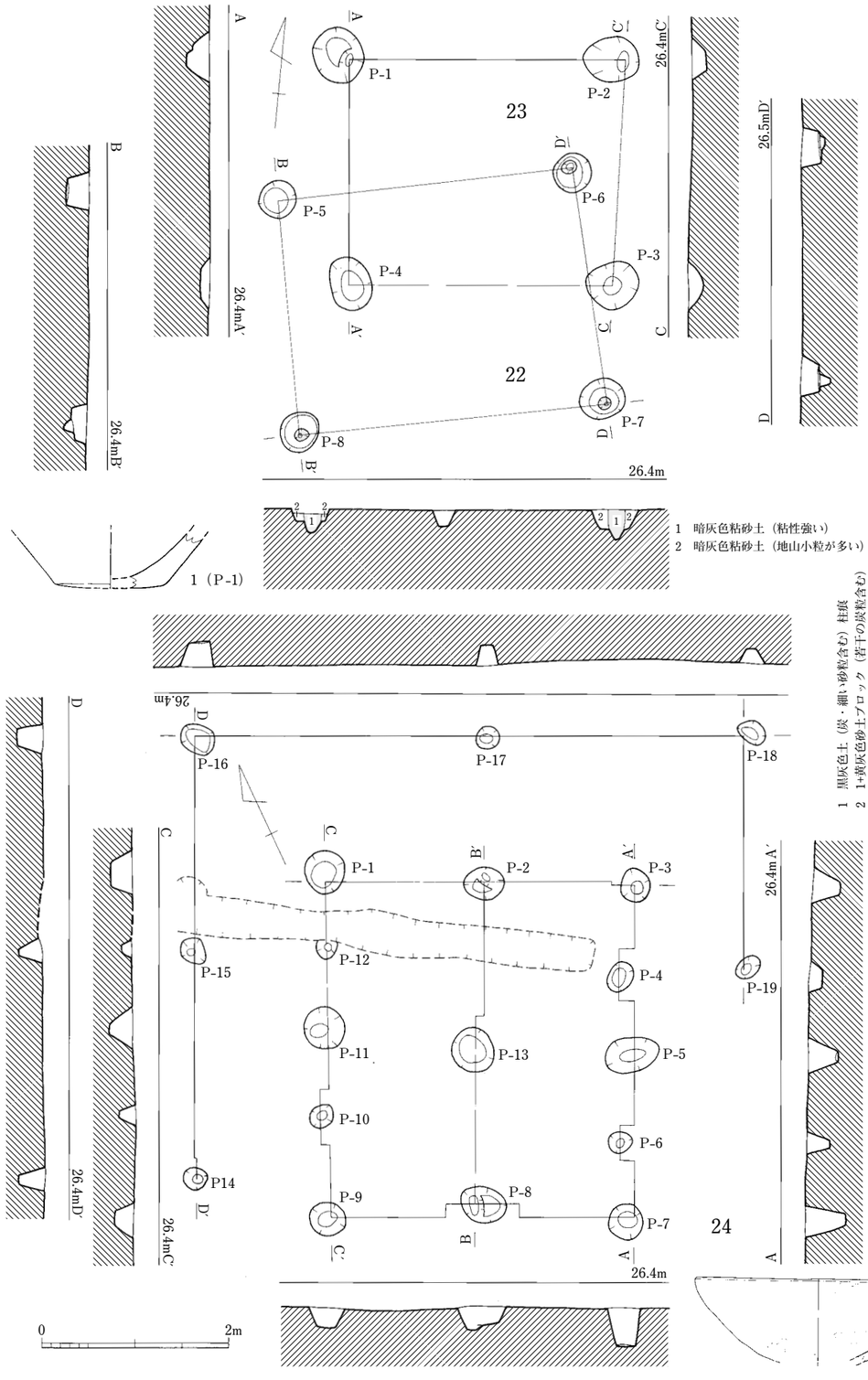
２は土師器の鉢片か。所々にミガキが残る。Ｐ８出土。

２５号掘立柱建物跡（第５３図）

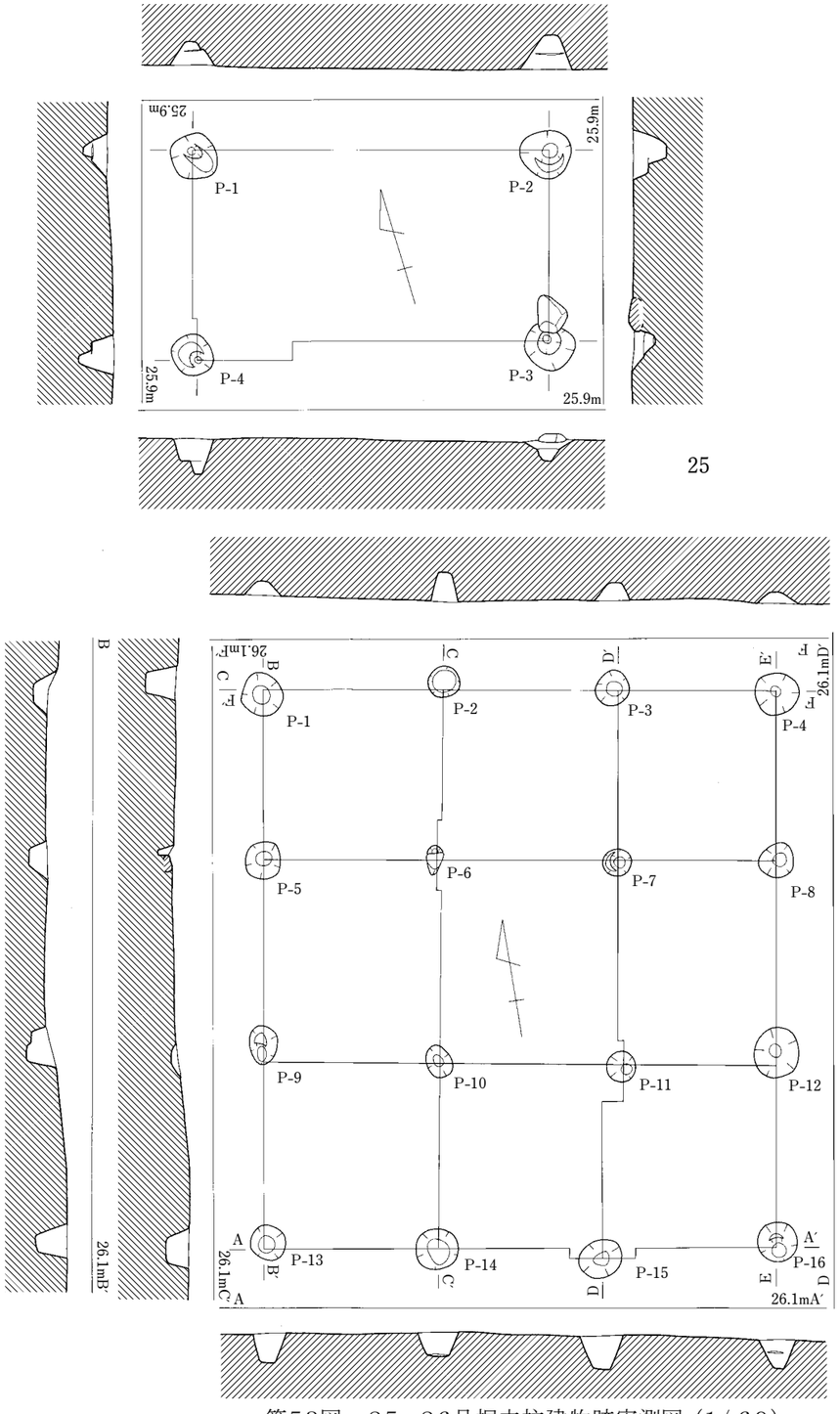
２６号住居跡から北西に 2.5m のところで検出した１×１間の掘立柱建物で、２２・２３号建物跡と掘方埋土がよく似ている。やや北西－南東へ軸は向き、桁行約 3.5m、梁行約 1.9 ～ 2.1m である。柱穴の大きさは 0.4 ～ 0.5m、深さは 0.2 ～ 0.35m を測る。なお、南側桁行方向の先に柱穴を二つ検出し、この建物と関係するかのようにも見えるが、僅かにズレがあることや掘方埋土の違いから無関係のものと判断している。

２６号掘立柱建物跡（第５３図）

古墳時代前期の３１号住居跡を切り、４１号住居跡に切られる３×３間の大型の総柱建物である。３×３間の総柱建物は当遺跡では唯一の建物である。桁行 5.5 ～ 5.6m で柱間は 1.7 ～ 2m、梁行 5.2m で柱間は 1.7m を測る。外側に当たる柱穴は比較的大きく、掘方もしっかりしているが、内側の柱穴は小さめで深さも浅い。柱穴の径は 0.15 ～ 0.5m で、深さは 0.16 ～ 0.35m である。



第52図　22～24号掘立柱建物跡および出土土器実測図（1/60、1/3）



第53図　25・26号掘立柱建物跡実測図（1/60）

5　土坑

ここで報告する土坑は主に古墳時代である。数基は古墳時代以外もあるが、古墳時代に関係する土坑は、ある程度まとまりをもって検出している。１９～２１号土坑は１区の１３号溝に沿って検出したもので、２区の古墳時代中期の遺構と一連と捉え、ここで報告する。

１９号土坑（図版１７、第５４図）

１区１３号溝の南側で２０・２１号土坑とともに検出した丸みを帯びた楕円形プランの土坑である。土層を確認すると半分程度埋没した後に、南側を約 1m の円形に再掘削しているようである。長軸 2m、短軸 1.4m、深さ 0.5m を測る。

２０号土坑（図版１７、第５４図）

１９号土坑の東側に隣接して検出した、北側と南側が尖る楕円形の土坑である。長軸 1.4m、短軸 0.8m、深さ 0.15m を測り、埋土は黒灰色粘土であった。１９・２０号土坑は軟弱な砂土部分に掘削されており、掘削後に一度崩壊したため、空中撮影時には一回り程大きくなってしまっている。

２１号土坑（図版１７、第５４図）

１９号土坑の北側で検出したやや歪な円形の土坑で、断面は擂鉢状を呈している。長軸 1.2m、短軸 1.1m、深さ 0.5m を測る。

２２号土坑（図版１８、第５４・５７図）

１号方形周溝状遺構と１号竪穴状遺構の間で２３・２４・２７号土坑と共に検出した土坑で、２４号土坑・４１号溝を切っている。南北にやや伸びる楕円形の土坑で長軸 1.8m、短軸 1.2m、深さ 0.15m を測る。埋土は淡黒灰色粘土である。

出土土器

１は土師器甕又は壺片か。

２３号土坑（図版１８、第５４・５７図）

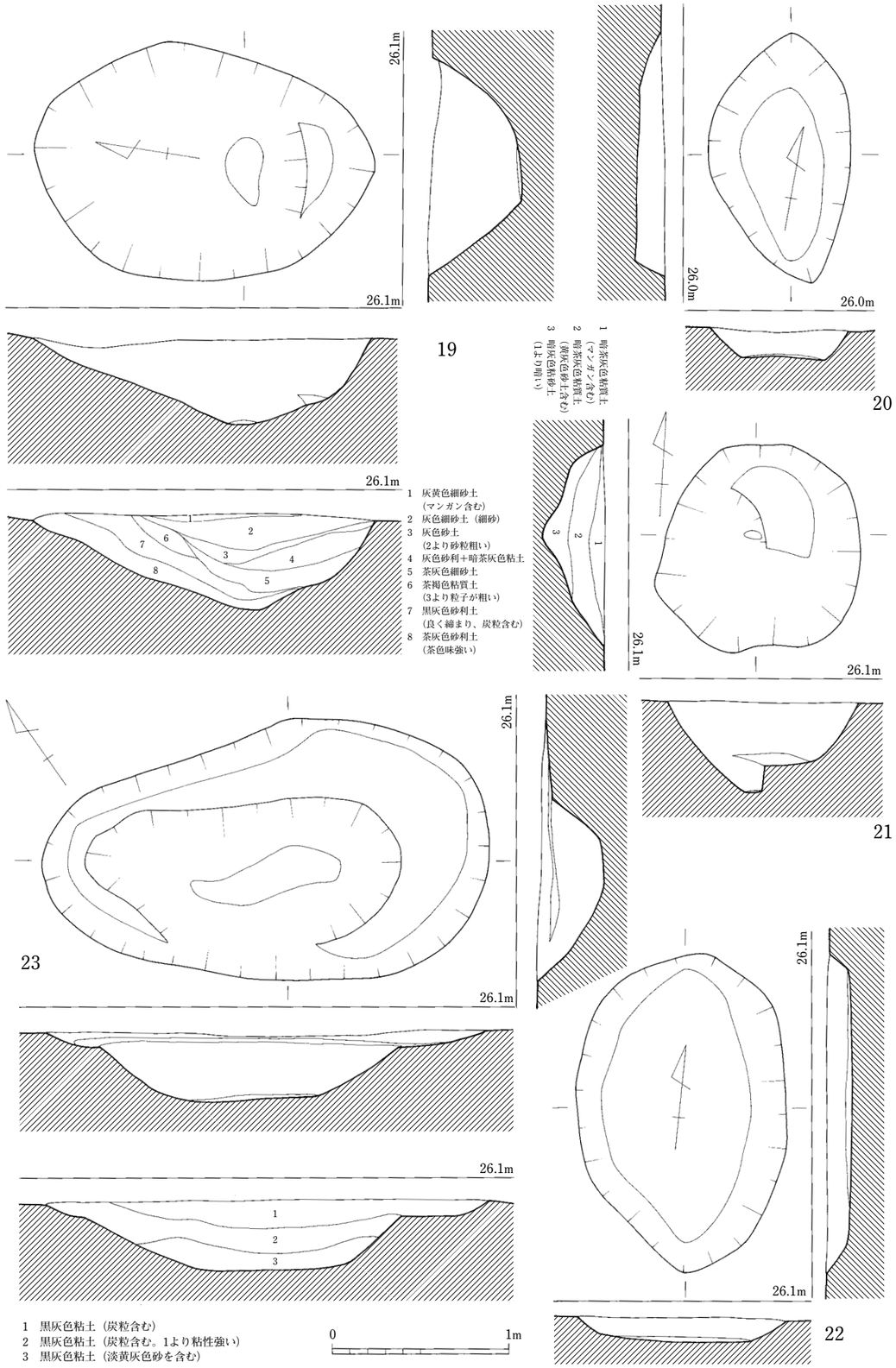
２２号土坑の北側で検出した東側に膨らみをもつ楕円形プランの土坑である。西側から北側～東側にかけて幅 0.1 ～ 0.4m のテラスを設けて、断面は逆台形を呈する。長軸 2.5m、短軸 1.5m、深さ 0.4m を測る。

出土土器

２～４は土師器である。２は二重口縁になる壺の口縁部片か。口縁端部は欠損するが、屈曲部に突帯がつく。３は甕で、復元口径 10㎝を測る。４も甕で、口縁下で凹んで外に開く。外面と内面口縁までは刷毛目、内面体部はケズリとナデである。口径 11.8㎝を測る。

２４号土坑（図版 １８、第 ５５・５７図）

１号竪穴状遺構から東に約１ｍのところで検出した土坑である。北西－南東方向に長い楕円形



第54図　19～23号土坑実測図（1/30）

プランで南東側が中央から膨らみ、２２号土坑に南東側の先が切られている。長軸 2.1m、短軸 1.5m、深さ 0.12m を測る。

出土土器

５は土師器の甕口縁部片か。６は土師器の鉢片である。堅固に焼かれており、内面にはミガキを施す。

２５号土坑（図版１９、第 ５５・５７図）

１９号住居跡のすぐ北側で検出した土坑で、西側が膨らむ楕円形プランである。南東側にテラスを設けており、浅くしか残存していない。長軸 1.6m、短軸 1.2m、深さ 0.14m を測る。埋土は黒灰色砂土である。

出土土器

７は土師器の壺や鉢などの口縁部片か。薄い作りで、内面には僅かにミガキがある。

２６号土坑（図版１９、第５５図）

１９号住居跡の北東コーナーの北 1m 先で検出した土坑で、東西に括れをもつ楕円形のプランである。長軸 1.6m、短軸 1m を測り、深さ 0.2m を測る。埋土は黒灰色砂土である。

２７号土坑（図版１９、第５５・５７図）

１号方形周溝状遺構に接触して検出した大型の土坑で、中央部分から東側にややカーブする楕円形プランである。長軸 3.3m、短軸 1.5m、深さ 0.25m を測り、床面から 0.2m の高さに西側から東側に斜傾して焼土が広がっていた。１号方形周溝状遺構とは上面で切り合っていたが、先後関係は不明である。

出土土器

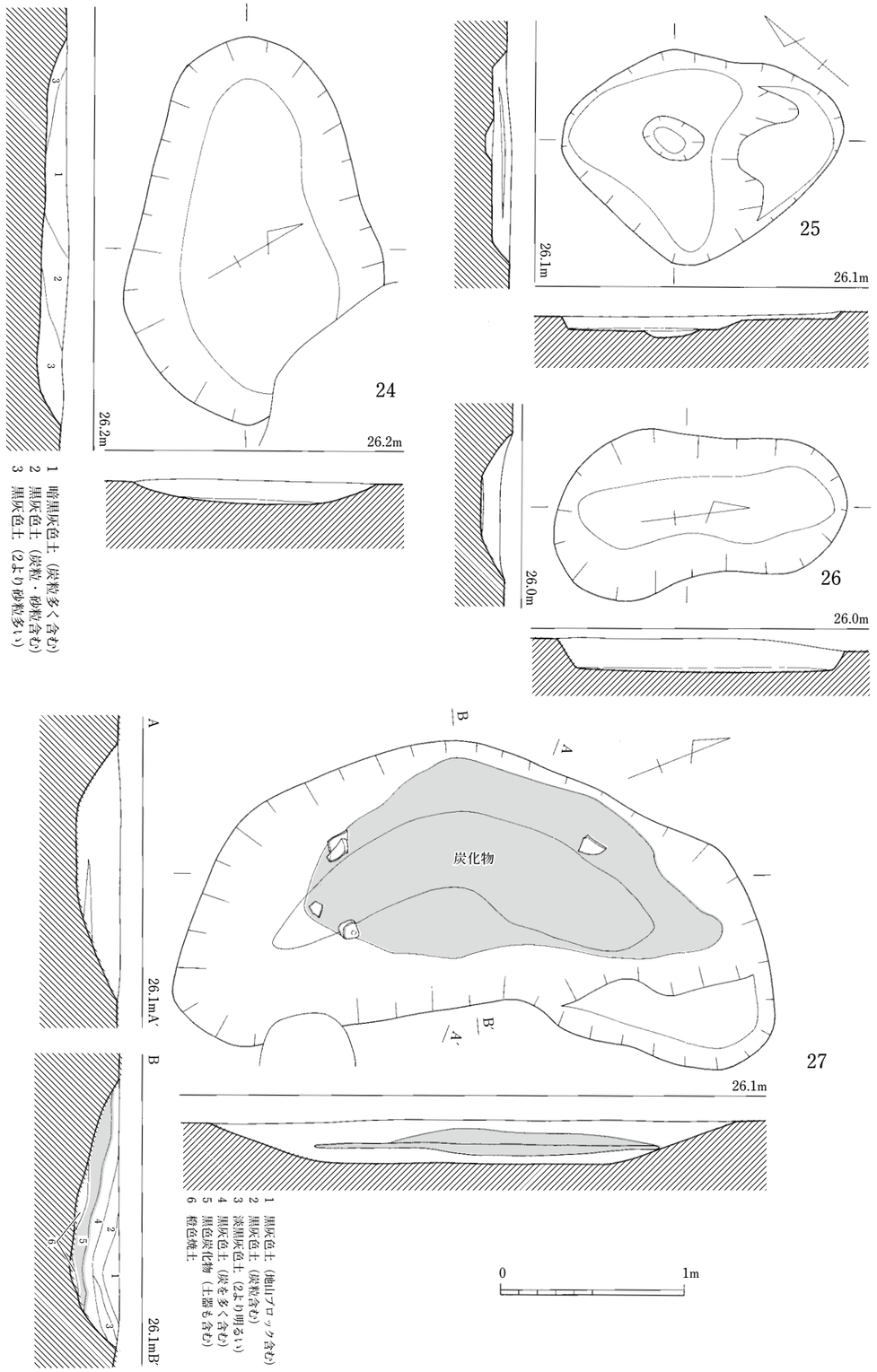
８～１１は土師器である。８は屈曲部が角張らないやや崩れた二重口縁壺である。頸部付近に僅かに刷毛目とケズリが残る。９は高杯の杯部で、復元口径 26㎝である。内面には工具によるナデを施す。１０は高杯の脚部で、杯部は屈曲部～口縁までを欠損する。脚部中央付近には穿孔がある。１１も高杯の脚部である。

２９号土坑（第５６・５７図）

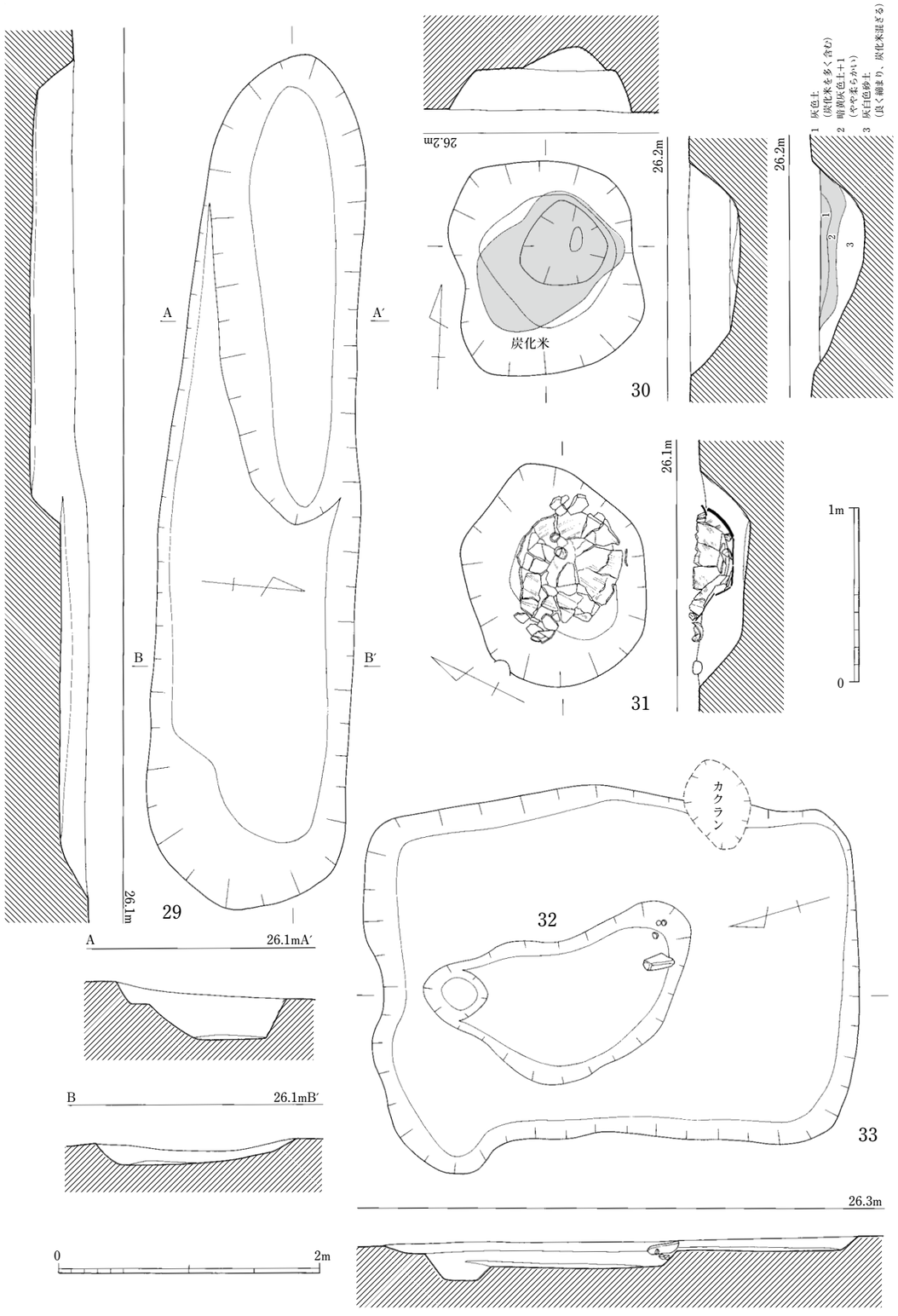
２８号住居跡の約 1.2m 先で検出した横長の楕円形土坑である。検出当初は小谷の上面ということもあり西側半分が不明瞭であった。1 号方形周溝状遺構が伸びていると考え、再検出したため、西側半分の上端は 0.1m 以下と低くなっている。内部は西側で長さ約 3.5m が長楕円形で低くなる。長軸 6.6m、短軸 1.5m、深さ 0.2 ～ 0.45m を測る。埋土は黒灰色土であった。

出土土器

１２～１６は土師器である。１２は甕で、外面には煤が付着する。復元口径 13.0㎝を測る。１３と１４は高杯の脚部である。１３はなだらかな脚部で、屈曲部～端部までは短く、ゆるやかに開く。１４は角張った作りで、脚部はほぼ真っ直ぐに立ち、屈曲部で直角に開く。１５は鉢の完存品である。口径 11.4㎝を測る。１６は８割残存する手づくねのミニチュア土器である。口径は波打ち、内



第55図　２４～２７号土坑実測図（1/ ３０）



第56図　29～33号土坑実測図（29・32・33は1/ 40、他は1/ 30）

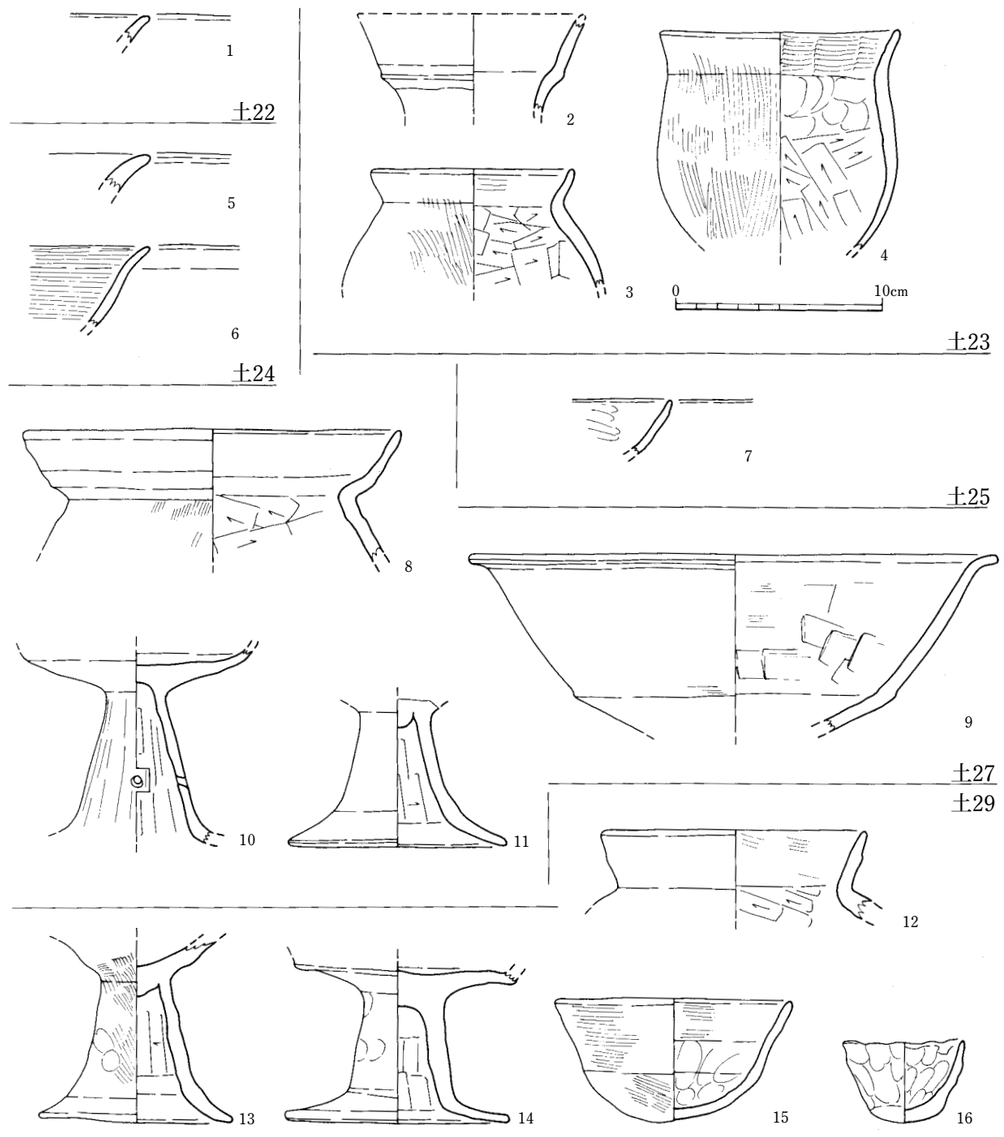
外面には粗い指の痕跡が明瞭に見られる。

３０号土坑（図版２０、第５６図）

３２号土坑のすぐ南側で検出した東西がやや窪む円形プランの土坑である。内部は一段深くなっていて、底面までの埋土に炭化米が混入している。埋土中の炭化米はサンプル程度しか回収できていない。長軸 1.23m、短軸 1.05m、深さ 0.35m を測る。

３１号土坑（図版２０・３３、第５６・５９図）

３０号住居跡から南東約 5m の礫原で検出した土坑である。土坑としているが、内部から大型の



第57図　22～25・27・29号土坑出土土器実測図（1/ 3）

甕が出土していることから、やや歪な円形の掘方をもつ小児棺墓である。棺の上半分は後世の開墾で消滅してしまっている。単独で存在しており、この近隣では同時期と思われる遺構も検出していない。内部の甕は、真西に口縁側を倒置した大甕で、口縁部を鉢で被せており、底面は掘方からは７㎝程度浮いている。下棺の北東隅にミニチュア土器が２点出土しており、副葬品と思われる。埋土は暗茶褐色粘土で長軸 1.3m、短軸 1.1m、深さ 0.25m を測る。

出土土器

１は５割ほど残存する大型の甕である。徳利のような形状で、外面には頸部と体部下半の２ヶ所に四角形の突帯がつく。突帯の表面は刻目が施されているが、口縁下の方が密である。内外面には細かい刷毛目を施す。口径 34.6㎝、器高 69.7㎝を測る。２は丁寧な作りの小型の壺である。外面には刷毛目､内面にはナデを施す。３は８割残存する鉢で､底部は平底である。復元口径 10.2㎝を測る。

３２号土坑（図版２１、第５６・５９図）

３３号土坑の中央を切り、北西－南東を向く楕円形プランの土坑で、南側が窄まる。長軸 2.1m、短軸 1.1m、深さ 0.13m で、北側では４８号住居跡の柱穴を切っている。南側の隅で、約 0.1m 浮いてミニチュア土器と支脚の残骸が出土している。埋土は黒灰色土である。

出土土器

４は８割以上残存する土師器鉢である。頸部の段はゆるやかで、口径 12.2㎝を測る。５は土師器甑の底部である。現状では円形で３ヶ所の穿孔を確認できる。６～８は手づくねのミニチュア土器である。内外面は指の圧痕が明瞭で、復元口径は 4.6㎝、4、4.2㎝を測る。

３３号土坑（図版２１、第５６・５９図）

４８号住居跡の南側を切って検出した、やや北西側が突出する長方形プランの土坑である。住居跡とも考えたが、柱穴やそれに伴うものは検出されず土坑とした。中央の３２号土坑と一緒に掘削してしまったが、土層で３２号土坑に切られることを確認している。埋土は黄灰色砂土で、長軸 3.3m、短軸 2.6m、深さ 0.1m 以下 である。

出土土器

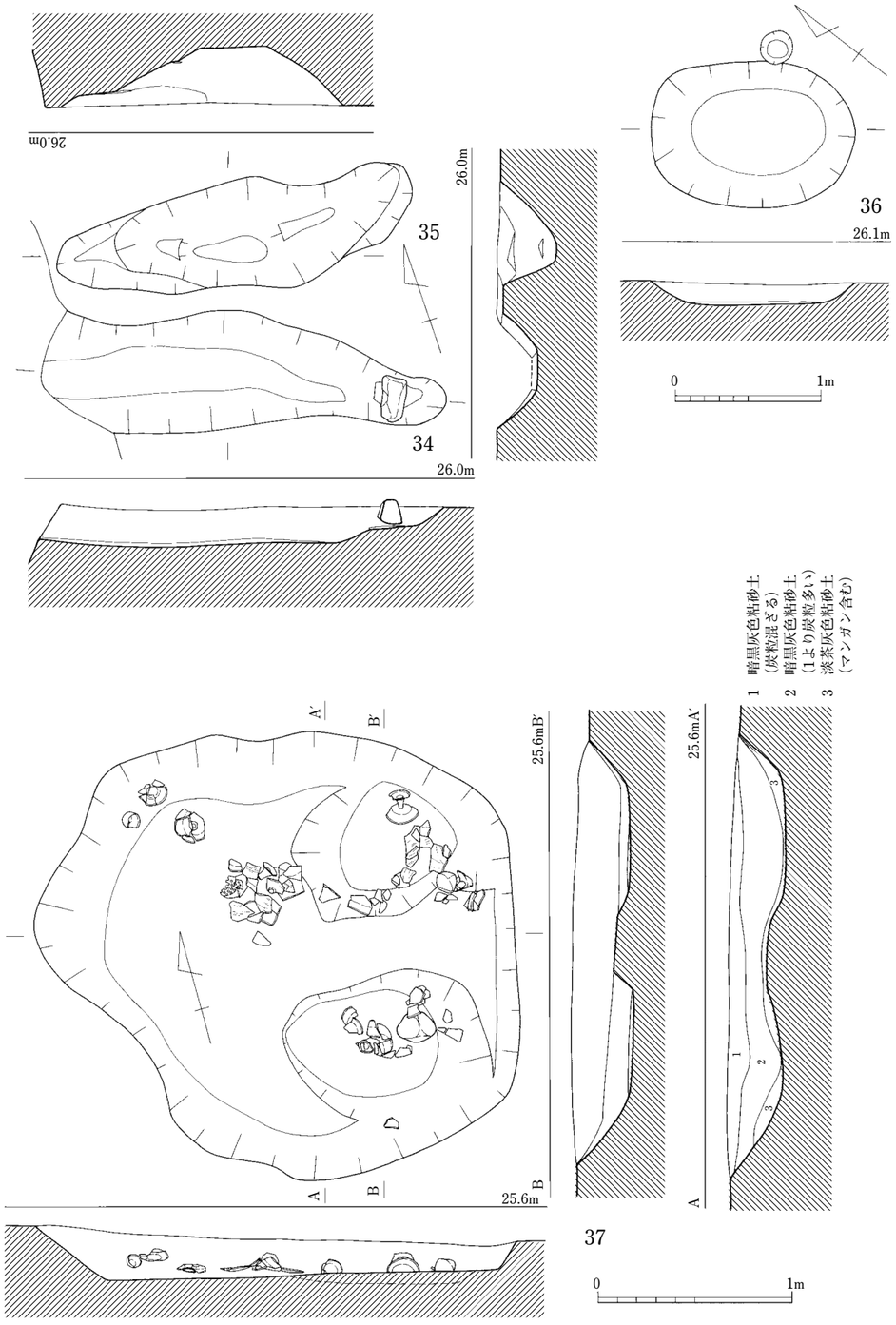
９は高杯の杯部片である。内外面には刷毛目の後にナデを施す。１０は手づくねミニチュア土器の体部下半片である。

３４号土坑（図版２１、第５８・５９図）

３０号住居跡に近く、1.2m ほど南で３５号土坑とともに検出した細長い土坑である。西側は検出できずに掘り飛ばしているが、１３号溝を切っている。３５号土坑と同様な形状をしており、東側先端が窄まり、小テラスがある。その上に河原石を打ち欠いたものを横にはめ込んでいる。図示したもの以外の遺物は出土しておらず、土坑墓の可能性は低いか。土坑は長軸 2m、短軸 0.6m、深さ 0.16m を測る。

出土土器

１１は須恵器の杯部片か。底部は厚手であるが、口縁に向かって薄手になる。外面は丁寧な横ナデ、内面は不定方向のナデである。色調は濃い青灰色を呈する。１２は高杯の杯部である。内面は剥



第58図　34～37号土坑実測図（36は1/ 40、他は1/ 30）

離している。

３５号土坑（図版２１、第５８・５９図）

３４号土坑の北で並列して検出した土坑である。ほぼ東西を向き、両側の先端が窄まり、中央が深くなる。西側は一段高くテラスを設けており、３４号土坑とはやや雰囲気が異なる。長軸 1.9m、短軸 0.6m、深いところで約 0.3m を測る。

出土土器

１３は弥生土器の壺の底部片か。外面は指の圧痕、内面には工具痕が残る。

３６号土坑（第５８・５９図）

３３号住居跡を切って検出した丸みを帯びた楕円形プランの土坑である。長軸 1.4m、短軸 1m で、深さ 0.14m と浅い。確たる遺物は出土していないが、埋土は暗灰色砂土であるため、古墳時代中期の遺構であろう。

出土土器

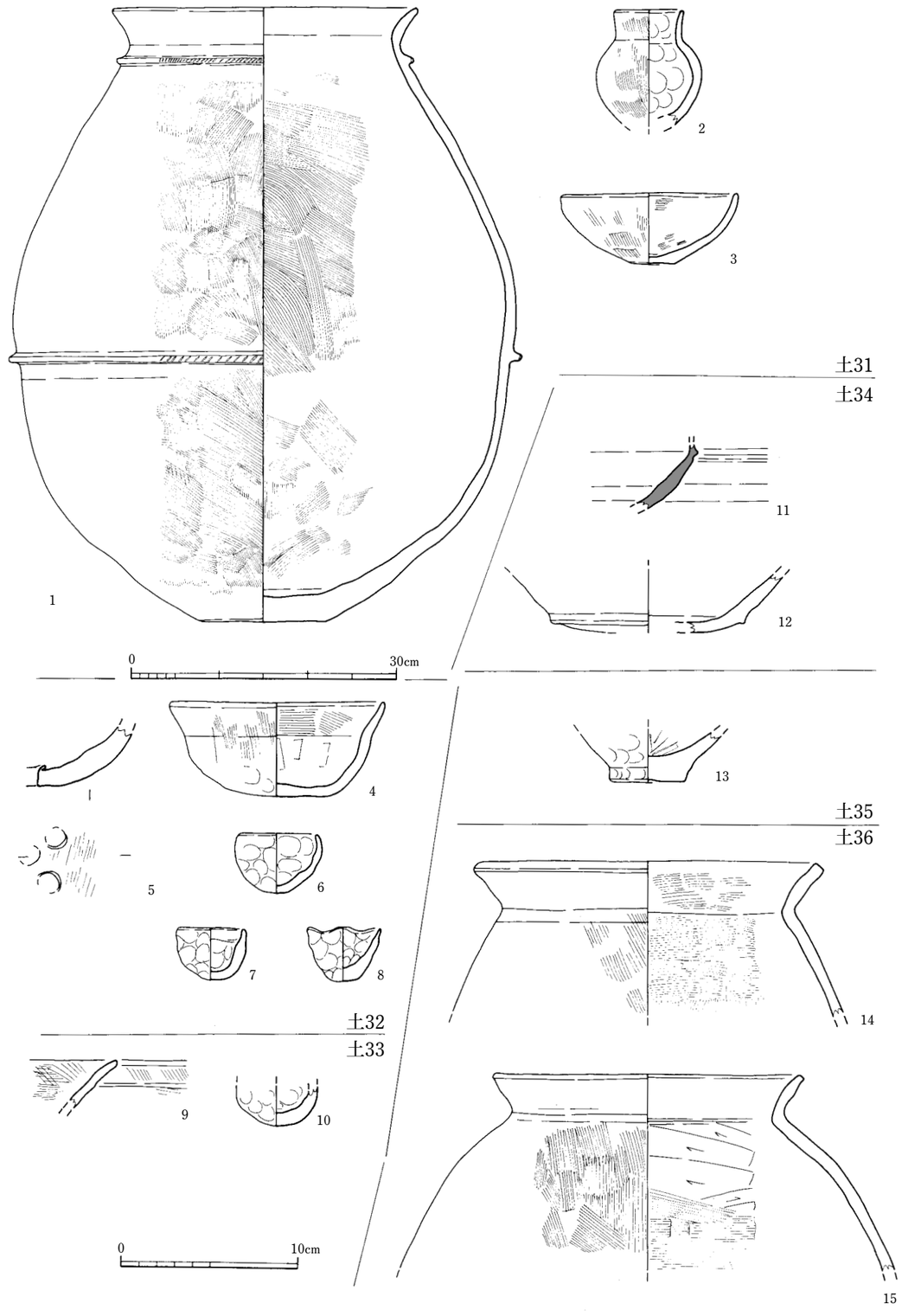
１４は混入品と思われる弥生土器の甕である。内外面は刷毛目である。１５は土師器の甕である。形状から肩部は張らず、体部中央付近で最大径をとるタイプか。復元口径で 20、17.6㎝を測る。

３７号土坑（図版２１、第５８・６０図）

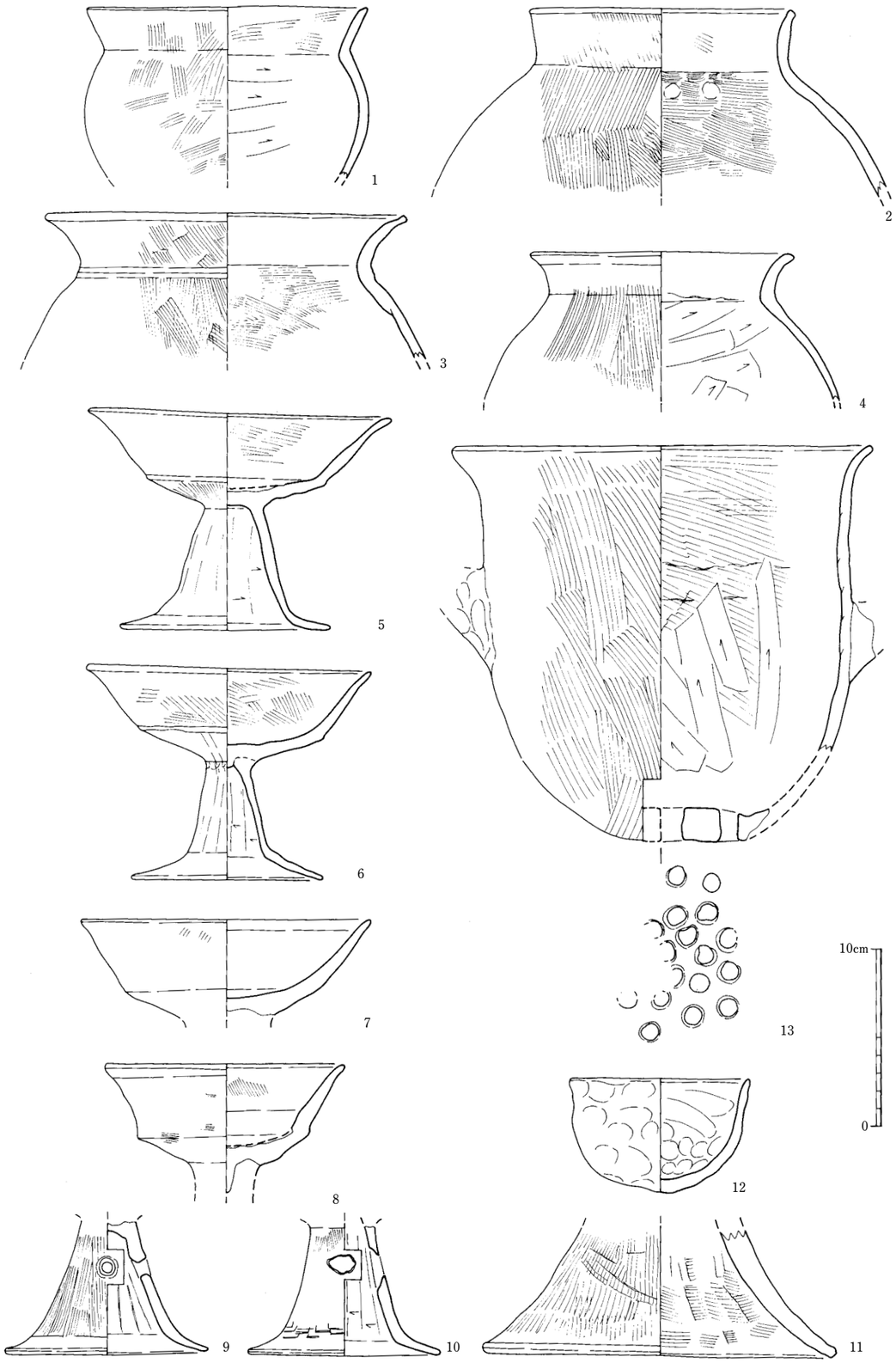
４２号住居跡の南で検出した不整円形の土坑で、長軸 2.5m、短軸 2.3m と大型の土坑である。内部は東側で浅く二つ窪む。深さは 0.28m である。４２号住居跡と同様で大谷の９層を剥いで検出しており、埋土は暗黒灰色粘砂土である。出土遺物は豊富であるが、欠損品を廃棄してあった。

出土土器

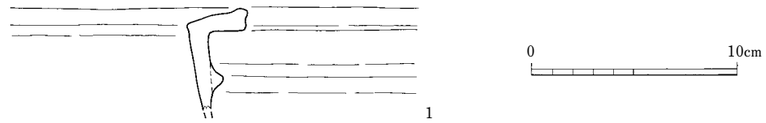
１～１３は土師器である。１は壺片である。外面～内面口縁までは刷毛目で、内面体部はケズリである。２～４は体部を欠損する甕である。２の口縁はほぼ直に立つ甕である。３は口縁端部が細く延びる甕である。胎土や焼成は同じような状況で、同時期のものか。いずれも内外面は刷毛目である。４は焼成良好で橙色を呈す甕片である。外面は刷毛目、内面はナデである。５は７割残存する高杯である。６は脚部の一部を欠損する高杯で、脚部の屈曲部位置が５よりも高い。口径 16.8㎝を測る。７と８は高杯の杯部のみである。７は器面が摩滅していて調整不明である。８は復元口径 13.6㎝と小さいが、杯部は深くなる。ちょうど接合面で脚部が剥がれている。９と１０は高杯の脚部で、同様な形状である。９は焼成前の円形の穿孔であるが、１０は焼成後に打ち欠き、不整形な穿孔である。１１は厚い作りから器台又は支脚片か。脚端部に向かって細くなる。内外面とも刷毛目である。１２は手づくねの鉢である。内外面にナデが明瞭に残る。復元口径 10.2㎝を測る。１３は両把手と底部の一部を欠損する甑である。底部は平底で、口縁端部で内湾して外へ曲がる。内外面とも幅の広い刷毛目であるが、全体の作りとしては少々雑な感がする。底部は厚く、約 1㎝の円形～不整形の穿孔を１７ヶ所以上空けている。口径 24㎝、器高 22.6㎝を測る。



第59図　31～36号土坑出土土器実測図（1は1/ 6、他は1/ 3）



第60図　37号土坑出土土器実測図（1/3）



第61図　12号溝状遺構出土土器実測図（1/3）

6　溝状遺構

溝状遺構は調査区内で多数検出し、時期も様々である。一部の溝は地山が砂地であるため、凹地に溜まった自然流路である可能性もあるが溝に含めている。1区12・13・32・34号溝は2区と関係があると思われるため、今年度で報告する。

12号溝状遺構（第61図）

1区13号溝が南側と調査区境で検出した溝で、11・20号溝に切られている。20号溝によって分裂するが1号建物跡まで延びている。約9m分を検出しており、幅は約0.4～0.5m、深さ0.2m以下 で13号溝と接続する南に向かって深くなる。

出土土器

1は弥生土器の甕口縁部片である。口縁下に三角形の突帯が付く。調整は内外面ナデである。

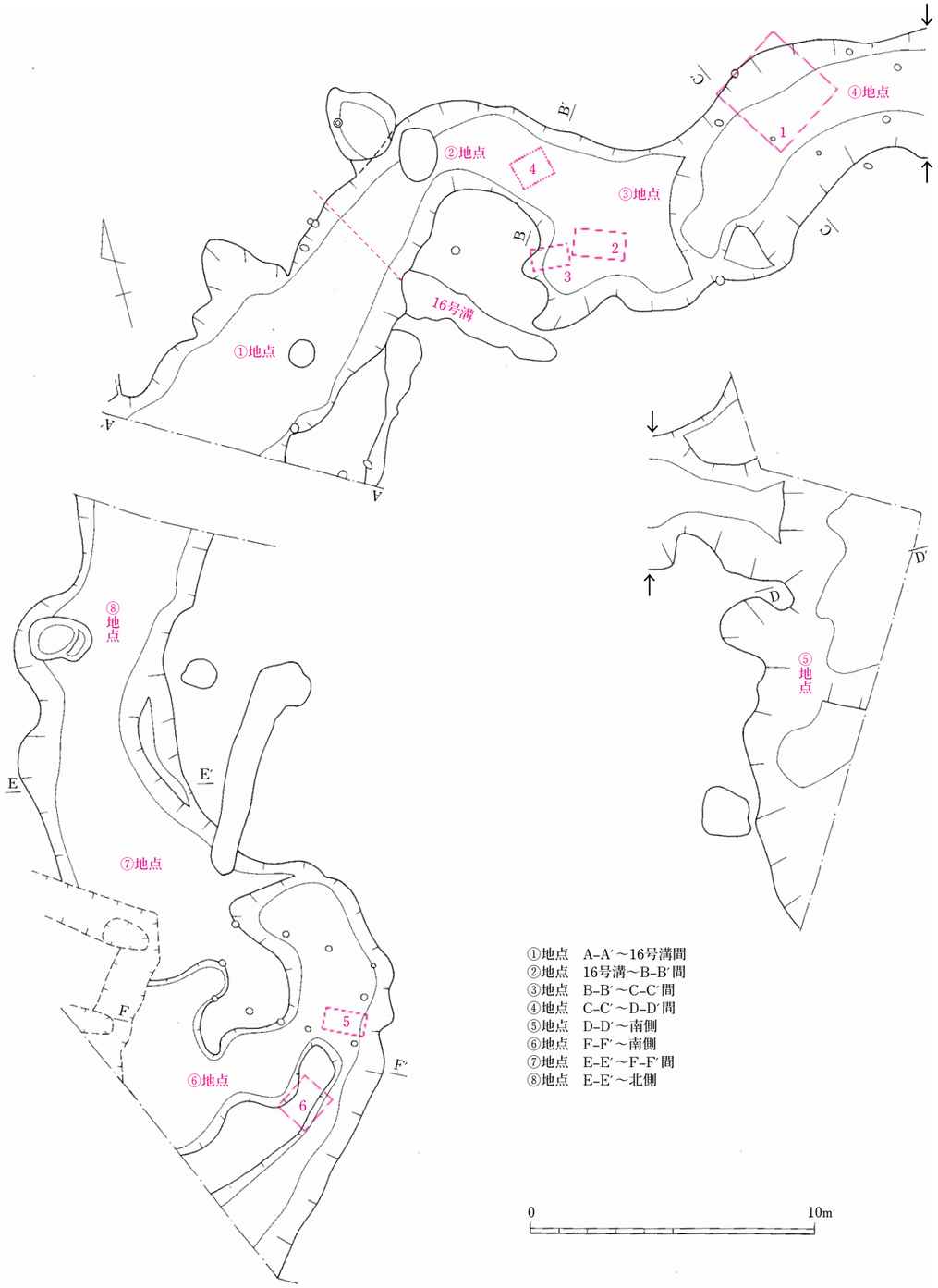
1区13号溝状遺構（図版22～24・34～37、第62～77図）

1区の南東側で検出した東から南へ半弧を描く大溝である。検出当初から土師器や須恵器が出土しており、古墳時代中期の遺構であることが判明していた。調査が進むにつれて南側の調査区まで延びていることが判り、総延長約65mを測る。幅は約3～9mと幅広な部分もあり、一部では深い礫原を壁面にする部分もある。深さは0.4～0.8mで、南側から北側へほぼ一定の深さで延びて、屈折する辺りから東に段々深くなる。1区の調査時には東側の調査区際の浅い窪みも13号溝のものとしていたが、2区の調査では小谷の一部であると判明した。層位は大きく別けて二つで、A～Dベルトの上層は9・10層、下層は11～14層で、E・Fベルトでは上層3～6層、下層7～9層である。調査では時間の都合上、上層と下層を同時に掘削することにしたため、まとまりのある遺物群の出土状況を記録している。上層の遺物は下層に比べて少ないが、土層ベルトC－C′の東で大石の周りにミニチュア土器が多く出土し、水辺の祭祀の可能性がある（第64図）。誤ってあげてしまったものを含めて30点近く出土している。下層は初期須恵器が出土し、同一の甕を破砕して撒いているものや、居屋敷窯製の須恵器と思われる遺物が出土している。土層ベルトB－B′の南東では居屋敷窯製と同一製品と思われる瓶も出土している（第65・67図）。

なお、出土土器は調査時に取り上げた各地点ごとで報告している。各地点の位置については、第62図を参照して頂きたい。

出土土器

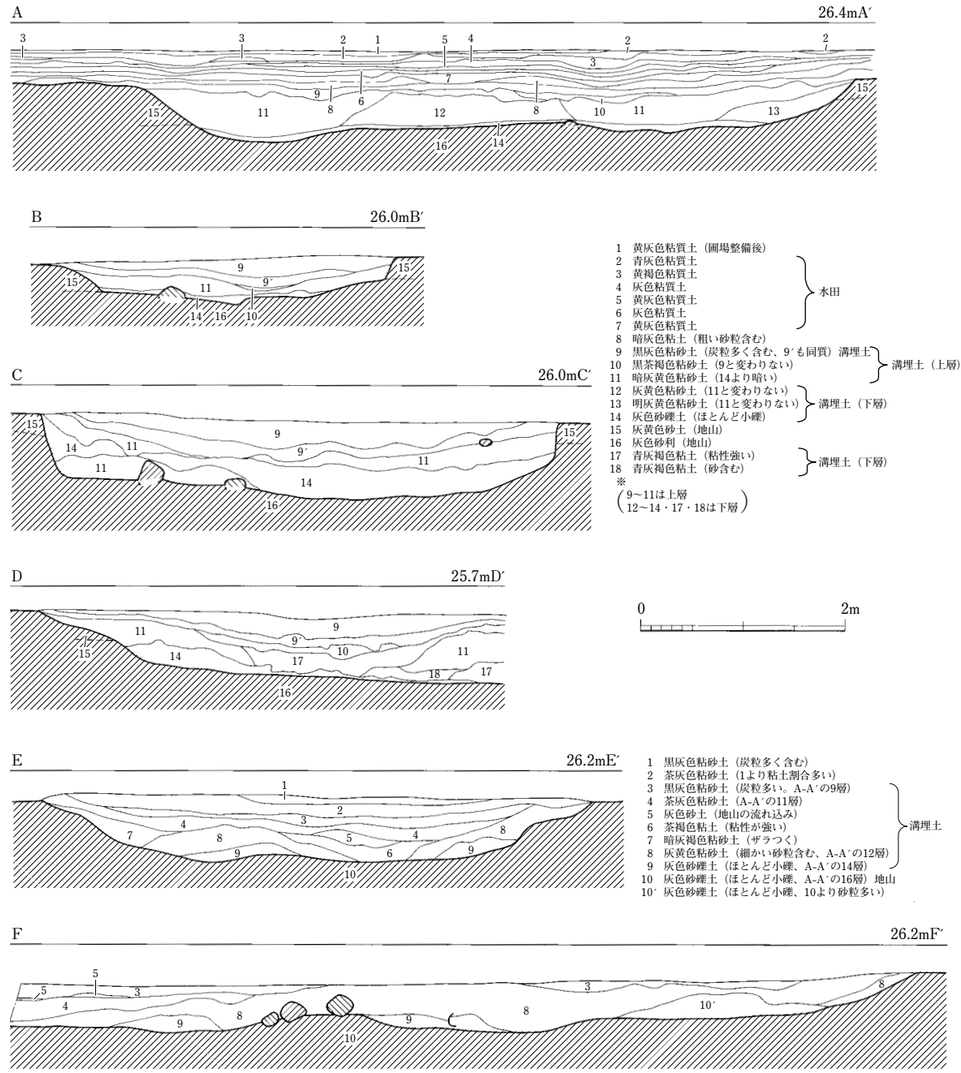
1～13は①地点出土土器である。1と2は須恵器の壺などの口縁部片か。1は口縁下に2条の沈線を巡らし、その沈線下には波状文を施す。2は口縁部片で、外面口縁下に三角形状の突帯がつ



第62図　1区13号溝状遺構実測図（1/200）

く。内面には緑色の自然釉が付着する。３は器形から手づくね状に作られた須恵器の小型丸底壺である。焼成は甘く軟質で、色調は灰白色である。内外面ともナデ調整である。土師器の小型丸底壺よりも雑な作りの感がする。４と５は小型丸底壺である。５は底部を欠く。６は口縁～頸部が大きく内湾して外へ開く壺片である。７は甕片である。８はやや小型の甕である。９は頸部が窄まるので、壺の体部片か。１０は脚付甕の脚部片か。体部は薄手で、脚部は厚手で高く作られる。周辺ではあまり見かけない器形から外来系のものか。１１は高杯の脚部である。１２は高杯の杯部である。１３は多孔式甑の底部である。外面には刷毛目、内面はケズリやナデである。残存状況から穿孔は５ヶ所以上になるか。

以下の②～④地点出土土器は土層ベルトＢ－Ｂ′の周辺で出土し、全て１１・１４層出土である。初期須恵器の瓶が出土し、さらにその周辺の土師器と共伴している。

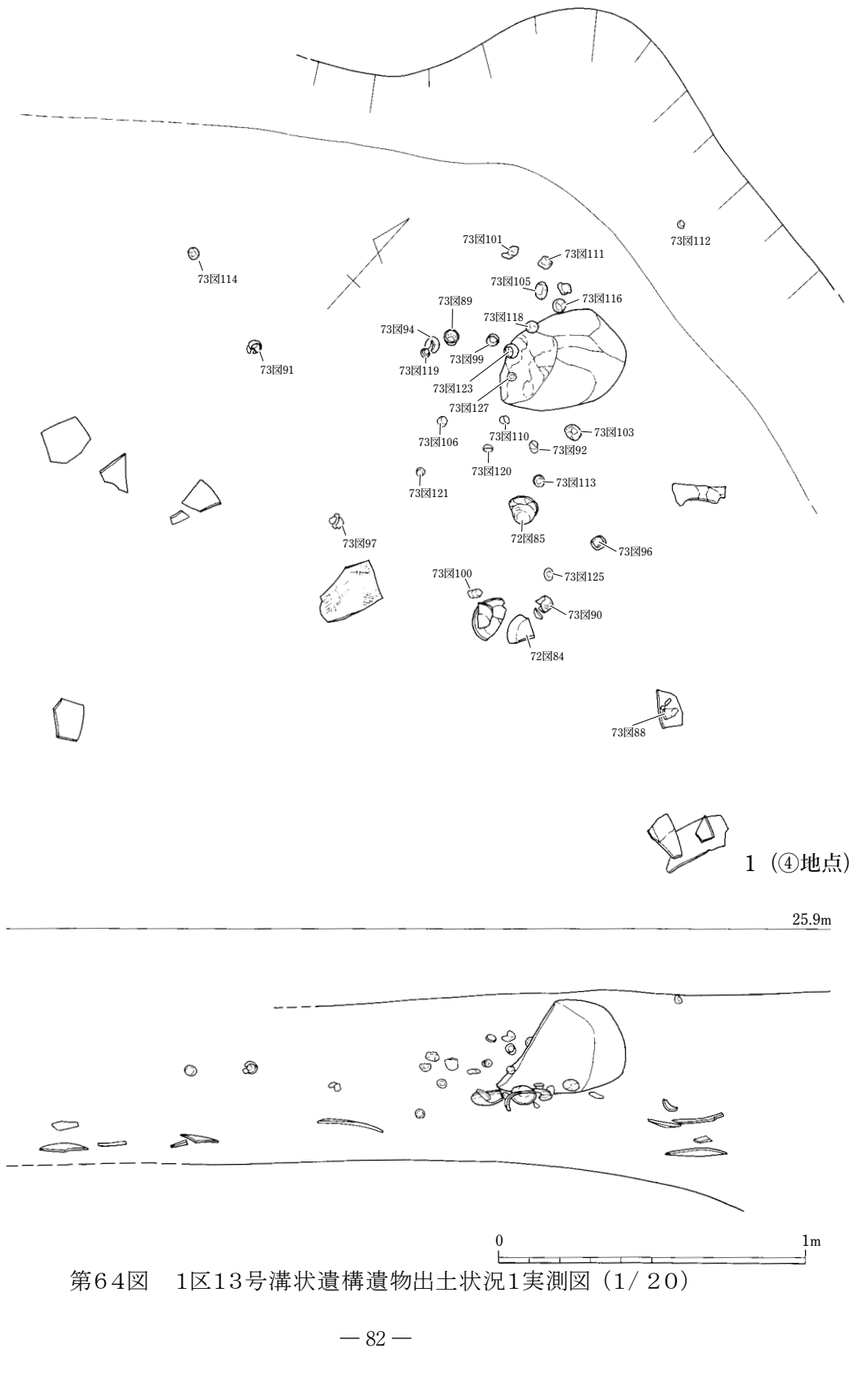


第63図　1区13号溝状遺構土層断面図（1/60）

出土土器

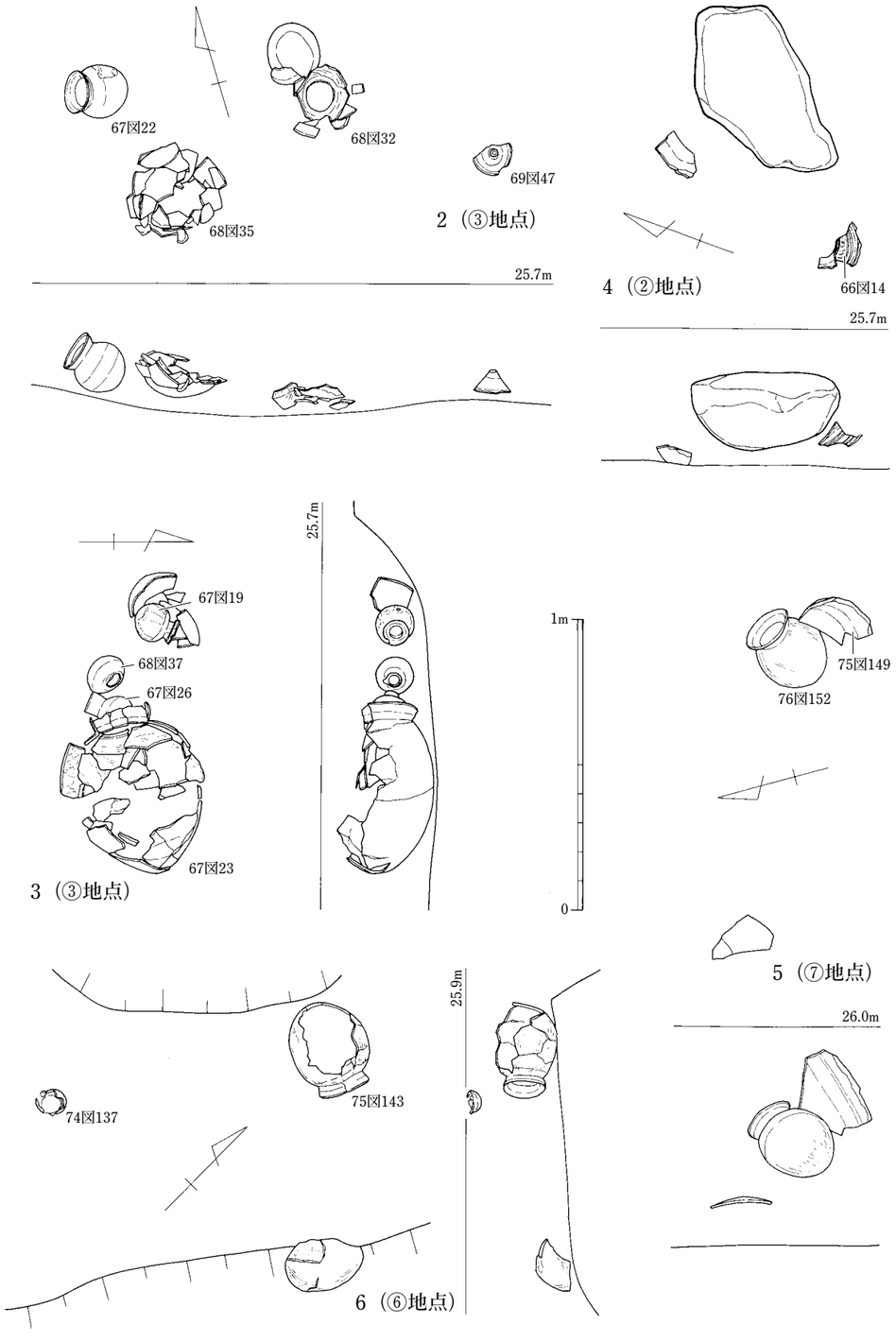
１４～１７は②地点出土土器である。１４は薄手な作りの須恵器壺片で、内外面ともに回転横ナデである。焼成は良好で、青灰～黒灰色を呈す。外面には２条の突帯が、口縁下と頸部よりやや上にあり、その間に波状文を巡らす。１５は口縁を一部欠く、ほぼ完形の壺である。薄手で内外面には刷毛目とナデを施す。１６と１７は甕片で、共に外面は刷毛目、内面はケズリを施す。

１８～６５は③地点出土土器である。１８は須恵器杯蓋の摘みである。大谷では６～７世紀の須

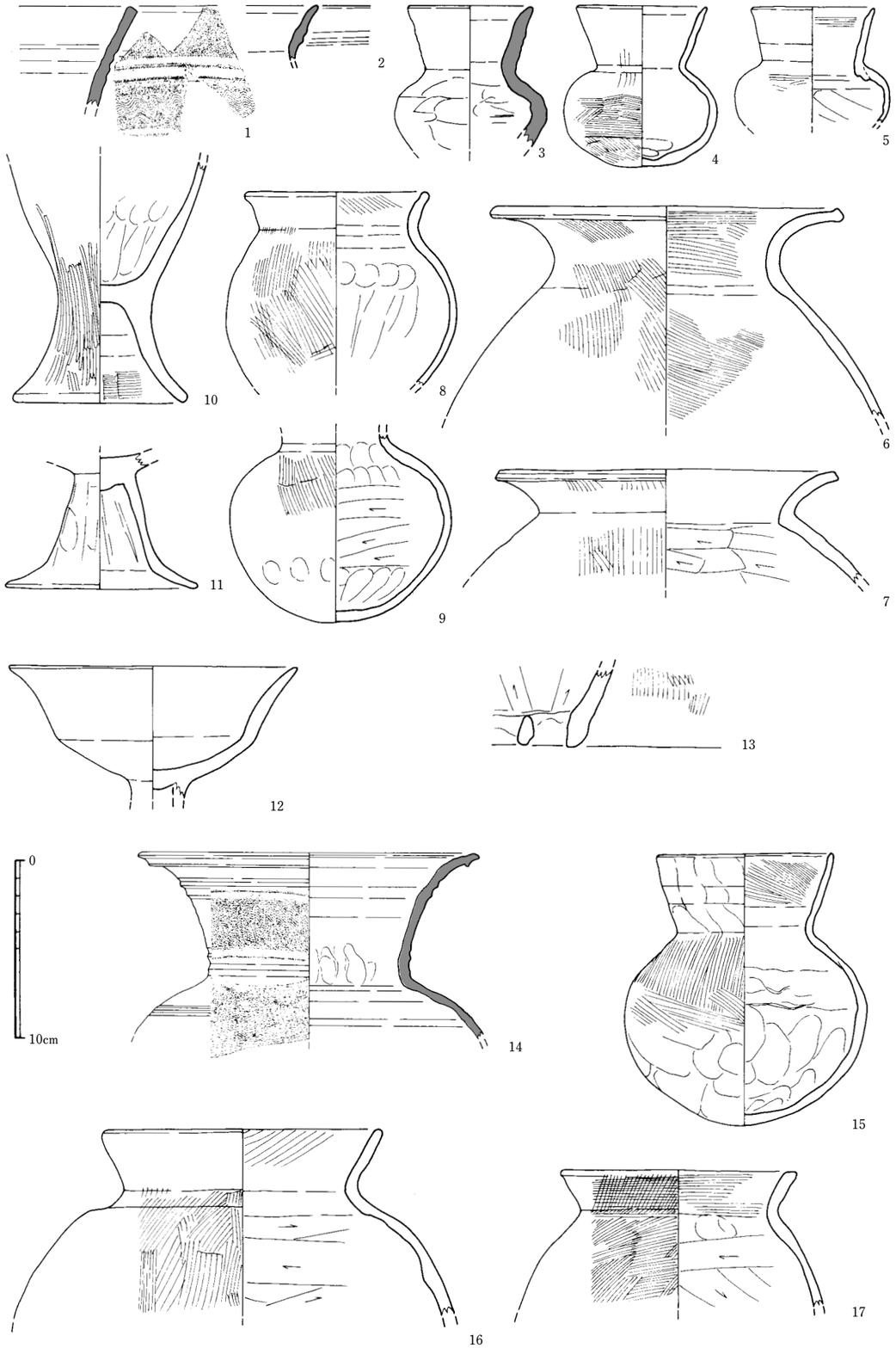


第６４図　1区13号溝状遺構遺物出土状況1実測図（1/２０）

恵器が出土することから、この時期の蓋の可能性もある。１９は瓶である。居屋敷窯製の瓶と瓜二つの製品である。口縁～頸部にかけては二重口縁壺状になり、口縁端部に向かって大きく口を広げる。体部はやや潰れた球形状で、体部上半に穿孔を施す。外面の穿孔部分は面取りされてはいな



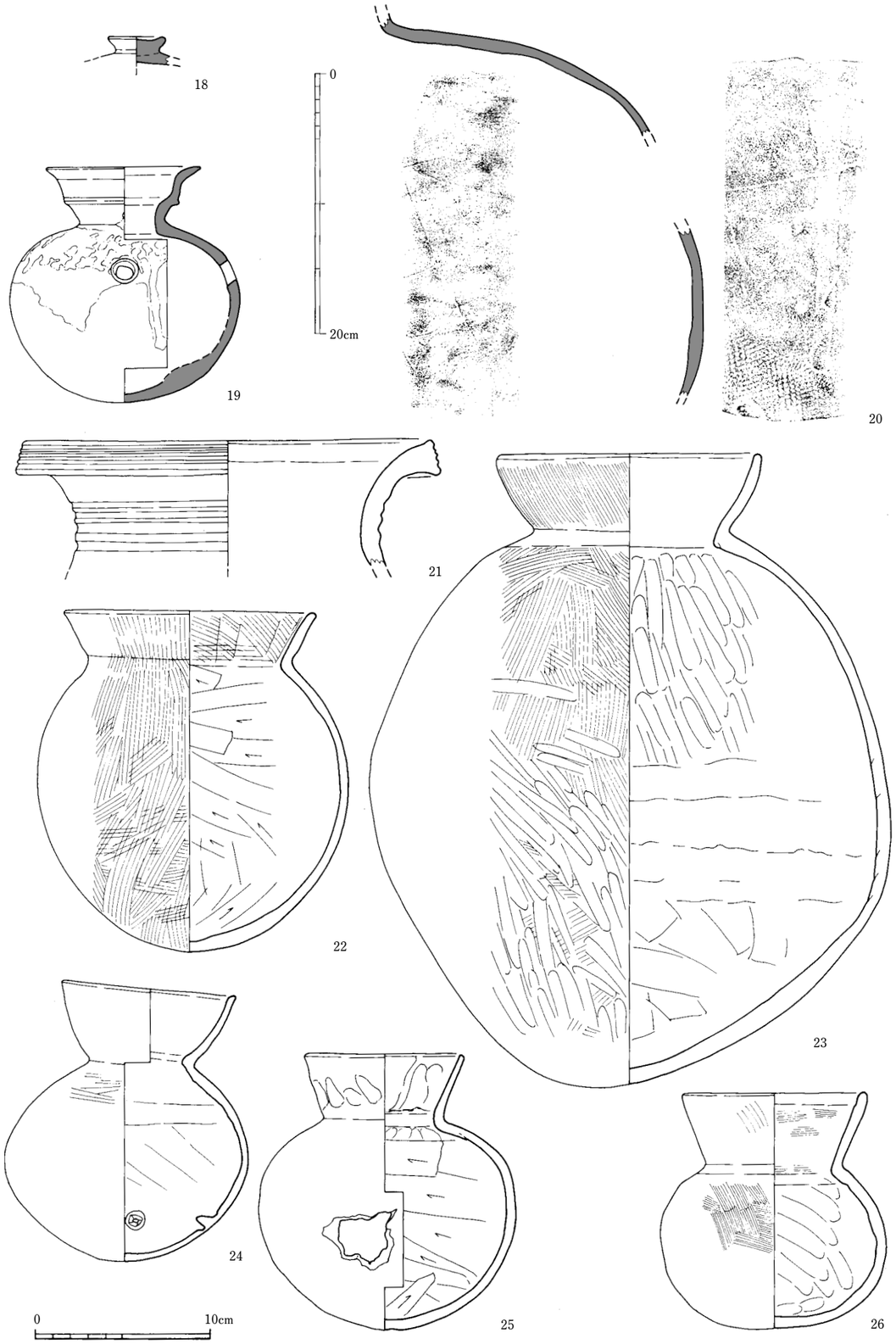
第６５図　1区13号溝状遺構遺物出土状況2実測図（1/２０）



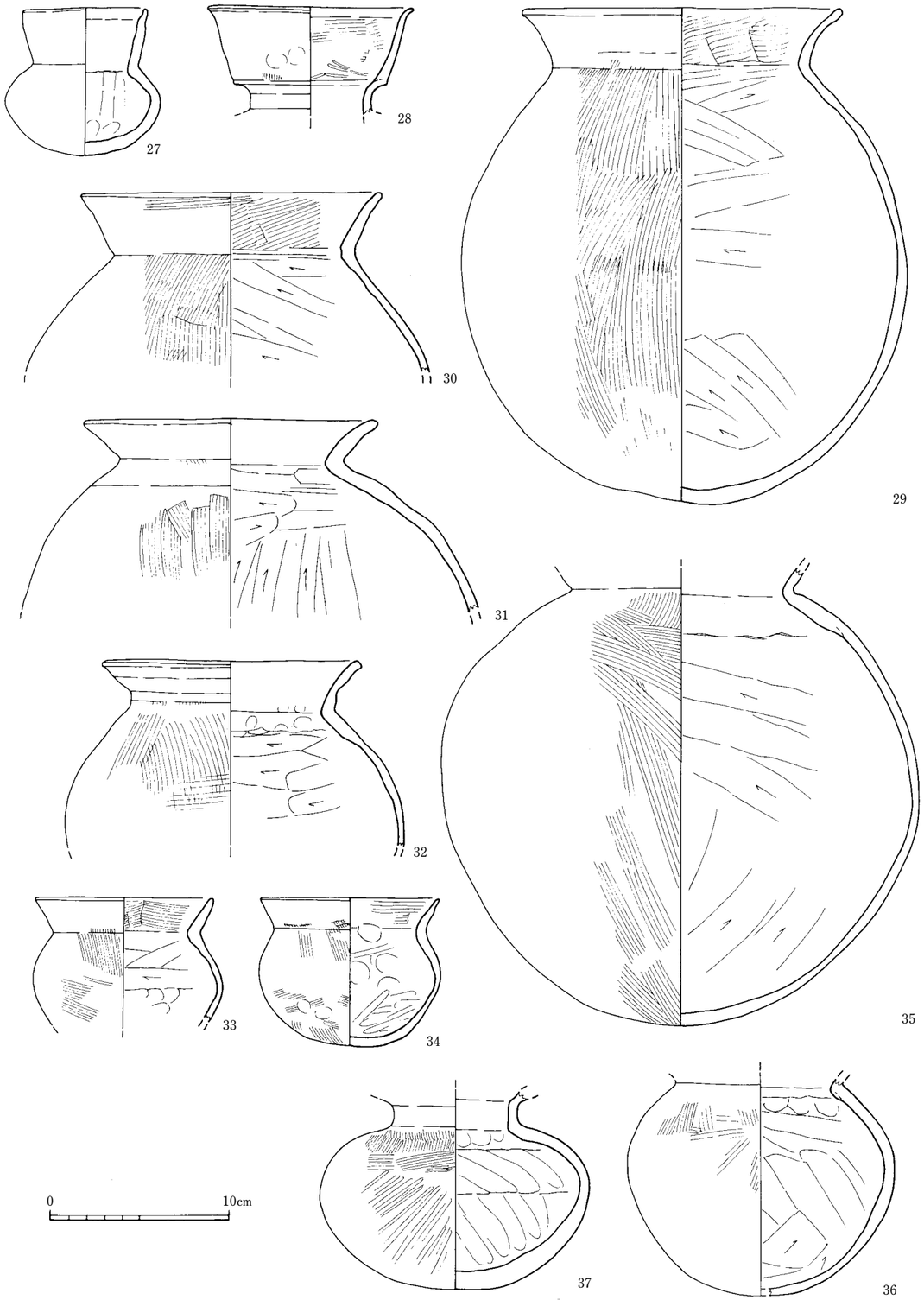
第66図　13号溝状遺構①・②地点出土土器実測図（1/ 3）

い。外面口縁～体部には緑色の自然釉が垂れているが、一部溶解しきれていない黄白色に硬化している部分もある。口縁端部が一部欠けるが、完形品である。口径 9cm、器高 13.7cmを測る。２０は須恵器甕又は壺の体部片である。焼成は良好で灰色を呈す。接合はできなかったが、図面上で復元している。外面は格子目タタキとナデ、内面はナデである。これも外面には緑色の自然釉と一部溶解しきれずに硬化した黄白色の自然釉が付着する。２１は瀬戸内系の壺の口縁部片か。口縁は厚手で、外面の口縁～頸部にかけて数条の沈線が巡る。２２は口縁が他より短い壺である。一部、体部中央を欠くが、８割以上は残存する。２３は大型の壺である。口縁～頸部はやや外湾して外へ開く。体部はやや崩れた卵型で、体部の最大径が中央より下半に位置する。外面は刷毛目と工具によるナデ、内面も工具によるナデ、体部下半には僅かに刷毛目が残る。２４～２６は壺である。いずれも８割以上は残存する。２４は内面体部下半に穿孔を塞いだような突起状の痕跡がある。２５の体部中央には 3cmの穿孔がある。２６は厚手の作りで、底部は平底状になる。２７は８割以上残存する小型の壺である。２８は薄手で丁寧な作りの二重口縁壺の口縁部片である。２９は外面に刷毛目が明瞭に残る壺である。内面はケズリ後にナデを施す。８割以上残存する。外面の体部下半には煤が付着する。３０～３２は甕片である。３２の口縁部は強い横ナデにより凹みができ、端部は尖る。３０～３２はいずれも外面は刷毛目、内面はケズリである。３３と３４は同じ形状の小型の甕である。３５は口縁部を欠く壺又は甕の体部片である。３６と３７は小型の壺又は甕の体部片である。３７の体部は横に広がり、頸部も窄まるので、壺の可能性が高い。外面にはミガキ状の痕跡がある。３８は脚部に約 1cmの穿孔が３ヶ所ある。３９は全体的に丸みをもつ高杯の杯部である。外面に僅かに段をもつ。４０～４７は高杯の脚部である。形状から３種類ある。４０は長脚で、端部の形状は不明である。４１～４５は脚端部の接地面より上 1cm 程で屈曲する。４６と４７は脚端部で屈曲する。４８と４９は椀に近い鉢である。５０は鉢である。頸部から口縁に向かって、外に開く。５１は多孔式甑の底部片である。平底で、7ヶ所の穿孔がある。５２も甑底部である。底部中央には約 1cmの穿孔がある。５３は厚手な作りの支脚片である。ほとんど残存しておらず形状は不明だが、天井部の中央には穿孔を空ける。外面には工具痕が明瞭に残る。５４～６５は手づくねのミニチュア土器である。いずれもナデの痕跡が明瞭に残る。５４はミニチュア土器としたが、他より大きくやや歪な小型の壺や甕などかもしれない。外面に黒斑がある。６５は支脚状である。

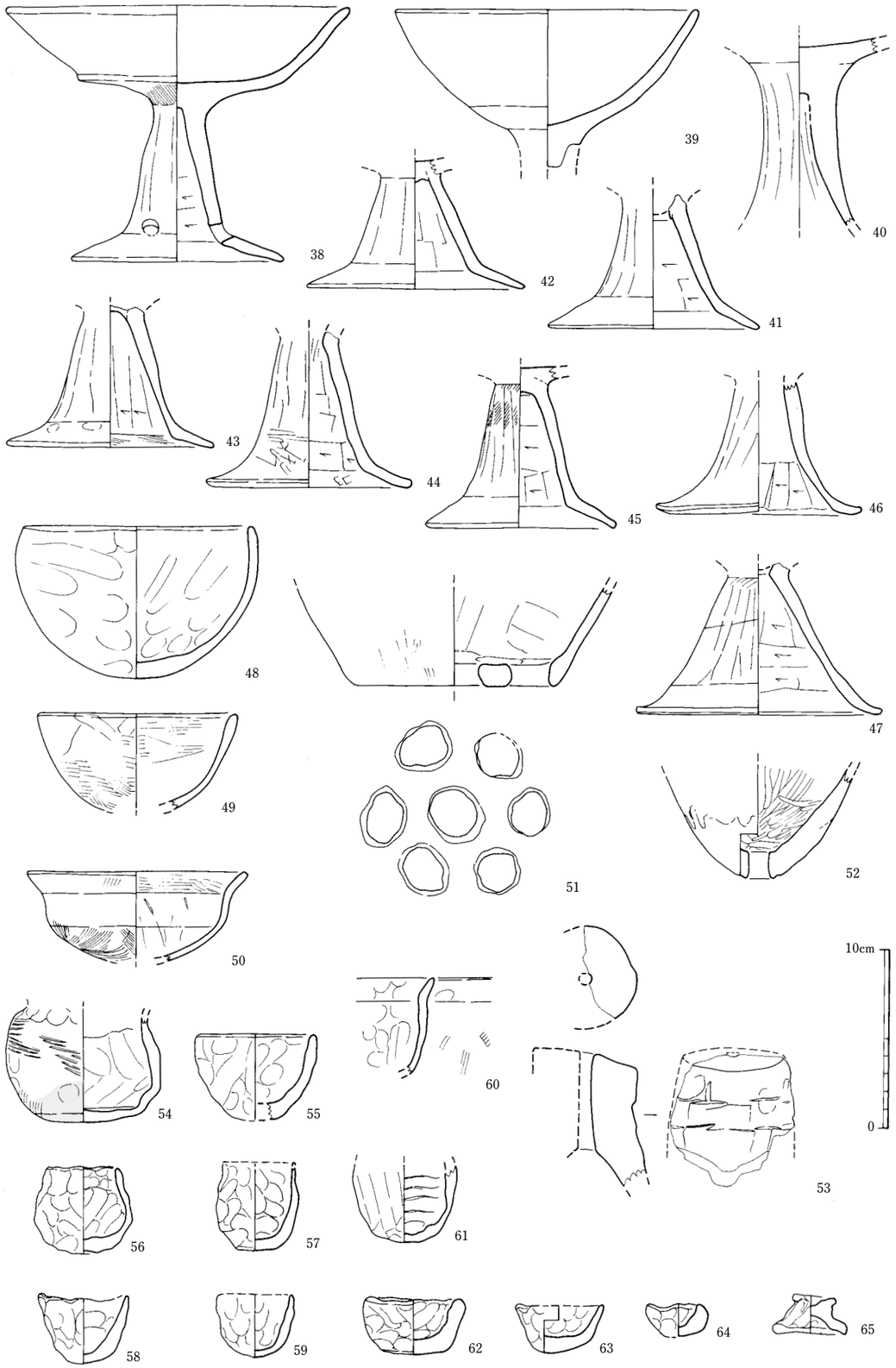
６６～１２８は④地点出土土器である。６６～６８は須恵器壺又は甕の体部片である。焼成は良好で、色調は灰色を呈す。おそらく同一品の可能性があるが、それぞれ掲載している。６６の外面下半には焼成前に紐を結んでいた痕跡が残る。内面はナデ、外面は格子目タタキとナデである。特に体部下半に格子目タタキの痕跡が多く残る。６９と７０は壺である。６９はほぼ完形品である。７０は体部下半を欠き、外面は煤が付着する。７１～７３は口縁を欠くが、器形から壺の可能性が高い。７２と７３は弥生土器か。７４～７７は甕である。７５は底部が尖る。内面は工具痕やケズリが残る。やや粗い作りの印象を受ける。７８は口縁部を欠く壺又は甕の体部である。７９は弥生土器の高杯杯部である。口縁端部は肥厚し、内側に折れ曲がる。内外面は放射線状にミガキを施す。８０は高杯の杯部、８１は高杯の脚部である。８２は支脚で、下半部は欠損する。８３は口縁部が肥厚し、外面には竹管文を有する鉢か。８４も椀形の鉢か。体部中央で内面より穿孔する。口縁端部は内側に「く」の字に折れ曲がって立つ。外面はケズリ後に粗いナデ、内面はナデである。口径 13.7cmを測る。８５は平底状の鉢である。内外面には指ナデの痕跡がある。８６は体部下半を欠く



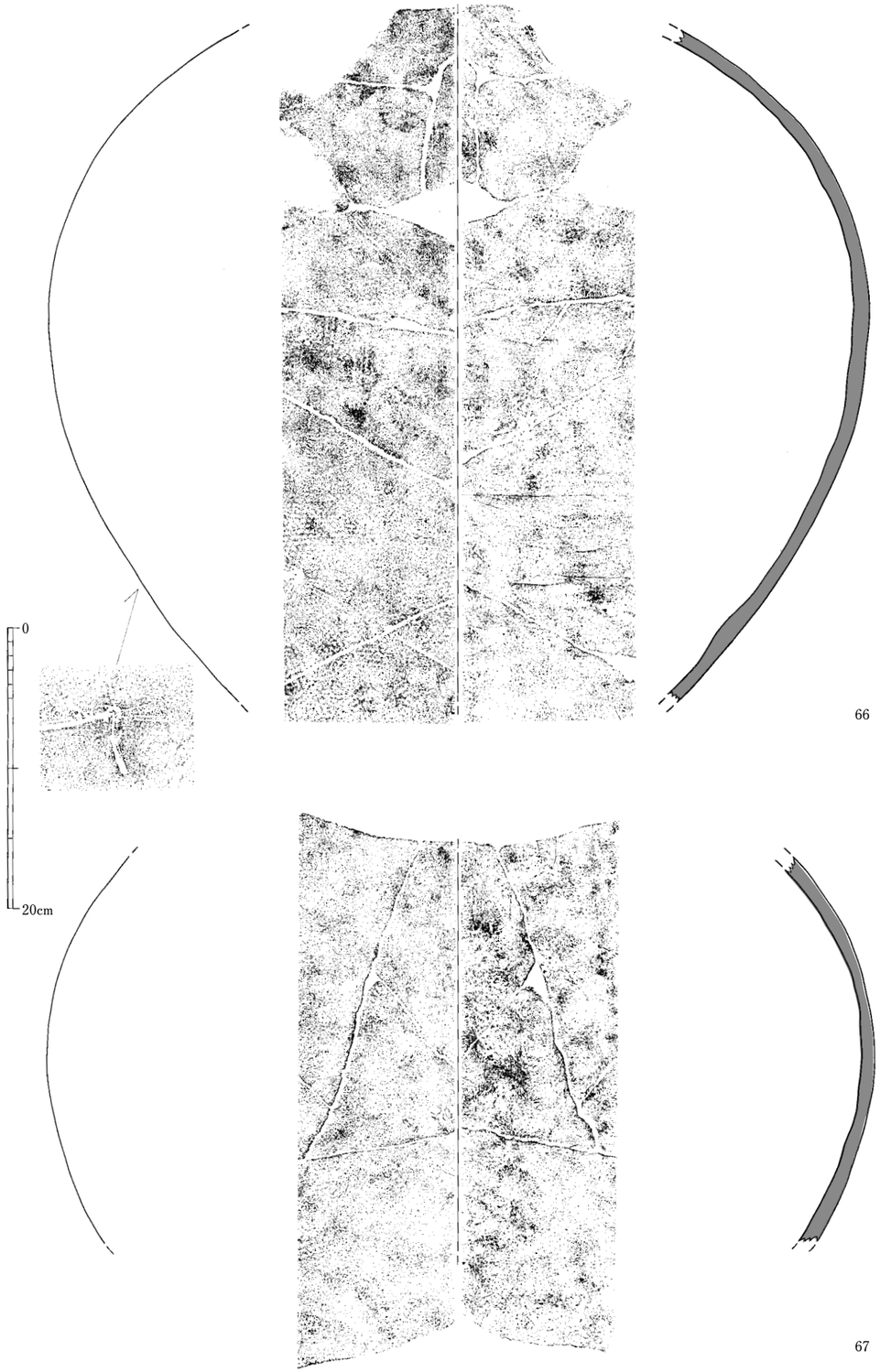
第67図　13号溝状遺構③地点出土土器1実測図（20・23は1/4、他は1/3）



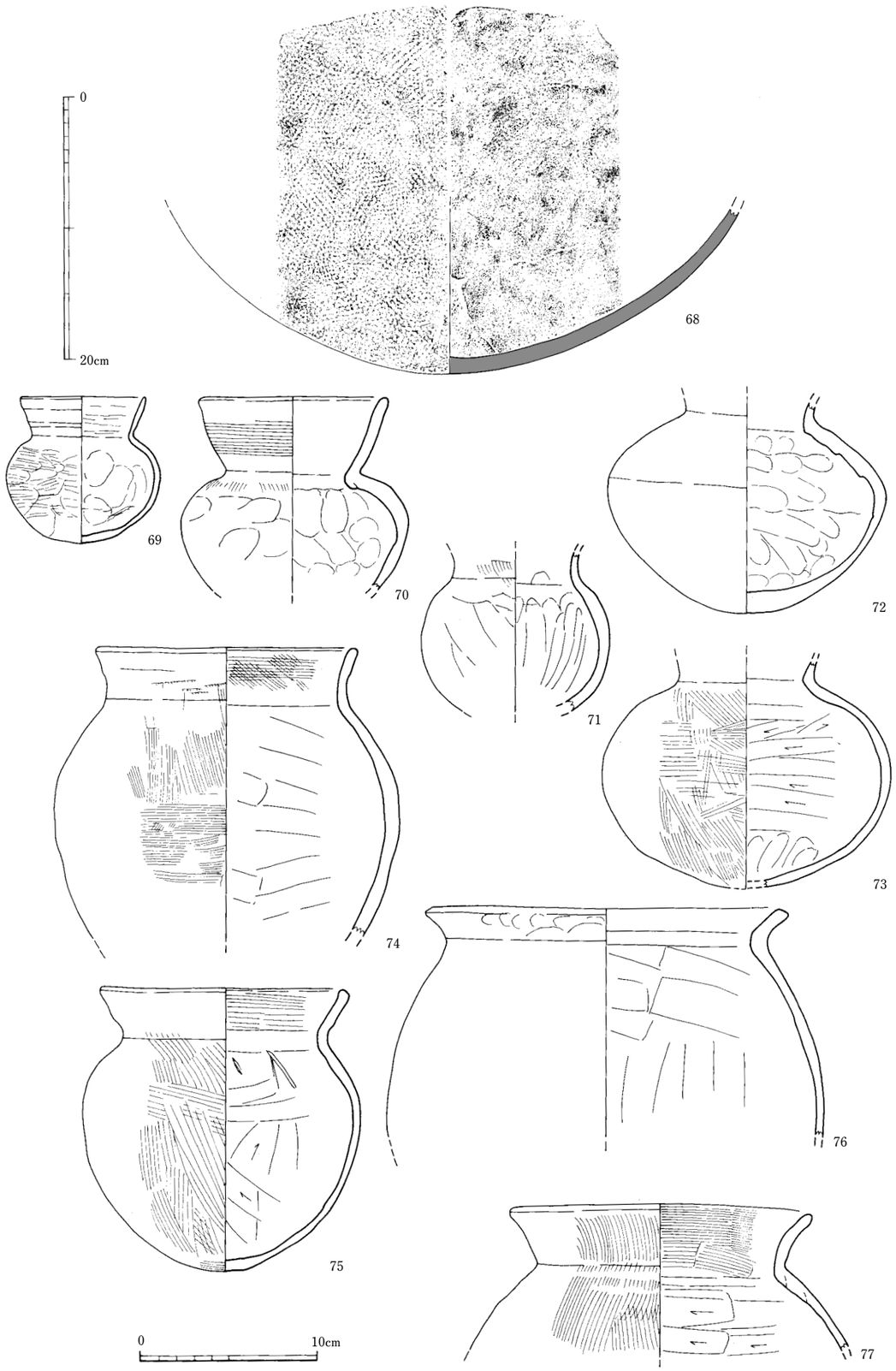
第68図　13号溝状遺構③地点出土土器2実測図（1/3）



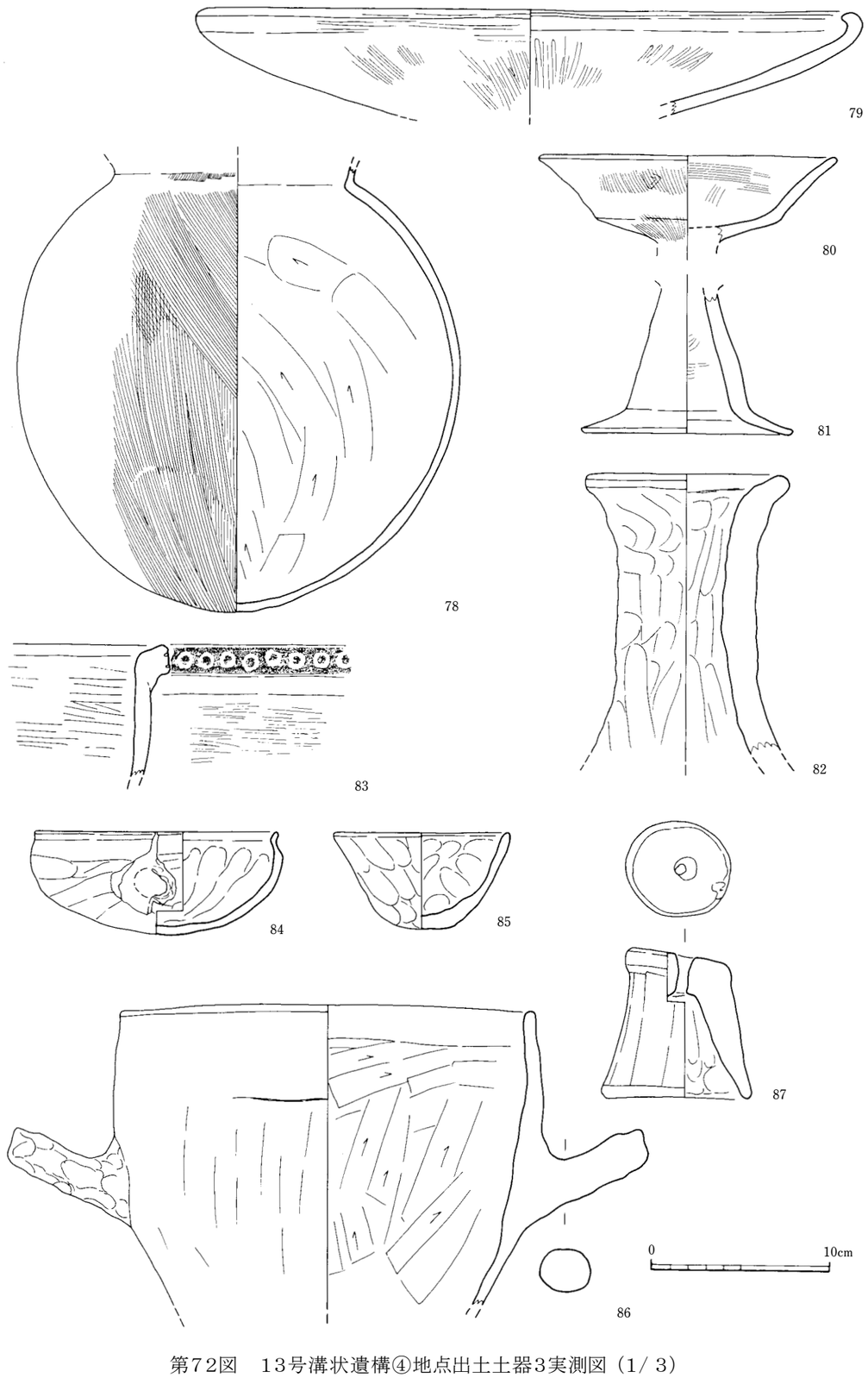
第69図　13号溝状遺構③地点出土土器3実測図（1/3）



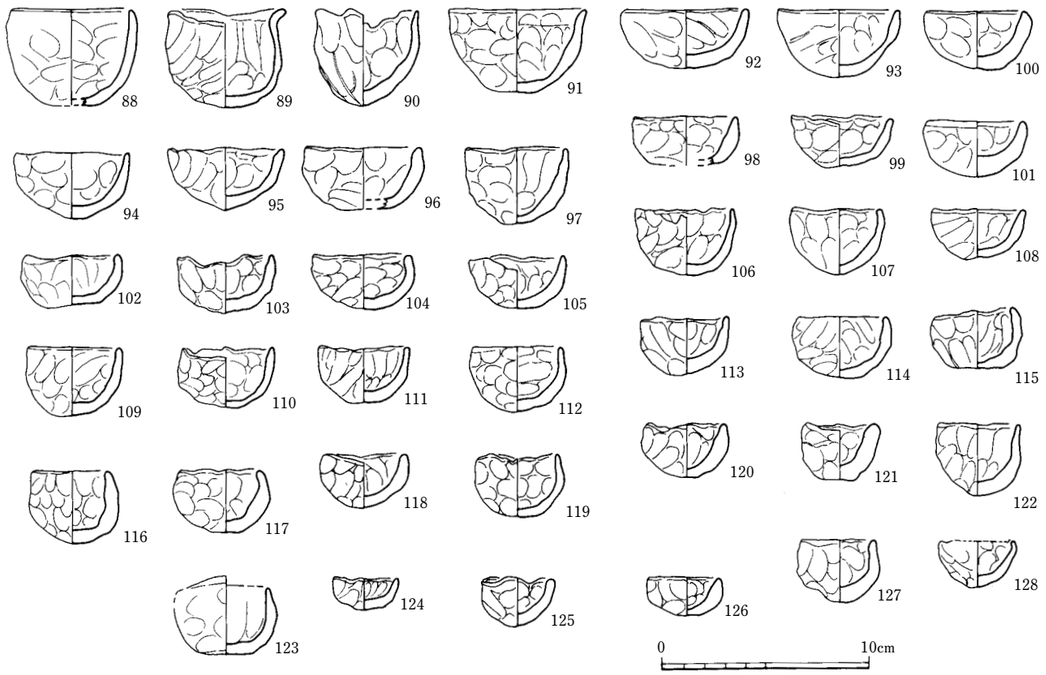
第70図　13号溝状遺構④地点出土土器1実測図（1/4）



第71図　13号溝状遺構④地点出土土器2実測図（68は1/４、他は1/３）



第72図　13号溝状遺構④地点出土土器3実測図（1/３）



第73図　13号溝状遺構④地点出土土器4実測図（1/3）

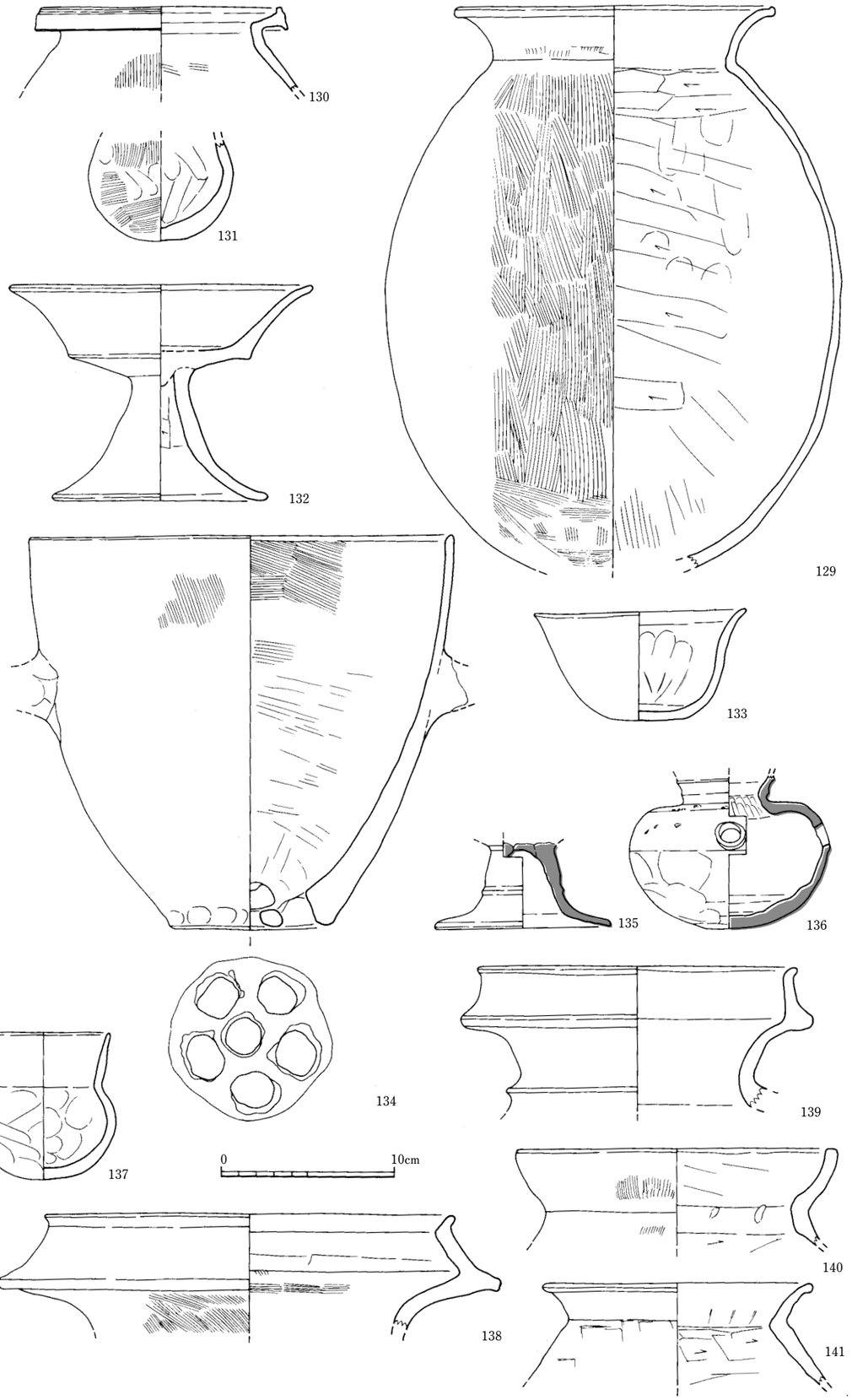
甑で、把手から口縁までは直立する。外面体部の把手付近には砂粒による沈線状の痕跡がある。棒状の把手は逆「ハ」の字状につき、把手の先端部は切られ尖らない。内外面とも工具によるナデである。８７は支脚である。天井部中央には穿孔を施す。８８～１２８は鉢形の手づくねのミニチュア土器で、４１点出土する。口径は３～6cmを測る。いずれも指ナデの痕跡が明瞭である。

⑤～⑦地点出土土器は土層ベルトＦ－Ｆ′を挟んで8・9層から出土した土器である。Ａ～Ｄベルト土層では１２・１４層にあたり下層になる。

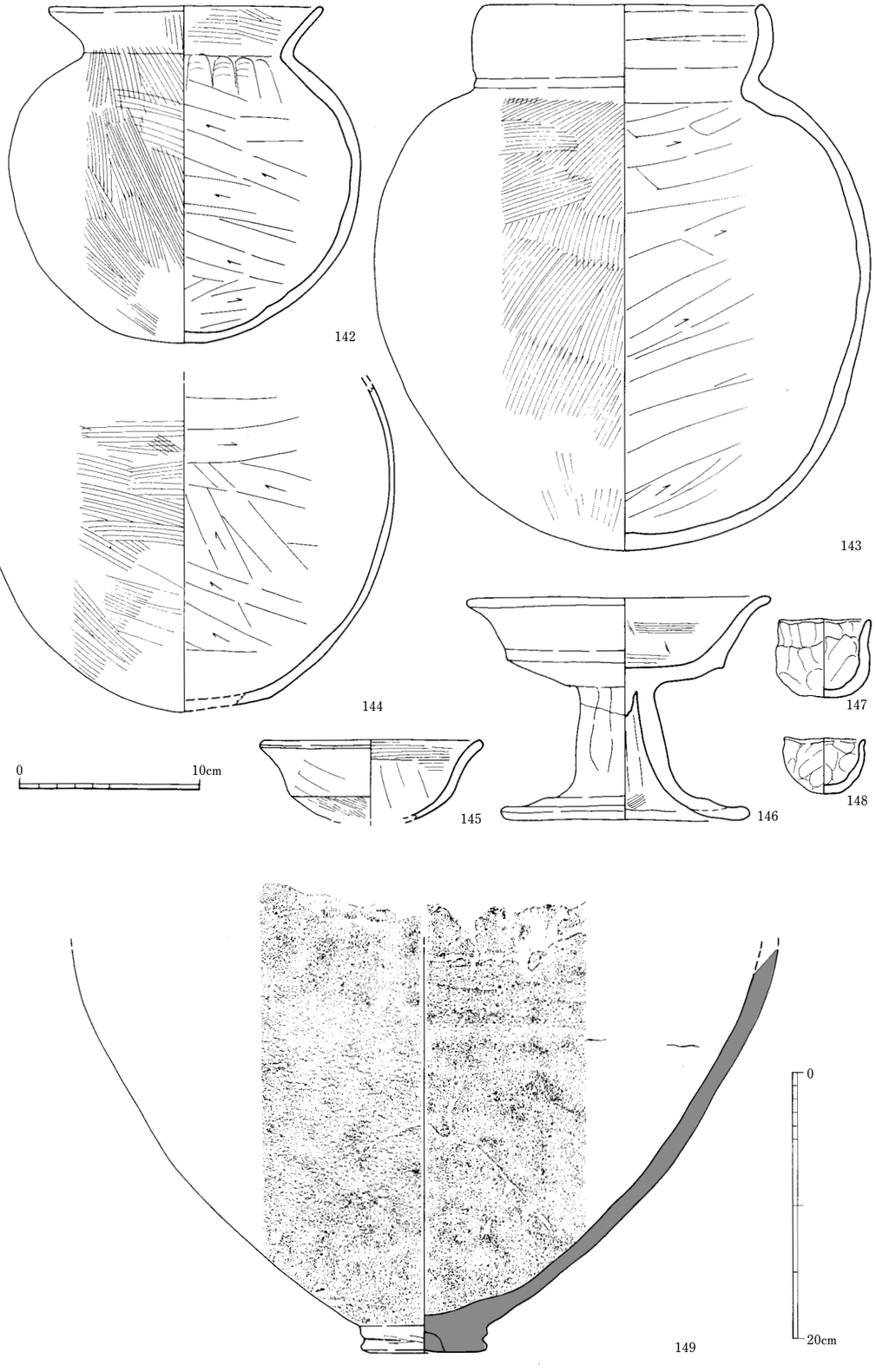
出土土器

１２９～１３４は⑤地点出土土器である。１２９は壺である。外面は刷毛目、内面はケズリ後ナデを施す。内面底部付近には刷毛目も残る。１３０は口縁端部で瀬戸内系の壺口縁部か。外面の口縁端部には沈線が1条巡る。１３１は壺などの体部片か。１３２は高杯である。脚部は屈曲せずに外に開く。１３３は鉢である。口縁付近で、内湾して外へ開く。１３４は多孔式甑である。外側に向かって緩やかに口が開く。底部は平底で6ヶ所に穿孔する。把手は欠く。

１３５～１４８は⑥地点出土土器である。１３５は杯部を欠く低い高杯の脚部片である。脚部中程には小さな突帯が巡る。焼成は良好で、色調は濃い青灰色を呈す。１３６は須恵器の瓶体部である。他の瓶とは異なり、体部は潰れた球形状である。外面の穿孔部分は面取りされている。器形などから判断すると居屋敷窯製とは異なる。１３７は小型の壺である。１３８の口縁部は内傾し、１３９は直立する二重口縁壺の口縁部片である。いずれも端部では外側に折れ曲がる。１４０～１４３は甕である。１４１は内外面に工具痕がある。１４２と１４３は、いずれも外面は刷毛目、内面はケズリである。１４２の体部には煤が付着する。１４４は体部上半より上は残存していない壺又は甕の体部片である。薄手で、丁寧に作られる。１４５はやや小型の高杯杯部である。１４６は高杯で



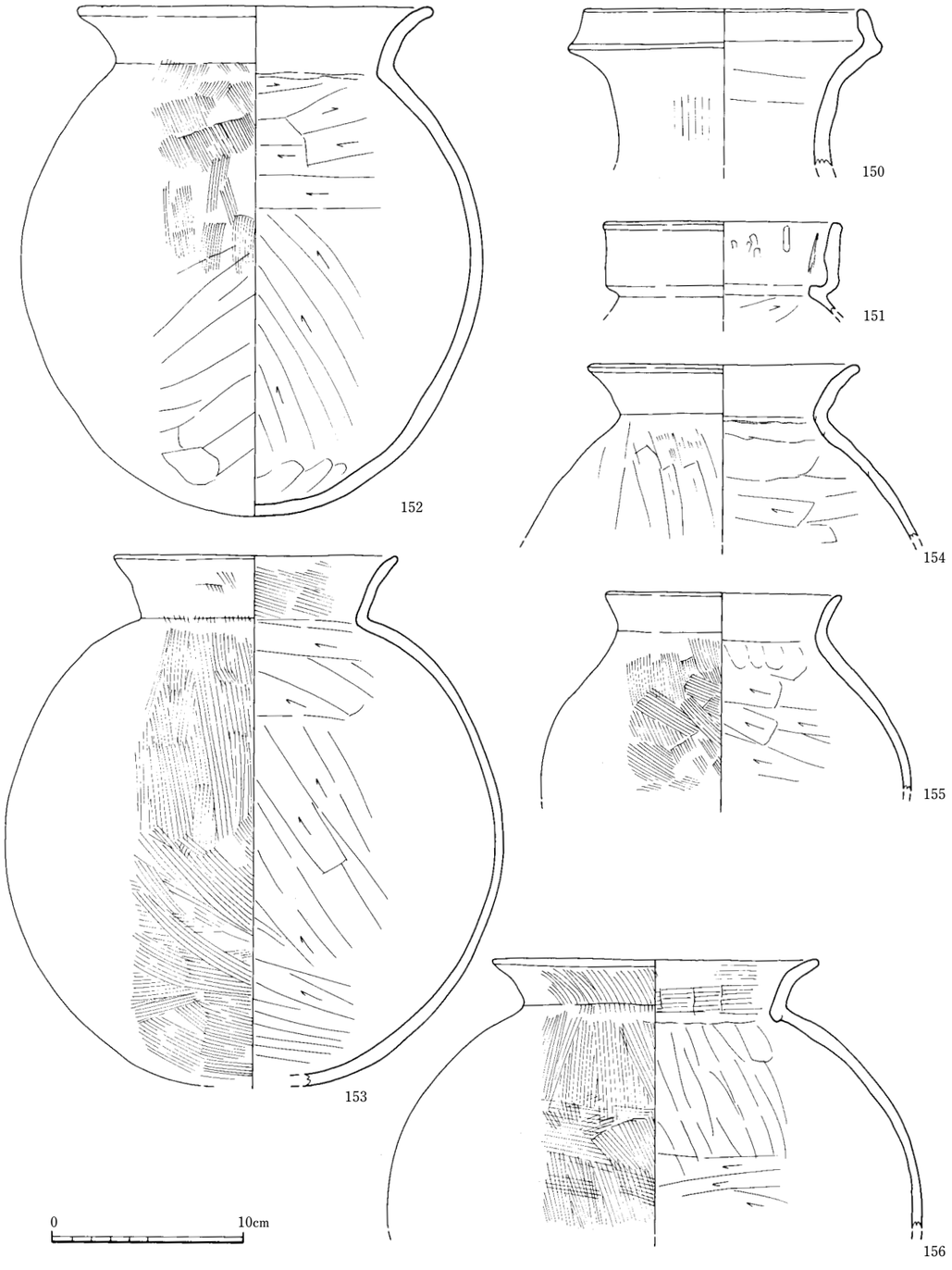
第74図　13号溝状遺構⑤・⑥地点出土土器1実測図（1/3）



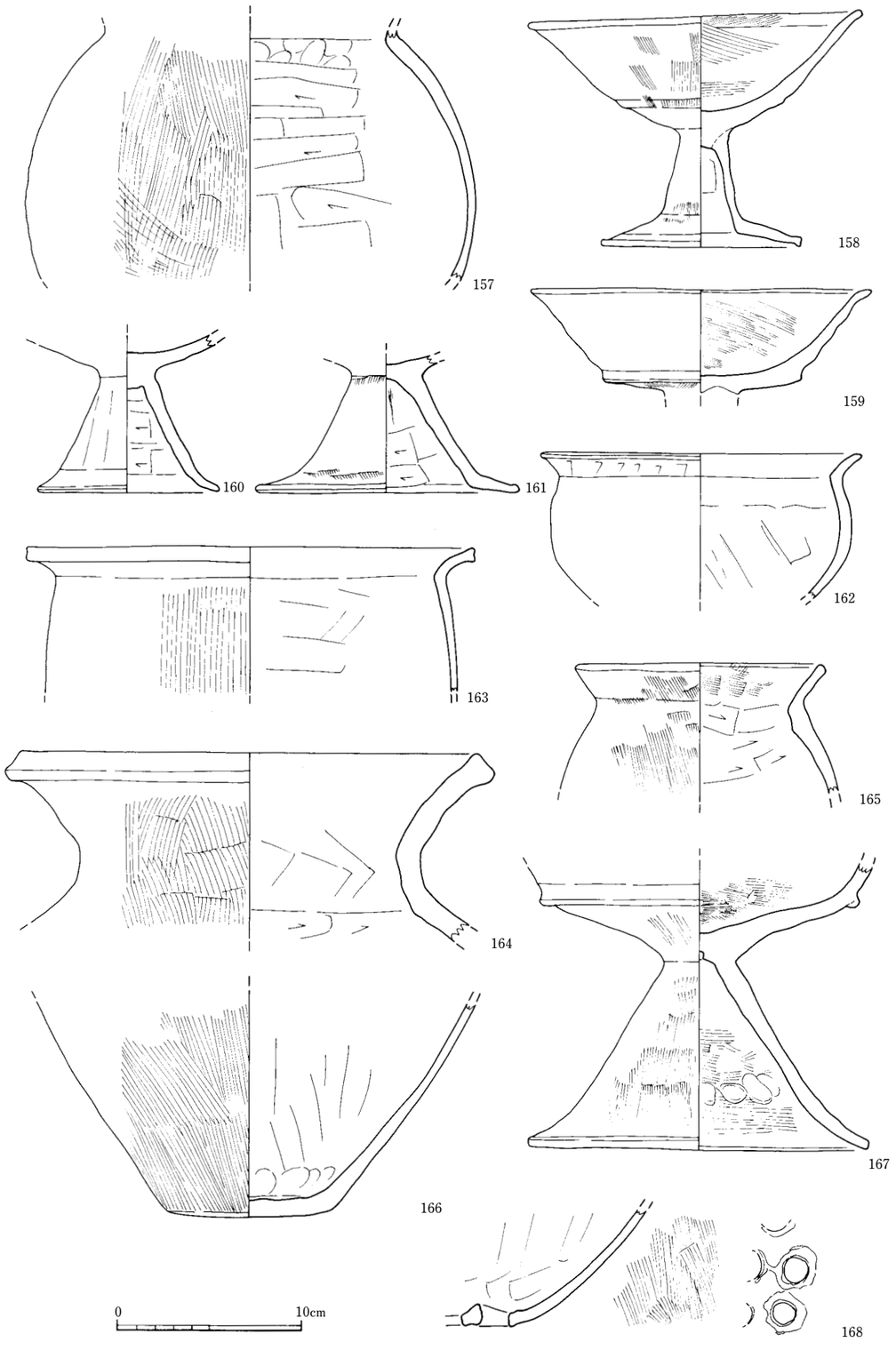
第75図　13号溝状遺構⑥地点出土土器2・⑦地点出土土器1実測図（149は1/4、他は1/3）

ある。全体的に厚手な作りである。外面には接合痕がある。１４７と１４８は手づくねのミニチュア土器である。

１４９～１６２は⑦地点出土土器である。１４９は須恵器の甕体部下半片で、外面底部中央には平底が付く。体部下半片は接合部で剥離していて、その外面には土器製作時に巻いていと思われ



第76図　13号溝状遺構⑦地点出土土器2実測図（1/3）



第77図　13号溝状遺構⑦地点出土土器3・⑧地点出土土器実測図（1/ 3）

る布目の痕跡がある。また種類の違う粘土を使用したためなのか所々に淡い灰色状になる。内外面ともにナデであるが、無文のタタキの痕跡の可能性も否定できない。１５０は内傾するタイプ、１５１は直立するタイプの二重口縁壺の口縁部片である。１５１の内面には工具痕がつく。１５２と１５３は壺である。１５２は完形品である。１５４も壺片か。１５５と１５６は甕片である。１５２～１５６の調整は外面に刷毛目、内面にはケズリやナデを施す。１５７は壺又は甕の体部片である。１５８は高杯である。１５９は高杯の杯部、１６０と１６１は高杯の脚部で、１６１は大きく脚端部を開く。１６２は鉢である。

１６３～１６８は⑧地点出土土器である。１６３は弥生土器の甕片である。１６４は厚手の作りの大甕片である。外面は刷毛目、内面は板ナデ状である。１６５は小型の甕である。１６６は平底で、薄手な作りの壺又は甕の底部片である。１６７は厚手の作りの高杯片である。脚部は大きくラッパ状に外へ開く。１６８は多孔式の甑底部片である。残存状況から約 1.5cmの穿孔を施す。

２区１３号溝状遺構（図版２４・２５・３７～４１、第７８～９８図）

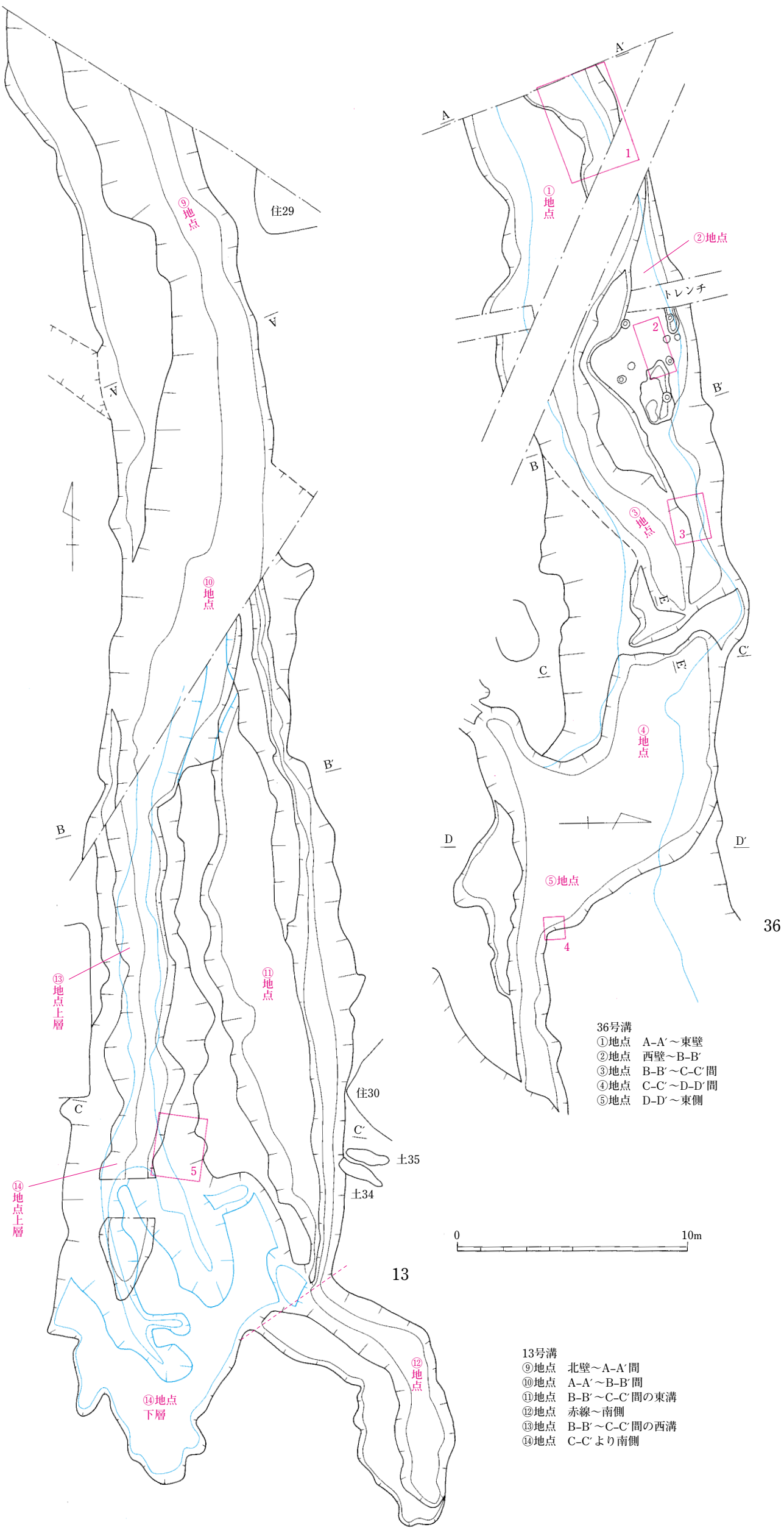
調査区北側から中央付近までほぼ直線的に南へ伸びる溝である。調査区境にかかり、中央付近で分断して調査している。時間的な都合により、調査区境から北側の⑨・⑩地点は上層（古墳時代中期）と下層（古墳時代前期）を同時に掘削している。南側⑪～⑭地点では上層と下層に分けて調査している。上層は残存状況が悪く、土器も小片ばかりであるが、下層は一個体になる土器や完形品が多く出土している。調査当初には、１区の１３号溝と接合するものと考えていたが、調査が進展するにつれ古墳時代中期の１区と違う様相が窺え、結果的には別の溝となった。しかし遺構番号の変更はせず調査当初の番号で報告する。

下層は古墳時代前期で２～４・６・７層にあたる。２９号住居跡から３０号住居跡の南で東へ短く屈折し、また南下して大谷の落ち際で終結するものと、中央付近から西側に浅く南へ分かれるものがある。前者の溝の東壁は底面から急に立ち上がるように掘削され、西側は緩く底面へ向かう幅広のテラス状を呈している。総延長は 67m で、幅は 4 ～ 6.5m である。２３号住居跡辺りから４２号溝の方面へ西側にも伸びており、土層を確認する限りでは切り合いはなく、南側では幅広くなる。幅は５～ 10m 程度である。

上層は古墳時代中期の１層であるが、下層溝が埋没して浅く窪みに堆積したもので、２０号住居跡の南側で短く屈折する部分以外を覆っていた。土層を確認する限りでは溝として機能していたとは考えにくく、淀みのようになっていた。また下層の西側溝の上層は２０号住居跡に切られており、この住居が建てられる前には埋没して平坦であったと考えられる。出土遺物の中には初期須恵器片を多く含み、また２０号住居跡から南東付近の西側溝内では、滑石製有孔円盤とミニチュア土器・鉇・初期須恵器器台片が出土し、この窪みで祭祀を行なっていた（第７９図）。なおこの器台は大谷で出土した器台と同一個体で、破砕して祭祀に使用したことが窺える。２区も１区と同様に報告している。各地点の位置については、第７８図を参照して頂きたい。

出土土器

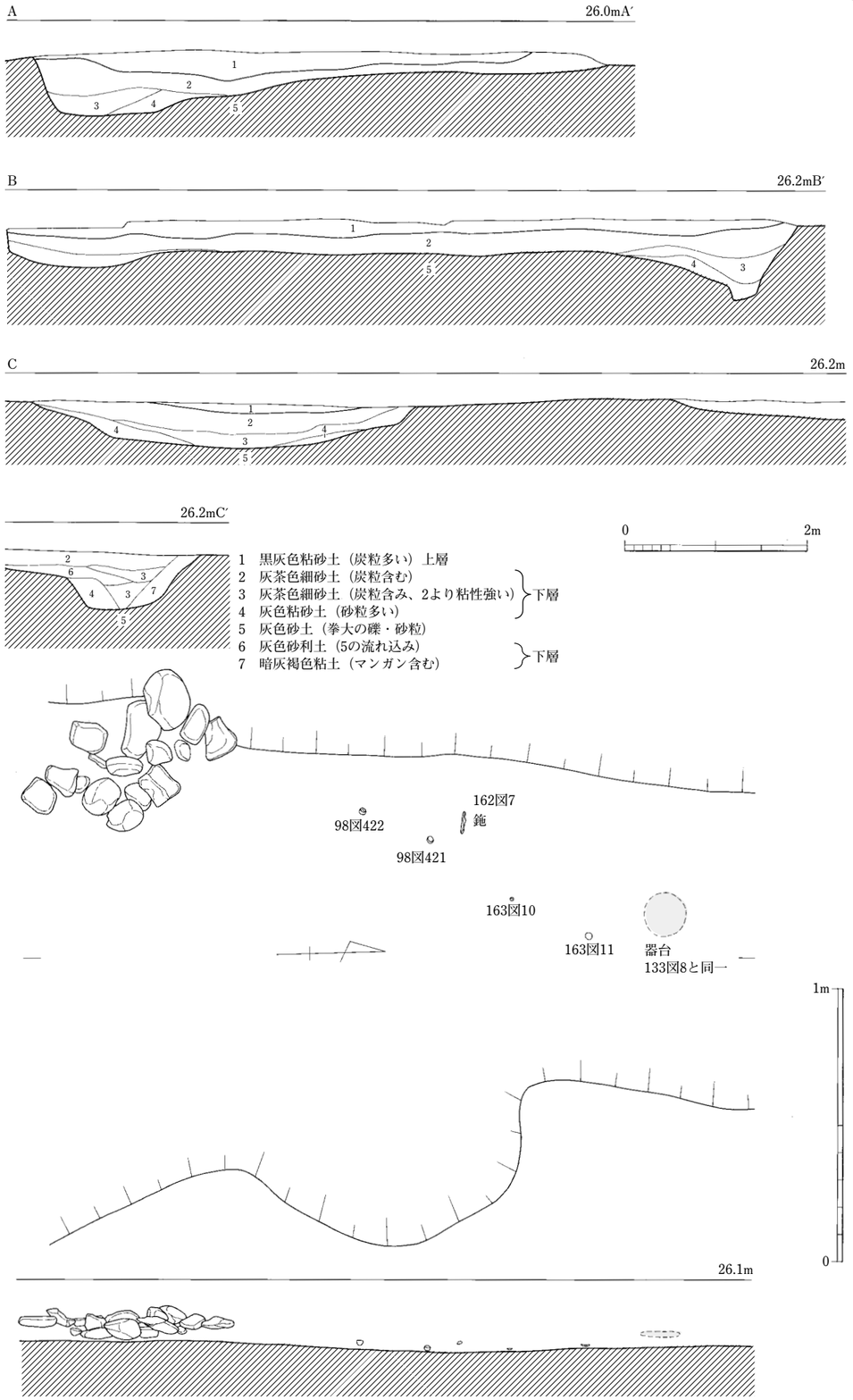
１６９～２７４は⑨地点出土である。１６９は須恵器高杯の口縁部片か。口縁端部は尖る。１７０～１７３は頸部が窄まり、口縁に向かって大きく口を開く広口壺である。１７３は内外面にミガキを施す。１７４は逆「ハ」の字状に大きく開く広口壺か。１７５と１７６は壺の口縁部片か。



第78図　2区13・36号溝状遺構実測図（1/200）

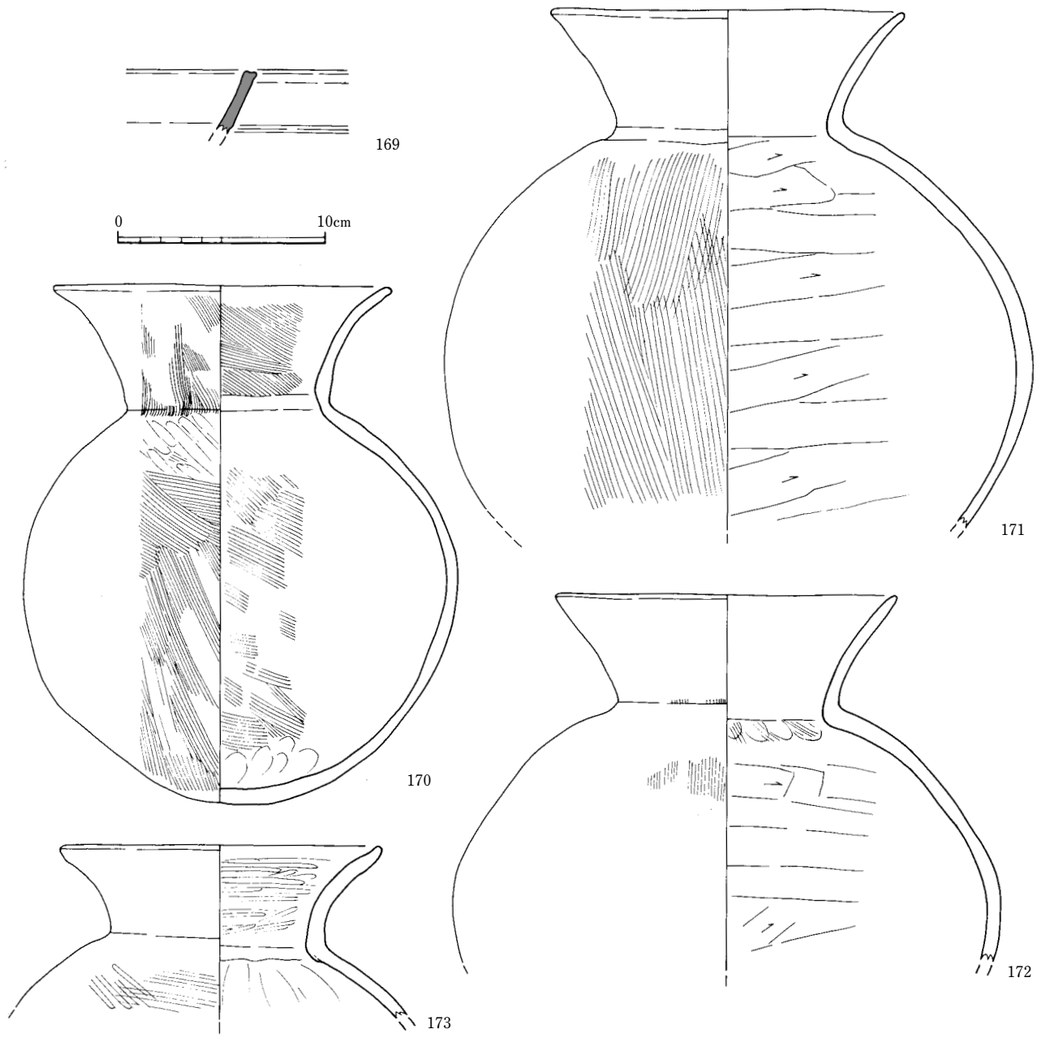
縦折込み
3色

第78図　2区13・36号溝状遺構実測図（1/200）

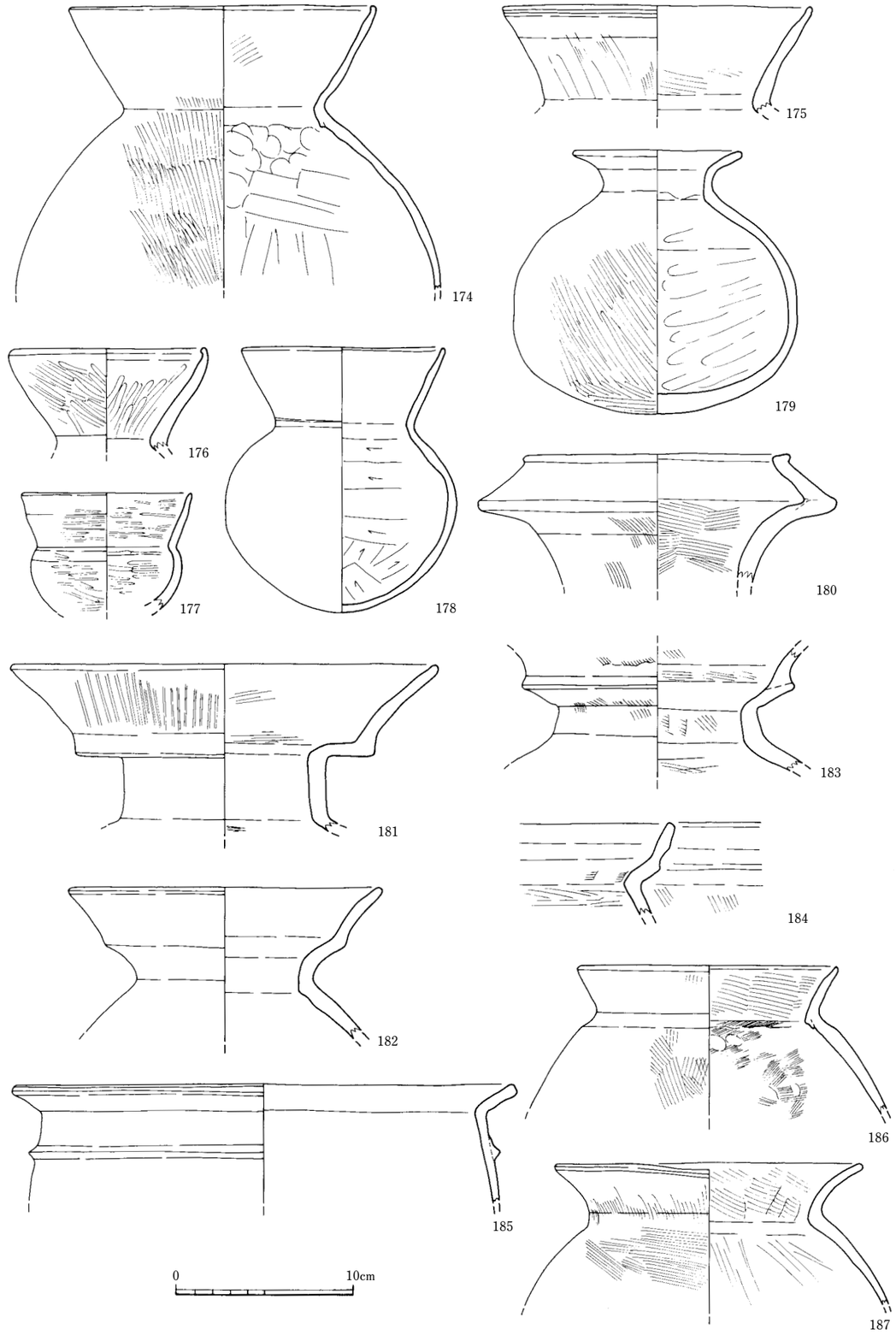


第79図　2区13号溝状遺構土層断面図、祭祀遺物出土状況実測図（1/60、1/20）

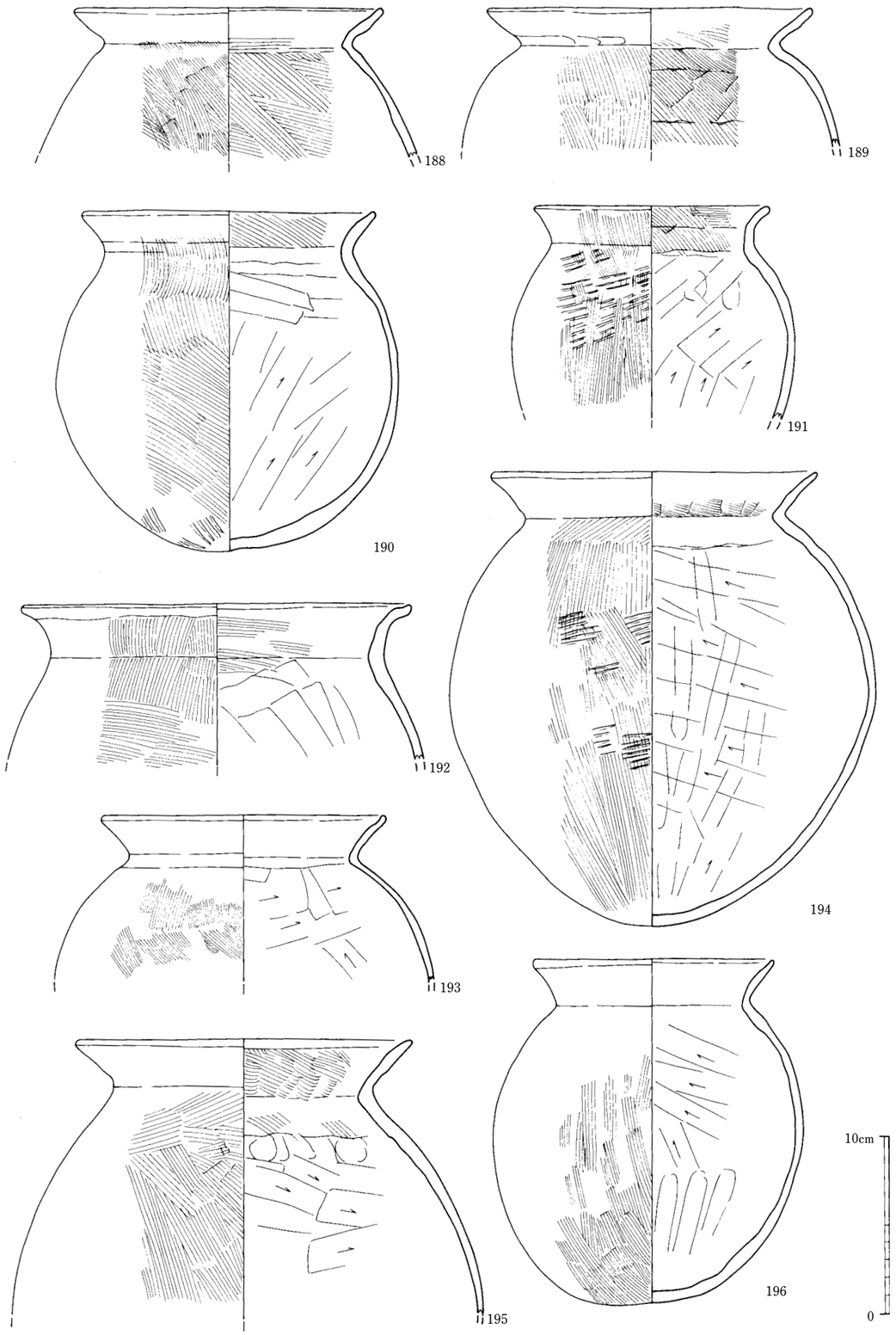
１７６は頸部で窄まり、口縁端部で折れ曲がる。内外面にミガキを施す。１７７は小型丸底壺である。底部は欠く。これも内外面に丁寧なミガキを施す。１７８と１７９は小型の壺である。内面の体部はケズリを施す。１７９は口縁端部に剥離した痕跡が見えることから二重口縁壺か。１８０～１８４も二重口縁壺片である。１８０の口縁は内傾し、端部は厚くなる。１８１は外面に暗文を施す。１８５は弥生土器の甕片である。１８６～１８９は甕片である。内外面の調整は刷毛目であるが、１８７の内面には工具によるナデの痕跡が残る。１９０～２０４も甕で、外面は刷毛目、内面はケズリと刷毛目を施す。２０１～２０４の外面にはさらにタタキを施す。２０１は口縁が一部欠けるもほぼ完形品である。内面頸部には工具痕がある。２０２～２０３は粗いタタキが明瞭に残る。２０５～２１８はやや小型の甕である。内外面の調整は刷毛目、ケズリを施す。２１１～２１５はやや胴長のタイプである。２１３の調整は工具によるナデを内外面に施す。２１５は外面に叩きを施す。２１６～２１８は口縁端部が僅かに肥厚する。２１９～２２６も小型の甕である。やや鉢形に近いものもある。２２７～２３３は壺又は甕片である。いずれも調整は外面に刷毛目、内面には



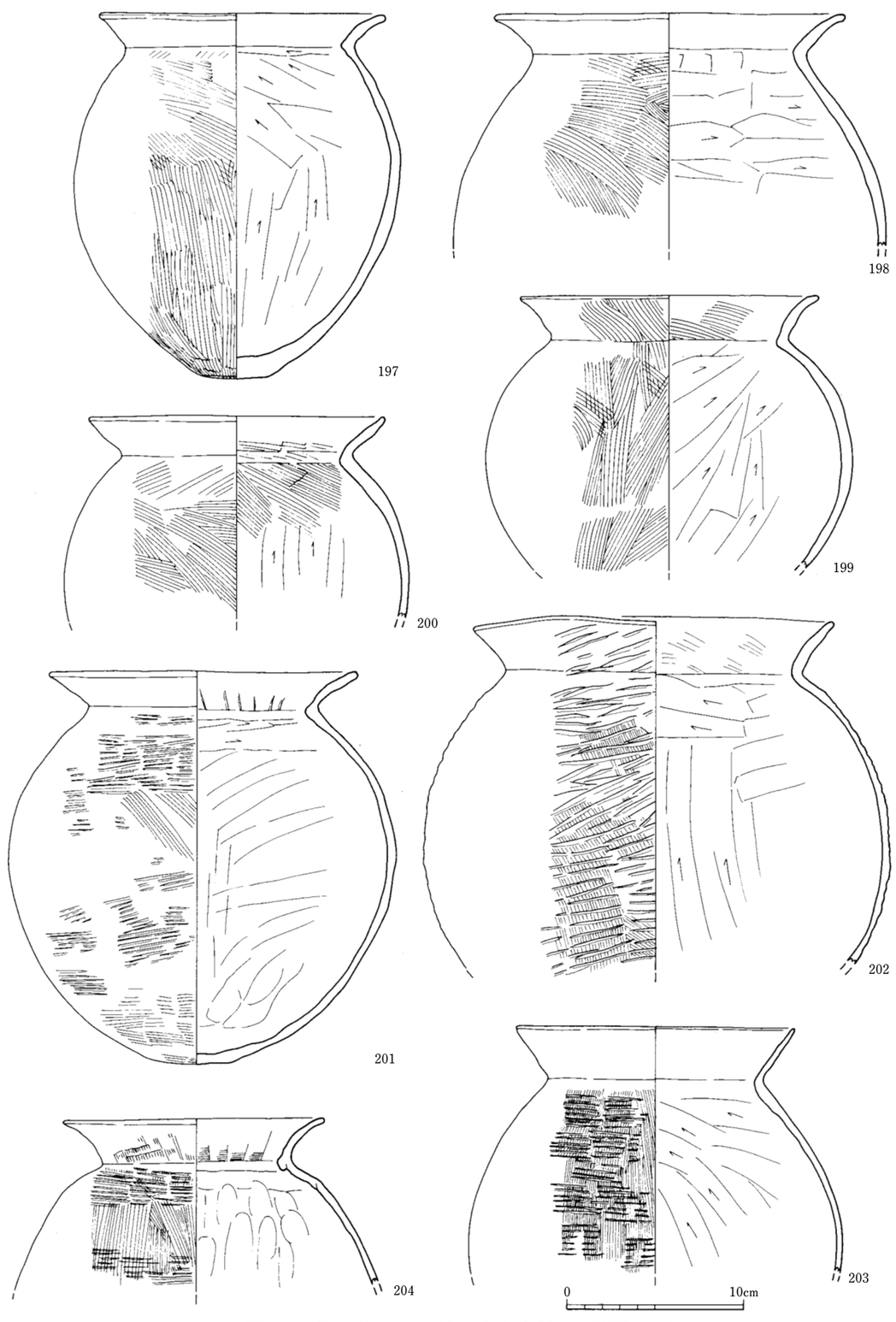
第80図　13号溝状遺構⑨地点出土土器1実測図（1/3）



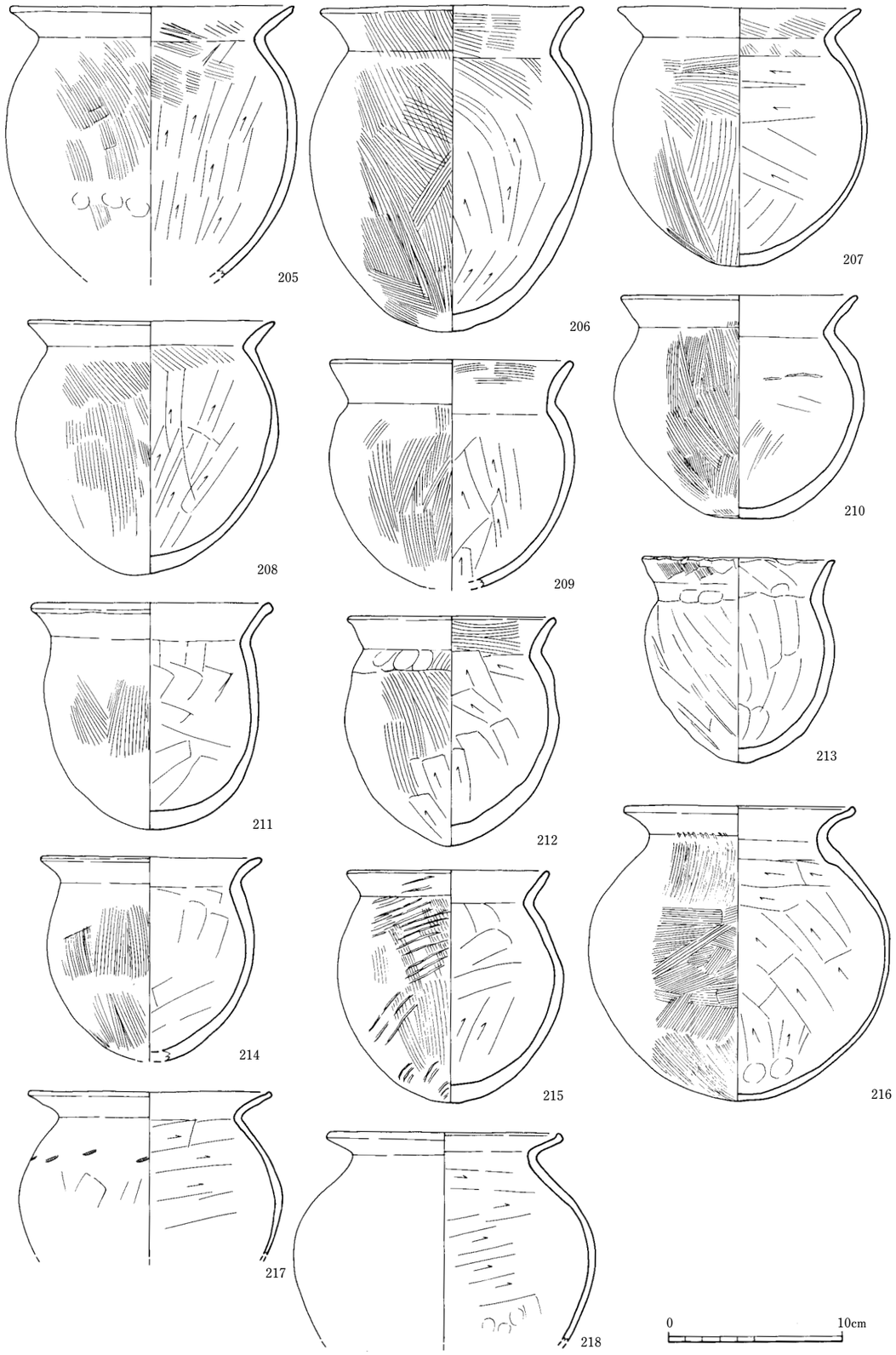
第81図　13号溝状遺構⑨地点出土土器2実測図（1/3）



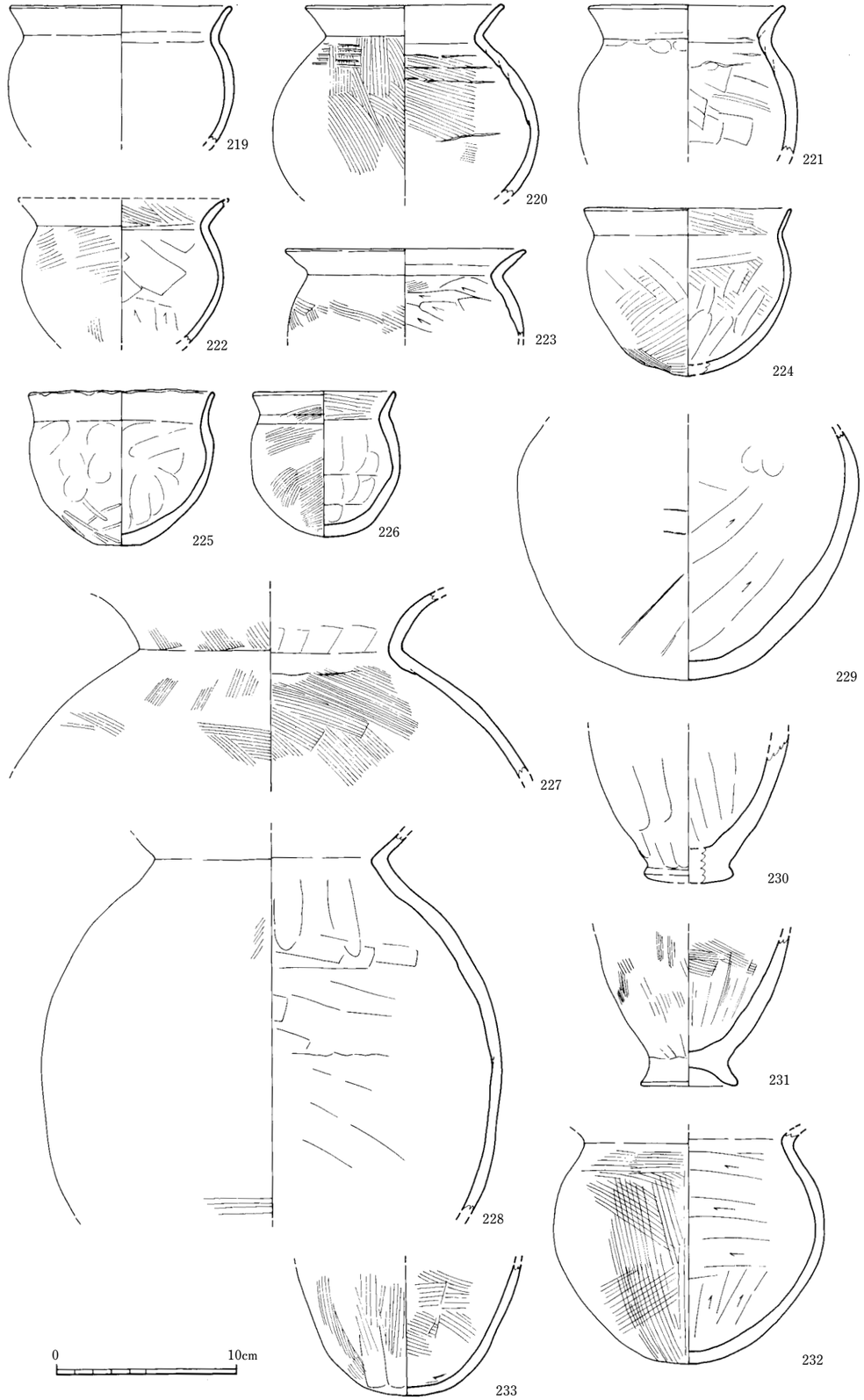
第82図　13号溝状遺構⑨地点出土土器3実測図（1/3）



第83図　13号溝状遺構⑨地点出土土器4実測図（1/3）

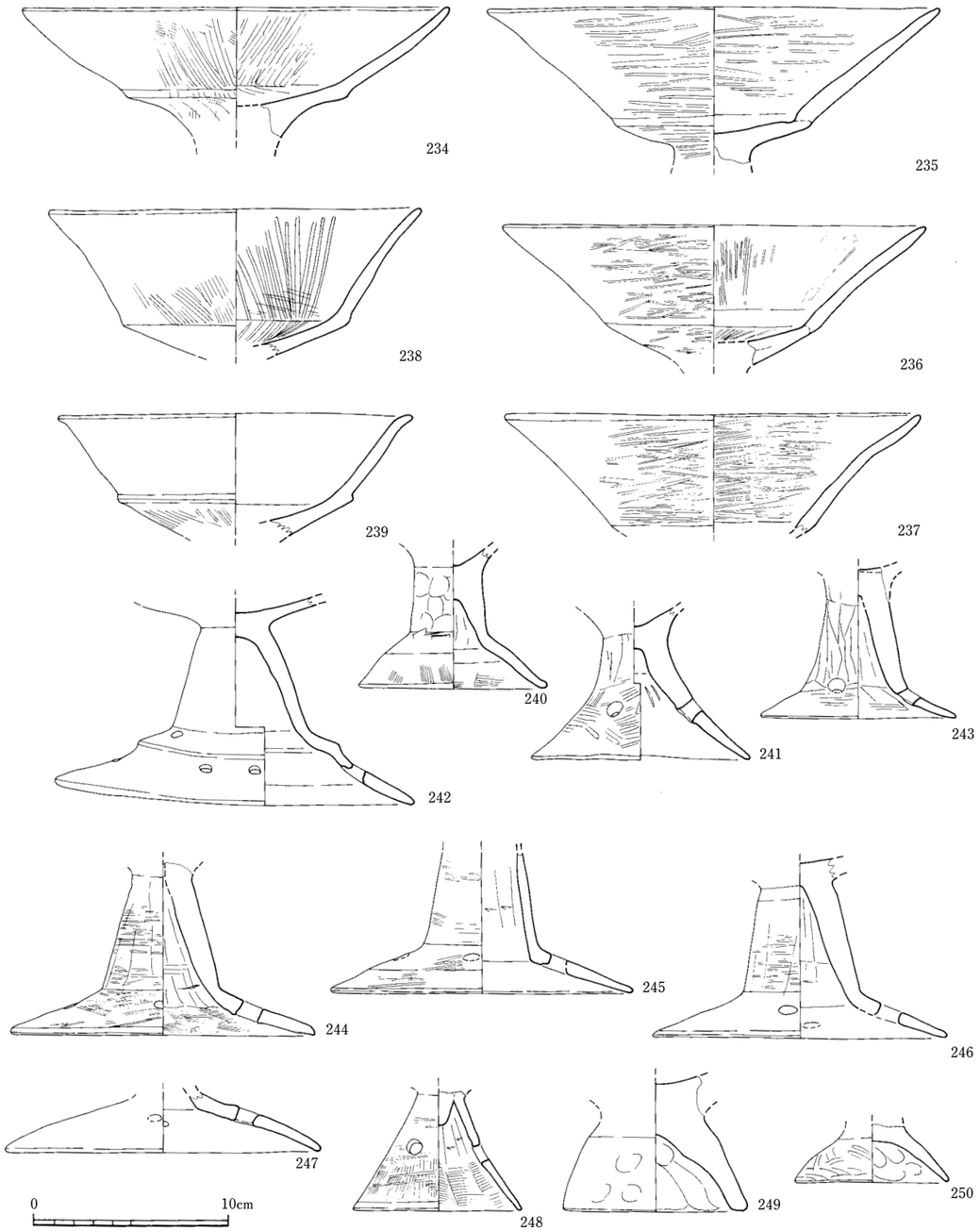


第84図　13号溝状遺構⑨地点出土土器5実測図（1/ 3）

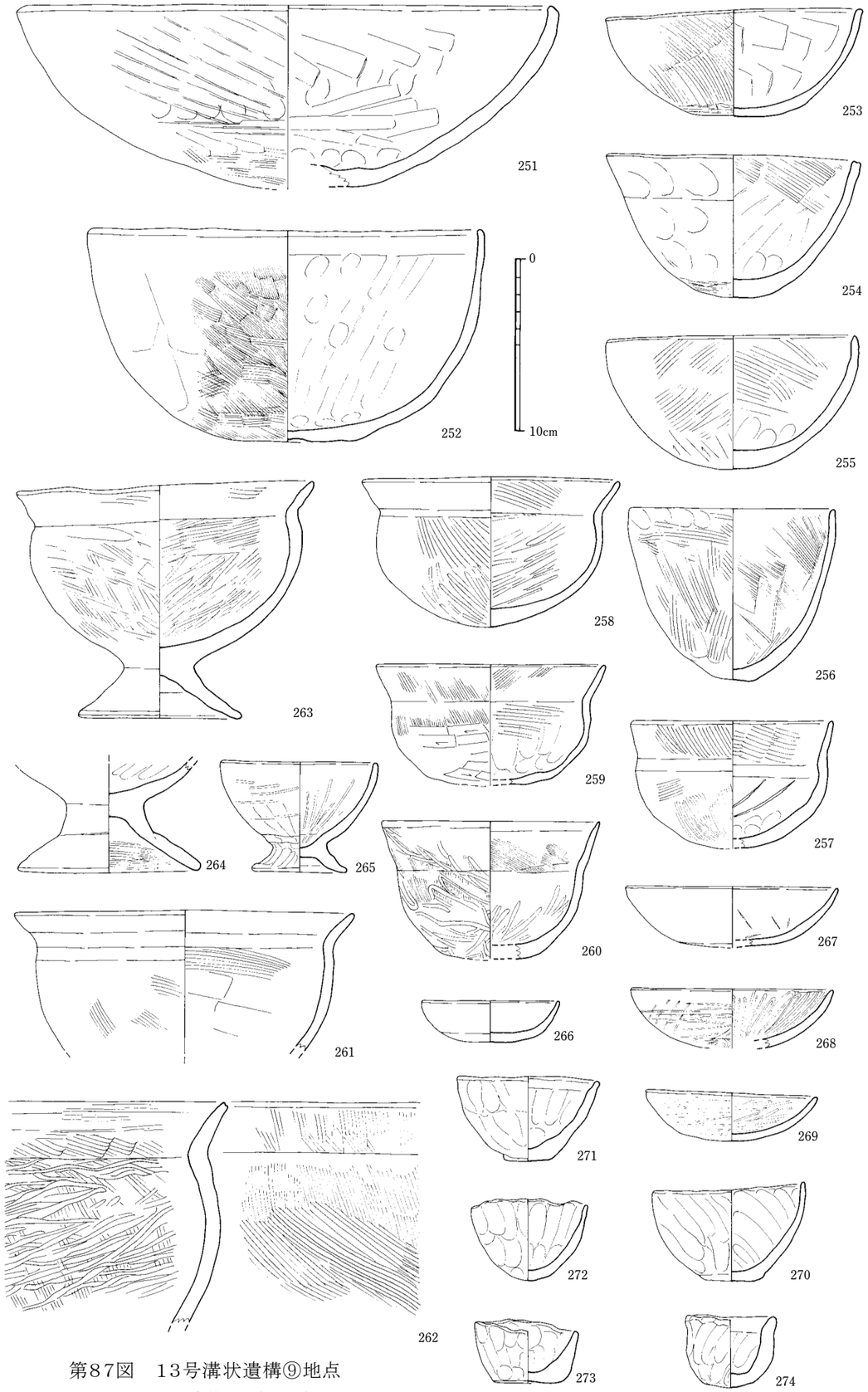


第85図　13号溝状遺構⑨地点出土土器6実測図（1/ 3）

刷毛目やナデを施す。２３０は底部の形状から弥生土器の甕か。２３４～２５０は高杯の杯部である。内外面にはミガキを施す。２４０と２４１は弥生土器の高杯脚部か。２４１は外面にミガキを施す。２４２は畿内系の高杯脚部である。穿孔は屈曲部を挟んだ上部に４ヶ所、下部に８ヶ所を施す。２４３～２４６はほぼ同形状の高杯脚部である。２４７は脚部が窄まることから、鉢の脚部か。２４８～２５０は器台の脚部か。２５１は浅い大形の鉢である。口縁部は角張り、底部は厚い作りで外面には黒斑がつく。内外面に工具痕やナデが明瞭に残る。２５２は薄手の作りの深鉢で、平底



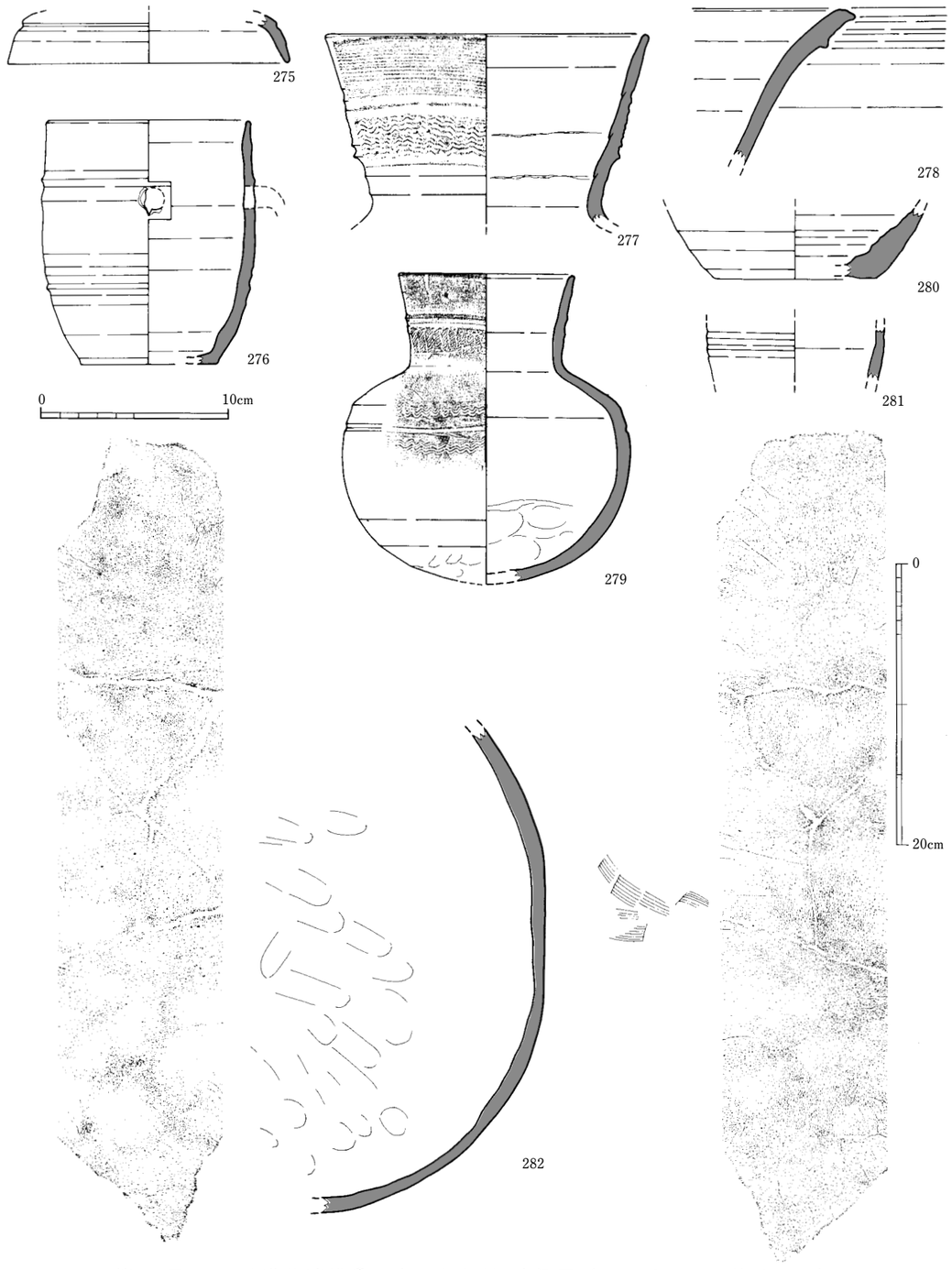
第86図　13号溝状遺構⑨地点出土土器7実測図（1/3）



第87図　13号溝状遺構⑨地点
出土土器8実測図（1/3）

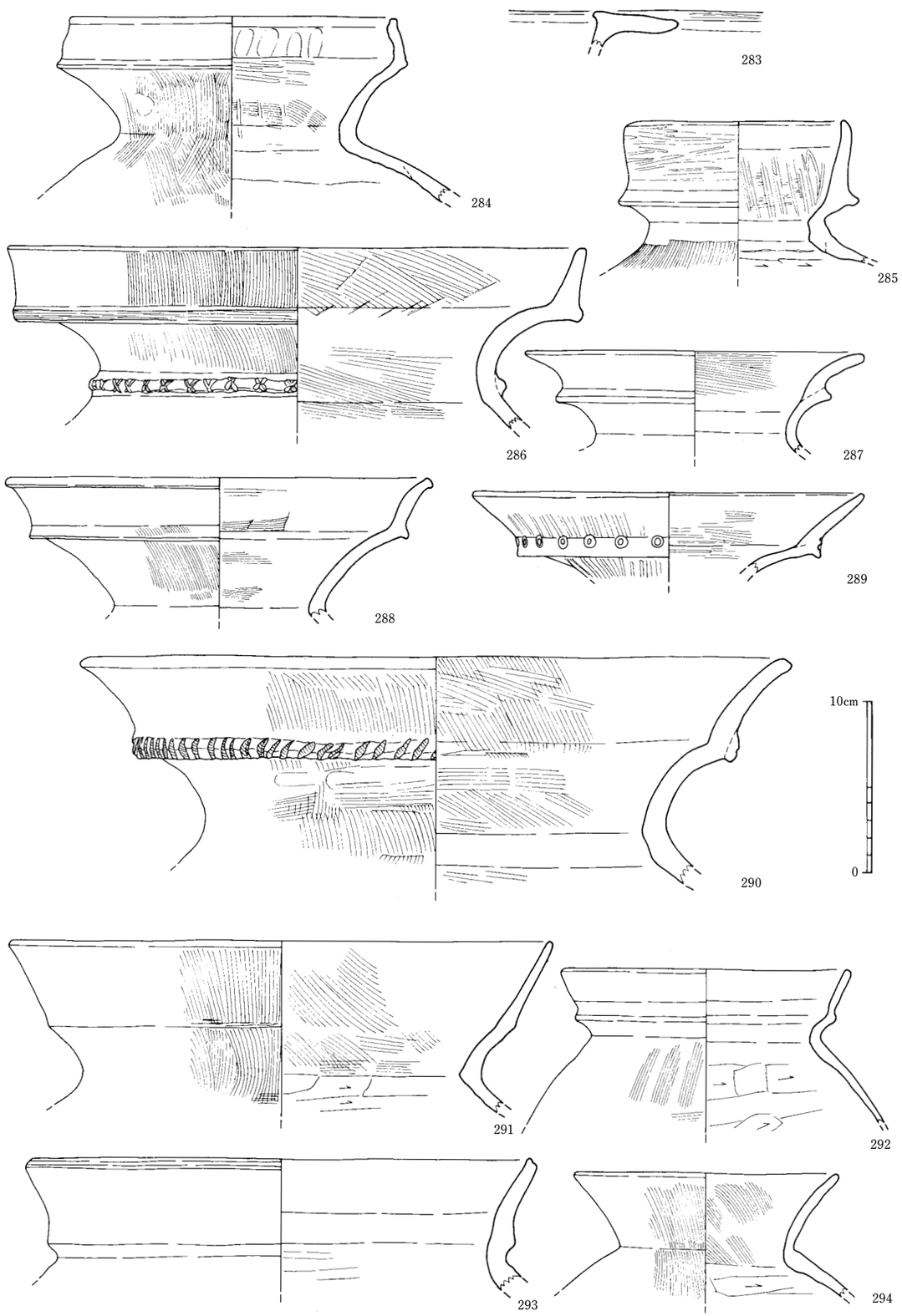
である。２５３～２５５は椀形の鉢である。２５４は外面の口縁下に、指ナデにより僅かな凹みがある。完形品である。２５６はやや胴長の深鉢である。２５７～２６１は体部が屈曲し、外側に口縁が開く小型の鉢である。２６２は大型の鉢で、１割程しか残存していない。２６３は口縁部を一部欠く９割残存する脚付鉢である。２６４は鉢の脚部か。２６５は小型の脚付鉢である。いずれの鉢も調整は刷毛目、工具によるナデや指ナデであるが、２５８・２６０・２６３・２６５にはミガキを施す。２６６～２６９は浅い椀である。調整は２６６はナデであるが、２６７～２６９はミガキである。２７０～２７４は手づくねのミニチュア土器である。ナデの痕跡が明瞭である。

２７５～２９４は⑩地点出土土器である。２７５～２８２は須恵器である。２７５は体部に段があるので杯蓋片か。２７６はジョッキ形土器である。突帯が体部上半と下半に均等な位置に巡る。体部上半の突帯下に把手がつくが、把手自体は出土していない。焼成は良好で、濃い灰色を呈す。口径 10.6㎝、器高 13㎝を測る。２７７と２７８は大型の壺の口縁部片か。２７７は外面口縁付近にカキ目を施し、口縁～頸部の中程にある突帯間に波状文を施す。内面は横ナデであるが、所々に接合痕が残る。復元口径 16.9㎝を測る。２７８は１３号溝で同形状のものがある。内外面とも横ナデである。色調は黒灰～灰色である。２７９は７割程残存する直口の壺である。焼成は良好で、灰色を呈す。口縁～頸部の中程と体部上半の沈線を挟んで波状文が巡る。調整は横ナデと不定方向のナデである。外面底部はヘラケズリ後、やや雑なナデを施す。復元口径 9.2㎝、器高 16.5㎝を測る。２８０は壺の底部片で平底か。外面はヘラケズリで、内面はナデの痕跡が明瞭に残る。新しい時期の可能性がある。２８１は壺などの体部片か。薄手な作りである。２８２は壺又は甕の体部片である。内外面ともナデを施しているが、外面には刷毛目が僅かに残る。焼成不良のため、軟質で灰褐色を呈す。居屋敷窯出土の甕と似る。２８３は弥生土器の壺口縁部片か。２８４～２９２は二重口縁壺片である。口縁部が２８４はやや内傾し、２８５と２８６は直立する。２８７～２９２は形状はやや異なるが外へ開く。２８５は口縁の内外面にミガキを施す。２８６は頸部に三角形状の突帯がつき、×状の刻目を施し、２９０も屈曲部の突帯に刻目を施す。２８９は外面の屈曲部に竹管文がある。２９１はやや崩れた二重口縁壺片か。屈曲部は僅かに残る。２９２は形状から山陰系か。２９３は頸部が突帯状に張出し、二重口縁壺状である。２９４は頸部が窄り、外へ大きく開く広口壺片である。２９５は口縁部で外へ折れ曲がる甕である。底部は平底で、厚手である。２９６と２９７は弥生土器の甕口縁部片である。２９８～３０２は体部下半を欠く甕で、口縁は内湾しながら外へ開く。内外面の調整は刷毛目であるが、３００のみ刷毛目の後、工具によるナデを施す。３０３～３０５も甕で、頸部は「く」の字型に折れ曲がる。３０６は外来系の甕である。外面体部上半には波状文が巡る。３０７と３０８は外面にタタキを施す甕である。３０９～３１８は小型の甕である。３１２は外面にタタキを有する。３１３と３１４のみ内外面はナデ調整が明瞭に残る。粗い作りの甕である。３１５と３１６の口縁は外へ開くが、３１７と３１８は直口である。３１９は壺の肩部片か。外面には沈線と沈線の間に波状文を施す。３２０～３２５は甕などの体部～底部片である。３２２は形状から脚付の甕片か。３２３の外面は刷毛目とタタキである。３２４は平底である。３２５は外面の底部に木ノ葉文がつく。３２６と３２７は小型の壺や甕片か。３２８は高杯の杯部である。内面の屈曲部には段がつき、その段より上にはミガキを施す。３２９～３３１は同形状の高杯で、口縁部は杯部の屈曲部から一直線状に大きく開く。３３２の屈曲部は尖る。３３３と３３４は畿内系の高杯である。３３３の脚の屈曲部には８ヶ所に穿孔がある。３３５と

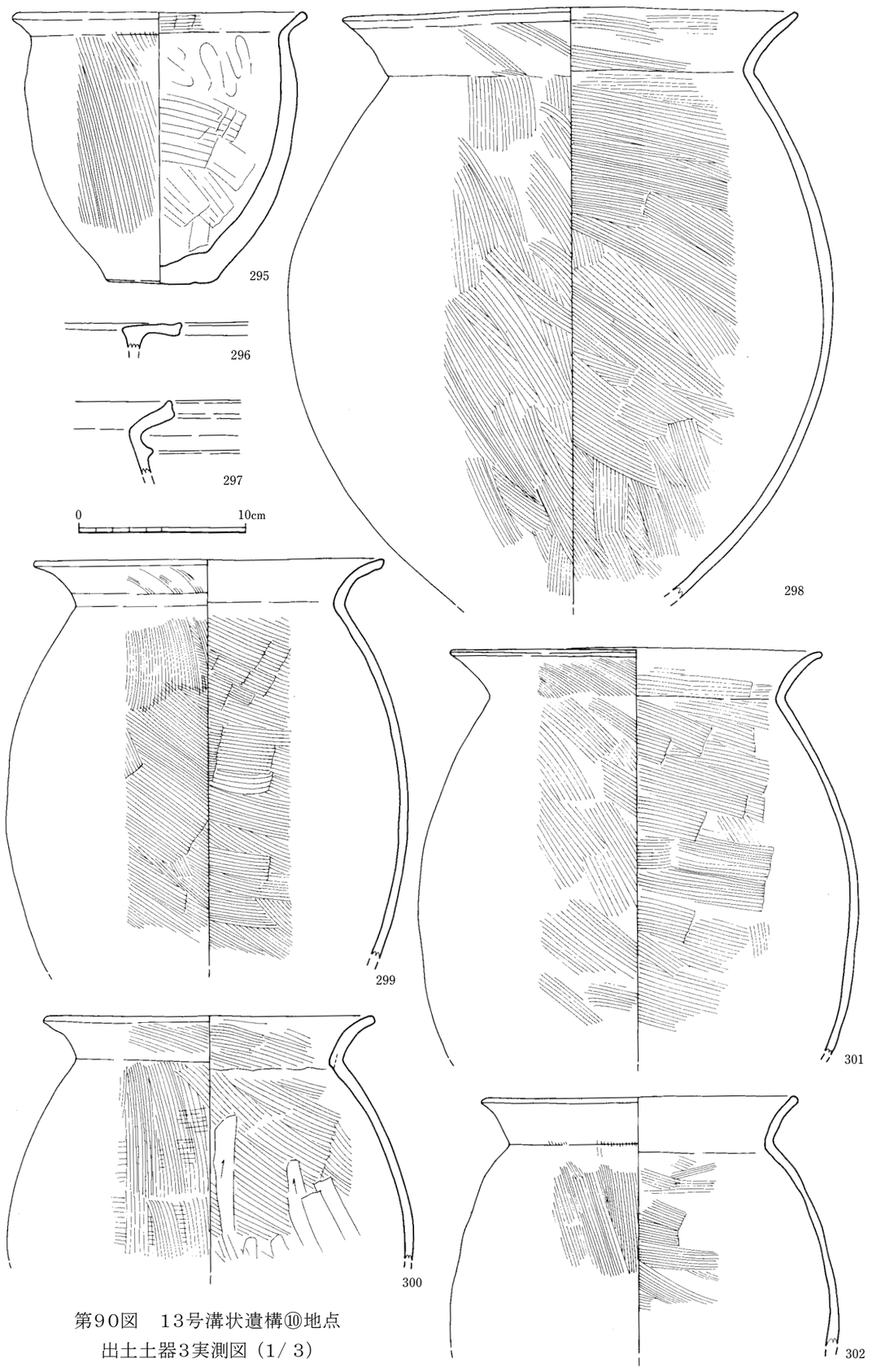


第88図　13号溝状遺構⑩地点出土土器1実測図（282は1/４、他は1/３）

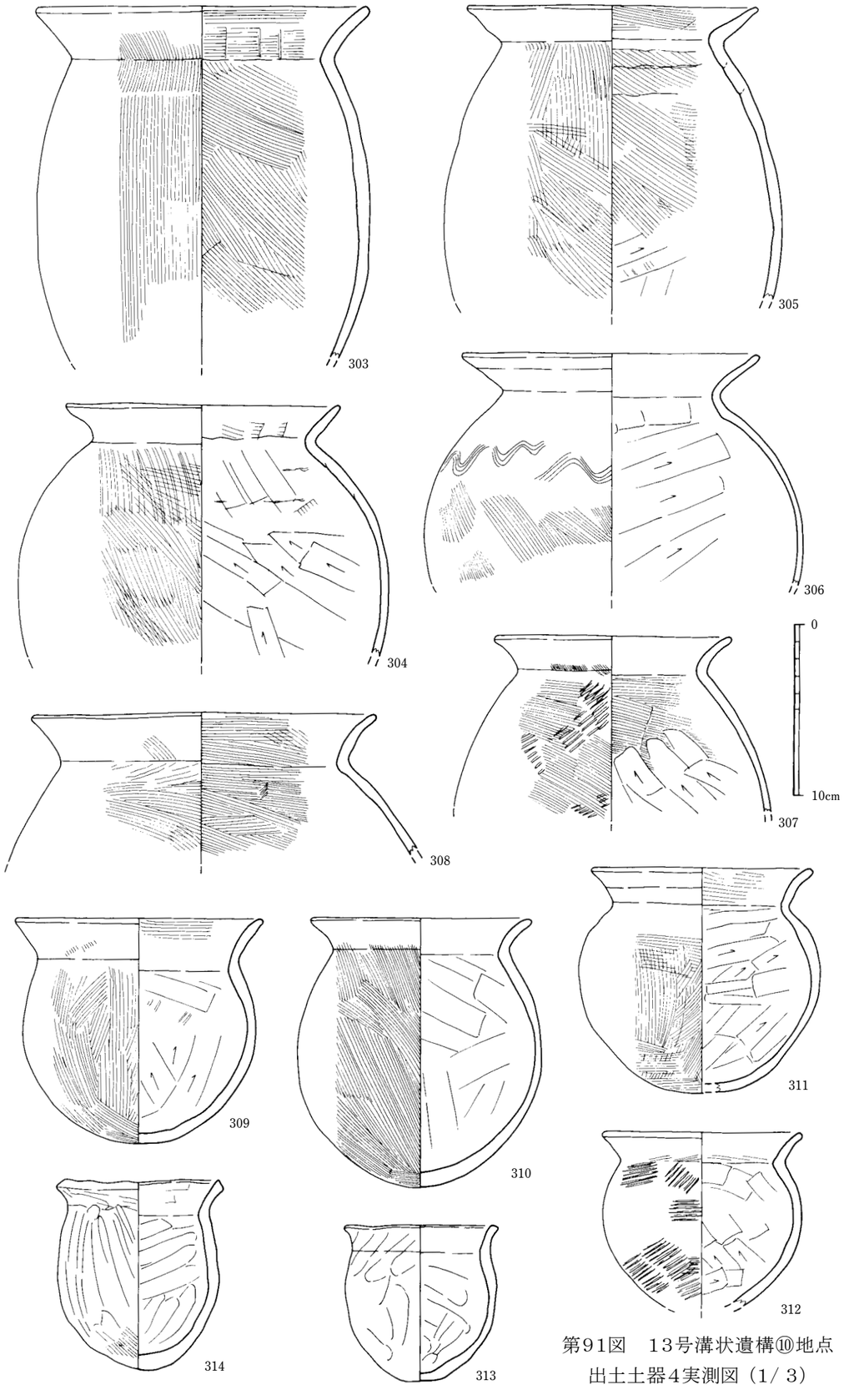
３３６は杯部が深い高杯である。３３７は口縁端部が水平に開く丸みのある杯部である。３３８は脚付鉢の脚部の可能性がある。３３９は高杯脚部で、４ヶ所に穿孔がある。３４０～３４２は器台である。３４０と３４１の脚部中程には穿孔があり、残存状況から３４０は２ヶ所以上で、３４１が５ヶ所か。３４２はミガキを施す。３４３は支脚である。中央にある約 3㎝の穿孔を挟んで、２



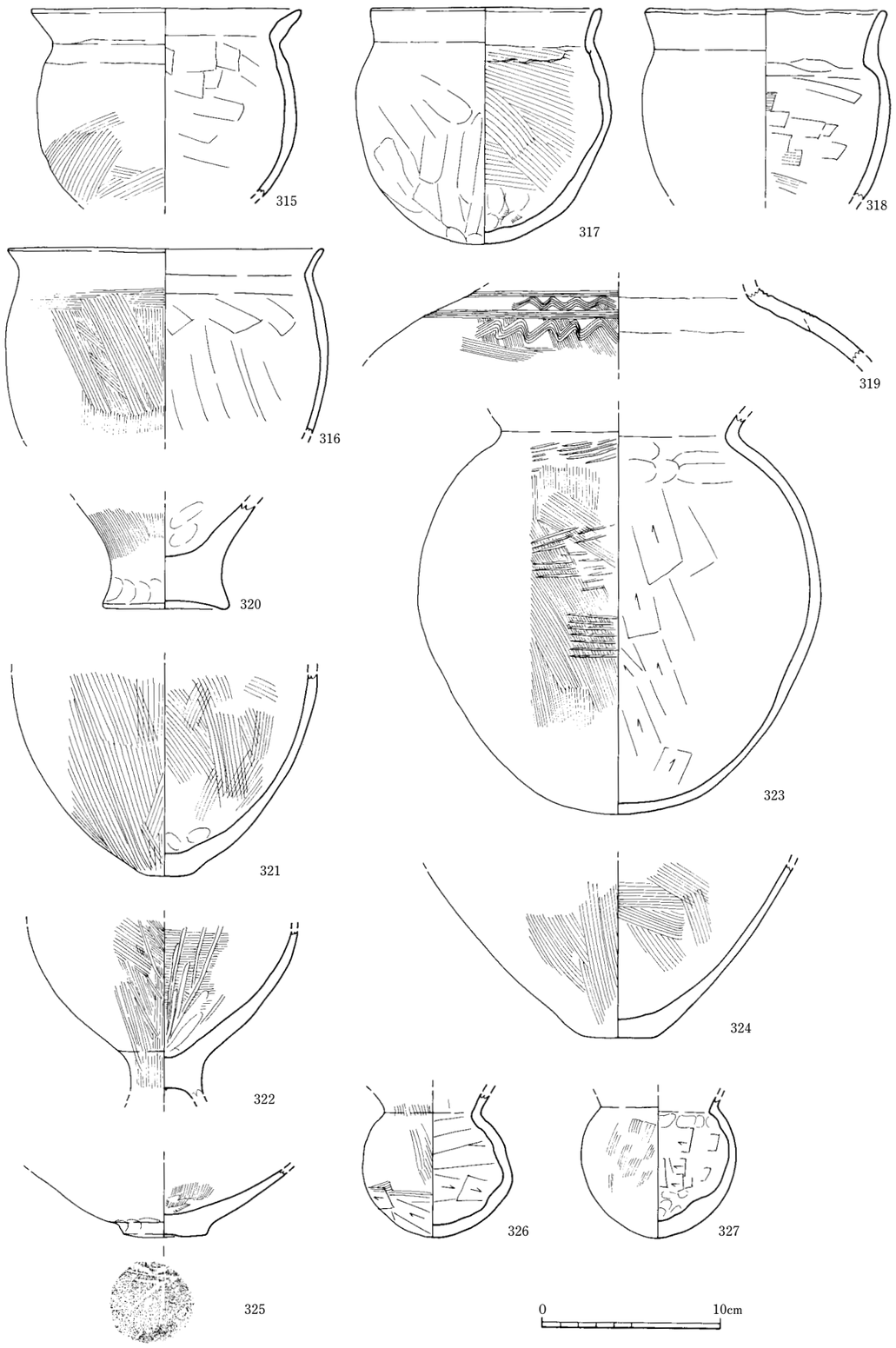
第89図　13号溝状遺構⑩地点出土土器2実測図（1/3）



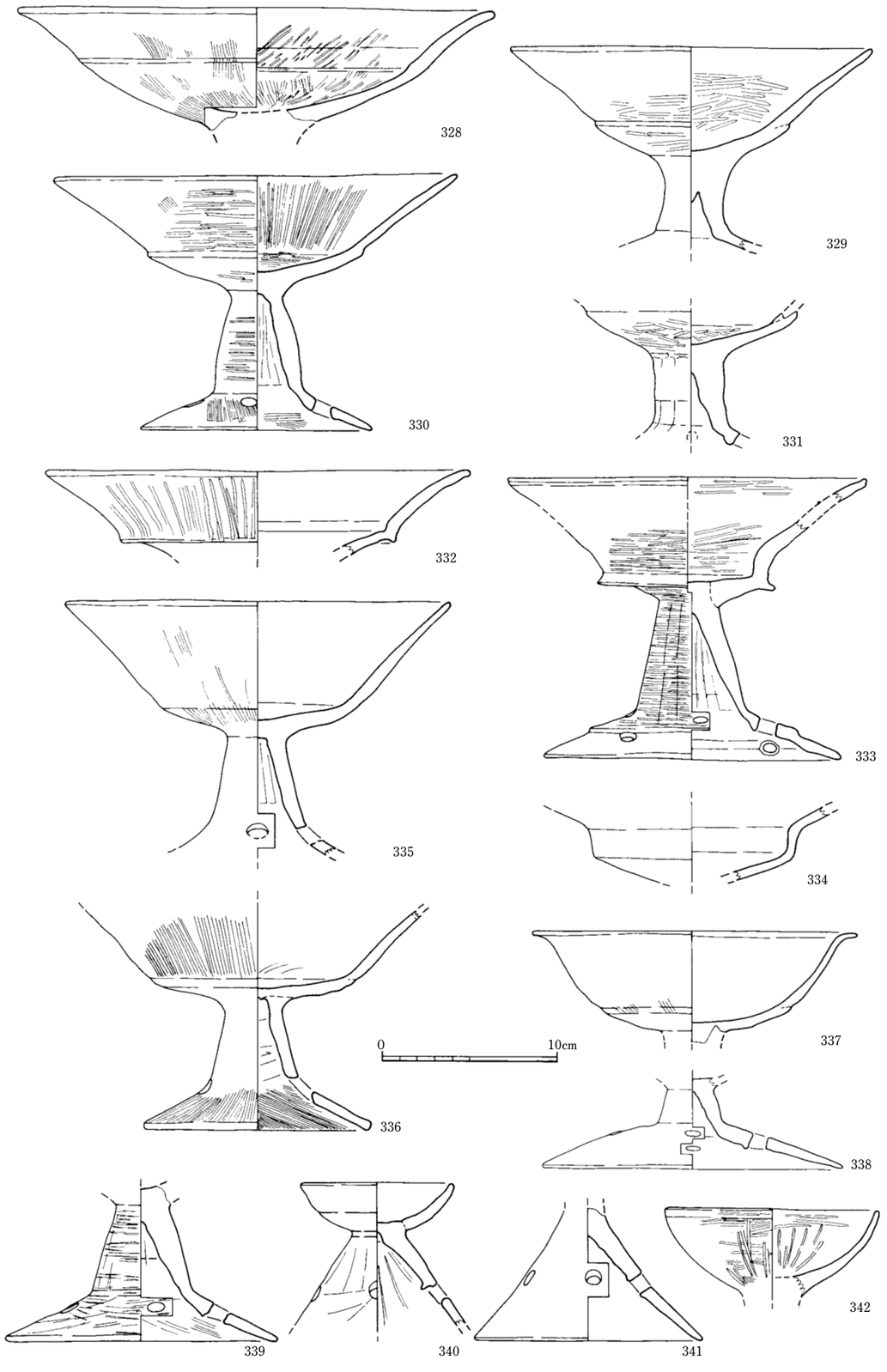
第90図　13号溝状遺構⑩地点
出土土器3実測図（1/3）



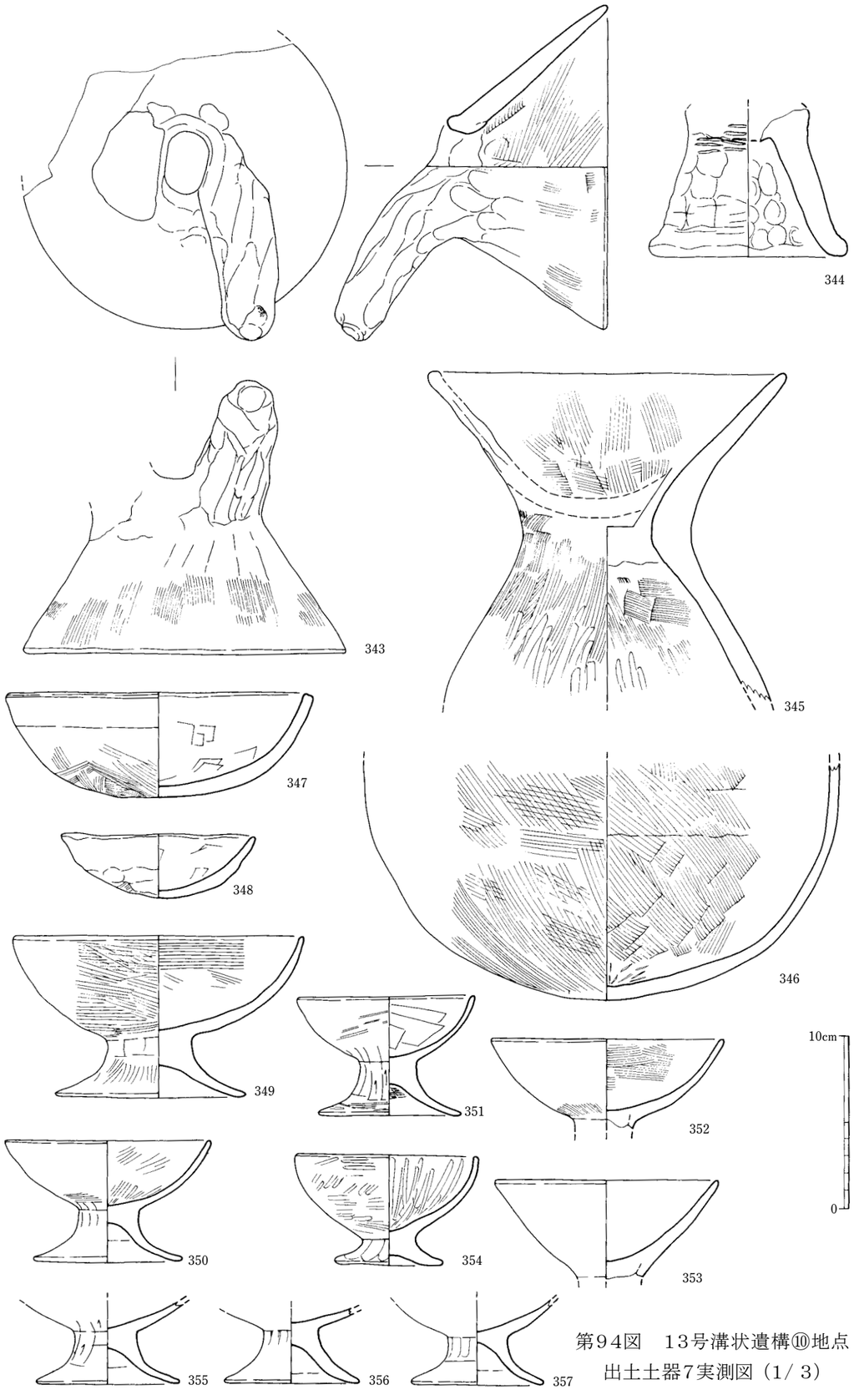
第91図　13号溝状遺構⑩地点
出土土器4実測図（1/3）



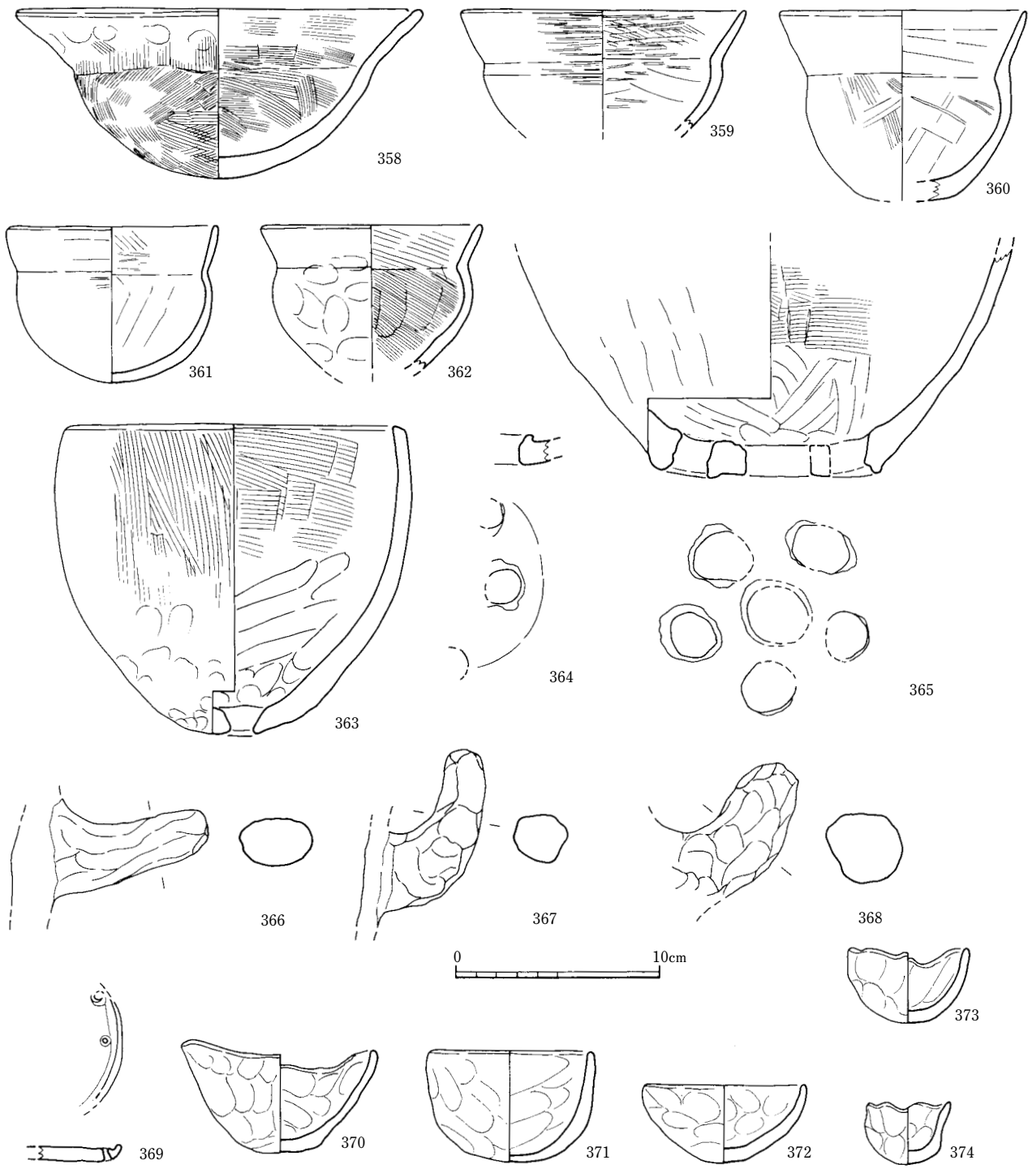
第92図　13号溝状遺構⑩地点出土土器5実測図（1/3）



第93図　13号溝状遺構⑩地点出土土器6実測図（1/3）

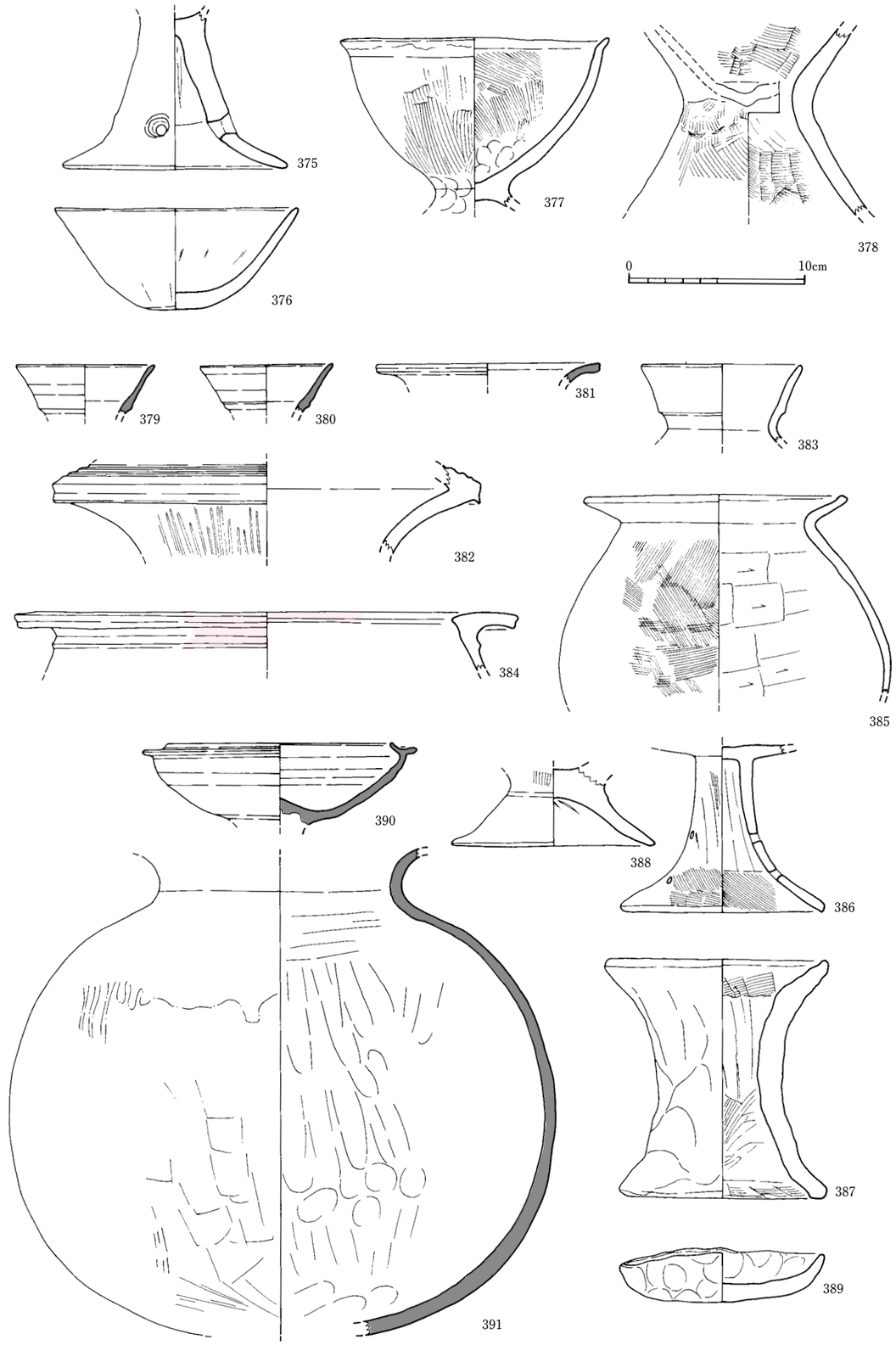


第94図　13号溝状遺構⑩地点出土土器7実測図（1/3）

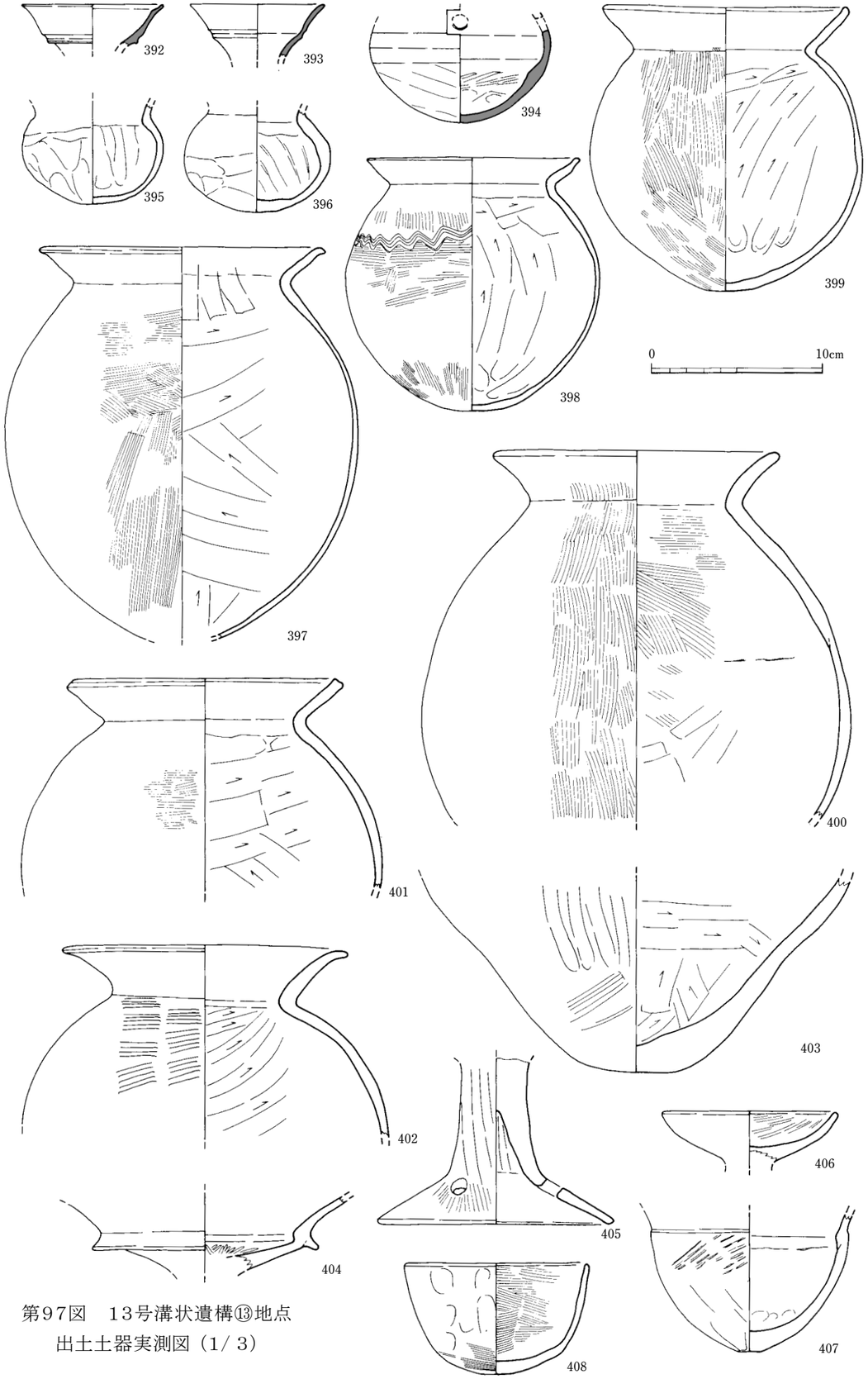


第95図　13号溝状遺構⑩地点出土土器8実測図（1/3）

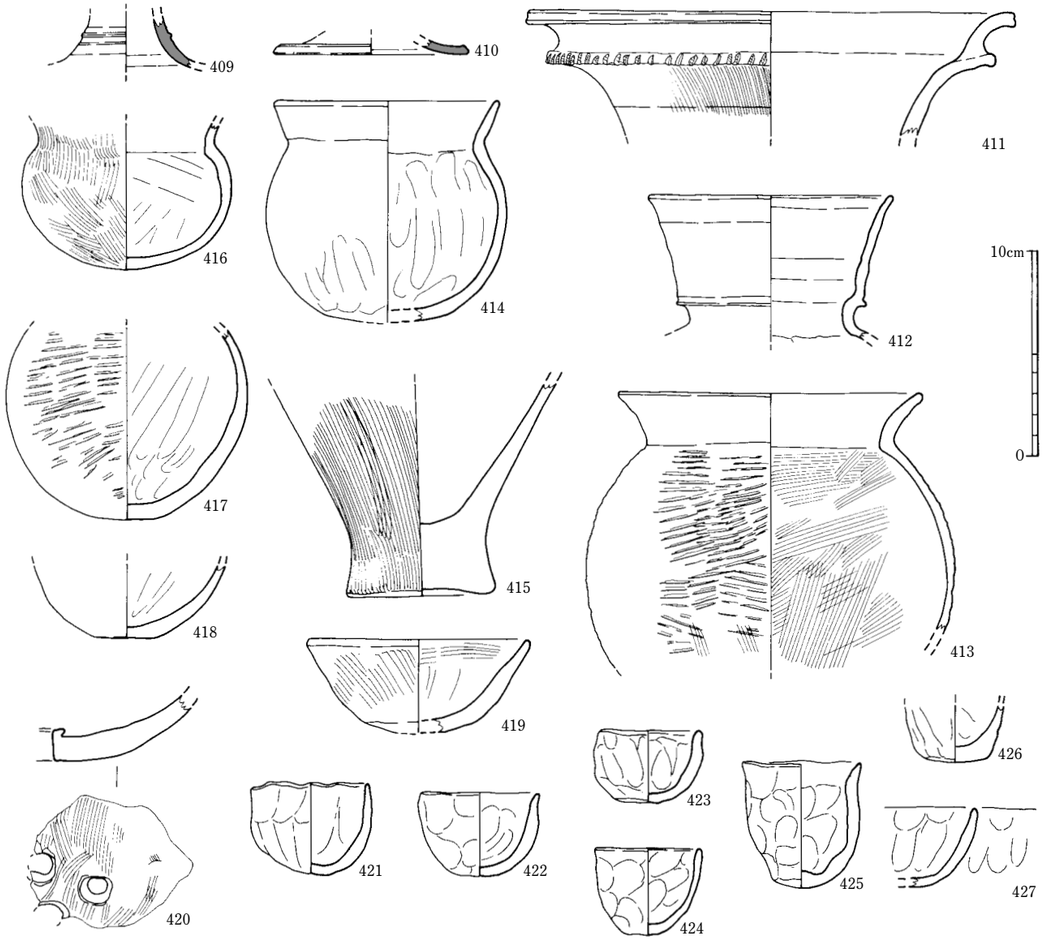
本の支えが角状に伸びる。３４４は支脚の脚部か。３４５は片口状になる器台で、大部分を欠く。３４６は口縁を欠くが、大型の鉢か。内外面には刷毛目が明瞭に残る。３４７と３４８は椀形の鉢で、底部中央は尖る。３４９～３５４は脚付鉢である。３５３のみやや角張った作りである。３５５～３５７は脚付鉢の脚部である。３５８～３６２は鉢である。３５９と３６１の調整はミガキで、他は刷毛目やナデである。３６３は砲弾形の甑で、底部中央に穿孔がある。３６４と３６５は多孔式の甑底部片である。３６５の底部には6ヶ所の穿孔がある。３６６～３６８は甑の把手である。３６６はほぼ水平に伸びるタイプだが、３６７と３６８は牛角状で折れ曲がる。３６９は弥生土器の蓋片か。口縁付近に5㎜以下の穿孔を施す。３７０～３７４は手づくねのミニチュア土器



第96図　13号溝状遺構⑪ー⑭地点出土土器実測図（1/3）



第97図　13号溝状遺構⑬地点
出土土器実測図（1/3）



第98図　13号溝状遺構⑭地点出土土器実測図（1/3）

である。３７０は外へ大きく開く。３７１は直に立つ。

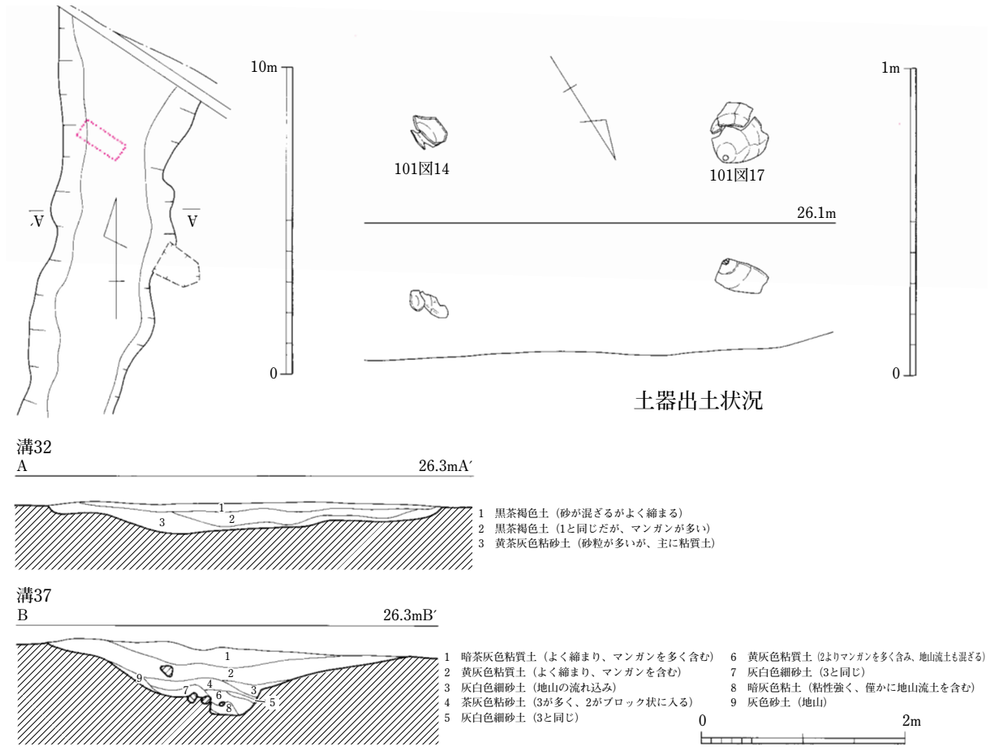
３７５と３７６は⑪地点出土土器である。３７５は高杯の脚部である。屈曲部に４つの穿孔を施す。３７６は鉢である。

３７７と３７８は⑫地点出土土器である。３７７は脚部を欠く脚付鉢か。口縁端部は外に折れ曲がる。３７８は片口状になる器台片か。

３７９と３８０は⑪・⑭地点出土土器である。口縁部が二重口縁状であることから鍾又は壺の口縁部片か。復元口径8、7.6㎝を測る。色調は黒灰色で、形状などから同一製品の可能性もある。

３８１～３８９は⑪・⑬地点出土である。３８１は壺などの口縁部片か。３８２は瀬戸内系の壺片か。口縁部に沈線が数条巡る。３８３は二重口縁壺片か。３８４は弥生土器の甕か。３８５は丁寧な作りの甕である。外面は刷毛目、内面はケズリである。３８６は高杯の脚部で、２方向に４ヶ所穿孔する。３８７は器台である。外面にはナデ、内面には刷毛目やナデが明瞭に残る。３８８は脚付鉢の脚部か。３８９は椀に近い皿である。粗い作りで指ナデが明瞭に残る。

３９０～４０８は⑬地点出土土器である。３９０は脚部を欠く有蓋高杯である。口縁部は受け部より僅かに立ち上がる。外面受け部より下はヘラケズリ、内面は丁寧な横ナデを施すなど作りは丁



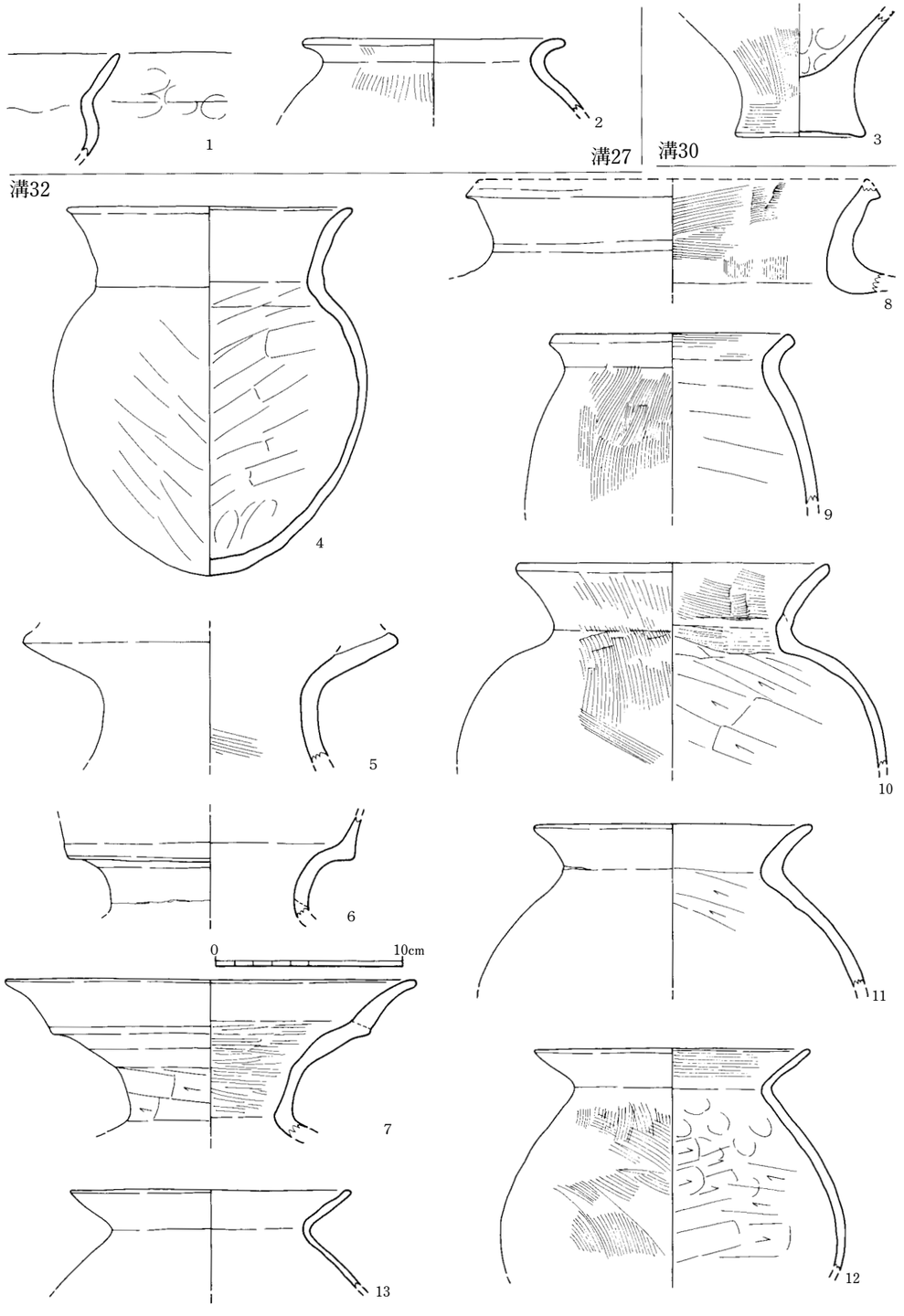
第99図　32号溝状遺構遺物出土状況、断面図・37号溝状遺構断面図（1/200、1/60、1/20）

寧である。口径12.9cmを測る。焼成は良好で、灰色を呈す。３９１は口縁部を欠く壺である。外面肩部には緑色の自然釉が付着し、体部下半には工具痕の筋が放射状に入る。内外面ともナデであるが、内面は無文のタタキの痕跡の可能性も否定できない。３９２と３９３は須恵器瓶又は壺の口縁部片か。これも３７９・３８０と似た形状である。復元口径8.3、7.9cmを測る。３９４は約１cmの穿孔の痕跡があることから、須恵器瓶の体部片か。内面底部には工具の痕跡が明瞭である。３９５と３９６は形状から小型の壺の体部片か。３９７～４０２は甕である。３９８は外来系の甕で外面に波状文がある。４０２は外面に叩きを施す。４０３は壺又は甕の底部か。４０４は屈曲部が尖る高杯の杯部である。４０５は高杯の脚部で、３ヶ所に穿孔がある。４０６は器台である。内面はミガキである。４０７は口縁を欠く鉢で、外面はタタキの後ナデる。４０８は椀形の鉢で、外面はナデ、内面は刷毛目である。

４０９～４２７は⑭地点出土土器である。４０９と４１０は須恵器の高杯脚部片である。４１１と４１２は口縁部が長い二重口縁壺片である。４１３は外面に叩きのある甕である。４１４はやや小型の甕である。４１５は弥生土器の甕底部である。４１６～４１８は壺又は甕の体部片か。４１９は椀形の鉢か。４２０は多孔式の甑底部である。残存状況から穿孔は３ヶ所確認できる。４２１～４２７は甕や鉢形の手づくねのミニチュア土器である。

２７・３０号溝状遺構出土土器（第１００図）

１～３は１４集で報告できなかった遺物である。１と２は２７号溝出土である。１は土師器小型丸底壺片である。ナデの痕跡がある。２は土師器甕の口縁部片である。外面には刷毛目を施す。３

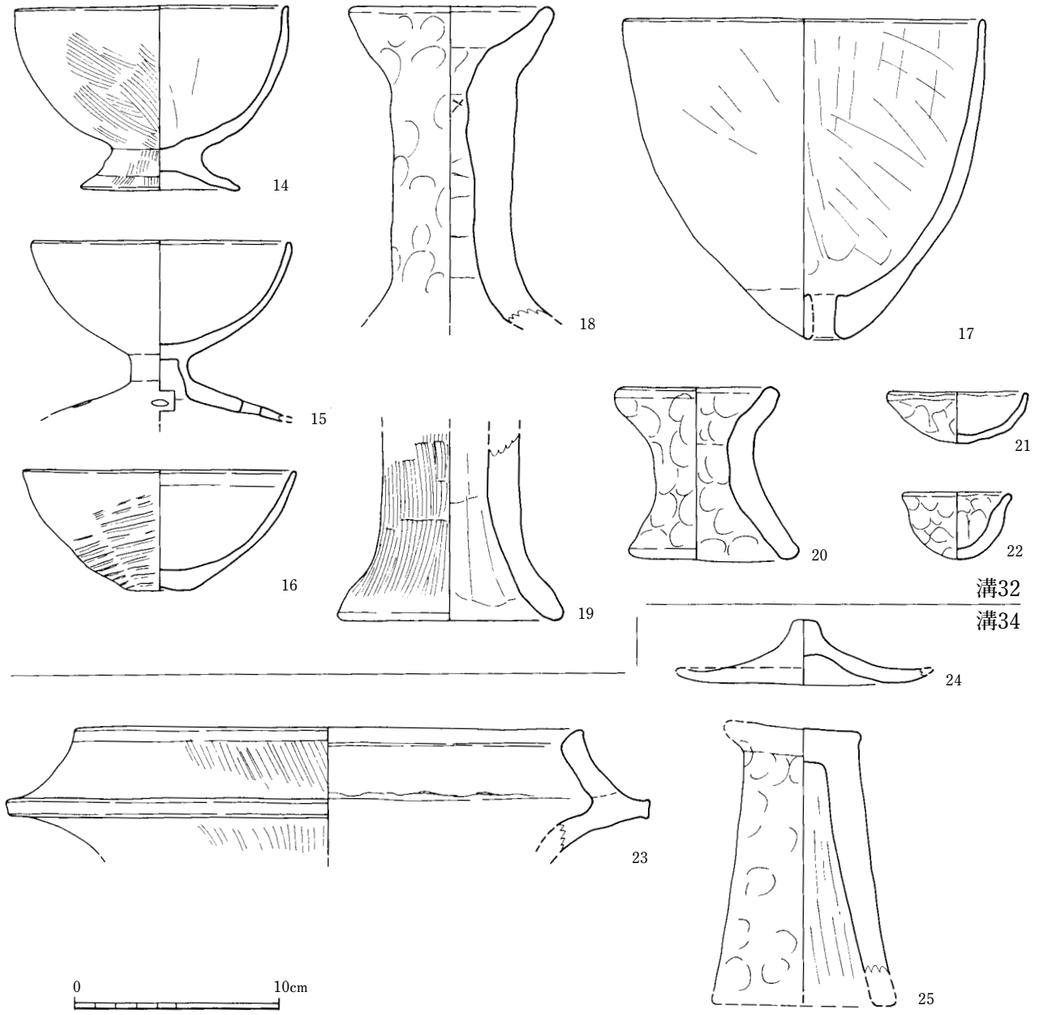


第100図　27・30・32号溝状遺構出土土器実測図（1/3）

は３０号溝出土の弥生土器の甕底部片である。外面には刷毛目、内面には指頭圧痕が残る。

３２号溝状遺構（図版２５・４０、第９９～１０１図）

調査区南側の東で３４号溝と並行して検出した溝で、長さ約25mを検出する。幅は３～4.5m、

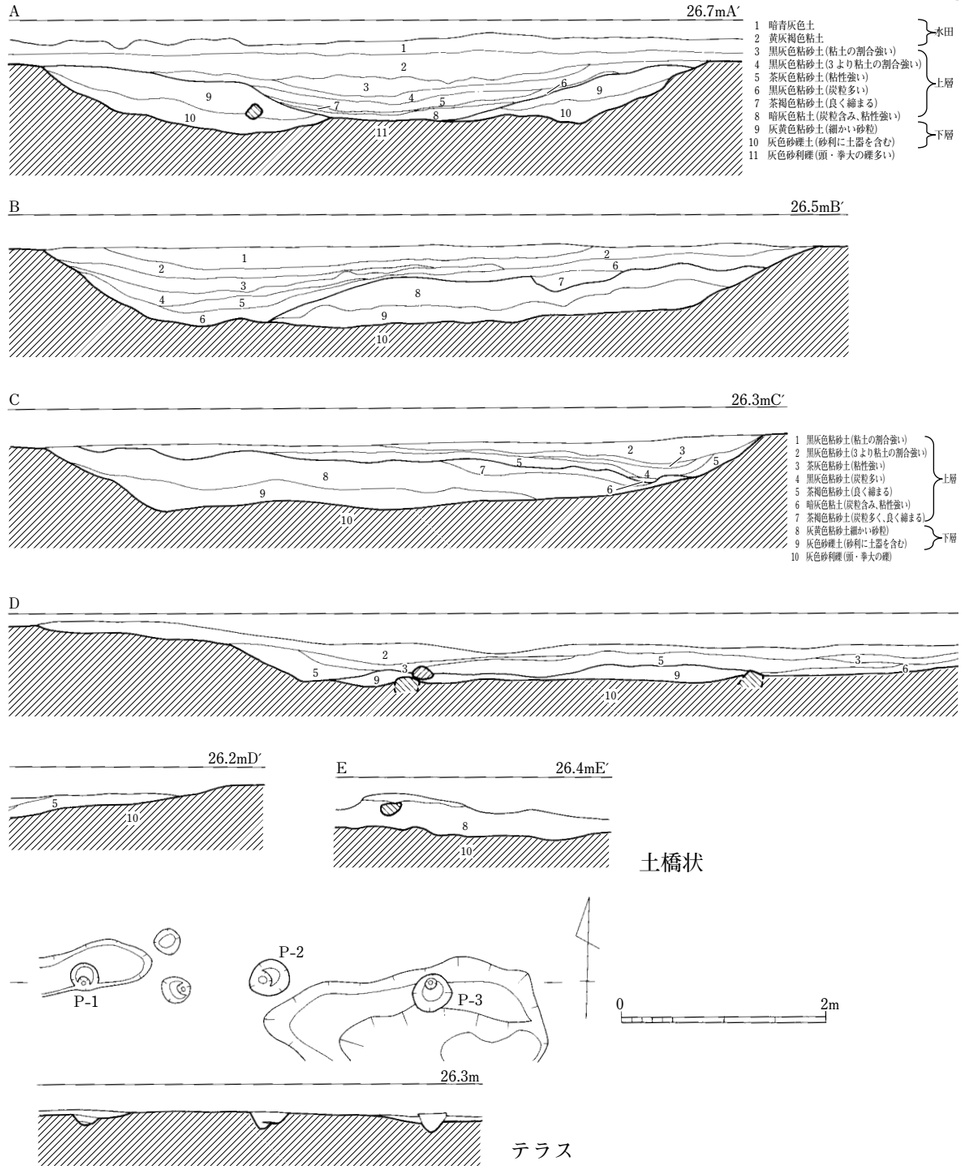


第101図　32・34号溝状遺構出土土器実測図（1/3）

深さは0.2～0.3mで、南側は細く、北側に浅く広くなっている。調査区境を挟んで、北側と溝の底面まで削られている。２０・２１号建物跡と１１号住居跡にも切られている。

出土土器

４は８割残存する壺である。二次焼成により、外面は黄褐色から淡褐色に変色する。口縁部はナデであるが体部はケズリを施す。５～７は二重口縁壺の口縁～頸部片である。５は内傾するタイプのものか。口縁が接合面で剥離している。６は直立するタイプである。７は大きく口を開くタイプで、頸部には外面にケズリ、内面にはミガキを施す。８は甕の口縁部片か。口縁には煤が付着する。９も甕片である。外面には刷毛目、内面にはナデを施す。１０～１３は甕である。１０は厚手の甕で焼成も良好で赤褐色を呈し、非常に堅固な作りである。外面は刷毛目、内面はケズリを施す。１２は外面に刷毛目､内面には指頭圧痕とケズリが残る。１４と１５は土師器の脚付鉢である。１５は大きく脚が開くタイプで、穿孔を施す。１６は土師器の鉢である。外面にはタタキを施す。１７は砲弾状を呈する土師器の甑である。調整は内外面にケズリを施す。底面中央には約2cmの円



第102図　36号溝状遺構土層、土橋状土層断面図、テラス柱穴実測図（1/60）

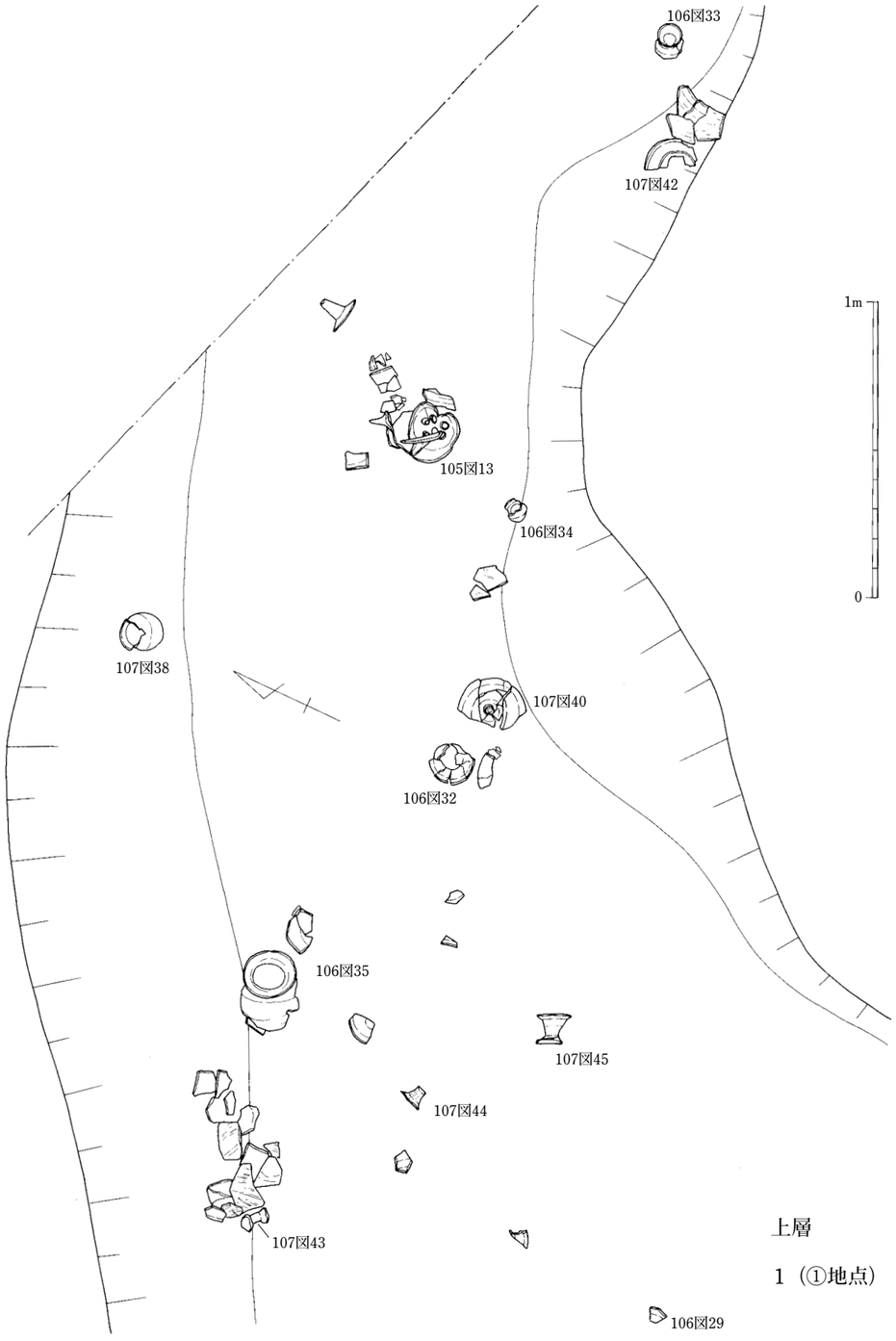
形の穿孔を施す。１８～２０は支脚である。１９の外面は刷毛目である。２１は椀形、２２は鉢形の手づくねのミニチュア土器である。いずれも指頭圧痕が明瞭に残る。

３４号溝状遺構（第１０１図）

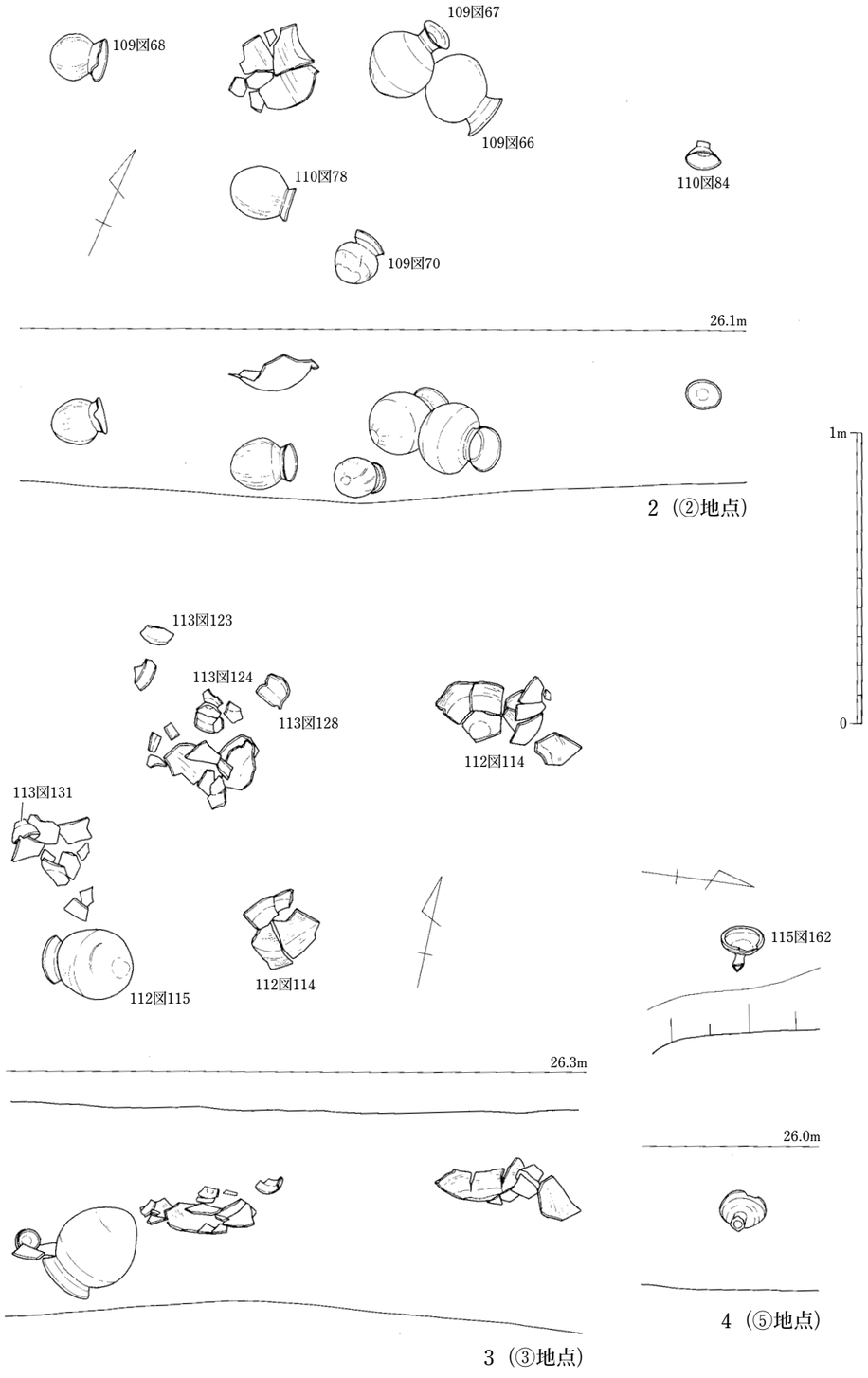
３２号溝の西側でこれに沿うように検出した溝で、約26mを検出する。平安時代の１７・１８・２０号建物跡と、１１号住居跡に切られる。幅は均一で、1～1.5m、南側では削平されて消えるが、深さは0.1～0.2mである。３２号溝と同様で調査区境を挟んで北では削平されている。

出土土器

２３は二重口縁壺の口縁部片である。２４は蓋である。内面中央を指で押し当てながら、天井部をうまく撮みあげている。２５は支脚片で、脚端部など所々を欠く。



第103図　36号溝状遺構遺物出土状況1実測図（1/20）



第104図　36号溝状遺構遺物出土状況2実測図（1/20）

３６号溝状遺構（図版２６～２８・４１～４５、第１０２～１１６図）

２区の南西で検出し、南西調査区から北東の大谷へ延びる大溝である。ほぼ直前的に延びており総延長は約 45m、幅は 1.5 ～ 6m 程度である。検出面では古墳時代中期の埋土が幅広く検出され、それを掘削して蛇行する断面「U」字型の溝を谷まで検出している。A－A′の１～８層がそれに当たる。検出面から 0.4 ～ 0.8m の深さで、北側と南側の壁面は緩やかであるが、下層を切っている。下層が堆積した後に、中央部の窪みを再掘削しているようである。その再掘削の際に幅 4m のテラス状の遺構を整形し柱穴を掘削しているが､構造物として明確な判断が出来ない。柱間 1.65 ～ 1.75m の柱Ｐ１～３の２間分は並ぶようであるため、柵を設置していた可能性はある。また、検出した約半分程度のところで土橋状になる部分を検出し、その面は硬化していた。幅は南から 0.5 ～ 2m 程度とやや幅広くなる。ただ、底面から高さ約 0.15m で大溝の上端は削平されていることも考慮すると土橋となるのか疑問も残る。出土遺物には土師器甑や初期須恵器有蓋高杯などが出土する。

下層の存在は、古墳時代中期の埋土を掘削している時に地山と似た埋土から土器が出土することで確認できた。この時期には溝は掘削されている。北東部は削平により残りが悪いが大谷へと接続し、幅は 6.2 ～ 11.5m、上端からの深さは 0.6 ～ 0.8m で、C－C′とD－D′の８・９層がそれにあたる。出土遺物の殆どは集落側から廃棄されたもので８層に堆積しているが、溝底面９層に意図的に埋置されていたと考えられる複数の完形品も出土している。

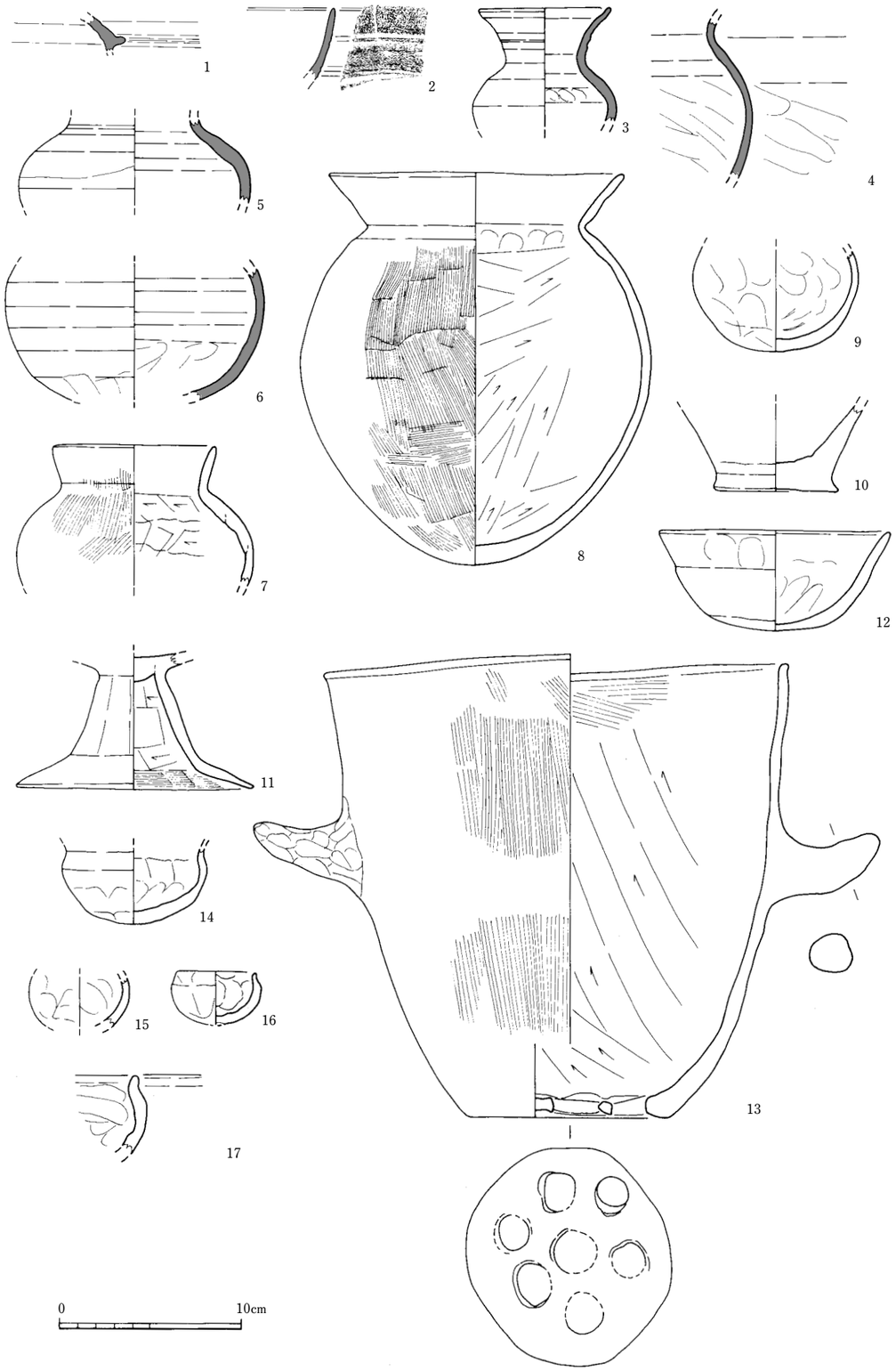
遺物出土状況１～４

１は細長い調査区に分断されるところから西側の上層の出土遺物状況である。４は溝の東側の谷に近い付近でやや浮いて出土している。２と３は１５号住居跡・２２・２３号建物跡の南側で廃棄された土器群と底面に埋置されていた土器群である。出土した土器は１３号溝と同様に各地点ごとに報告する。各地点については、第７８図を参照して頂きたい。

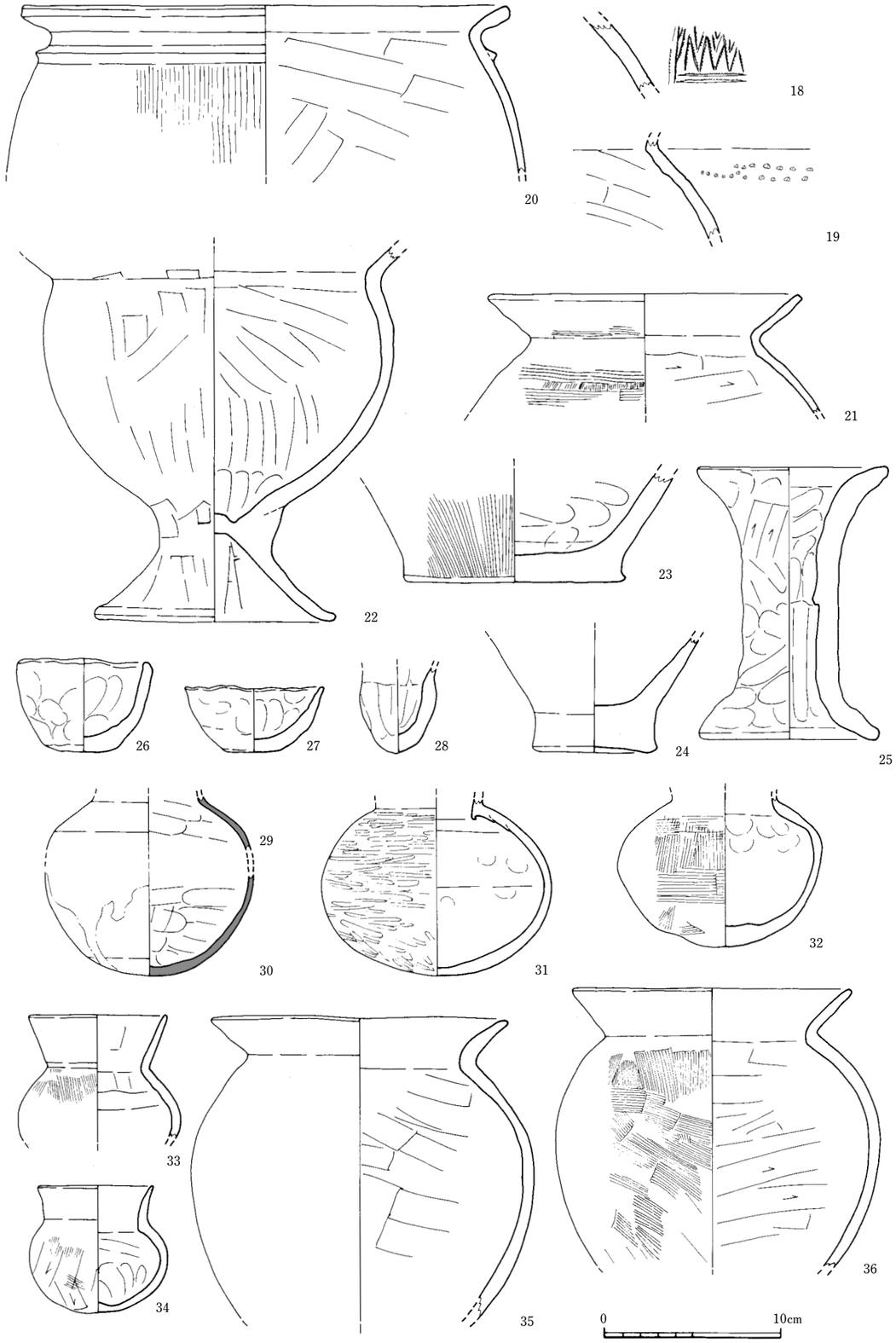
出土土器

１～４５は①地点出土土器である。１～１７は上層黒灰色粘砂土出土である。１～６は須恵器である。１は杯の口縁部片で端部を欠く。内面には緑色の自然釉が付着する。２は壺などの口縁部片か。外面の沈線間には波状文が巡る。３は小型の壺片である。薄手な作りで、良く焼けている。色調は黒灰色を呈す。内外面とも横ナデである。復元口径 7.2㎝を測る。４も壺の体部片か。これも薄手な作りである。色調は灰色で、内外面の体部にはナデの痕跡が残る。５と６は瓶や壺の体部片で、色調は黒灰～青灰色や焼成具合から同一の可能性がある。６は外面底部付近にケズリを施す。７はやや外へ開く直口の壺か。８は甕である。外面には細かい刷毛目を施す。９と１０は壺または甕の底部片である。１１は高杯の脚部片である。内面の調整は屈曲部を境にケズリと刷毛目に分かれる。１２は口縁下にゆるやかな凹みが見られることから鉢か。１３は多孔式の甑である。底面中央の孔を中心に７ヶ所の穿孔がある。外面は刷毛目で、内面はケズリ後にナデを施す。１４～１７は鉢や椀形に近い手づくねのミニチュア土器である。

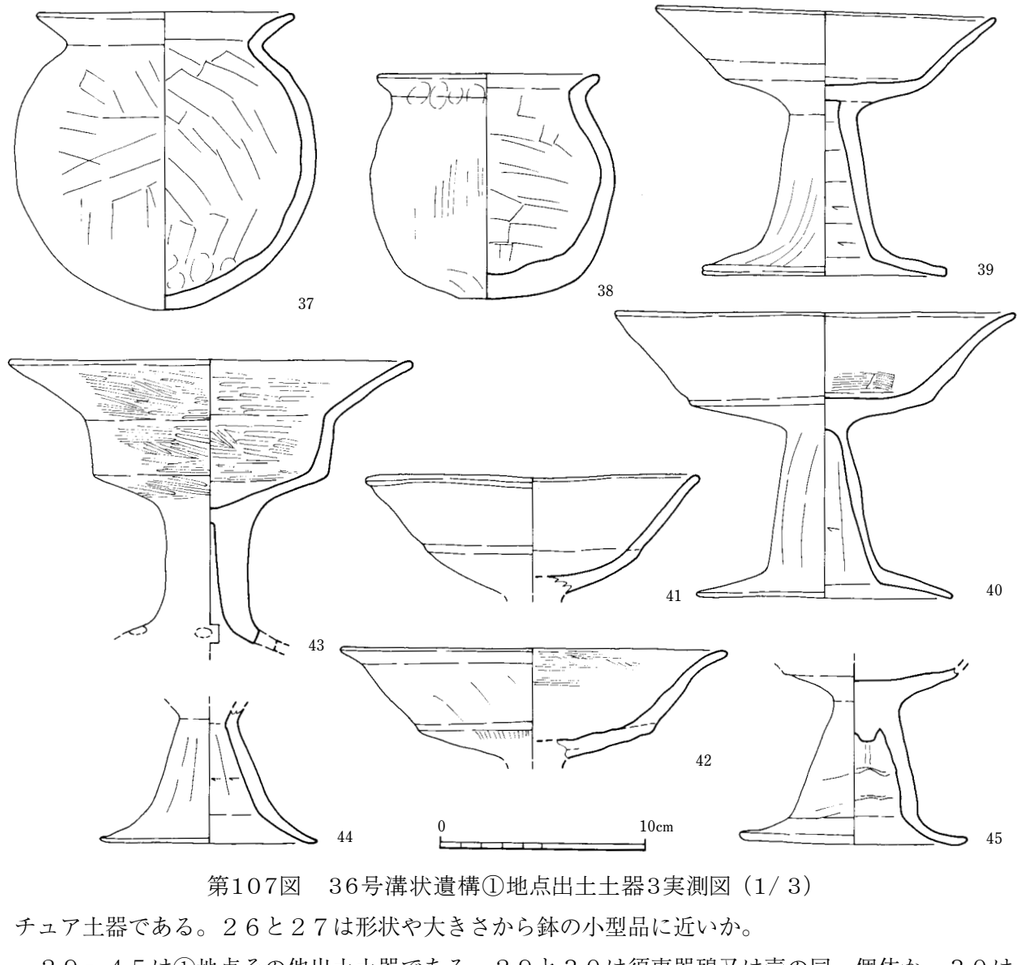
１８～２８は下層灰黄色粘砂土以下出土である。１８は貝殻羽状文、１９は刺突文を外面に施す壺などの体部片か。２０は弥生土器甕片である。破片から復元しているので口径は不安定である。外面の頸部下には三角形の突帯が巡る。２１も甕で、外面の肩部付近には波状文状に巡る。２２は脚付甕片である。厚手の作りで、内外面には工具によるナデの痕跡がある。２３と２４は壺や甕の底部片か。２５は器台である。工具の痕跡や指頭圧痕が明瞭に残る。２６～２８は手づくねのミニ



第105図　36号溝状遺構①地点出土土器1実測図（1/３）



第106図　36号溝状遺構①地点出土土器2実測図（1/3）

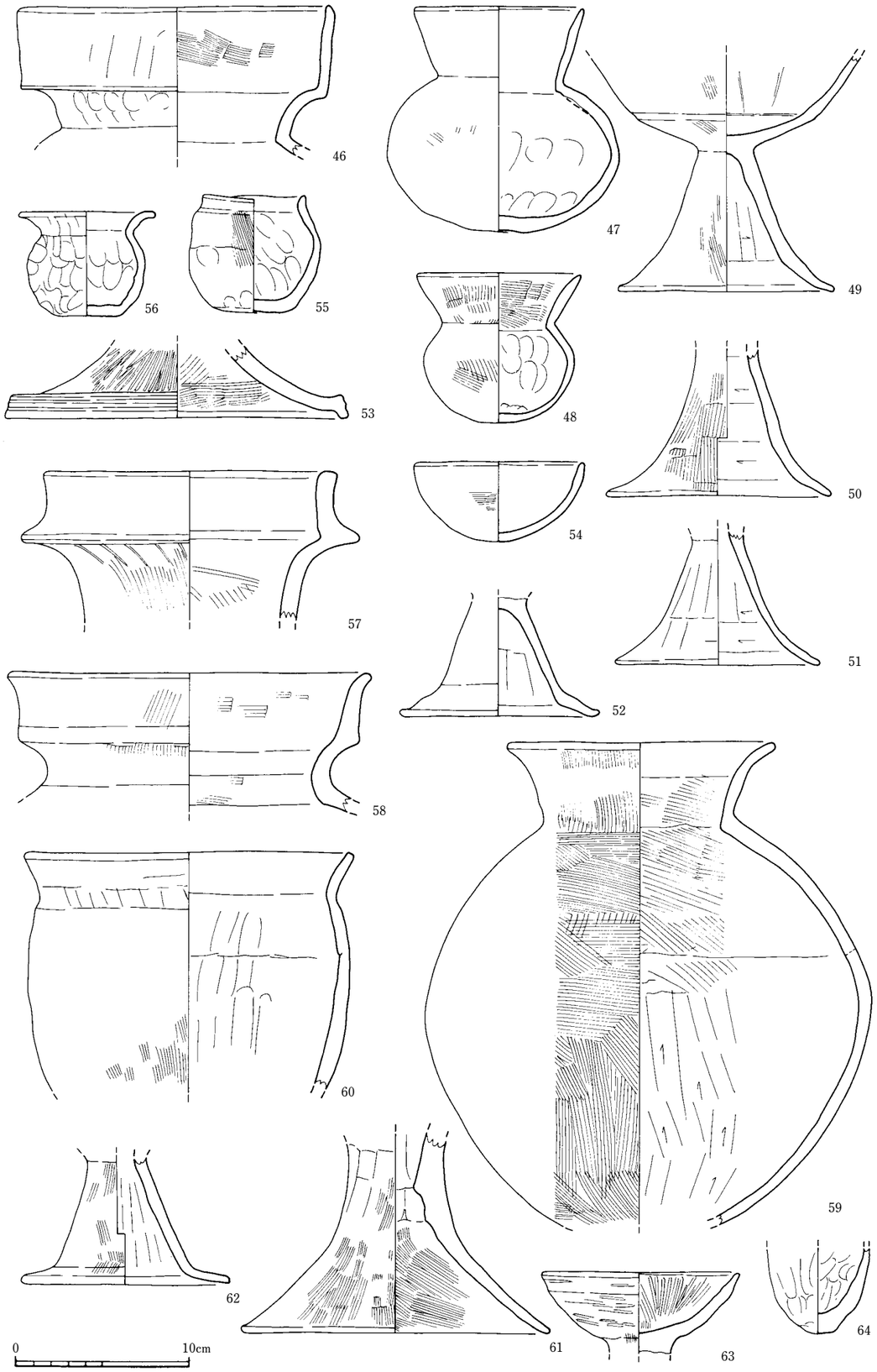


第107図　36号溝状遺構①地点出土土器3実測図（1/3）

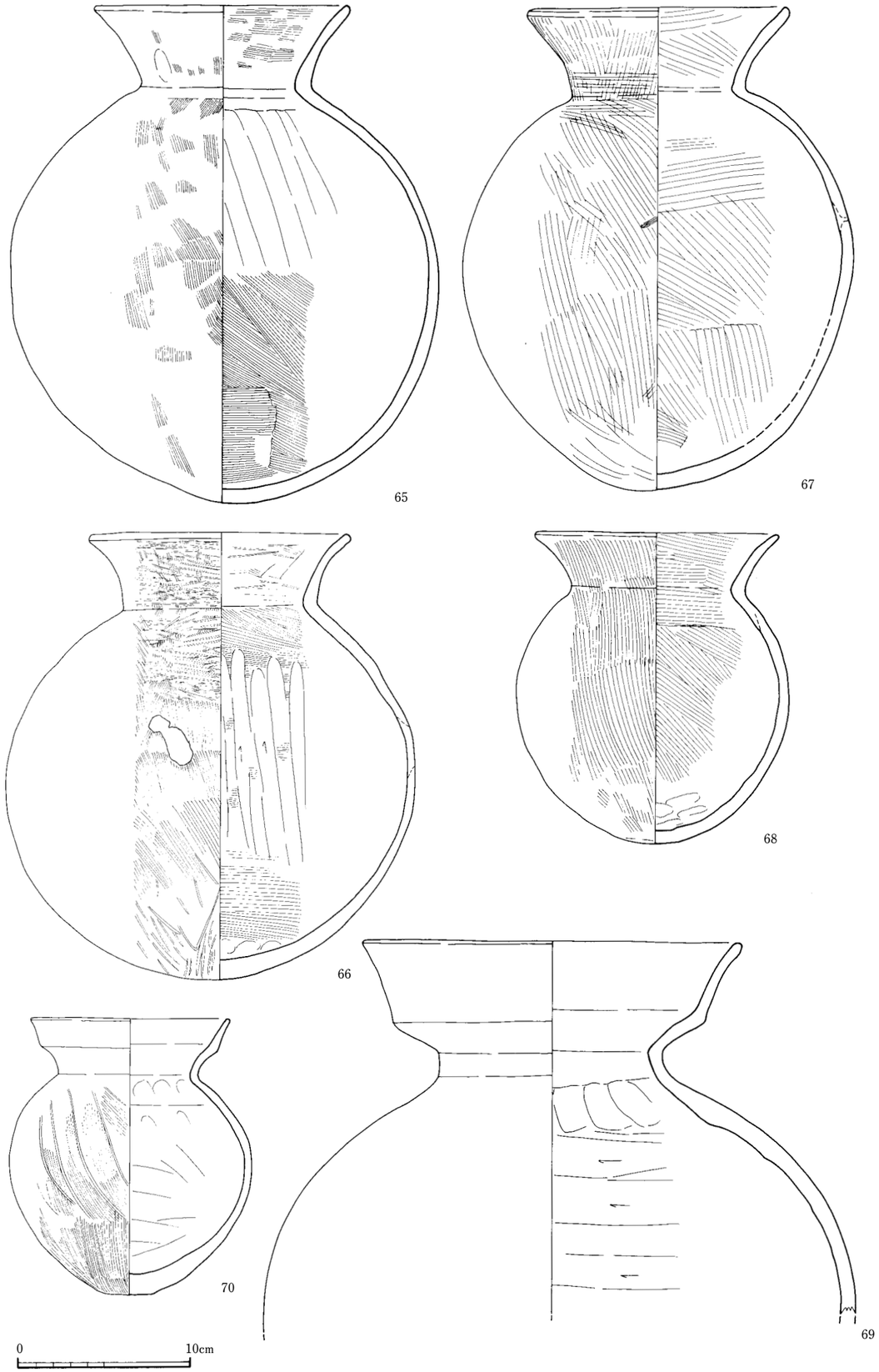
チュア土器である。２６と２７は形状や大きさから鉢の小型品に近いか。

２９～４５は①地点その他出土土器である。２９と３０は須恵器瑞又は壺の同一個体か。３０は外面に溶解していない黄白色の自然釉が垂れている。いずれも内面にはナデの痕跡が明瞭である。３１と３２は壺の体部片か。３１は外面に細かいミガキを施し、丁寧に作られている。３２は３１より角張った壺の体部片である。３３と３４は小型の壺である。３５と３６は甕である。３５は器面が剥離していて外面の調整は不明であるが、内面は工具によるナデか。３６の内面は工具によるナデ以外にもケズリを施す。３７と３８はやや小さめの甕である。３９～４２はほぼ同形の高杯である。４３は形状から畿内系の高杯か。内外面に細かいミガキを施す。４４はやや小さいサイズの高杯脚部である。４５も高杯脚部であるが、杯部の屈曲部で口縁部が剥離している。

４６～８３は②地点出土土器である。４６～５６は②地点上層黒灰色粘砂土出土である。４６は二重口縁壺の口縁部片で、ほぼ直に立ち上がる。４７は壺である。口縁部を一部欠くもほぼ完存品であるが、外面は摩滅する。色調は橙褐色であるが、1/3以上は黒斑する。４８は小型の壺である。内面の体部はナデであるが、他は刷毛目である。４９は高杯で口縁部片を欠く。５０～５２は高杯の脚部である。５３は壺とも考えたが、窄まりすぎるため高杯の脚部か。外面の脚端部には浅い２条の沈線が巡る。瀬戸内系か。５４は底部中央がやや尖るので鉢か。５５と５６は手づくねのミニチュア土器の壺形や甕形である。５５は短頸、５６の口縁は外側に大きく開く。５７～６４は



第108図　36号溝状遺構②地点出土土器1実測図（1/3）

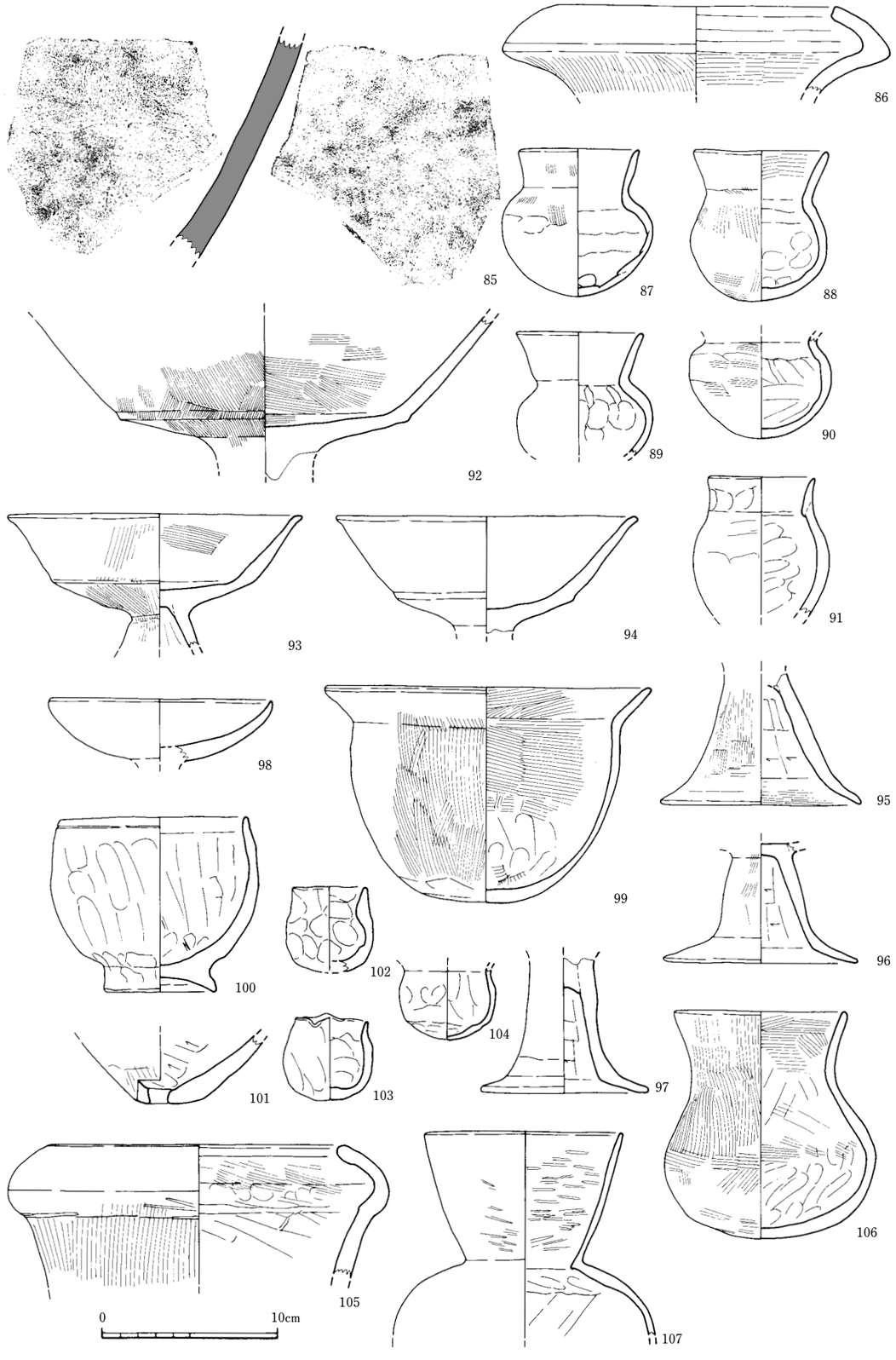


第109図　36号溝状遺構②地点出土土器2実測図（1/3）

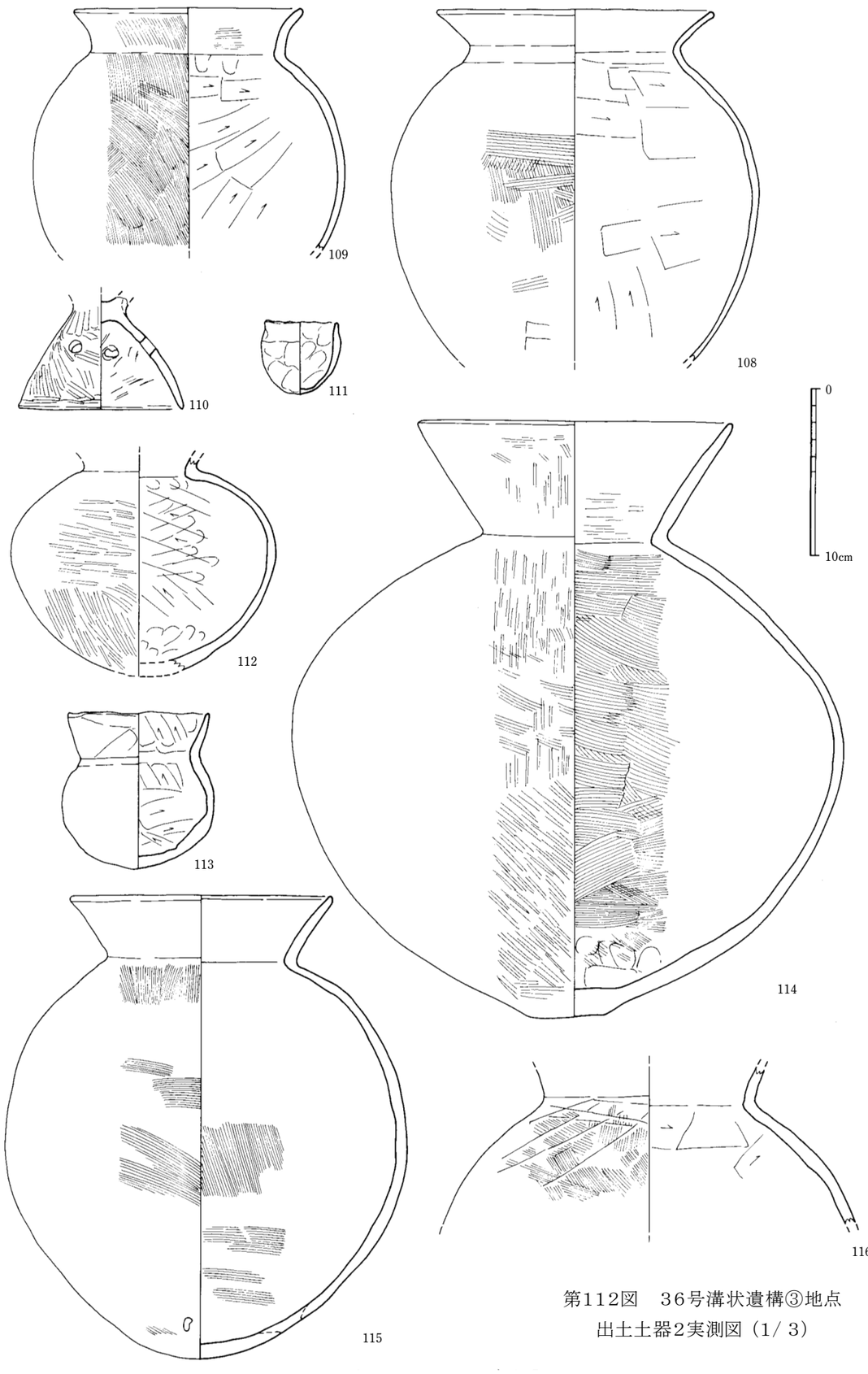
第110図　36号溝状遺構②地点
出土土器3実測図（1/3）

灰黄色粘砂土出土である。５７と５８は二重口縁壺の口縁部片である。５７は内傾し、５８は口縁端部が外に開くが、直口するタイプである。５９は広口の壺である。内外面は刷毛目であるが、内面体部下半は工具によるナデか。６０は甕であり、内面体部上半に接合痕が残る。６１と６２は高杯の脚部である。６１はやや大型の高杯で、弥生時代後期のものか。６３は高杯の杯部で、内外面は丁寧にミガキを施す。６４は手づくねのミニチュア土器の体部片である。６５～８４は②地点その他出土土器である。６５～６８の体部は中央で最大径となり、楕円形状を呈する同形状の広口の壺で、内外面には刷毛目とナデを施す。６５の外面体部は工具によるナデを施し、刷毛目が消えている。６６の体部には外側から打ち欠いた穿孔が２ヶ所ある。また外面には工具によるナデ消しの痕跡が明瞭に見える。６７と６８は口縁を一部欠くが、ほぼ完形品である。６７の焼成は良好で、色調は橙色を呈す。体部には２ヶ所、黒斑がある。６９と７０は大小の二重口縁壺である。６９の外面は丁寧なナデだが、内面はケズリの痕跡がある。７０の外面には刷毛目の単位ごとに工具痕が明瞭に残る。完形品である。７１と７２は壺の口縁部片である。７１は内面に工具痕が残る。７３～７６は小型の壺で、８割以上残存する。７６は頸部より上を欠く。７７は鉢に近い形状である。７８は甕であり、口縁と体部を一部欠くが、ほぼ完存品である。内外面には細かい単位の刷毛目を施す。外面には煤が付着する。７９はナデやケズリの痕跡があるやや粗い作りの印象を受ける甕である。８０は他よりも厚手である。壺の体部か。口縁～頸部を欠くが、６５の壺と同形状である。８１と８２ともに８割以上残存する高杯である。８３は大型の鉢で、体部は厚手の作りである。内外面は刷毛目やナデを施す。８４は脚端部を一部欠く、ほぼ完形の脚付鉢である。

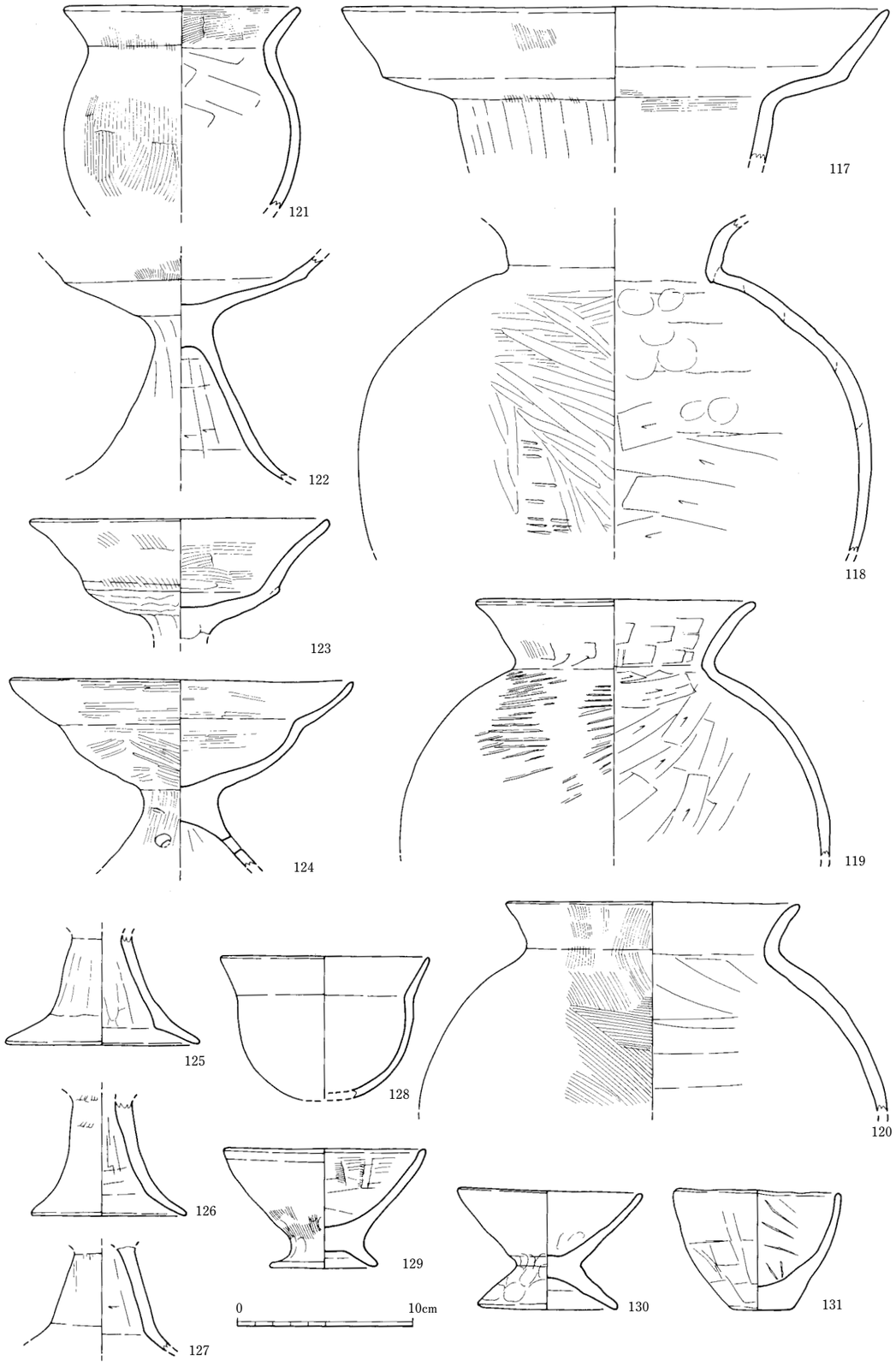
８５～１３１は③地点出土土器である。８５～１０４は③黒灰色粘砂土出土である。８５は厚手な作りから須恵器甕の体部片か。焼成は良好で、色調は灰色を呈す。内外面は丁寧なナデを施しているため、タタキの痕跡は見えない。８６は袋状口縁壺の口縁部片である。８７～９１は小型の壺である。９０も口縁を欠くが、壺の体部か。９１の口縁は直口する。９２～９４は高杯の杯部である。９２は口縁と脚部を欠く大型の高杯の杯部である。９５～９７は高杯の脚部である。９６と９７は脚部の屈曲が明瞭である。９８は丁寧に作られている器台の上部である。９９は鉢である。内面は丁寧な刷毛目やナデが残る。１００は脚付鉢である。工具や指によるナデが明瞭に残る。脚部は指でつまんで整形した痕跡がある。弥生時代終末期頃のものか。１０１は底部中央に穿孔のあることから、甑の底部である。１０２～１０４は手づくねのミニチュア土器である。１０４は口縁を欠く。１０５～１１１は③灰黄色粘砂土出土である。１０５は袋状口縁壺の口縁部片である。１０６は頸部と体部との境が不鮮明な壺である。体部中央がやや角張る。内外面には刷毛目が残る。１０７は口縁の長く、薄手な作りの壺である。１０８と１０９は甕である。１１０は器台の脚部で、円形の穿孔が５ヶ所ある。焼成や橙色の色調などから９８と同一の個体の可能性がある。１１１はミニチュア土器である。１１２～１３１は③地点その他出土土器である。１１２は口縁を欠くが、壺の体部か。１１３はナデが明瞭に残る粗い小型の壺である。１１４はやや大型の平底の壺である。外面体部は工具によるナデの痕跡がミガキ状になる。１１５は口縁を一部欠く、ほぼ完形の壺である。１１６は壺の頸部～肩部片か。外面には交差する線刻を施す。１１７は大きく口を外へ開く二重口縁壺の口縁部片である。１１８は口縁を欠くが、壺の頸部～体部片である。頸部の形状から二重口縁壺の可能性がある。外面は橙色だが、内面は黒褐色を呈す。１１９は外面にタタキを有する壺である。１２０は短頸の壺である。１２１は甕である。１２２は端部を欠く高杯片である。１２３は



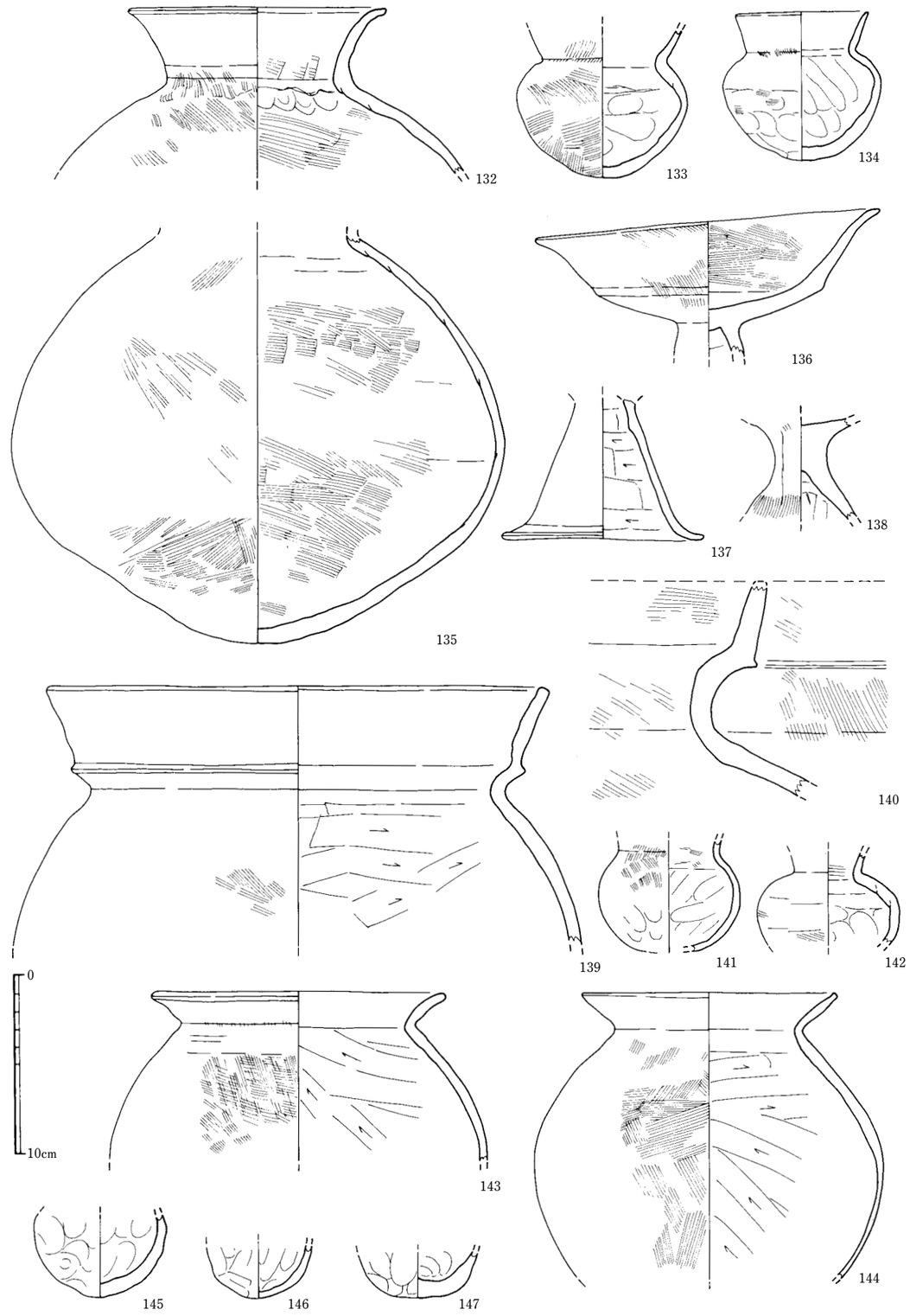
第111図　36号溝状遺構③地点出土土器1実測図（1/ 3）



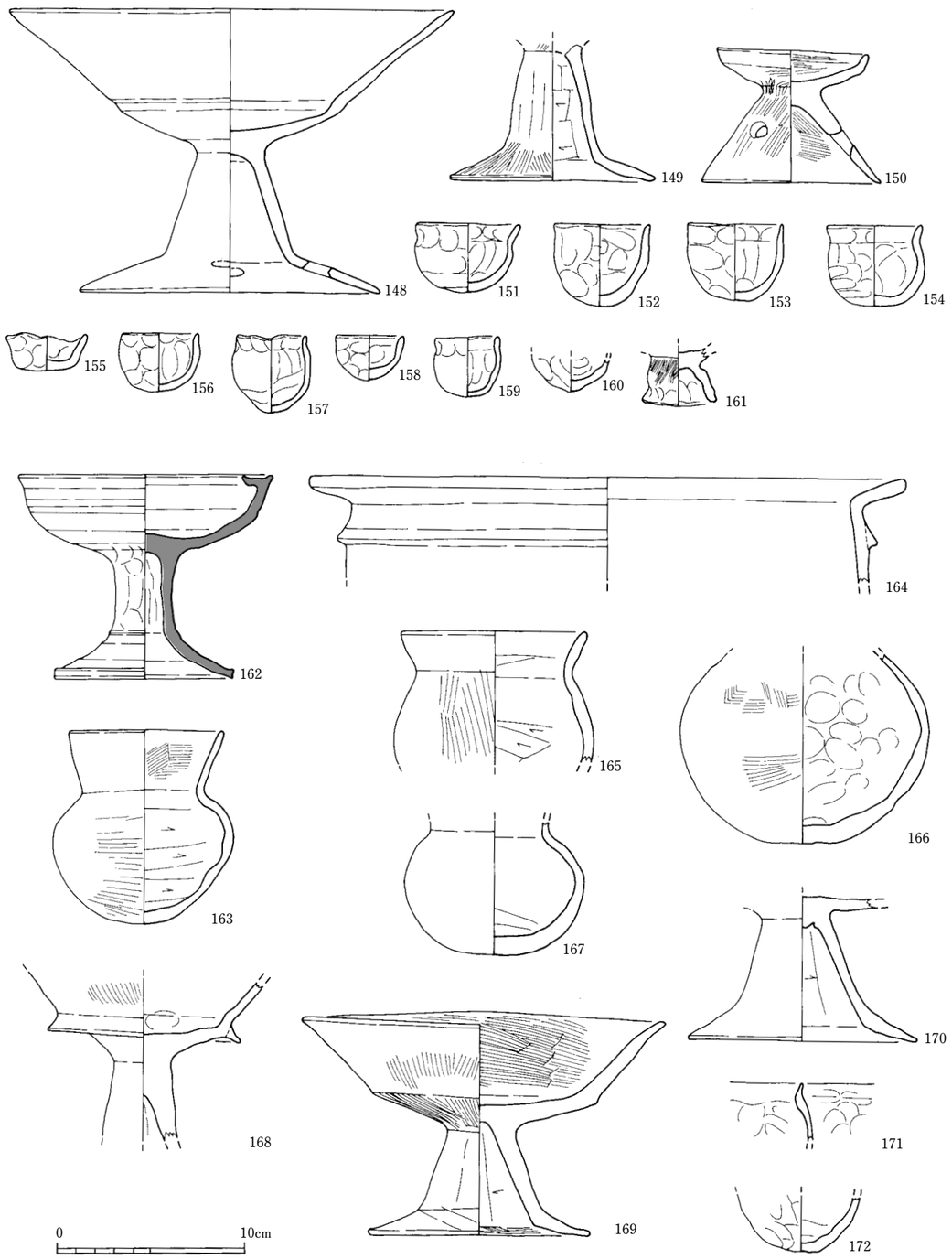
第112図　36号溝状遺構③地点
出土土器2実測図（1/ 3）



第113図　36号溝状遺構③地点出土土器3実測図（1/3）



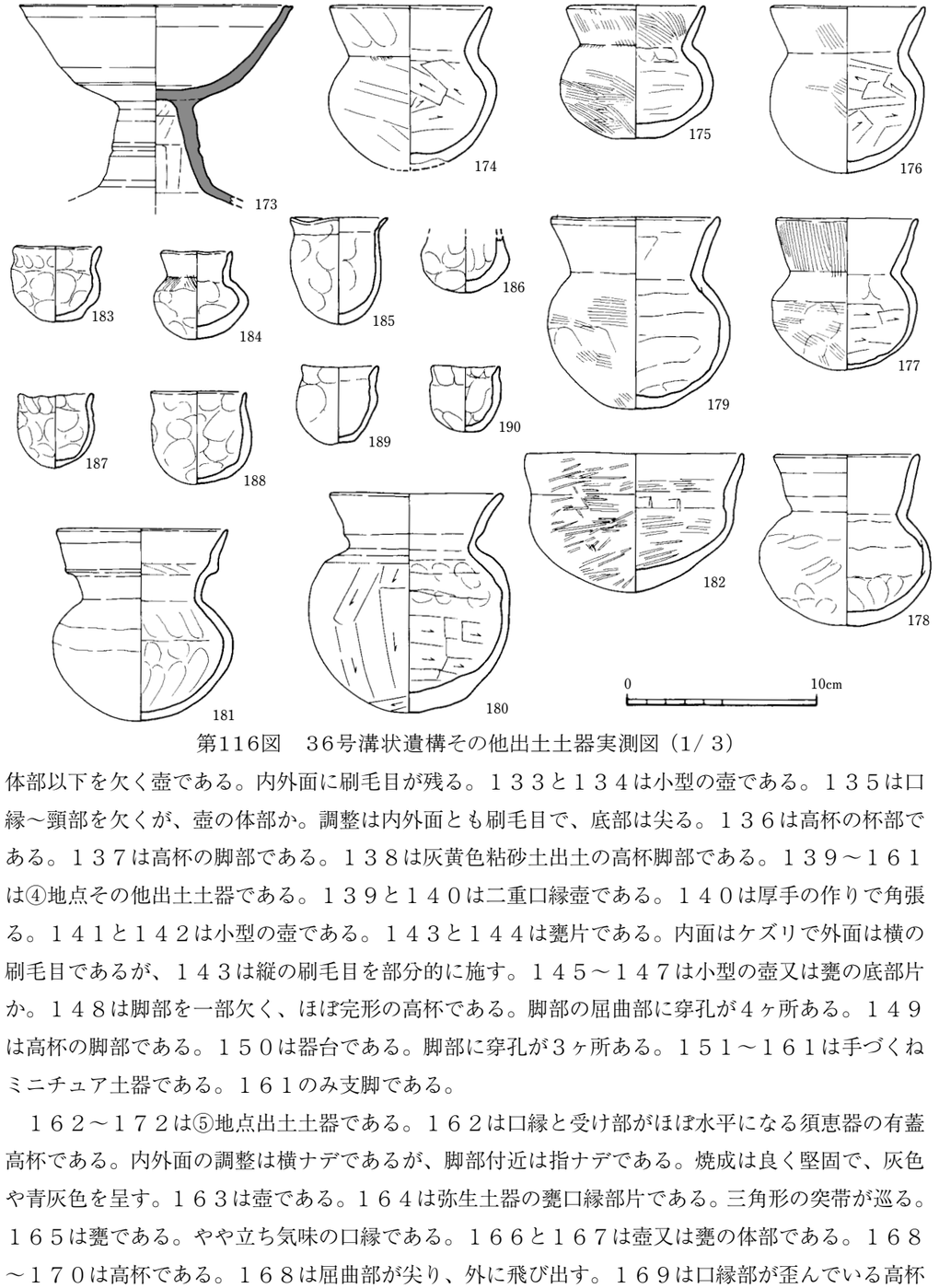
第114図　36号溝状遺構④地点出土土器1実測図（1/3）



第115図　36号溝状遺構④地点出土土器2・⑤地点出土土器実測図（1/3）

高杯の杯部である。１２４は杯部が鉢状になる高杯である。１２５～１２７は高杯の脚部である。いずれも脚部付近で屈曲する。１２８は内外面に摩滅した鉢である。１２９と１３０は脚付鉢である。１３１は平底で椀に近い鉢である。内外面には工具痕が明瞭に残る。

１３２～１３８は④地点出土土器である。１３２～１３７は黒灰色粘砂土出土である。１３２は

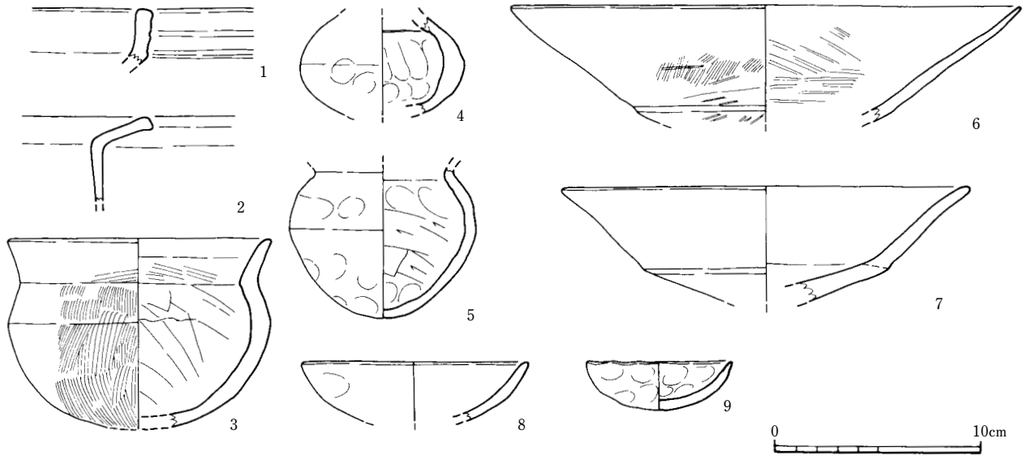


第116図　36号溝状遺構その他出土土器実測図（1/3）

体部以下を欠く壺である。内外面に刷毛目が残る。１３３と１３４は小型の壺である。１３５は口縁～頸部を欠くが、壺の体部か。調整は内外面とも刷毛目で、底部は尖る。１３６は高杯の杯部である。１３７は高杯の脚部である。１３８は灰黄色粘砂土出土の高杯脚部である。１３９～１６１は④地点その他出土土器である。１３９と１４０は二重口縁壺である。１４０は厚手の作りで角張る。１４１と１４２は小型の壺である。１４３と１４４は甕片である。内面はケズリで外面は横の刷毛目であるが、１４３は縦の刷毛目を部分的に施す。１４５～１４７は小型の壺又は甕の底部片か。１４８は脚部を一部欠く、ほぼ完形の高杯である。脚部の屈曲部に穿孔が４ヶ所ある。１４９は高杯の脚部である。１５０は器台である。脚部に穿孔が３ヶ所ある。１５１～１６１は手づくねミニチュア土器である。１６１のみ支脚である。

１６２～１７２は⑤地点出土土器である。１６２は口縁と受け部がほぼ水平になる須恵器の有蓋高杯である。内外面の調整は横ナデであるが、脚部付近は指ナデである。焼成は良く堅固で、灰色や青灰色を呈す。１６３は壺である。１６４は弥生土器の甕口縁部片である。三角形の突帯が巡る。１６５は甕である。やや立ち気味の口縁である。１６６と１６７は壺又は甕の体部である。１６８～１７０は高杯である。１６８は屈曲部が尖り、外に飛び出す。１６９は口縁部が歪んでいる高杯である。１７１と１７２は手づくねのミニチュア土器の破片か。

１７３～１９０はその他に３６号溝状遺構内で出土した土器である。１７３は脚端部を欠く須恵器の無蓋高杯である。形状は土師器の高杯に似て、杯部に段と脚部に屈曲部がある。内外面は横ナデである。焼成は良好で青灰色を呈す。口径14.6cmを測る。１７４～１７９は小型の壺である。内外面は刷毛目やケズリ、ナデである。１８０と１８１は二重口縁壺である。１８１の方が明瞭に口



第117図　37号溝状遺構出土土器実測図（1/3）

縁は角張る。１８２は鉢で、内外面はミガキである。１８３～１９０は甕形や壺形の手づくねのミニチュア土器である。いずれも口縁部などを一部欠くが、８割以上は残存する。

３７号溝状遺構（第１１７図）

３６号溝の中央南から南西方向へ伸びる幅 2.2 ～ 3.5m 程度の断面「Ｖ」字の溝である。溝の両側壁から緩やかに低くなり、中央で幅 0.6 ～ 0.9m で溝底へ深くなる。１８号住居跡の北側コーナー付近で３６号溝に切られており、本来は東に伸びて谷へ抜けていたと思われる。総延長 18.5m で深さは 0.4 ～ 0.45m を測る。

出土土器

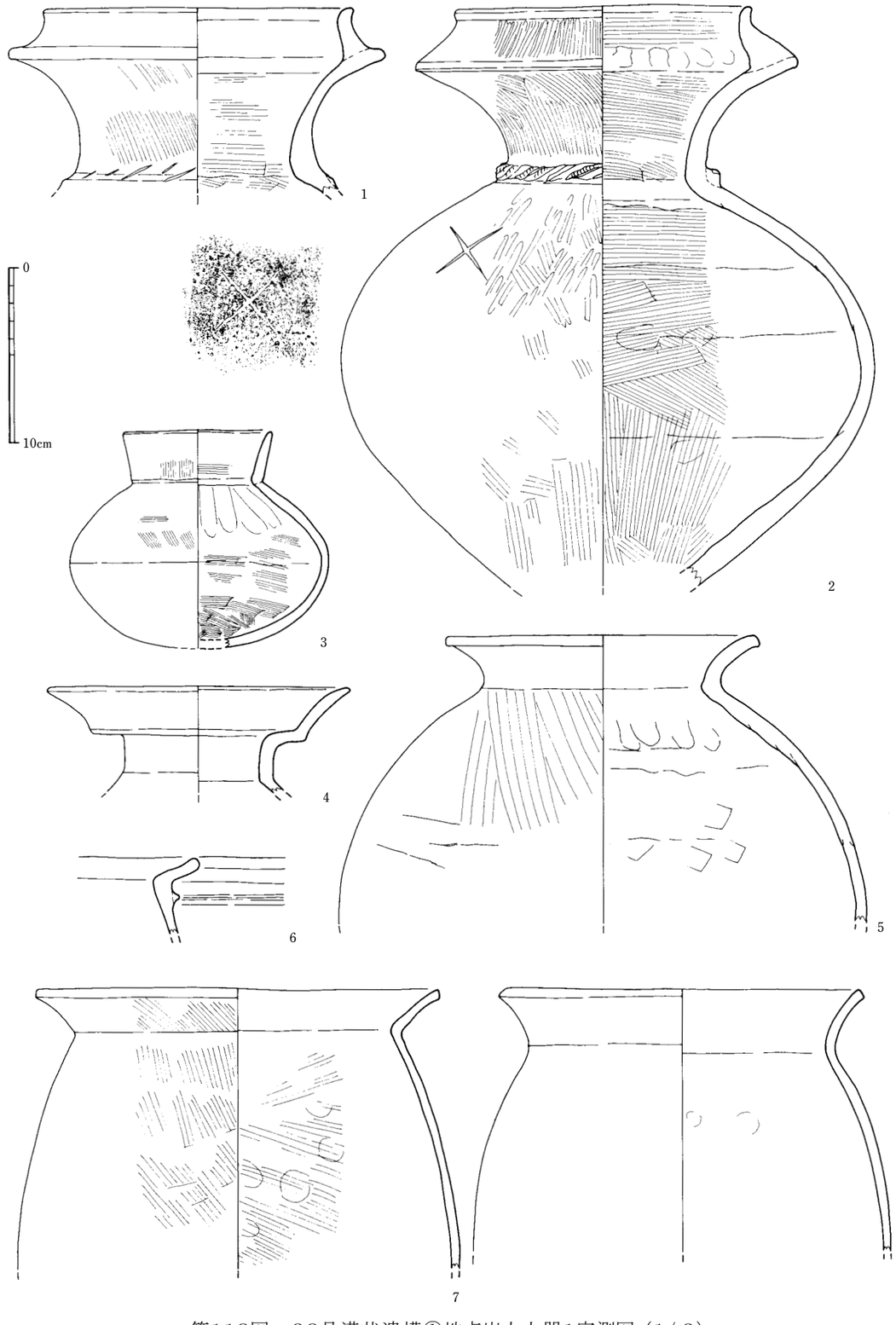
１は二重口縁壺の口縁端部片か。２は弥生土器甕の口縁部片である。３は復元口径 13.0㎝と器高に比べて大きく広がり鉢状を呈するが、ここでは甕とした。４と５は頸部より上部を欠く、小型の壺又は甕体部片である。６と７は高杯の杯部片である。６は薄手の作りで､内外面にミガキを施す。８は浅い鉢である。９は手づくねのミニチュア土器で、指頭圧痕が明瞭に残る。

３８号溝状遺構（図版４６・４７、第１１８～１２４図）

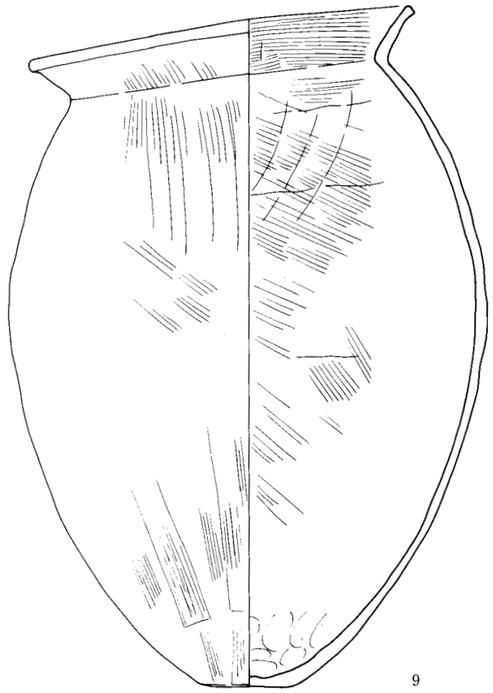
１６号住居跡の脇の大谷落ち際で検出した溝であるが、調査の進展で大谷の窪みに貯まった弥生時代後期頃の包含層であることが分かった。そのため、遺物は大谷の遺物として報告するのが妥当であるが、ここでは調査時のままに３８号溝状遺構で出土した①～③地点ごとに報告する。

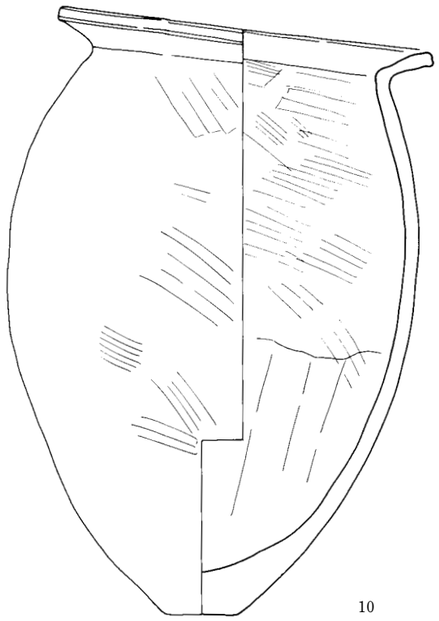
出土土器

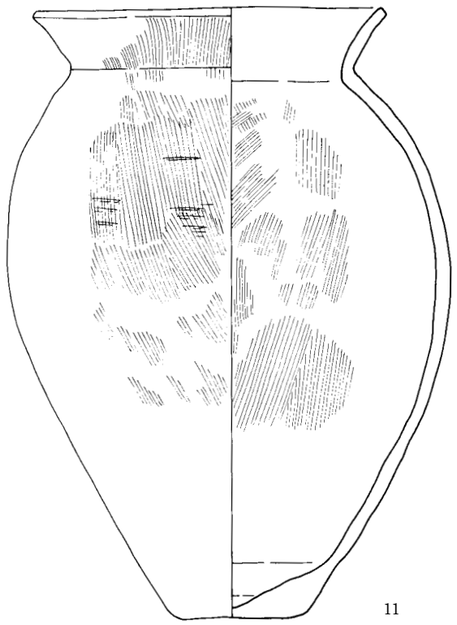
１～４５は①地点出土土器である。１と２は二重口縁壺である。１は頸部以下を欠く。２は底部のみ欠損するが、８割残存する。体部上半には×印状の線刻がある。調整は明瞭に残り、内外面には刷毛目を施し、外面には刷毛目後、ミガキを施す。３は一部体部と底部を欠く、８割残存する短頸壺である。体部中央で最大径をとる。外面は摩滅するが、内面は刷毛目と指ナデを施す。４は二重口縁壺片で混入品である。５は壺又は甕か。内外面には工具痕がつく。６は摩耗している弥生土器甕の小片である。７～１１は６～８割残存する平底の甕である。調整は刷毛目であるが、板状工具によるナデや指ナデを施す。１０のみ粗い刷毛目である。１２は唯一出土した脚付甕である。脚

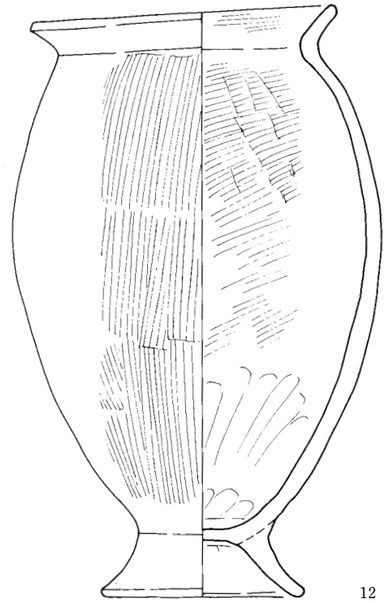


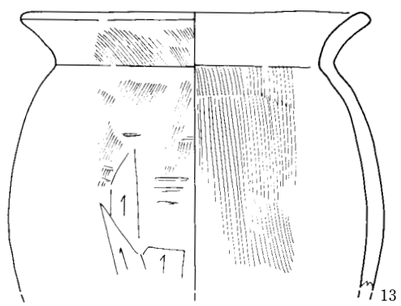
第118図　38号溝状遺構①地点出土土器1実測図（1/3）


9


10


11

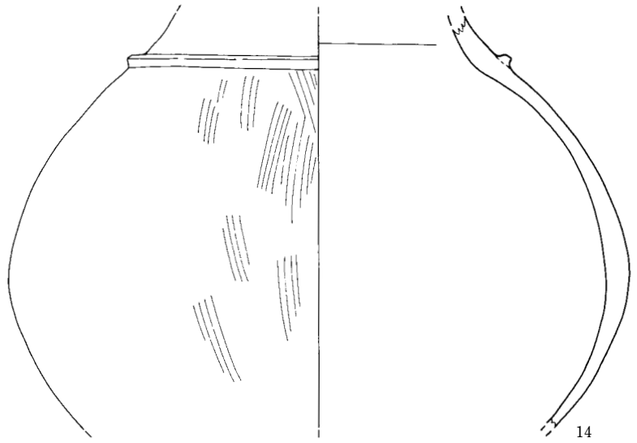

12

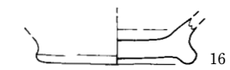

13

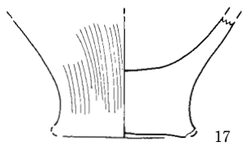
0 10cm

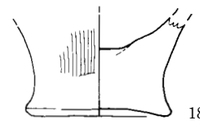
第119図　38号溝状遺構①地点
出土土器2実測図（1/ 3）

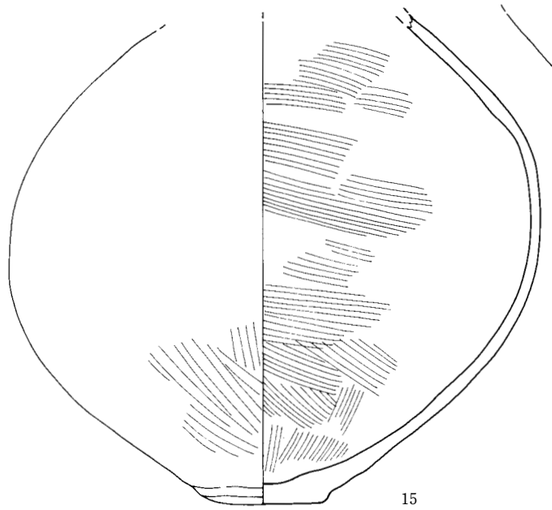
端部は外側へ広がる。１３も甕であるが、体部下半以下を欠く。調整は他と異なり、刷毛目以外に、外面にはタタキ、ケズリを施す。１４と１５は壺か。１４は体部上半片で、肩部に突帯がある。１５は口縁～頸部を欠損する。平底である。１６は縄文時代晩期頃の甕の底部片か。１７～

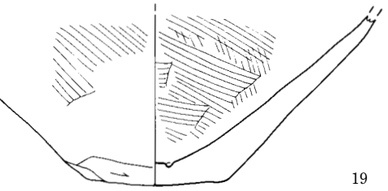

14


16

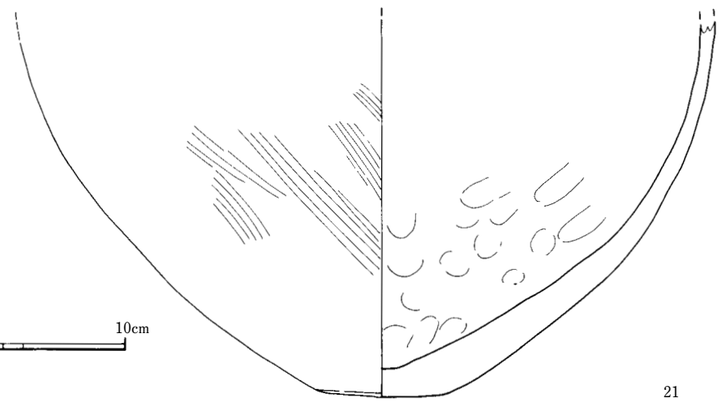

17


18


15

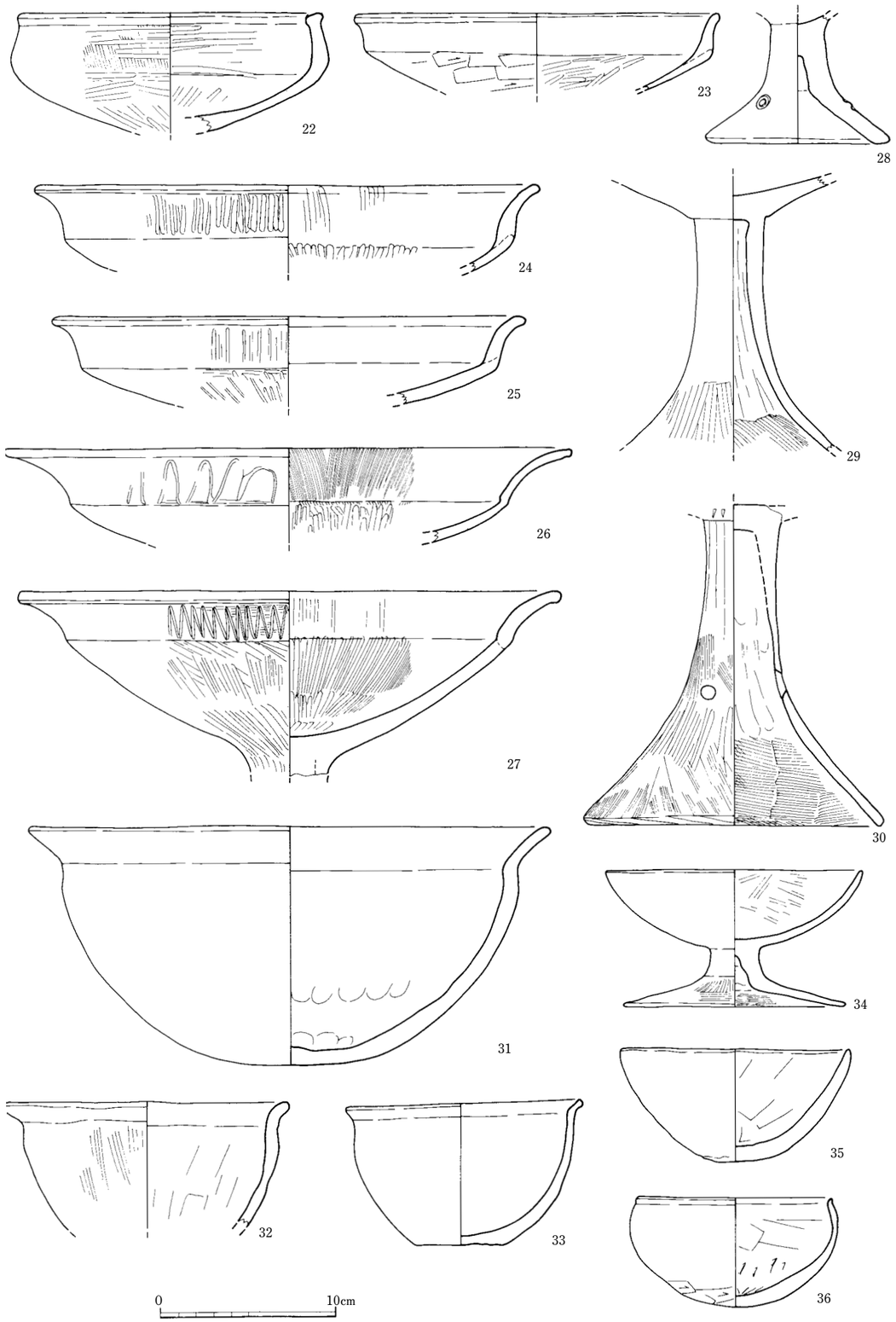

19

20

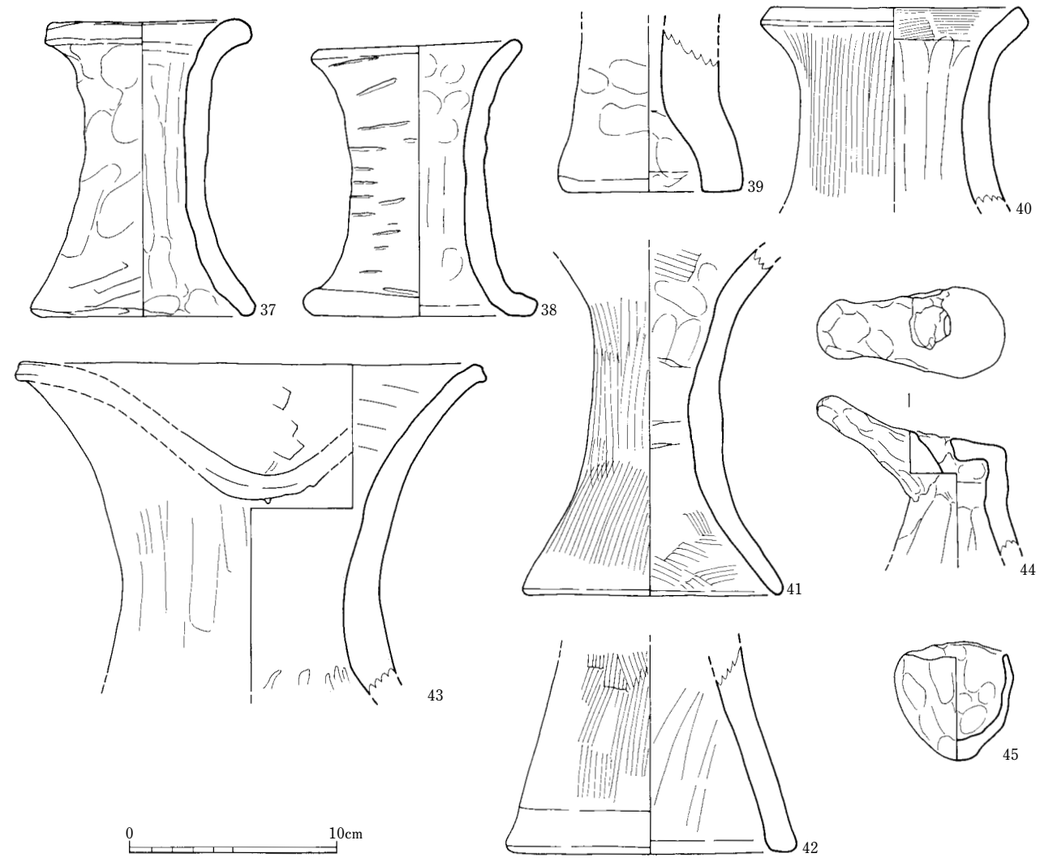

21

0 10cm

第120図　38号溝状遺構①地点出土土器3実測図（1/ 3）



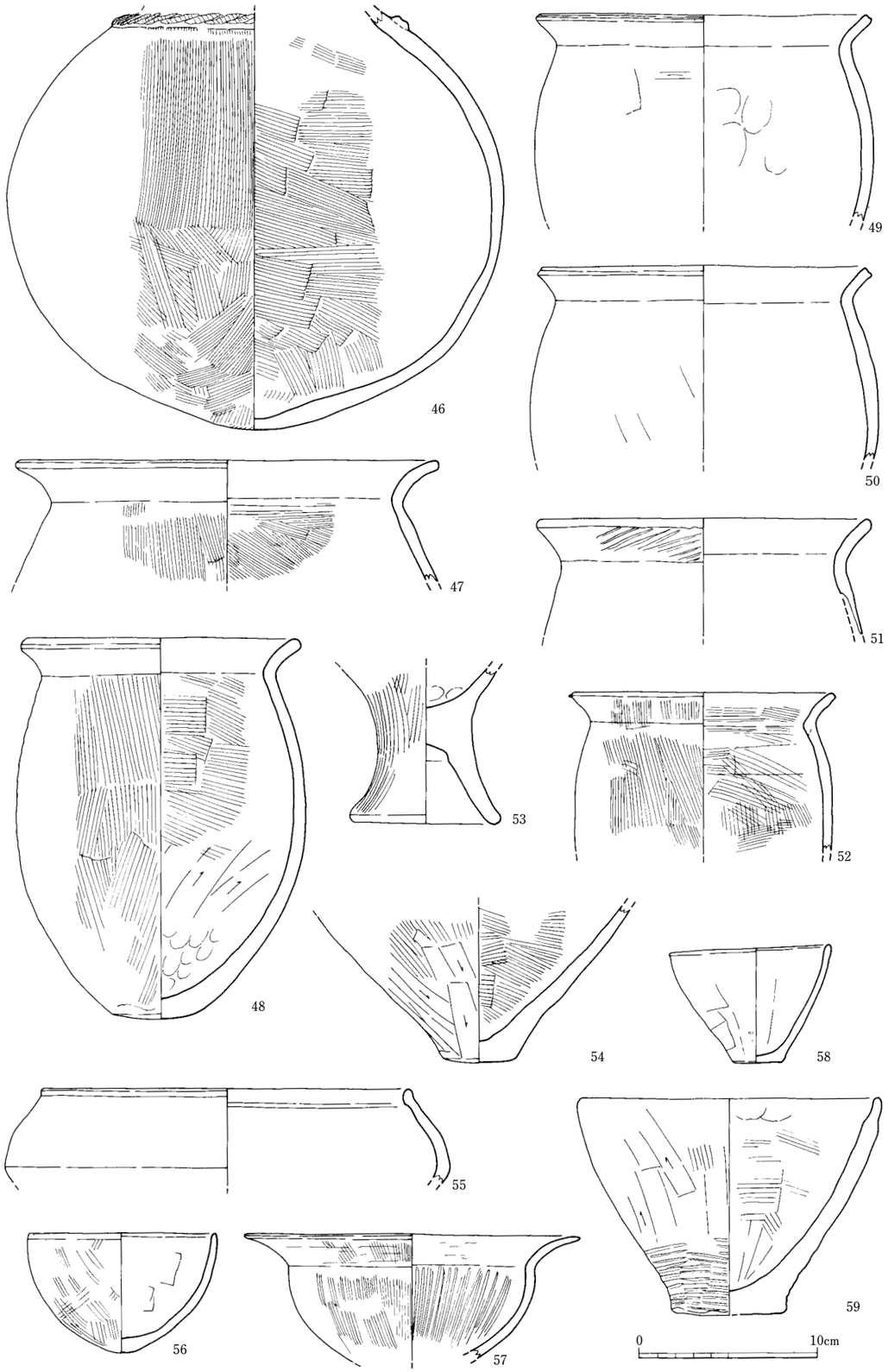
第121図　38号溝状遺構①地点出土土器4実測図（1/3）



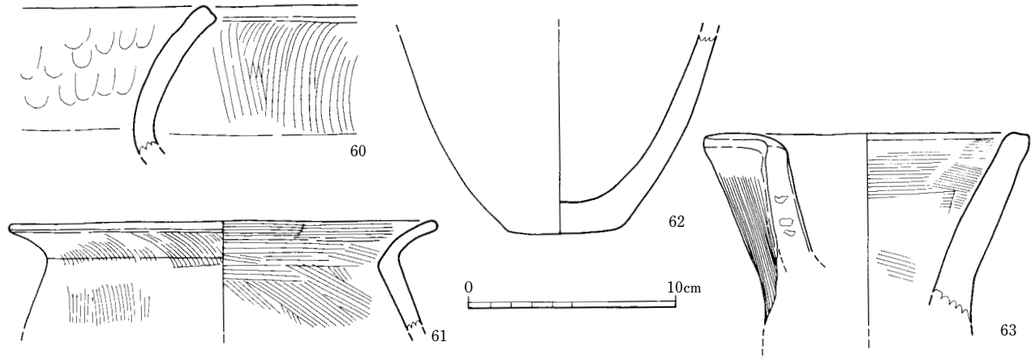
第122図　38号溝状遺構①地点出土土器5実測図（1/3）

２１は壺又は甕の底部片である。２２～２７は高杯の杯部片である。２２は杯部が深く、口縁端部は厚手になり、外に尖る。２３～２５の杯部は浅く、縦方向のミガキを施す。２６と２７は杯部の屈曲部から外側に大きく内湾しながら広がる。外面には暗文を施す。２８～３０は高杯の脚部である。２８は脚部の外面に竹管文を施す。残存状況から４ヶ所以上か。２９と３０はやや長脚である。３０は脚部中央に円形の穿孔を施す。橙色や灰褐色の色調などから２４と２９、２６と３０は接合する可能性がある。３１～３３は鉢である。３１は大型の鉢。３３は平底で、外面底部はケズリを施す。３４は脚付鉢である。３５と３６は底面がやや尖る椀に近い形状の鉢である。３６は口縁端部が内湾する。いずれも内面には工具による痕跡がある。３７～４３は器台である。３８のみ外面にタタキを施す。４０～４２は同一形状のものか。外面には刷毛目、内面は指ナデや工具によるナデを施す。４３は大型の器台で、口縁は片口状になる。４４は支脚片である。片側を嘴状に約5cm伸ばし、天井中央は斜めに穿孔する。４５はミニチュア土器で、口縁端部は歪む。

４６～５９は②地点出土土器である。４６は口縁～頸部を欠く壺の体部か。肩部付近に刻目の突帯がつき、内外面は刷毛目を施す。４７は甕の口縁部片である。４８～５２はほぼ同様の形態の甕である。調整は内外面に刷毛目を施す。５１のみ外面にタタキを有する。５３と５４は甕や壺の底部片か。５５は高杯の杯部である。５６と５７は鉢である。５６は底部中央が尖る。５７は大きく口を開く鉢で、内面はミガキを施して丁寧に仕上げる。５８と５９も鉢であるが、平底のタイプで



第123図　38号溝状遺構②地点出土土器実測図（1/3）



第124図　38号溝状遺構③地点出土土器実測図（1/3）

ある。59は底部付近が厚手に作られ、外面にはタタキを施す。

60～63は③地点出土土器である。60は広口壺の口縁部片か。61は甕の口縁部片である。内外面に刷毛目を施す。62は壺又は甕の底部片か。摩滅していて調整不明である。63は残存状況から、片口状の器台片か。

39号溝状遺構

37号溝の南側に取り付く細い溝で、長さ2.5mを検出している。37号溝と同時に掘削してしまい、切り合い関係は不明である。幅は0.5m、深さ0.2m程度である。

41号溝状遺構

1号竪穴遺構に切られ、22号土坑の東で屈折して北東方向に延びる溝である。1号方形溝状遺構に切られて、小谷を切る。途中は撹乱や掘削で途切れるが長さ26m分、幅は0.3～1m程度、深さ0.1m以下である。小谷の方向へやや深くなることから、小谷の埋没後の淀みの可能性がある。

42号溝状遺構（第125図）

13号住居跡の南東で検出した短い溝で調査区境にかかり、南側は検出できていない。埋土は灰色粘砂土である。長さ5.5m、幅は広いところで1.6m、深さ0.35m以下で、淀みか。

出土土器

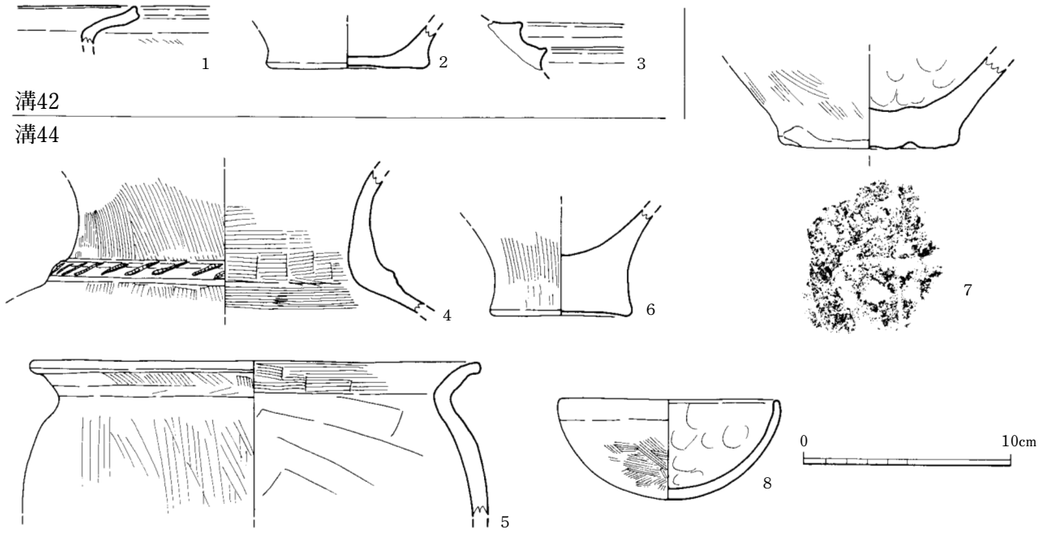
1～3は弥生土器か。1・2は甕の口縁部片と底部片、3は壺の突帯で、2条ある。

43号溝状遺構

2区13号溝の南と大谷の間で検出した浅い溝で、削平されているが13号溝を切る。1区40号溝と似て硬化した砂と砂利が混ざる。長さ11.5m、幅は0.6～2mで、深さ0.1m以下である。

44号溝状遺構（第125図）

39号住居跡の北東コーナーで切られ、42号住居跡の方向へ下り、北東方向へ伸びる溝である。大谷の弥生時代後期の埋土上で掘削されており、切り合い関係から弥生時代後期末頃のものか。長さ12.5m、幅0.5～1.5m、深さは0.1mである。



第125図　42・44号溝状遺構出土土器実測図（1/3）

出土土器

4は壺の頸部片である。頸部と肩部の境に刻目のついた三角形の突帯を巡らす。5は甕片で、口縁は刷毛目であるが、体部は板状工具によるナデを施す。6と7は甕と壺の底部片である。7の外面底部には棒状の痕跡がある。8は椀形の鉢である。

45号溝状遺構

大谷の調査区北壁からやや蛇行して南へ延びる溝で、大谷の古墳時代中期前半の埋土を切る。43号住居跡の東側で途切れているが総延長17m、幅は0.4～1m、0.1～0.35mの深さである。埋土は灰色砂土である。大谷の上層埋土（灰色砂土層）を含む南西壁側を剥いだため、45～48号溝は古墳時代中期の落ち際までの検出となる。そのため全容は不明だが、北側へ深くなっている。

46号溝状遺構

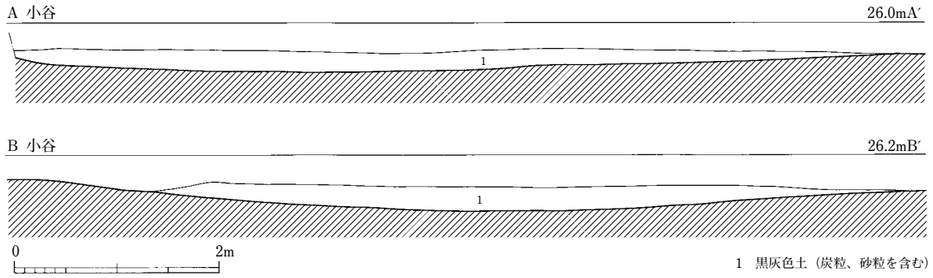
45号溝の東側で隣接して検出した蛇行する溝で、45号溝と同様の理由で全容は知れないが長さ約10mを検出している。幅は1.1～2.7m、深さは0.1～0.35mである。埋土は灰色砂土である。

47号溝状遺構

45号住居跡の南の溝で、西側は48号溝との切り合いは不明で、東側では分裂する。長さ11.5m、幅は1.2～1.5m、深さ0.3m前後である。埋土は灰色砂土である。

48号溝状遺構

47号溝と同時に掘削した溝で、東側で47号溝の南を谷の深部方向へ伸びる。落ち際で広くなり、47号溝の方向へ枝分かれして伸びる部分もある。長さ約6m、幅は1.1～1.5m、深さ0.3mを測る。埋土は灰色砂土である。



第126図　小谷土層断面図（1/60）

7　小谷・大谷

小谷（図版47、第126・127図）

2区の北西に位置し、1号方形溝・29号土坑などに切られる。1区の南東側で13号溝上層に切られる形で検出している。長さは約20m、幅は6～11m、深さ0.2mである。埋土は単層で黒灰色土が堆積しており、2区13号溝の祭祀で検出した器台と同一個体の器台片が出土している。1区13号溝下層・2区13号溝1層・大谷9・20層に相当する。

出土土器

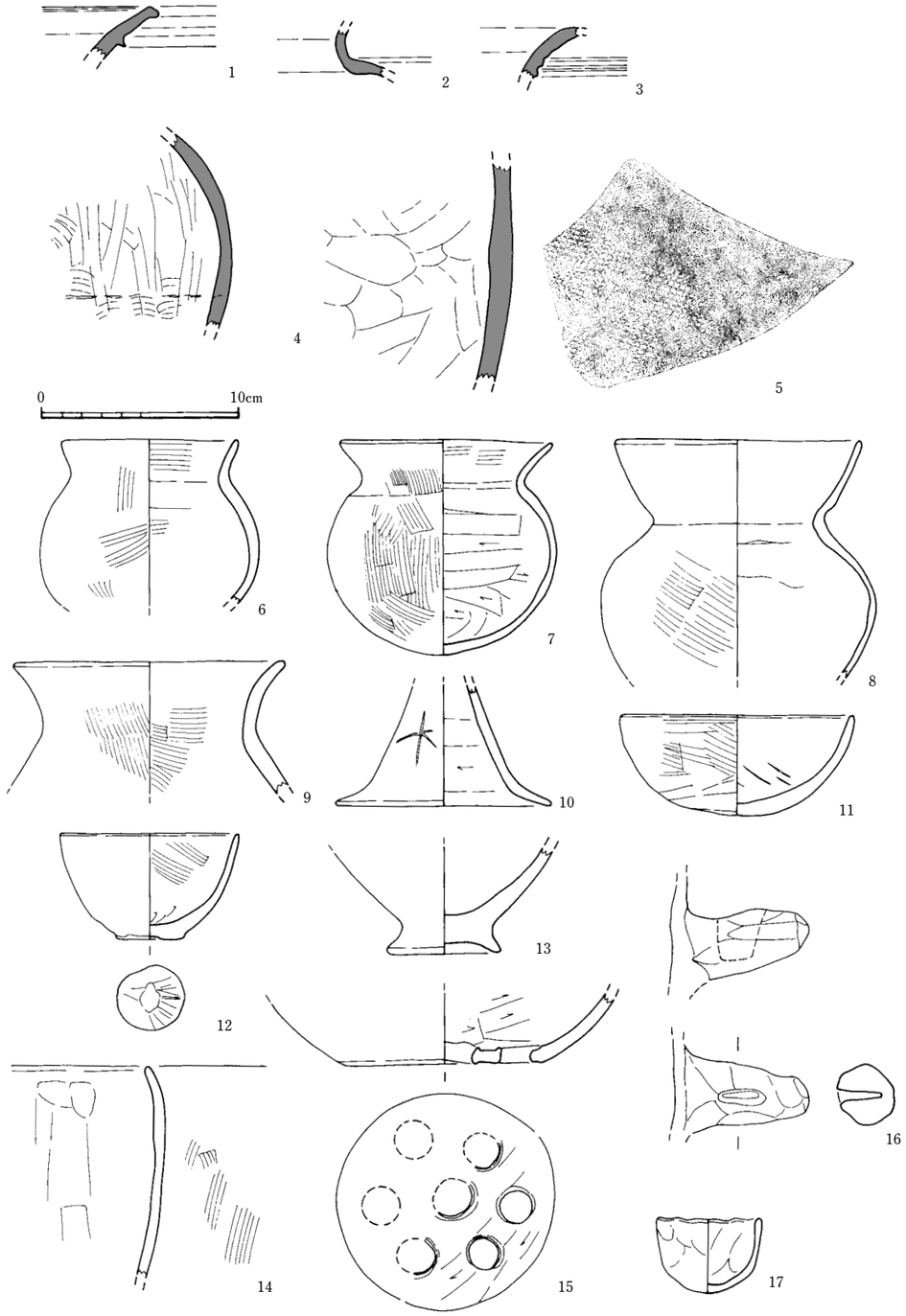
1～5は須恵器である。1は瓶の口縁部片で、2と3は壺などの頸部片か。3の外面には沈線が巡る。4も壺の体部片である。外面は丁寧なナデで滑らかである。内面は当て具痕をナデ消している。5は壺又は甕の体部片である。内外面ともナデであるが、外面は、格子目のタタキも施す。

6～17は土師器の小壺である。6は口縁部外面横ナデ、胴部内面ナデ一部工具痕、他は刷毛目後ナデを施す。7は口縁部横ナデ一部刷毛目、胴部外面刷毛目、内面ケズリを施す。8は摩滅するが、胴部外面刷毛目、内面ナデが残る。外面に煤が付着する。9は小型の甕か。口縁部横ナデ、胴部内外面刷毛目を施す。10は高杯である。外面ナデ、内面ケズリを施す。外面にヘラ記号状の線描きが見られる。11は椀である。口縁部横ナデ、胴部外面刷毛目、底部内外面工具痕が見られる。12・13は鉢か。12は口縁部外面横ナデ、内面刷毛目後ナデ、底部内外面工具痕が見られる。13は脚付で摩滅するが、ナデが残る。14～16は甑である。14は口縁がやや内湾し、口縁部横ナデ、胴部外面刷毛目、内面ナデ一部指頭圧痕を施す。15は多孔式の甑で、7ヶ所の穿孔があったと考えられる。摩滅するが内面にケズリが残る。16は把手で上方に扁平な膨が切られ2.5×1cm、深さ4cmを測る。底ほど幅が狭い。17はミニチュア土器である。指ナデで成形する。

切り合いと出土遺物から、古墳時代中期に属する。

大谷（図版28～30・47～52、第128～160図）

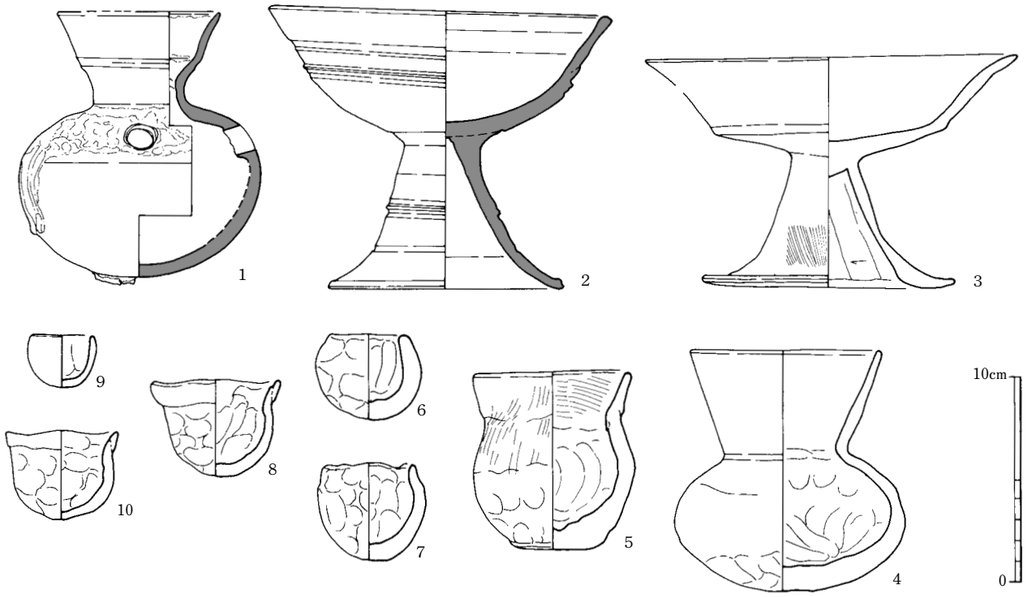
調査区東側で検出した谷で、調査区西側の谷と区別するため大谷とした。表土剥ぎの段階でC－C′～G－G′間において淡灰白色の砂土がほぼ全面に現れ、南側の浅い谷と同じ地山が露出していると想定していたが、トレンチを入れて確認を行った。その結果、谷落ちから0.8m程度下方で須恵器片が出土したことから（土層D－D′）谷を横断する方向に土層ベルトを複数設定して、その間を面的に掘削することとした。合計8ブロックに分割している。谷の長さは83m、幅は15～



第127図　小谷出土土器実測図（1/３）

20m、弥生時代の埋土を除去した段階の深さは0.75m を測る。

５世紀代には第１２９図に赤色で示すように、谷部分が埋没後、溝状に再掘削を行っている。調査区北側から谷に沿って延び、南の土層ベルトＤ－Ｄ′付近の井泉をコーナーとして屈折し、南東へ向きを変える。溝状部分は長さは39m、幅は４～6m、深さ0.8m を測る。埋土は７～１４・



第128図　大谷出土土器実測図（1/３）

１８～２０層である。

遺物出土状況１・２（第１３２図）

１は土層ベルトＧ－Ｇ′から東の谷底１３層で出土したもので、図示している遺物を取上げたあとに近接して、ベルト下から初期須恵器の無蓋高杯も出土している。このやや南側では同じ層から初期須恵器小壺（１３３図１）も出土している。

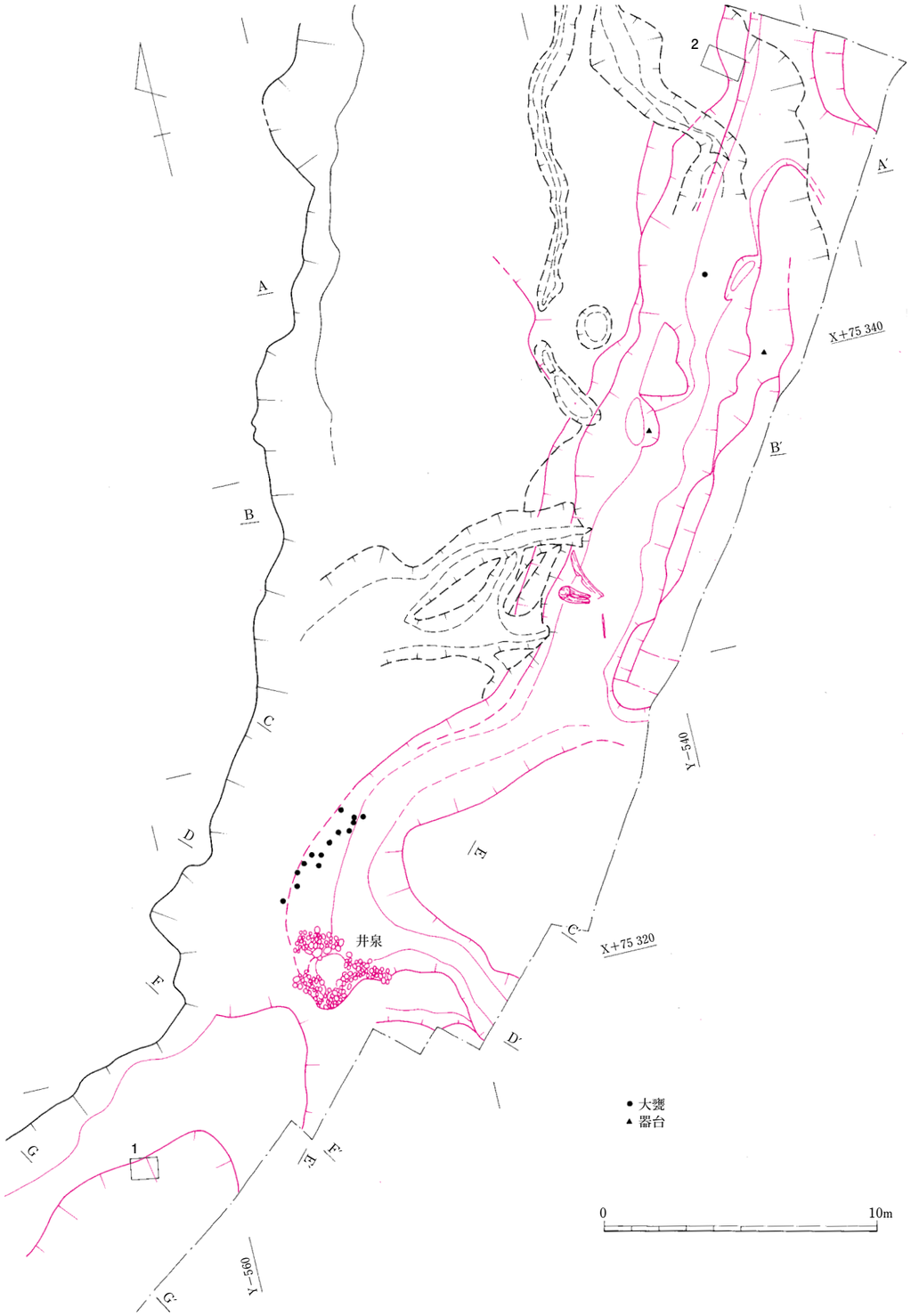
出土土器（図版４７、第１２８図１～３）

１は須恵器の瓶である。外面肩部から緑色の自然釉が垂れ落ち、底部と窯土が接着する。一部、口縁を欠くがほぼ完形品である。口縁部の形状は開かずに立ち、やや異なるが焼成や色調などは居屋敷窯製と似る。体部上半には1.2cmの円形の穿孔を施す。口径8.0cm、器高13.0cmを測る。内面にはガラス化した窯土と思われるものが付く。２は須恵器の無蓋高杯である。口縁部は角張ってはいるが、概ね土師器の形状に似る。口縁下には２条の段をもつ。焼成は良好で灰白色を呈し、同じ形状のものが３８号住居跡から出土する。口径16.1cm、器高13.8cmを測る。３は高杯である。杯部はナデであるが、脚部の外面は刷毛目、内面はケズリである。

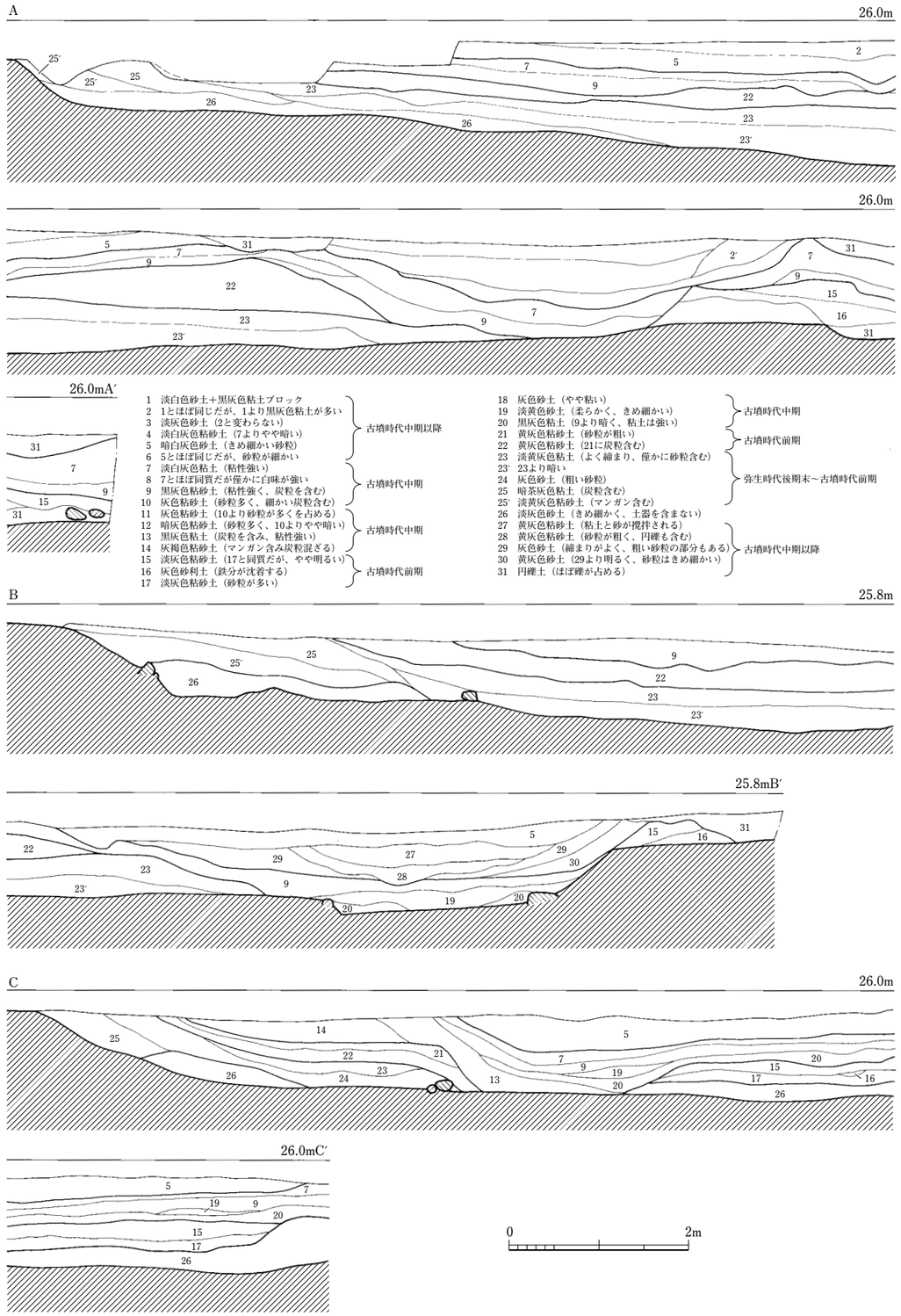
２は谷の最北部の古墳時代中期の落ち際で、ミニチュア土器がまとまって出土した。東側の溝内部にはここから転がったのかミニチュア土器が出土している。溝の淵で祭祀を行なっていたか。

出土土器（第１２８図４～１０）

４は壺である。内外面はナデであるが、外面底部のみケズリである。５～１０は甕や鉢形の手づくねのミニチュア土器である。５は他よりも一回り以上大きい。内外面には刷毛目とナデを施す。８と１０は同形状のもので、口縁端部に粘土紐を貼り付けて肥大化させる。



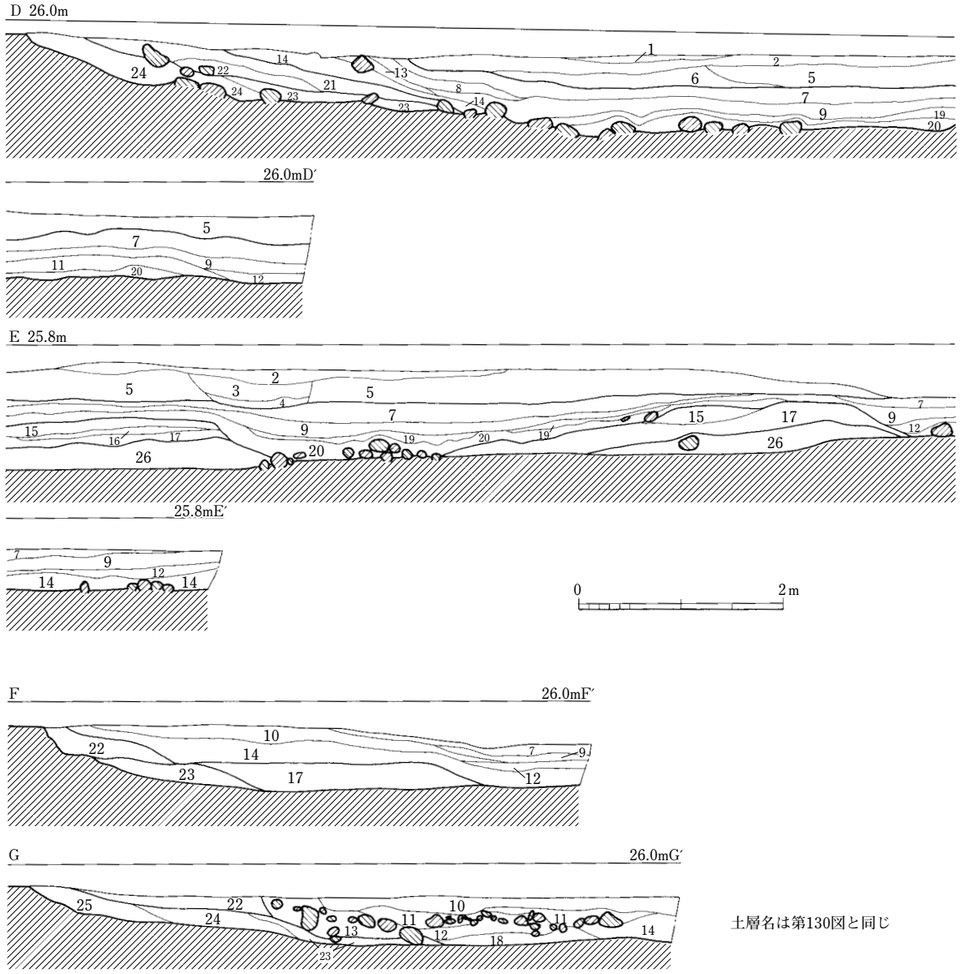
第129図　大谷実測図（1/200）



1 淡白色砂土＋黒灰色粘土ブロック
2 1とほぼ同じだが、1より黒灰色粘土が多い
3 淡灰色砂土（2と変わらない）
4 淡白灰色粘砂土（7よりやや暗い）
5 暗白灰色砂土（きめ細かい砂粒）
6 5とほぼ同じだが、砂粒が細かい
7 淡白灰色粘土（粘性強い）
8 7とほぼ同質だが僅かに白味が強い
9 黒灰色粘砂土（粘性強く、炭粒を含む）
10 灰色粘砂土（砂粒多く、細かい炭粒含む）
11 灰色粘砂土（10より砂粒が多くを占める）
12 暗灰色粘砂土（砂粒多く、10よりやや暗い）
13 黒灰色粘土（炭粒を含み、粘性強い）
14 灰褐色粘砂土（マンガン含み炭粒混ざる）
15 淡灰色粘砂土（17と同質だが、やや明るい）
16 灰色砂利土（鉄分が沈着する）
17 淡灰色粘砂土（砂粒が多い）
} 古墳時代中期以降
} 古墳時代中期
} 古墳時代中期
} 古墳時代前期

18 灰色砂土（やや粘い）
19 淡黄色砂土（柔らかく、きめ細かい）
20 黒灰色粘土（9より暗く、粘土は強い）
21 黄灰色粘砂土（砂粒が粗い）
22 黄灰色粘砂土（21に炭粒含む）
23 淡黄灰色粘土（よく締まり、僅かに砂粒含む）
23′ 23より暗い
24 灰色砂土（粗い砂粒）
25 暗茶灰色粘土（炭粒含む）
25′ 淡黄灰色粘砂土（マンガン含む）
26 淡灰色砂土（きめ細かく、土器を含まない）
27 黄灰色粘砂土（粘土と砂が撹拌される）
28 黄灰色粘砂土（砂粒が粗く、円礫も含む）
29 灰色砂土（締まりがよく、粗い砂粒の部分もある）
30 黄灰色砂土（29より明るく、砂粒はきめ細かい）
31 円礫土（ほぼ礫が占める）
} 古墳時代中期
} 古墳時代前期
} 弥生時代後期末〜古墳時代前期
} 古墳時代中期以降

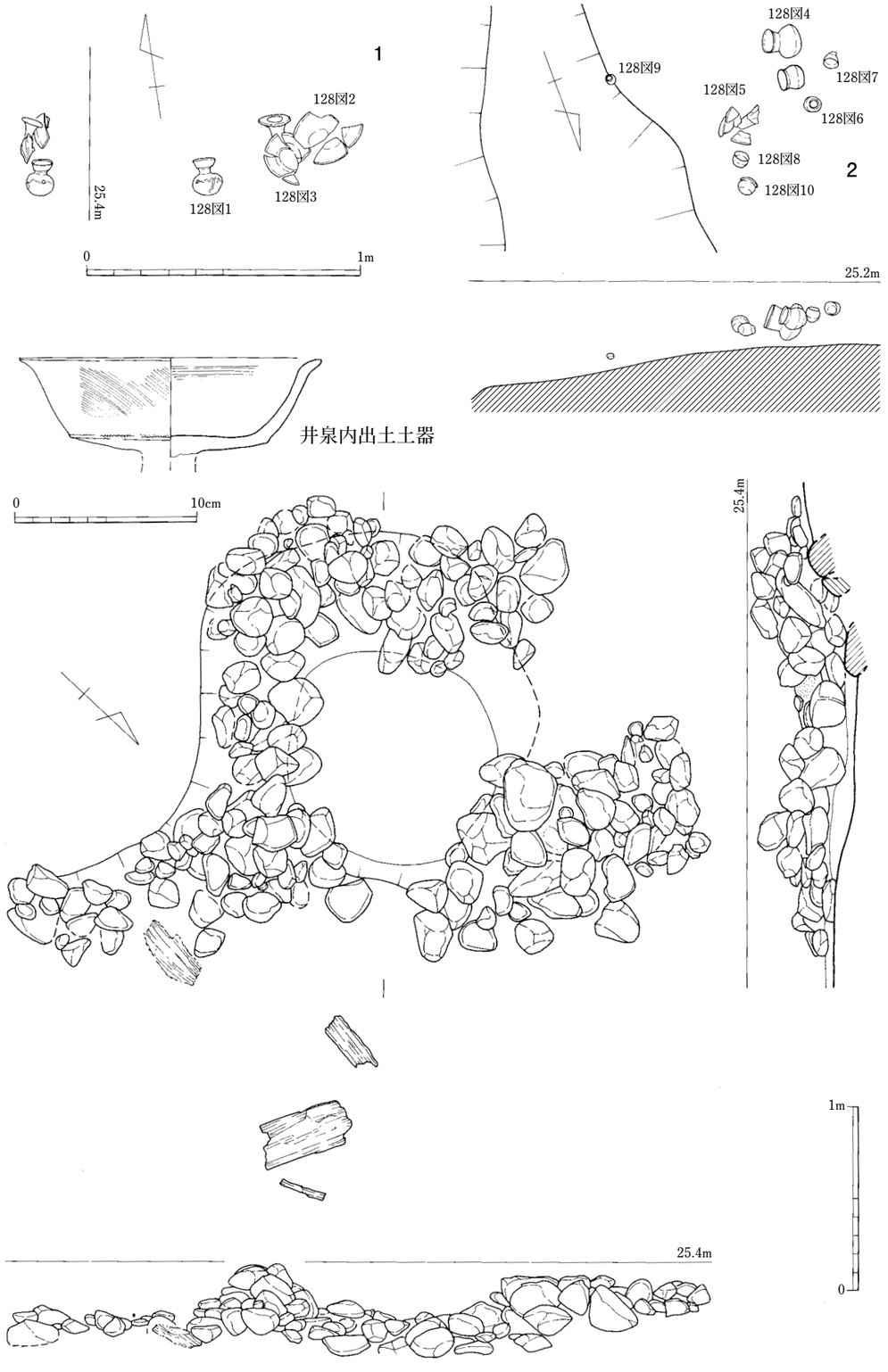
第130図　大谷土層断面図1（1/60）



第131図　大谷土層断面図2（1/60）

井泉遺構（図版３０、第１３２図）

大谷内の古墳時代中期溝に井泉遺構と思われる「コ」の字状石囲い施設が検出された。常に湧水しており、中心部には石が入っておらず、河原石の人頭大から手のひらサイズの丸石で径1.15mの円形に囲んでいる。石組みは湧水点を中心にして円形に掘削してその壁面に沿って底から比較的大きめの石を、上方に行くにつれて小さくなり、手のひらサイズの河原石を積み上げる。丸石同士が点的に接地するようなもので壁面に貼る様子は窺えないが､埋土除去後も崩壊せず維持されていた。調査中では、石組みの背面を削りすぎたものの、石組みが存在していた時には丘状になっていたことが土層で判る（第１３１図Ｄ－Ｄ′）。幅は２×2.3m、内部湧水底から石組みの高さ0.5m、東裾の長さは1.9mである。溝コーナー側に接する幅0.35mほどが排水部と考えられ、その先約1.5mの底面で0.35×0.1m程度の板片と0.5×0.25m、厚さ3㎜程度の板状木製品が出土した。出土時点では設置された状況でなかったものの、掘削中に小枝などを除いて他に木が出土しなかったことから、排水部に板を掛けて溝内部へ導水していた可能性が高い。



第132図　大谷遺物出土状況、井泉遺構および出土土器実測図（1/20、1/30、1/3）

出土土器（第１３２図）

確認された出土遺物は１点のみである。土師器の高杯で、杯部のみが遺存している。摩滅するものの一部刷毛目が残る。

土層ベルトＤ－Ｄ′の２０層が排水部にかかっており、その部分が低く窪んでいる様子が窺えること、ならびに出土遺物から１３号溝と同時期と考えられ、古墳時代中期に属する。

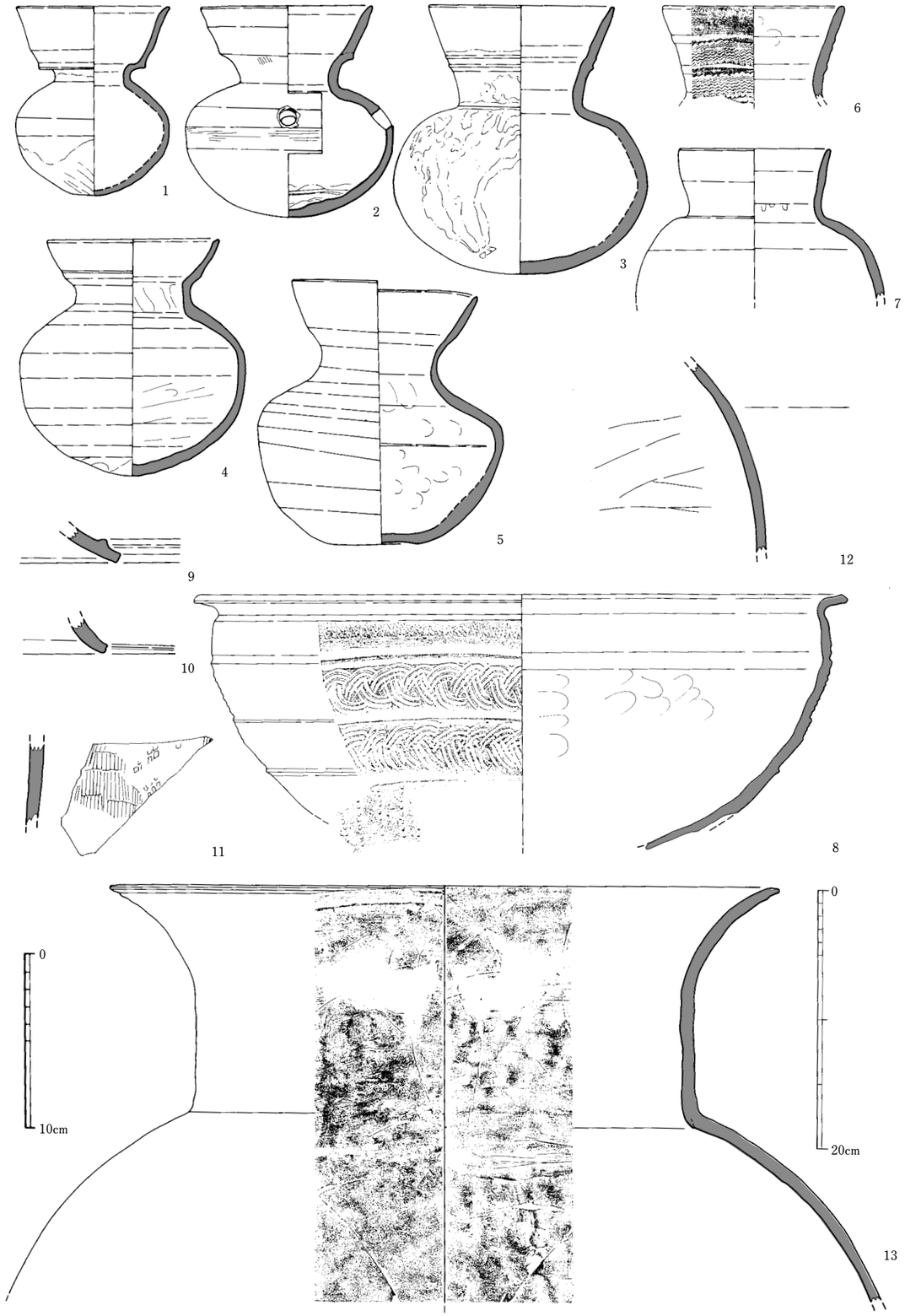
大谷から出土した遺物について、須恵器とそれ以外の土師質土器に分けて報告する。

大谷中層出土須恵器（図版４８・４９、第１３３図）

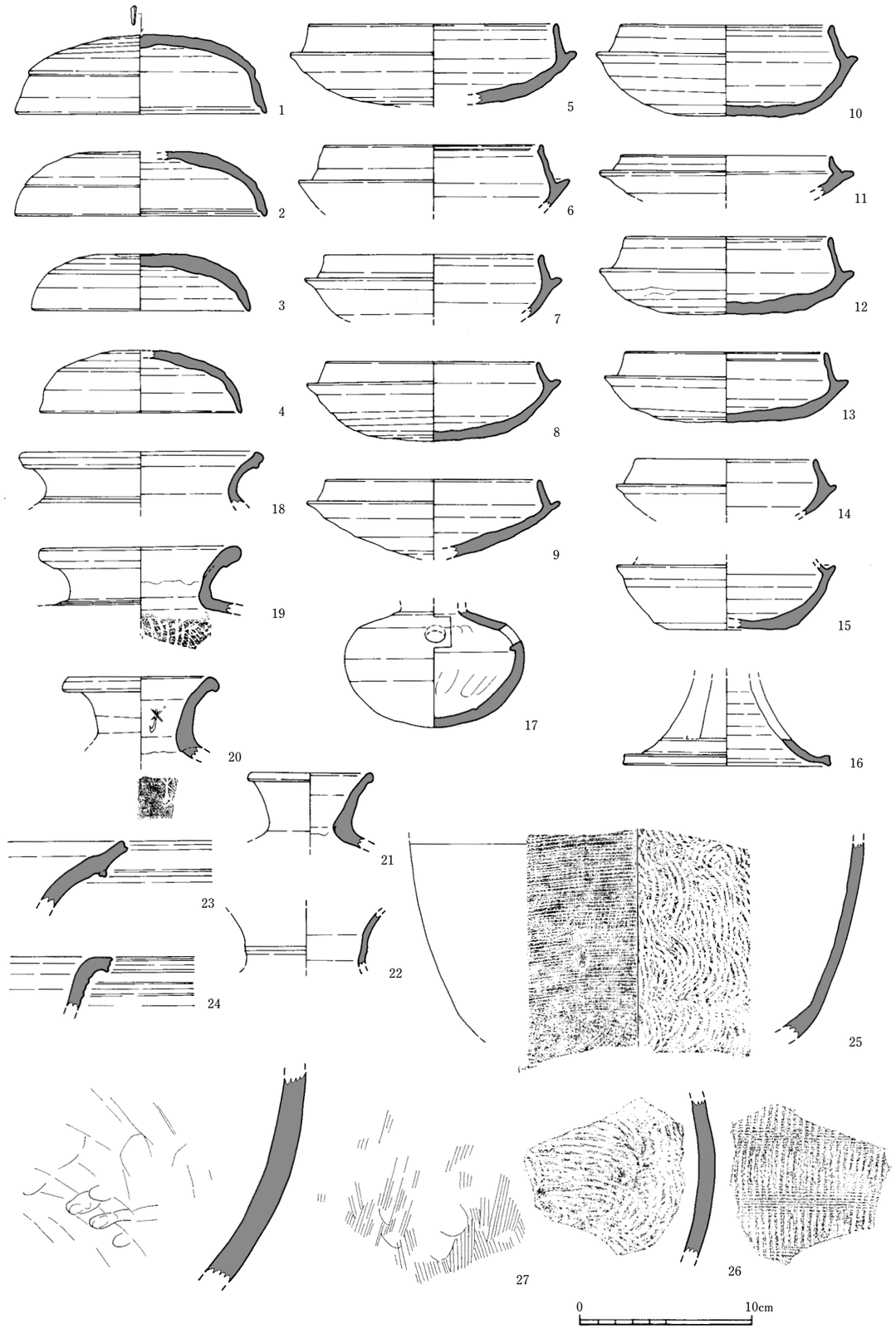
中層は初期須恵器が出土する。１～３は壺又は瓶である。１と３は体部に穿孔がないことから、壺とする。１は土師器の小型丸底壺と酷似する。内外面は横ナデであるが、外面底部は刷毛目を施す。焼成は良好で堅固な作りで、色調は茶灰色を呈す。内面の頸部には溶解した釉が付着する。２は須恵器とするが、焼成は甘く軟質で黒褐色を呈す。１と同様な二重口縁である。体部は潰れた球形で、中央やや上に穿孔を施す。３は二重口縁壺状の段をもつ直口の壺に近い。堅固な作りで、色調は灰褐色～黒褐色である。器形、焼成、色調から勘案すると居屋敷窯製のものか。６７図１９と１２８図１とも酷似し、外面には緑色の自然釉が付着する。いずれも内外面は横ナデを施す。１と２は完形品で、３のみ９割以上残存する。それぞれ口径8.6、10、10.6cm、器高 11.1、12.2、15.5cmを測る。４と５は壺片である。５の方が歪んではいるが、どことなく形状は似る。内外面ともナデであるが、外面底部のみヘラケズリである。いずれも色調は青灰色である。６と７は直口の壺か。６は外面に波状文を施す。７は緑色の自然釉が付着する。焼成も良く堅固な作りである。８は器台である。１３号溝でも同一破片が出土していたが、まとめて図示している。口縁部は外に逆「Ｌ」字状になる。外面の口縁下には、波状文、その下の沈線を挟んで組紐文が２条巡る。組紐文のさらに下には刺突文がある。内面は横ナデだが、所々には指ナデの痕跡がある。全体的に薄手で焼成は良く堅固な作りであるが、それぞれの文様は粗く雑である。色調は灰色～濃青灰色である。口縁は歪んでいるが、復元口径 38cmを測る。９と１０は器台の脚端部片か。１１は甕などの体部片か。傾き不明だが、外面には刷毛目の痕跡がある。他はナデだが、格子目タタキも僅かに残る。１２は壺や甕などの体部片である。内外面はナデにより滑らかに整えられている。外面に自然釉が付着し、内面は工具によるナデか。１３は肩部より下を欠く甕である。口縁～頸部まではやや長く広口壺のような形状である。口縁部は尖り、口縁～肩部まではほぼ均一の厚さで作られる。内外面とも丁寧にナデ上げられ、指ナデの痕跡が所々に残るが、タタキは見えない。焼成は良好で、色調は黒褐色や紫褐色を呈す。胎土分析では陶邑産と判断された。復元口径 52cmを測る。

大谷上層出土須恵器（図版４８・４９、第１３４図）

上層からは６世紀代の須恵器が出土するが、一部初期須恵器も含む。１～４は杯蓋である。１と２は外面に段をもち、内面の口縁端部に段がつくことから６世紀中頃か。５～１５は杯身である。５・６・１０も内面の口縁端部に段を有するなど１・２と同時期を示すか。それぞれ復元口径は、杯蓋で 12 ～ 15cm、杯身で 10.8 ～ 14.1cmを測る。１６は短脚の高杯脚部片である。１７は瓶の体部片である。１８～２１は壺又は甕などの口縁である。２０の内面には「米」字状のヘラ記号がある。２２は壺又は甕の頸部片か。２３はこれまで報告してきた遺物と同形状のものがあることから初期

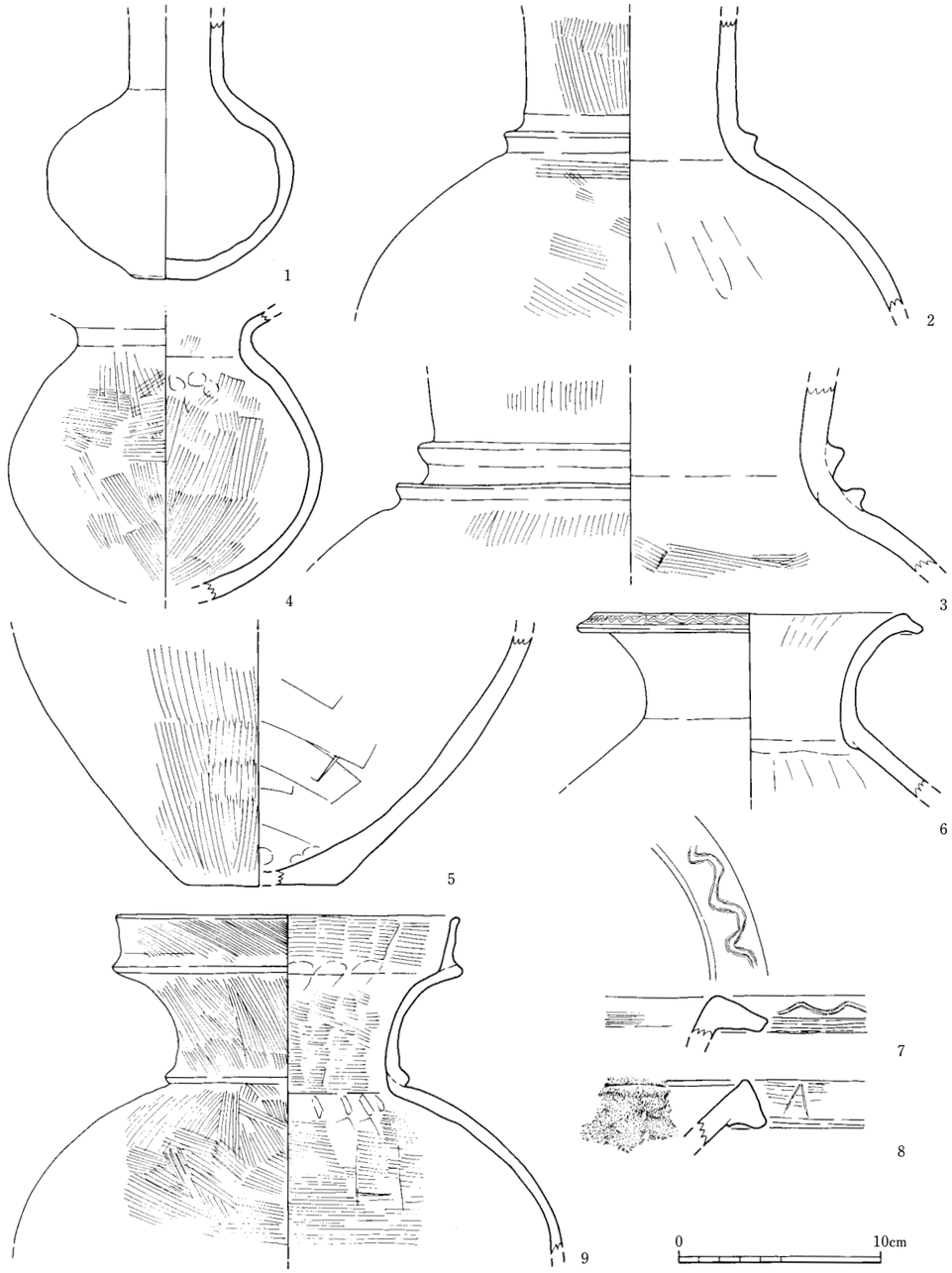


第133図　大谷中層出土須恵器実測図（13は1/４、他は1/３）



第134図　大谷上層出土須恵器実測図（1/３）

須恵器の可能性がある。壺などの口縁部片と考えたが、器台の脚部の可能性もある。内外面は横ナデである。２４は壺の口縁部片か。外面には僅かに波状文がある。２５は壺の体部片か。外面はカキ目で、内面には同心円文の当て具痕が残る。２６と２７は甕などの体部片である。２７は厚手な作りの甕体部片か。内外面にはナデ、さらに外面には刷毛目がある。調整や焼成などから初期須恵器か。焼成はやや甘く、外面は灰色、内面は赤灰色である。



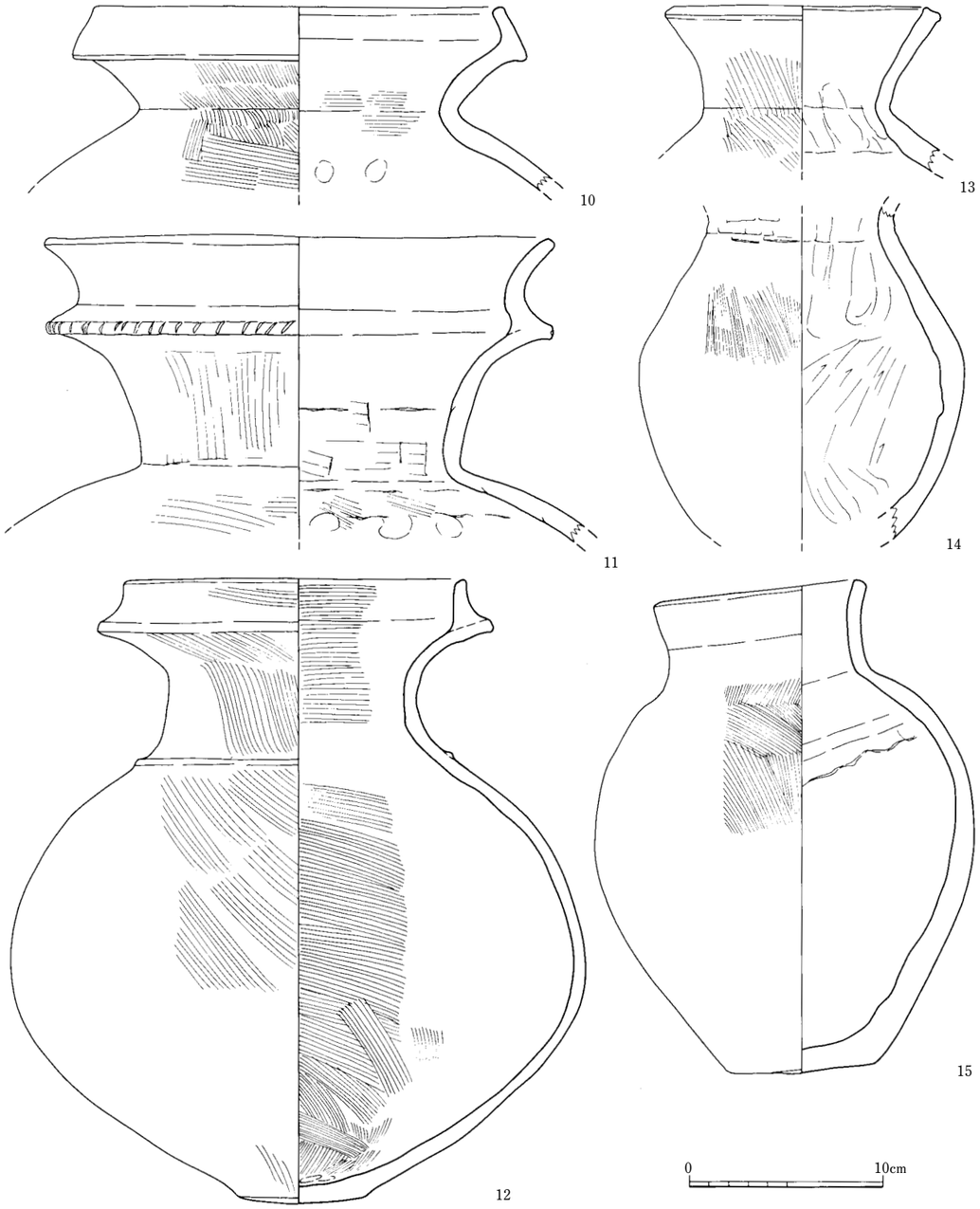
第135図　大谷最下層出土土器実測図①（1/３）

大谷出土土師質土器（図版５０～５２、第１３５～１６０図）

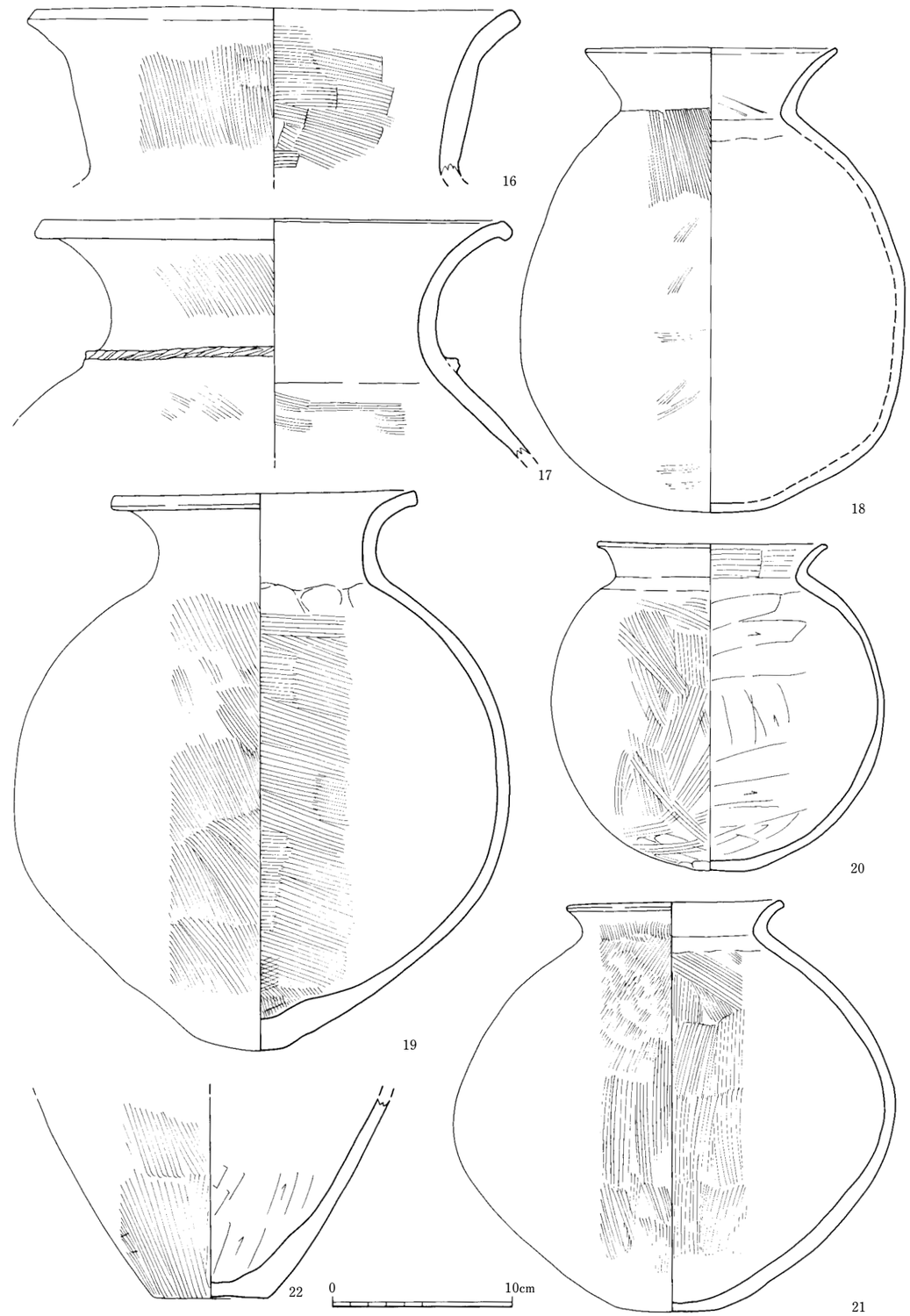
大谷では、弥生時代後期を中心とした最下層、弥生時代終末～古墳時代前期を中心とした下層、古墳時代中期を中心とした中層、古墳時代中期以降を中心とした上層に分かれる。以下、層ごとに報告する。

最下層（２３～２５′層）出土遺物（図版５０、第１３５～１４４図）

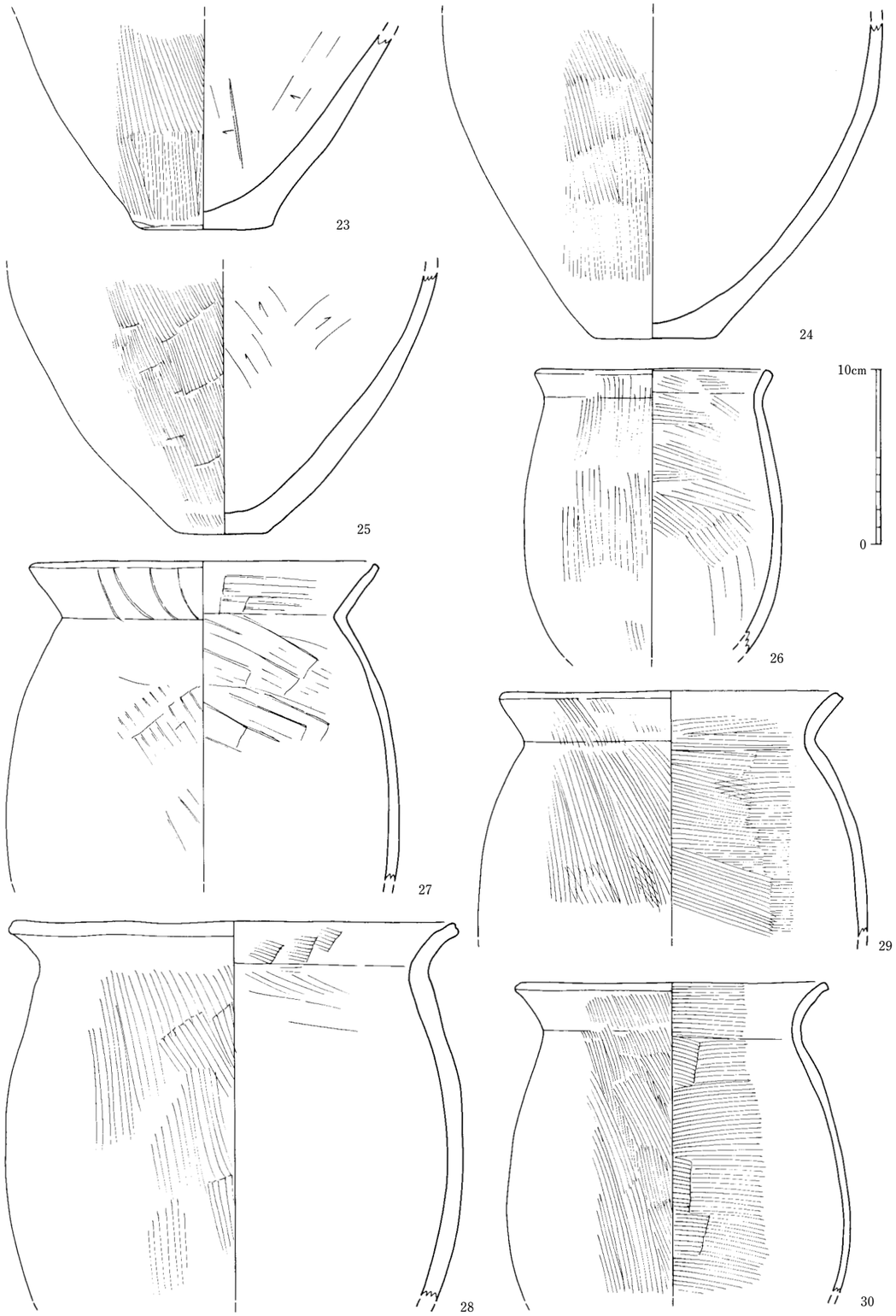
１～２１は壺である。１～３は長頸壺である。１は小型で、摩滅が著しいが、体部外面に黒斑が



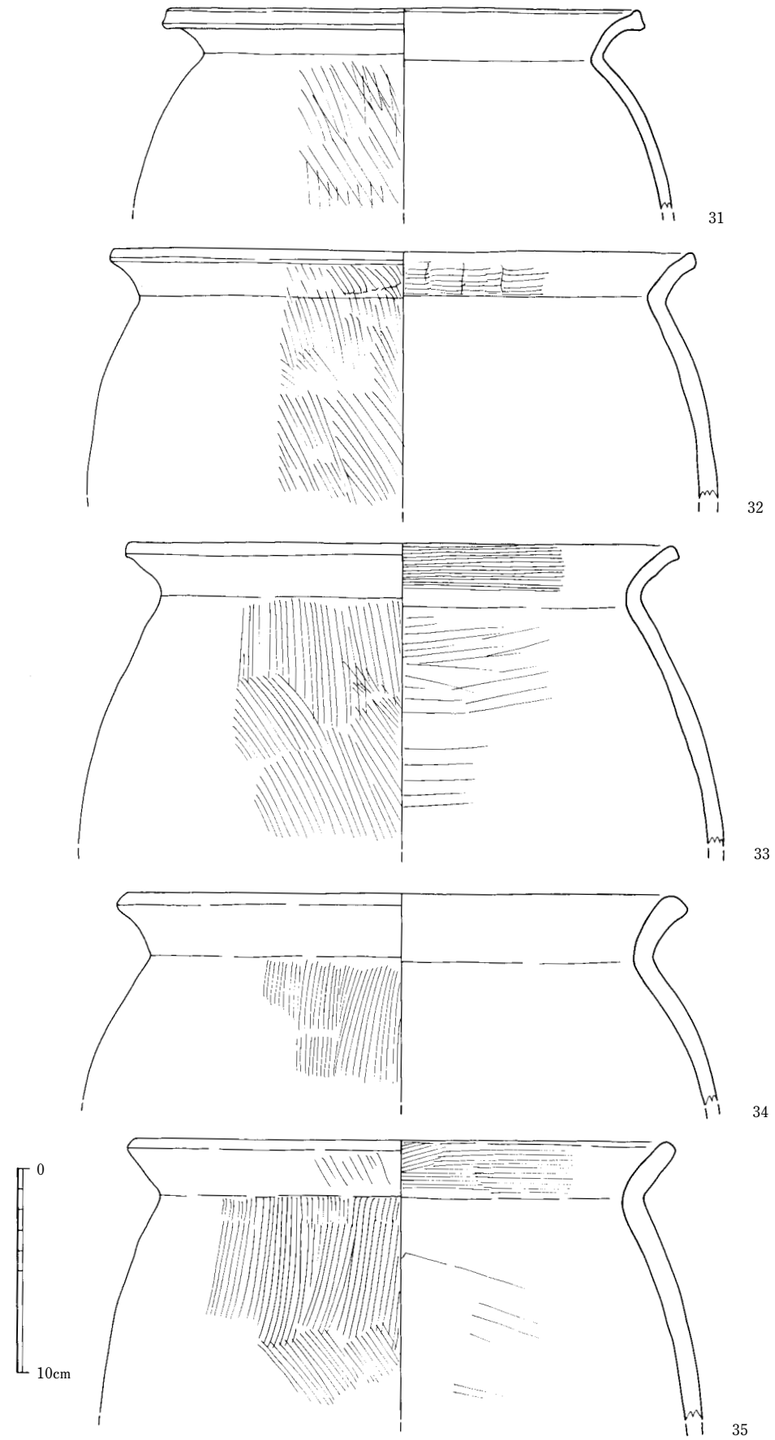
第136図　大谷最下層出土土器実測図②（1/３）



第137図　大谷最下層出土土器実測図③（1/３）



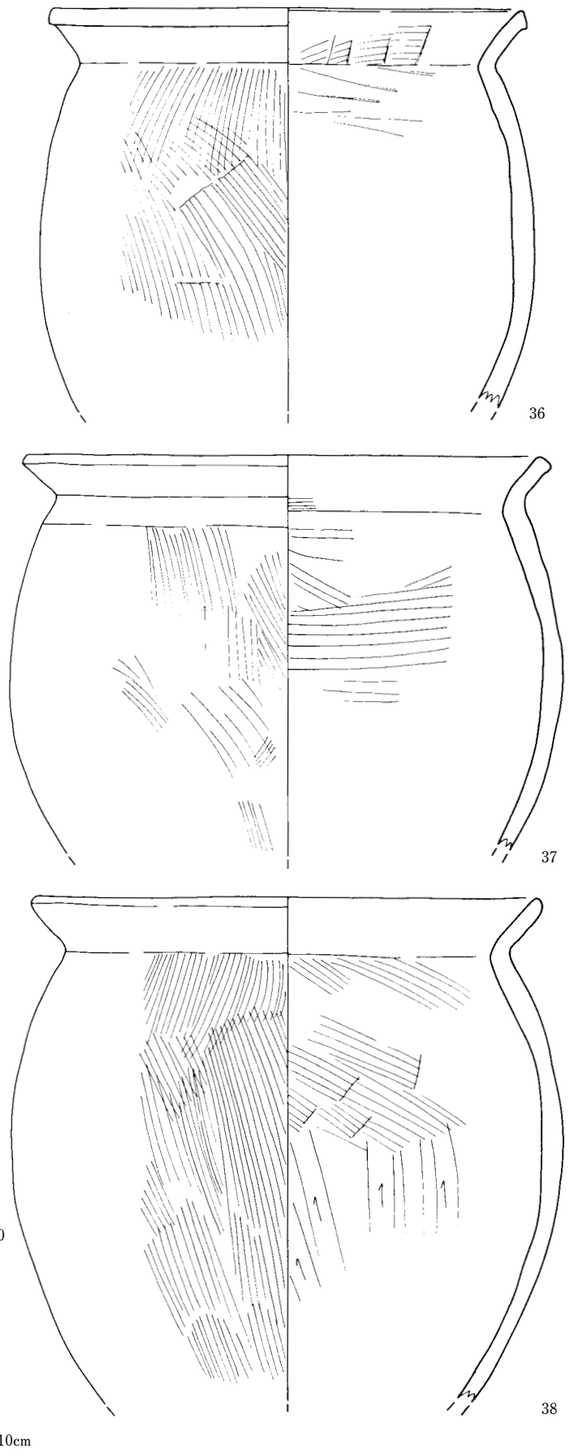
第138図　大谷最下層出土土器実測図④（1/３）



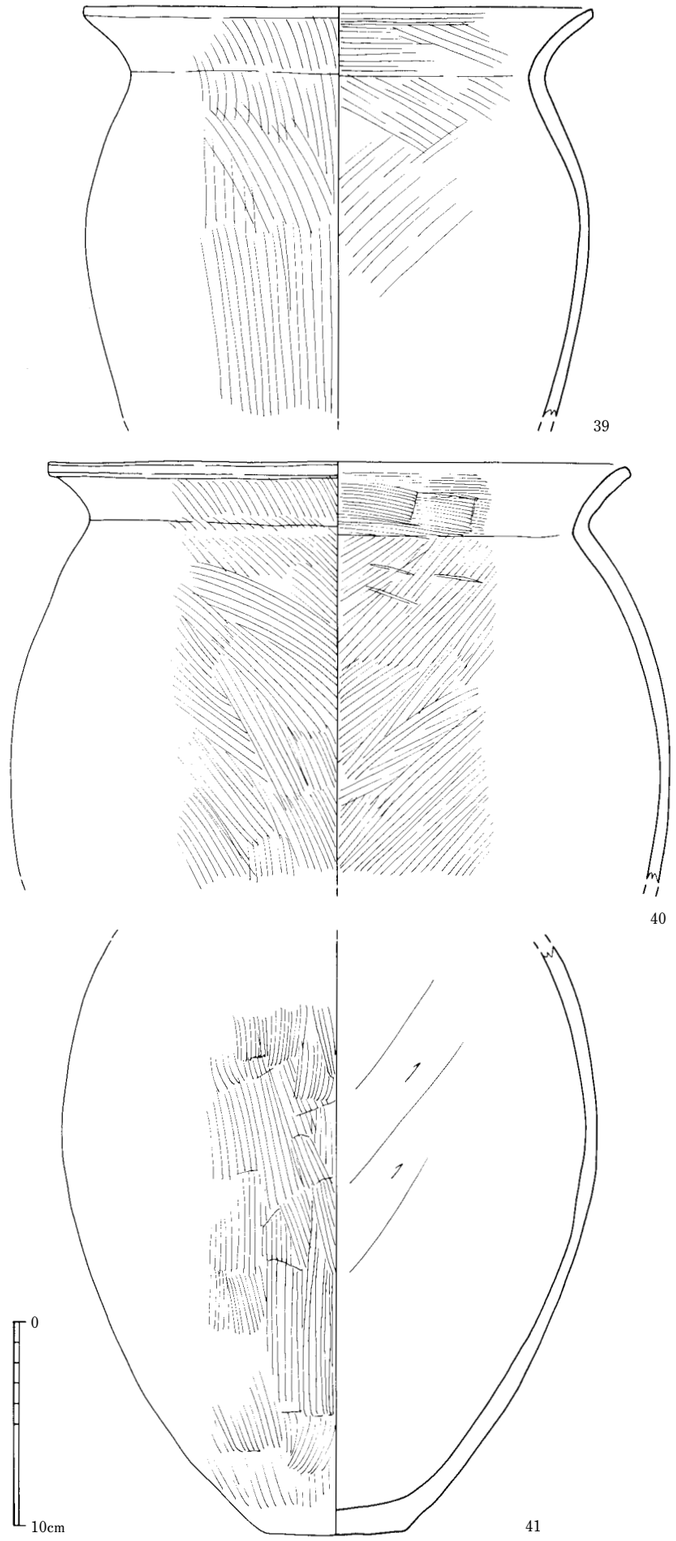
第139図　大谷最下層出土土器実測図⑤（1/３）

見られる。２・３は頸部が遺存しており、断面三角形の突帯が２は１条、３は２条付される。４は小型の二重口縁壺である。口縁部が欠損するが、やや外反するものと考えられる。５は底部のみが遺存し、内面には工具痕が見られる。６～８は口縁端部に帯状の平坦面が形成され、波状文および鋸歯文が施される。瀬戸内系。８は内面に二列の竹管文が縦方向に施される。９～１２は二重口縁壺である。９は頸部と体部の接合面が肥厚し、突帯状を呈する。１０は口縁部横ナデ、頸部内外面刷毛目後ナデ、体部外面刷毛目、内面ナデを施す。１１は頸部のくびれ部分が大きく突出し、端部にキザミが施される。口縁部横ナデ、頸部および体部外面刷毛目後ナデ、頸部内面工具痕、体部内面ナデを施す。１２は平底で頸部に断面三角形の低い突帯を付す。内外面とも刷毛目である。１３～２１は素口縁の壺である。１３～１５はやや細長い形態を呈する。概ね口縁部は横ナデ、体部外面に刷毛目とナデ、内面はナデを施

す。１４の外面に煤、１３・１４の外面に黒斑が見られる。１６は器台の底部である可能性もある。１７は頸部に断面三角形の突帯を付し、斜め方向にキザミを施す。１８はやや下膨れ気味の形態を呈し、体部外面中位～下位に刷毛目状工具によるナデを施す。外面に黒斑が見られる。１９は底部がレンズ状を呈し、外面に黒斑が見られる。２０は球形を呈し、甕か。上層からの混入品か。外面に黒斑が見られる。２１はわずかに平底を呈し、外面に黒斑が見られる。２２～４４は甕である。２２～２５は底部のみが遺存し、いずれも平底を呈する。２５の外面には被熱痕跡が見られる。２６～３０は長胴の甕である。外面は刷毛目、内面刷毛目ないしはナデを施す。２７・３０の外面に黒斑、２９の内面に煤が見られる。３１～４０はやや丸みを帯びた甕で、概ね口縁部横ナデ、体部外面粗い刷毛目、内面刷毛目ないしはナデを施す。３８の体部内面下位はケズリが施される。４１は体部から底部が遺存しており、外面刷毛目、内面ナデ上げを施す。外面上半に黒斑、中位付近に煤が見られる。４２は平底を呈し、体部内外面の下位に被熱痕跡が見られる。４３は頸部に断面三角形の突帯を付し、口唇部にキザミが施される。接合しないものの、胎土等から同一個体と考えられる口縁部破片（４３左）では、口唇部のキザミが斜め方向に付される。４４は摩滅が著しいものの、体部外面刷毛目後ナデ、内面刷毛目が残る。４５～５０は高杯である。４５・４６は脚部が下位で広がり、孔を穿つ。４５は摩滅のため調整不明、４６は外面ミガキ、内面刷毛目を施す。４６の孔

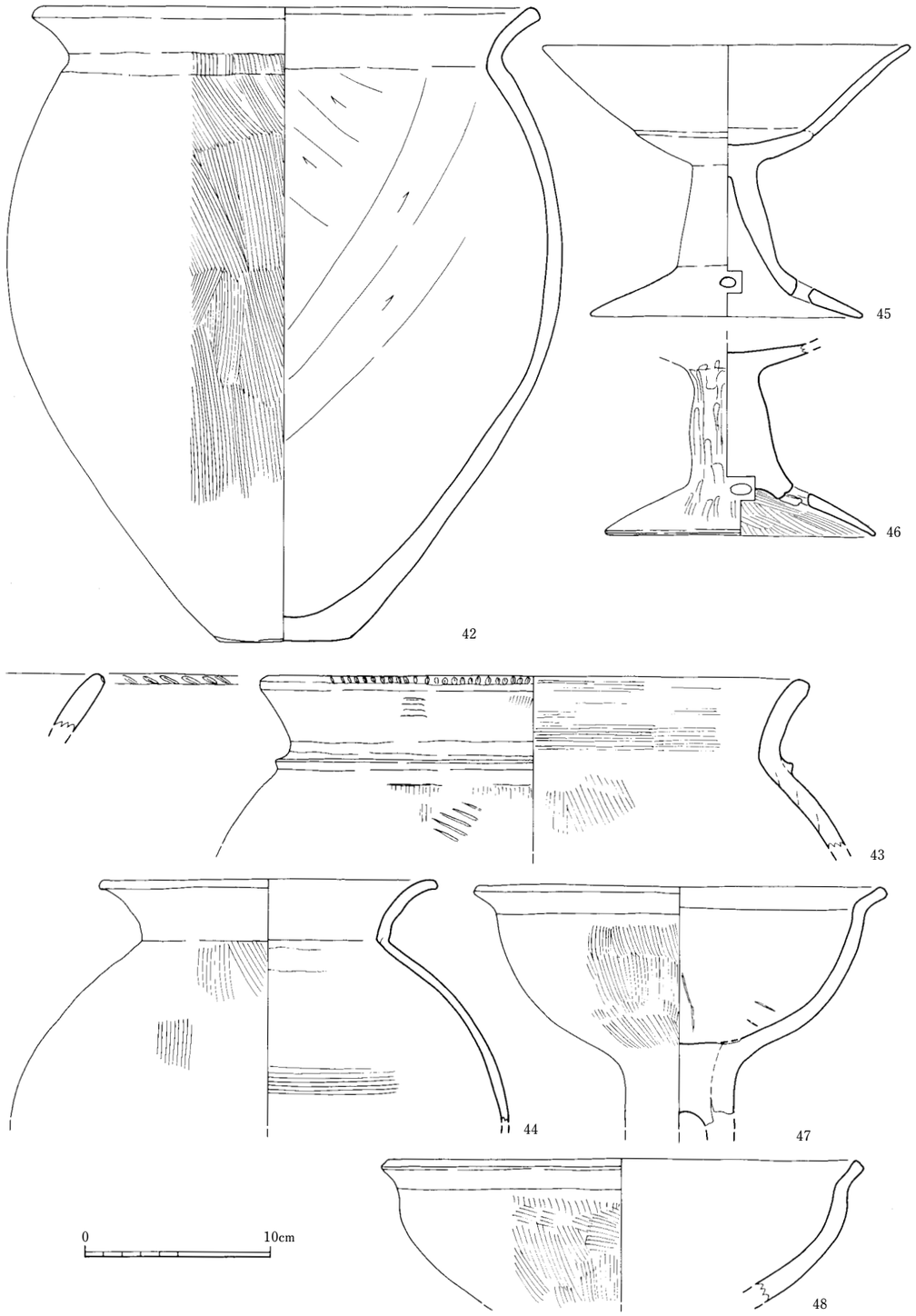


第140図　大谷最下層出土土器実測図⑥（1/３）

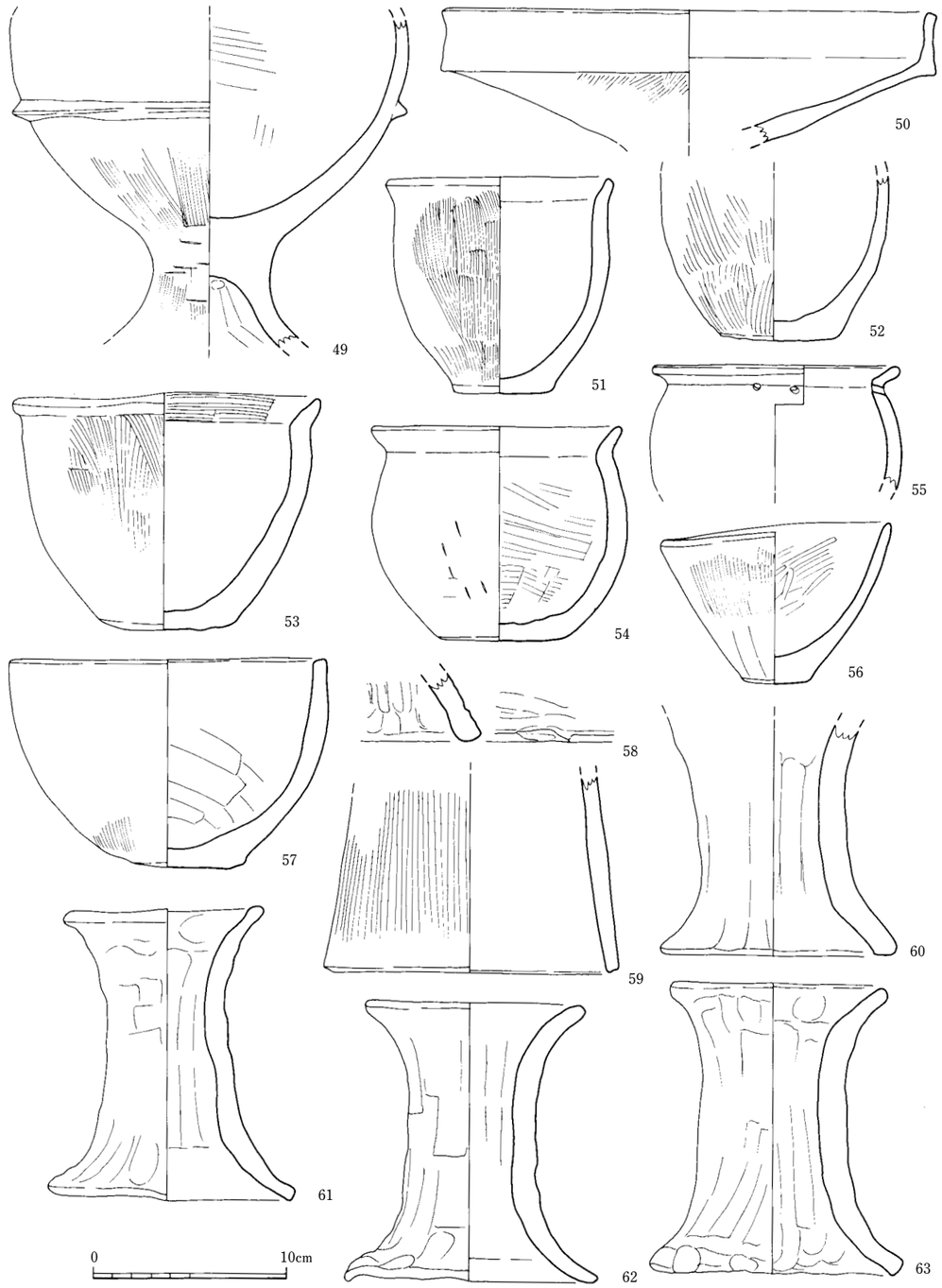


第141図　大谷最下層出土土器実測図⑦（1/３）

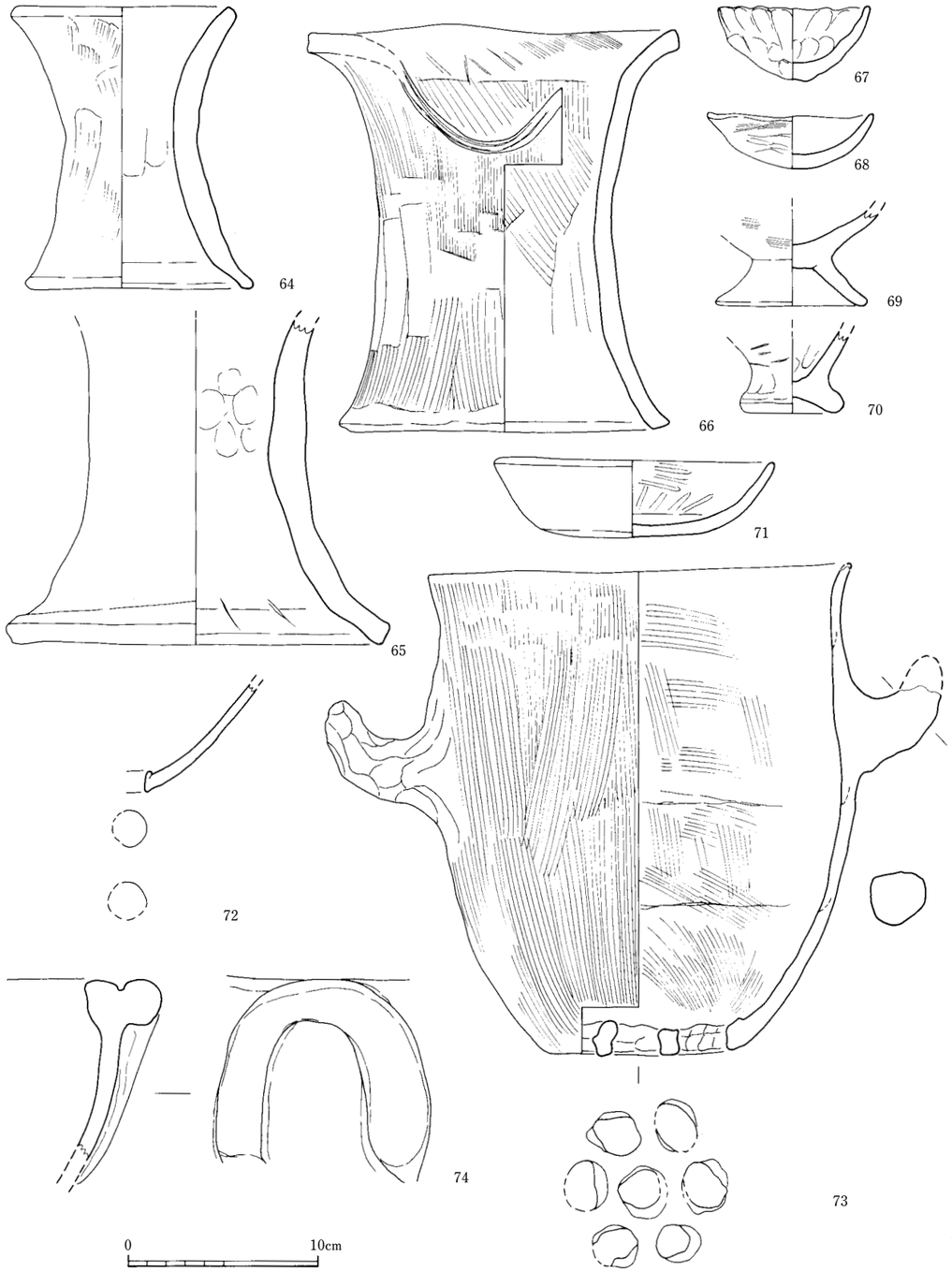
内面には穿孔時の粘土が付着する。４７・４８は杯部が鉢形を呈し、外面刷毛目、内面ナデを施す。４８は外面に黒斑が見られる。４９は杯部が壺形を呈し、体部に断面三角形の突帯を付す。外面刷毛目、体部内面工具痕一部ナデ、脚部内面指ナデを施す。５０は口縁部が直立する。口縁部横ナデ、胴部外面刷毛目、内面ナデを施す。５１～５７は鉢である。５１～５４は平底で、外反する口縁を持つ。概ね外面刷毛目、内面ナデを施す。５１・５３・５４の外面に黒斑が見られる。５５は頸部に孔が２つ穿たれる。摩滅のため調整不明である。５６は口縁が直線的に伸び、外面刷毛目、内面ケズリ後ミガキ、一部ナデを施す。５７は口縁部が内湾気味になり、外面ナデ、内面下位板ナデを施す。外面に黒斑が見られる。５８～６６は器台である。５９が直線的に伸びるほかは、中央にくびれを持ち、概ね工具によるナデで仕上げる。６４は外面に刷毛目を施し、６５は外面に黒斑が見られる。６６は上方が大きく抉れる形態で、内外面共に刷毛目、内面下位のみナデを施す。外面下位に黒斑、下端部に被熱痕跡が見られる。６７は手づくねの椀である。６８は小型の椀で、外面ミガキ、内面ナデを施す。６９は脚付の鉢ないしは甕で



第142図　大谷最下層出土土器実測図⑧（1/3）



第143図　大谷最下層出土土器実測図⑨（1/3）



第144図　大谷最下層出土土器実測図⑩（1/３）

ある。７０は小型の鉢か。内外面とも工具痕が見られる。７１は椀である。摩滅するが、内面にミガキが残る。７２･７３は甑である。いずれも多孔式の甑で、古墳時代中期の混入品と考えられる。７４は不明土器である。大きなU字形の厚い浮文が付され、口縁部はわずかに内湾する。口縁が直線的でないことから、浮文部分が底部になり、片口の容器状を呈する土器である可能性もある。内外面共にナデを施す。青銅器の「鍑」を模倣した可能性がある。

土層と出土土器から、弥生時代後期末を中心とした時期に形成された層と考えられる。一部、新しい時期および、弥生時代後期前半まで遡ると考えられる土器を含む。

最下層・下層（２２・２３層）出土土器（図版５１、第１４５・１４６図）

１～４は小型壺である。１は外面に丹塗りが見られる。２は口縁部が直立し、横ナデを施す。３・４は小型丸底壺で、３は体部外面刷毛目後ナデ、内面工具痕を施す。４は外面刷毛目、内面ナデを施す。５～７・１０は二重口縁壺である。５は口縁部に線刻で鋸歯文、６はミガキを施す。６の外面に赤色顔料が付着する。１０は口縁部が強く屈曲し、外面にわずかに赤色顔料が付着する。８・９は素口縁の壺である。共に頸部に低い断面三角形の突帯を付す。１１～１９は甕である。１１～１３は小型の甕で１１の外面に煤、１２の外面に黒斑、１３の外面に煤および被熱痕跡が見られる。１４～１９は摩滅するものもあるが、概ね外面刷毛目およびタタキ、内面刷毛目ないしはナデを施す。１９の外面に被熱痕跡および黒斑が見られ、煤が剥落している。２０・２１は高杯である。２０は長脚で外面ミガキ、内面ナデを施す。２１は４つの孔が穿たれる。２２は鉢である。体部内面ナデ、他は刷毛目を施す。２３は脚付鉢である。摩滅が著しいが、脚部外面ナデ、他はミガキを施す。２４は器台か。摩滅が著しいがわずかにミガキが残る。外面に黒斑が見られる。２５は器台である。ナデを施す。２６は椀か。内外面共にミガキを施すが、やや歪む。

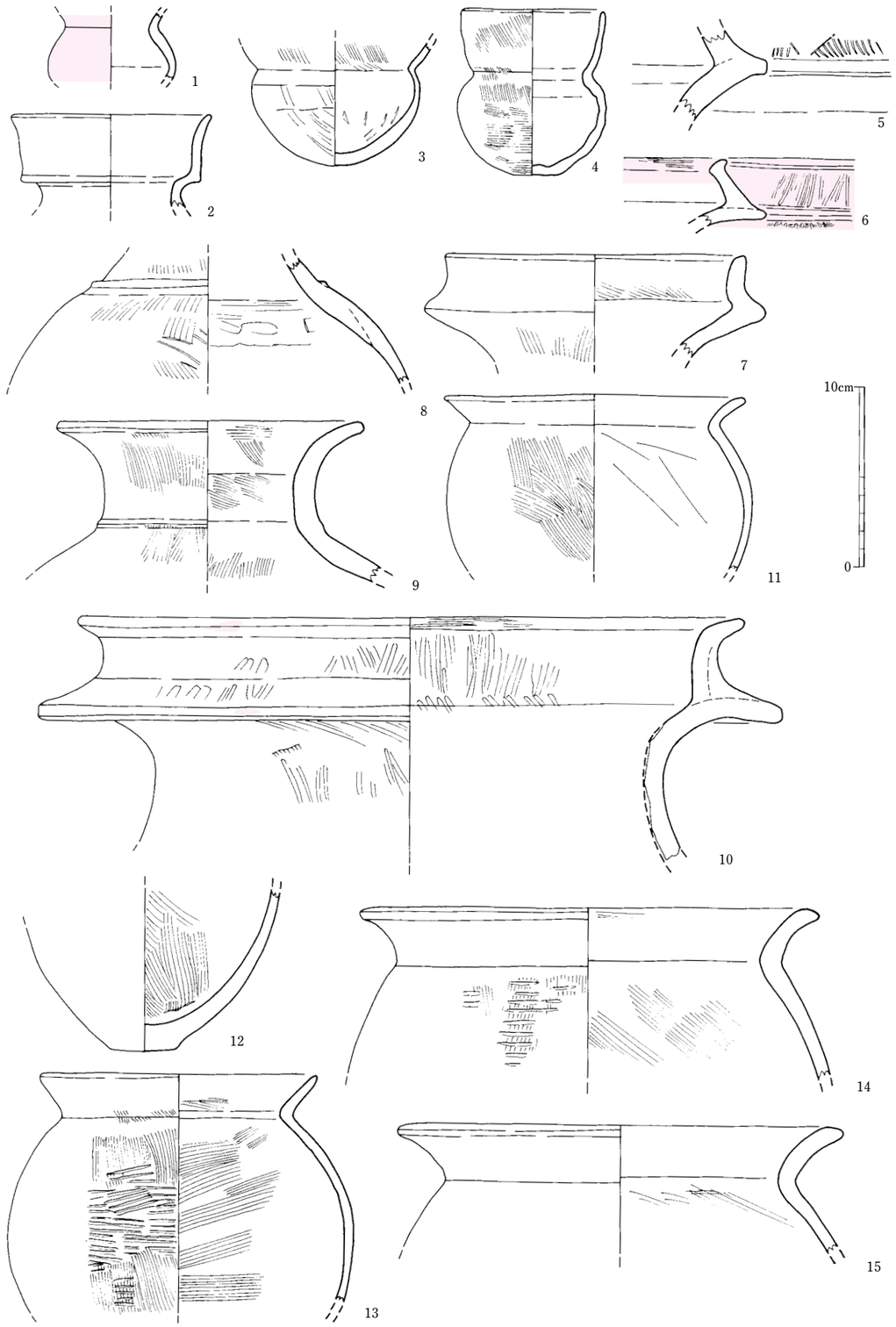
下層（１５～１７・２１・２２層）出土土器（図版５１、第１４７図）

１は小型壺である。外面に焼成前穿孔が見られ、甑の模倣品の可能性があり、混入品か。２・３は壺である。２は口唇部に粘土紐を貼り付け二重口縁状に仕上げる。３は二重口縁壺である。４は甕である。口縁部横ナデ、体部刷毛目を施す。５･６は高杯である。５は脚部下位に４孔を施すが、やや位置がずれる。摩滅が著しいがわずかに刷毛目が残る。６は外面ミガキ、内面刷毛目およびケズリを施し、外面にわずかに赤色顔料が見られる。７は底部に孔が穿たれた甑である。内外面共に刷毛目を施し、口縁部外面にタタキが見られる。８は支脚である。１方向が突出するタイプと考えられる。外面タタキ、内面刷毛目およびナデを施す。

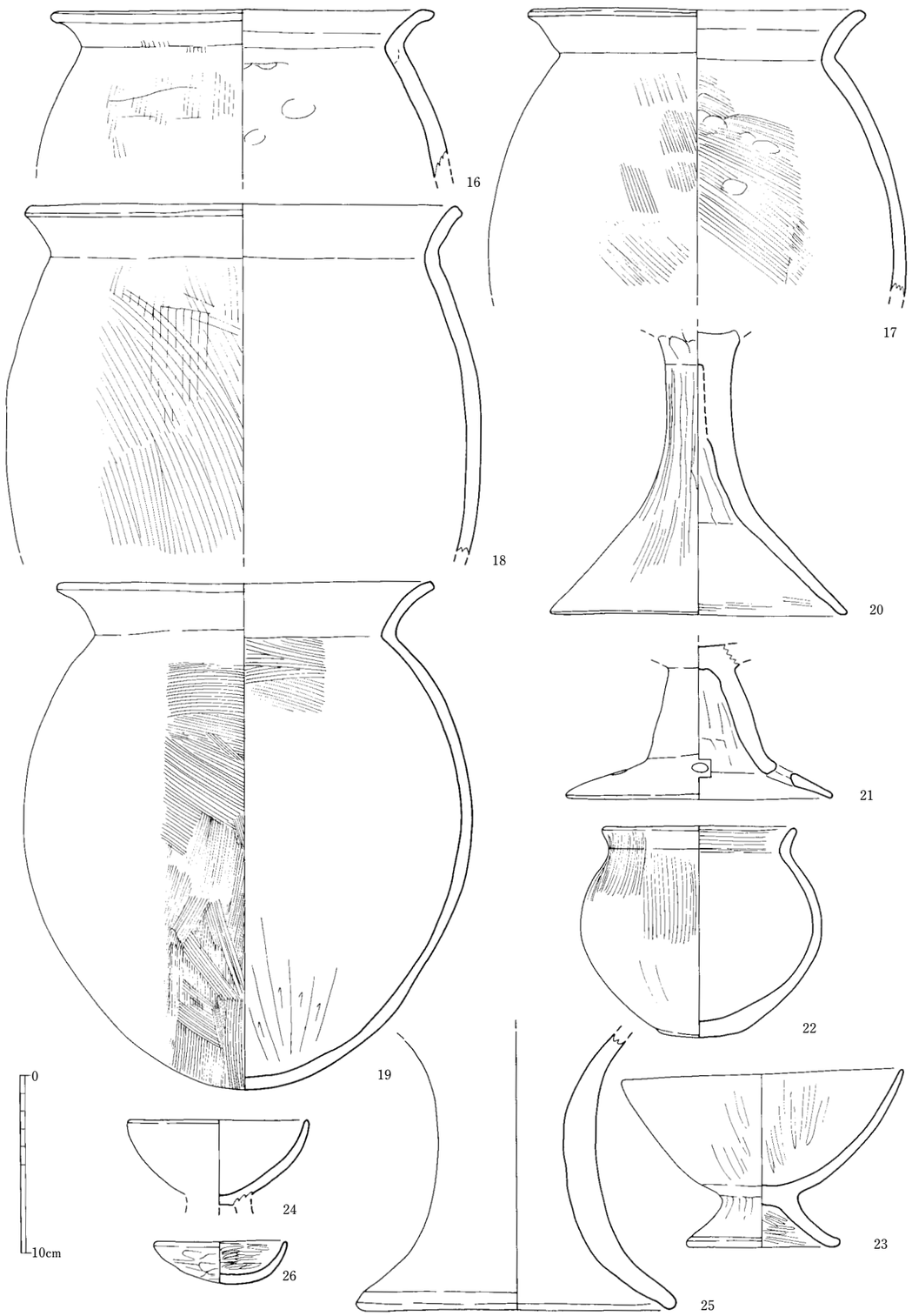
出土土器からは弥生時代終末期を中心とすると考えられるものの、下層と最下層が混入した先述の土器から、古墳時代初頭～前期前半頃まで含まれるものと考えられる。

中層（７～１４・１８～２０層）出土土器（図版５１・５２、第１４８～１５６図）

１～１５は小型壺である。概ね外面刷毛目ないしはミガキ、内面ナデないしは指ナデを施す。２は口縁が短く、鉢形を呈する。３は体部が潰れており、口縁が直立気味に伸びる。４は外面にミガキを施し、脚部が付く。８は外面上位にケズリを施し外面に黒斑が見られる。９は頸部が窄まり、外面にはミガキを施す。１５は底部に線描きで木ノ葉文が描かれる。１６は小型壺か。やや鉢形を呈し、緩やかなＳ字形を呈する。１７は甑の模倣品か。胴部中央に孔が穿たれる。外面刷毛目、内



第145図　大谷最下層・下層出土土器実測図①（1/ 3）



第146図　大谷最下層・下層出土土器実測図②（1/ 3）